

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書

別府（石踊）遺跡

県営特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘報告書

1979・3

鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会

正

誤表

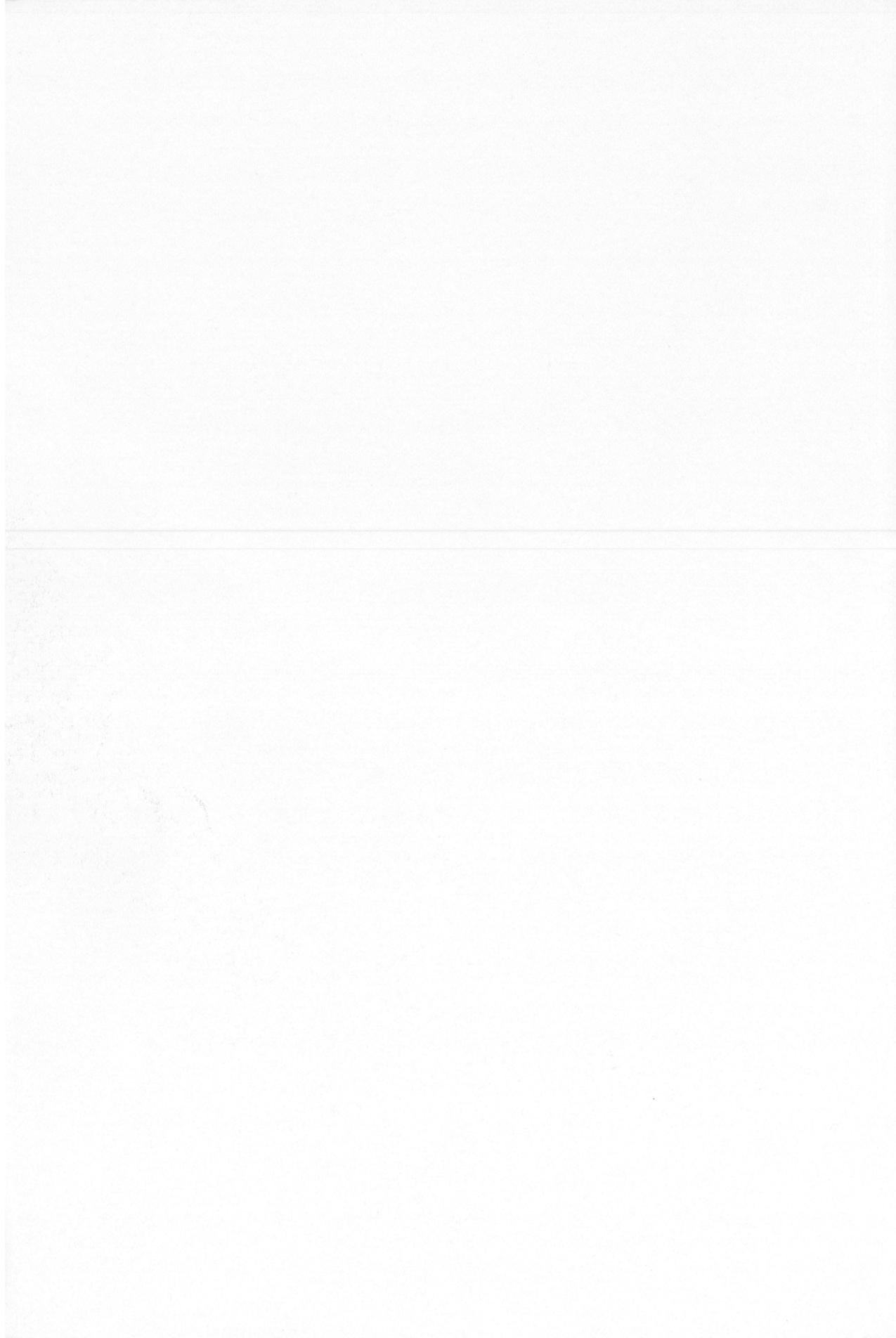
(別府遺跡埋藏文化財発掘
(石器)
(調査報告書)

| | | 誤 | | 正 | |
|-------|-------|------------------|----------|-------------------|-----------------|
| | | 第 1 1 図 | Ⅲ a 類土器 | 第 1 1 図 | Ⅲ b 類土器 |
| P 4 | 1 2 行 | 第 1 1 図 | 第 1 1 図 | 第 1 1 図 | 第 1 1 図 |
| " | 1 8 行 | 第 1 7 図 | 実測図 | 第 1 7 図 | 実測図拓影 |
| " | 1 9 行 | 第 1 8 図 | 実測図 | 第 1 8 図 | 実測図拓影 |
| P 5 | 2 2 行 | 第 9 表 | 県内における…… | 第 9 表 | 鹿児島県内の…… |
| P 1 1 | 2 5 行 | 轟 C. | C 式 | 轟 C 式 | 轟 C 式 |
| P 2 2 | | 第 3 図 | 遺物出土状況 | 第 3 図 | 層別遺物出土状況 |
| P 2 5 | | II | 黒色火山灰土務層 | II | 黒色火山灰土層 |
| " | | IV | 暗茶褐色火山灰土 | IV | 暗茶褐色火山灰土層 |
| P 2 7 | 3 4 行 | " - 0 1 5 " | () " | " - 0 1 5 " | " 2 0 " |
| P 3 3 | | | | | 色調の空白部分は全て、赤茶褐色 |
| P 3 8 | | 第 9 図 | Ⅲ a 類土器 | 第 9 図 | Ⅲ a Ⅲ b 類土器 |
| P 4 9 | 2 行 | 第 V 類土器は IV 層出土 | | 第 V 類土器は IV 層出土 | |
| P 9 3 | 1 2 行 | 市南町伊勢遺跡…… | | 市南町伊勢遺跡…… | |
| P 9 8 | 1 6 行 | 註 3 1 ……調査報告書(9) | | 註 3 1 ……調査報告書(10) | |





遺跡周辺航空写真（昭和47年撮影）



序文

近年、わが町においても特殊農地保全整備事業などの土地開発が計画実施されるに当り、埋蔵文化財にかかる調査も実施されております。

我々祖先の残した貴重な文化財は、子孫へと継承するのが我々の責務かと思いますが、開発と現状保存との調整には限度があります。そこで、事業実施前に埋蔵文化財の確認調査を実施し、できるだけ現状保存に努め、その保存が不可能なものは記録保存として残さなければなりません。

今回、県営特殊農地保全整備事業に伴う別府(石踊)遺跡の発掘調査を国・県の補助事業として、鹿児島県教育委員会文化課の御協力で、志布志町教育委員会が事業主体となって行ったものです。

ここに、調査の報告書を刊行するにあたり、今後広く文化財に関心を寄せられ文化財保護に、ご協力をお願い致します。

おわりに、発掘調査から報告書の刊行までご協力をいただきました鹿児島県教育委員会文化課の先生方々、ご協力をいただいた関係者の方々に深甚の謝意を表わす次第であります。

昭和53年3月

志布志町教育長 北迫茂

例 言

1. 本書は、県営特殊農地保全整備事業（別府地区）に伴い鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会が行った別府（石踊）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 報告書作成にあたり、遺物について県文化財審議会委員河口貞徳氏・加治木工業高校教諭池水寛治氏・高山高校教諭平川欽哉氏・鹿屋高校教諭小倉順氏の教示と助言を得た。
3. 航空写真及び地形図は、志布志町所有を使用した。
4. 調査の組織は、調査の経過の中で記した。
5. 本書に用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
6. 本書の遺物の実測図・写真等は、立神・中村が分担して行った。
7. 本書の執筆及び編集は、立神・中村が担当した。

本文目次

| | |
|------------------------|----|
| 序 文 | 1 |
| 例 言 | 2 |
| 第 1 章 遺跡の環境 | 8 |
| 第 1 節 位置と環境 | 8 |
| 第 2 節 周辺の遺跡 | 14 |
| 第 2 章 調査の経緯 | 15 |
| 第 1 節 調査に至るまでの経過 | 15 |
| 第 2 節 発堀調査の経過 | 16 |
| 第 3 節 調査の概要 | 21 |
| 第 3 章 層位 | 28 |
| 第 4 章 遺構・遺物 | 26 |
| 第 1 節 遺構 | 26 |
| 第 2 節 遺物 | 26 |
| 1. 土 器 | 26 |
| 2. 土製品 | 66 |
| 3. 石 器 | 67 |
| 第 5 章 まとめにかえて | 92 |
| あとがき | 99 |

插 図 目 次

| | | |
|--------|------------------------------|----|
| 第 1 図 | 別府（石踊）遺跡の周辺 | 9 |
| 第 2 図 | 別府（石踊）遺跡地周辺地形とグリッド配置図 | 20 |
| 第 3 図 | 層別遺物出土状況 | 22 |
| 第 4 図 | 別府遺跡地層断面図 | 24 |
| 第 5 図 | 集石遺構実測図 | 26 |
| 第 6 図 | I類土器実測図・拓影 | 28 |
| 第 7 図 | I類土器・II類土器・底部実測図・拓影 | 29 |
| 第 8 図 | IIIa類土器実測図・拓影 | 37 |
| 第 9 図 | IIIa類・IIIb類土器実測図・拓影 | 38 |
| 第 10 図 | IIIb類土器実測図・拓影 | 39 |
| 第 11 図 | IIIa類土器実測図・拓影 | 40 |
| 第 12 図 | IIIb類・IIIc類土器実測図・拓影 | 41 |
| 第 13 図 | IIIc類土器実測図・拓影 | 42 |
| 第 14 図 | IIId類土器実測図・拓影 | 43 |
| 第 15 図 | IIId類土器実測図・拓影 | 44 |
| 第 16 図 | IIId類土器実測図・拓影 | 45 |
| 第 17 図 | IIId類土器・IIId類土器底部実測図 | 46 |
| 第 18 図 | IIId類土器底部実測図 | 47 |
| 第 19 図 | IV類土器実測図・拓影 | 48 |
| 第 20 図 | V A類土器実測図・拓影 | 52 |
| 第 21 図 | V A類土器実測図・拓影 | 53 |
| 第 22 図 | V A類土器実測図・拓影 | 54 |
| 第 23 図 | V A類土器実測図・拓影 | 55 |
| 第 24 図 | V A類土器実測図・拓影 | 56 |
| 第 25 図 | V B類土器実測図・拓影 | 57 |
| 第 26 図 | V B類土器実測図・拓影 | 58 |
| 第 27 図 | V B類土器実測図・拓影 | 59 |
| 第 28 図 | VI類土器実測図・拓影 | 64 |
| 第 29 図 | VII類・VIII類・IX類・X類土器実測図・拓影 | 65 |
| 第 30 図 | 土製品実測図 | 66 |
| 第 31 図 | 石器実測図（石鏃・石匙・異形石器） | 72 |
| 第 32 図 | 石器実測図（磨製石斧） | 73 |
| 第 33 図 | 石器実測図（磨製石斧・打製石斧・スクレーパー・異形石器） | 74 |

| | | |
|------|---------------|----|
| 第34図 | 石器実測図(磨石・I) | 75 |
| 第35図 | 石器実測図(磨石・II) | 76 |
| 第36図 | 石器実測図(磨石・III) | 77 |
| 第37図 | 石器実測図(敲石・I) | 84 |
| 第38図 | 石器実測図(敲石・II) | 85 |
| 第39図 | 石器実測図(敲石・III) | 86 |
| 第40図 | 石器実測図(敲石・IV) | 87 |
| 第41図 | 石器実測図(凹石・I) | 88 |
| 第42図 | 石器実測図(凹石・II) | 89 |
| 第43図 | 石器実測図(凹石・III) | 90 |
| 第44図 | 石器実測図(石錐) | 91 |
| 第45図 | 層位と出土遺物 | 92 |

表 目 次

| | | |
|-----|------------------------------|----|
| 第1表 | 志布志町の遺跡地名表 | 10 |
| 第2表 | I類・II類土器出土一覧表 | 27 |
| 第3表 | III類土器出土一覧表 | 33 |
| 第4表 | IV類土器出土一覧表 | 48 |
| 第5表 | V類土器出土一覧表 | 60 |
| 第6表 | VI類・VII類・VIII類・IX類・X類土器出土一覧表 | 66 |
| 第7表 | 石器出土一覧表 | 69 |
| 第8表 | 石器出土一覧表 | 80 |
| 第9表 | 県内における曾畠式土器の地名表 | 93 |

図 版 目 次

| | | |
|---------|--------------------|-----|
| 図版 1 | 東側壁断面 | 100 |
| 図版 2—① | 9・10・11区 Ⅲ層 遺物出土状態 | 101 |
| " —② | 14～18区 トレンチ調査 | 101 |
| 図版 3 | 11区 Ⅳ層 集石の検出状態 | 102 |
| 図版 4 | Ⅲ層 Ⅳ層 遺物出土状態 | 103 |
| 図版 5 | Ⅶ層 遺物出土状態 | 104 |
| 図版 6 | I類土器 | 105 |
| 図版 7 | I類土器 | 106 |
| 図版 8—① | I類土器 | 107 |
| " —② | Ⅲ層 出出土製品 | 107 |
| 図版 9—① | Ⅱ類土器 | 108 |
| " —② | Ⅲa類土器 | 108 |
| 図版 10 | Ⅲa類土器(表・裏) | 109 |
| 図版 11—① | Ⅲa類土器 | 110 |
| " —② | Ⅲb類土器 | 110 |
| 図版 12 | Ⅲb類土器 | 111 |
| 図版 13 | Ⅲb類土器 | 112 |
| 図版 14—① | Ⅲb類土器 | 113 |
| " —② | Ⅲc類土器 | 113 |
| 図版 15 | Ⅲc類土器(表・裏) | 114 |
| 図版 16 | Ⅲc類土器 | 115 |
| 図版 17—① | Ⅲc類土器 | 116 |
| " —② | Ⅲd類土器 | 116 |
| 図版 18 | Ⅲd類土器(表・裏) | 117 |
| 図版 19 | Ⅲd類土器(表・裏) | 118 |
| 図版 20 | Ⅲd類土器 | 119 |
| 図版 21 | Ⅲ類土器底部 | 120 |
| 図版 22 | Ⅳ類土器(表・裏) | 121 |
| 図版 23 | VA類土器 | 122 |
| 図版 24 | VA類土器 | 123 |
| 図版 25 | VA類土器 | 124 |

| | | |
|----------|------------------|-----|
| 図版 26 | V A類土器 | 125 |
| 図版 27 | V A類土器 | 126 |
| 図版 28 | V A類土器 | 127 |
| 図版 29 | V B類土器 | 128 |
| 図版 30 | V B類土器 | 129 |
| 図版 31 | V B類土器 | 130 |
| 図版 32 | V I類土器 | 131 |
| 図版 33 | V II類土器 | 132 |
| 図版 34 —① | V III類土器 | 133 |
| " —② | X・XI類土器 | 133 |
| 図版 35 | 石鏃 | 134 |
| 図版 36 —① | 石鏃・異形石器 | 135 |
| " —② | 石匙 | 135 |
| " —③ | 石匙・スクレーパー | 135 |
| 図版 37 | 磨製石斧 | 136 |
| 図版 38 —① | 磨製石斧・打製石斧 | 137 |
| " —② | 打製石斧・スクレーパー・異形石器 | 137 |
| 図版 39 | 磨石 I・磨石 II | 138 |
| 図版 40 —① | 磨石 III | 139 |
| " —② | 敲石 I | 139 |
| 図版 41 | 敲石 II・敲石 III | 140 |
| 図版 42 —① | 敲石 IV | 141 |
| " —② | 凹石 I | 141 |
| 図版 43 | 凹石 II・凹石 III | 142 |
| 図版 44 —① | 磨石 II 060 の拡大 | 143 |
| " —② | 石錘 | 143 |

第1章 遺跡の環境

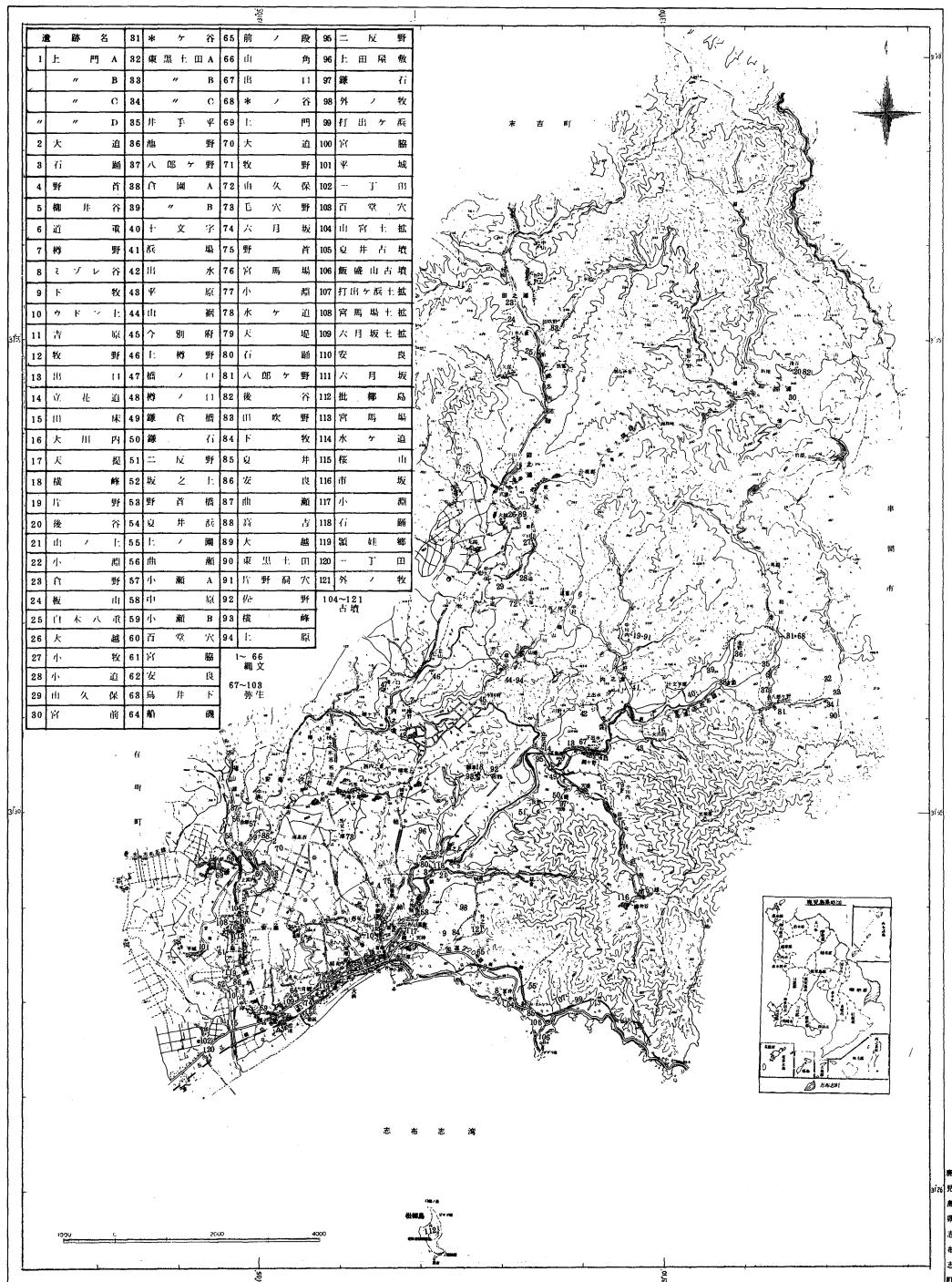
第1節 位置と環境

別府(石踊)遺跡は鹿児島県曾於郡志布志町字帖石踊に位置している。志布志町は鹿児島県の最東部、曾於郡の東南部にあり、県庁所在地のある鹿児島市より東南約88.2キロメートルの国道220号線沿いにある。別府(石踊)遺跡は志布志町役場から、さらに北東方向に約1.2キロメートルの地点にあり、通称石踊台地に所在する。

別府(石踊)遺跡の位置する鹿児島県東部の地形を大きく見ると北部から東部にかけて日南山地、西部は高隈山地、南西部は肝属山地、南部は志布志湾と取り囲まれている。日南山地の主要部は宮崎県との県境付近に分布する山地で、福島川、安楽川などの水源にあたり、中岳山地、宮田山山地、霧岳山地、田之浦山地、御在所岳山地、笠祇山地などの中起伏山地により構成されている。高隈山地は大笠柄岳(1236m)を最高峰とし、大起伏山地を中心を示め、その周囲を中起伏山地がとり囲んでおり、南部は次第に小起伏山地となっている。その高隈山地との間に広大な面積を占めるシラス台地は、平行して流れる肝属川、串良川、持留川、田原川、菱田川、安楽川、前川などを中心とする大小河川の活発な侵食活動により急斜面あるいは崖によって大小幾多の狭長な独立台地に分断されている。そのうち主なものを西から東へ挙げれば笠野原台地、永吉台地、大崎台地、中沖台地、有明台地、志布志台地となっている。これらの台地は厚いシラス堆積層の上に砂礫または砂層、さらにローム層、赤褐色火山灰層および黒色火山灰層が覆っている。志布志湾岸は肝属川の河口から前川の河口までの約16キロメートルにわたり砂丘が発達しており、その幅は約1キロメートルで、新旧Ⅳ期の砂丘から構成されているといわれ、Ⅰ期～Ⅲ期の砂丘には植林がなされ、耕地や集落を形成している個所もみられる。また志布志湾内には枇榔島があり、亜熱帯性植物群落などの植生が知られる(註1)。

別府(石踊)遺跡の周辺の地形を概観すると北部から西部にかけては、安楽川と前川とにはさまれた志布志町市街地背後の志布志台地が広がっている。この台地は侵食活動により僅少の比高をもついくつかの台地面に分断されている。前川は志布志台地の東端部を蛇行して流れ、この前川の活発な侵食活動により出来た沖積低地が樹枝状に発達している。本遺跡の立地する石踊台地の北側から西側台地縁辺部沿いを流れ、その比高は約50m以上となっている。東部から東南部にかけては陣岳(349.3m)を中心とする山麓が広がり、その間に山麓から連なる台地がある。これらの台地は侵食谷が樹枝状にはいり込み、低地とは急斜面あるいは崖により分断されている。これらの侵食谷の一部には多量の湧水が見られ、水田耕作の営まれている所もみられる。南部は国道220号線と国鉄日南線とがほぼ平行に走り志布志湾へと続いている。

別府(石踊)遺跡の立地する石踊台地は、陣岳東側に広がるシラス台地のひとつで、南北に狭長な舌状台地である。この台地はシラス堆積層を基盤にローム層、黄褐色火山灰土層に覆われ、台地原面はゆるやかな起伏を有している。同台地内南部に山ノ上三角点があり標高59.6mを数える(註2)。



第1図 別府(石踊)遺跡の周辺

第1表 志布志町の遺跡地名表

(縄文時代)

| 遺跡名 | 所 在 地 | 編 (土 器) | 遺 物 | 備 考 |
|--------|---------------------|------------|--|-------------------|
| 上 門 A | 安楽 上門 | 後 期 | 西平式, 黒曜石片 | 一部残存 |
| 上 門 B | 安楽 上門 | 後 期 | 西平式, 打製石斧, 石皿 | |
| 上 門 C | 安楽 上門 | 早・中・後期 | 阿高式, 出水式, 押型文, 南福寺式, 御領式土器 敲石, 打製石斧, 石劍石錘石彈 | |
| 上 門 D | 安楽 上門 | 後 期 | 西平式 | 一部消滅 |
| 大 迫 | 安楽 大迫 | 前・中・後期 | 阿高式, 塞ノ神式, 出水式土器, 凹石, 石錘 石斧 | |
| 石 踊 | 帖 石踊 | 前・中・後期 | 押型文, 御領式土器, 打製石斧, 凹石, 石匙 石器 | |
| 野 首 | 帖 野首 | 後 期 | 市来式, 西平式土器, 打製石斧 | |
| 柳 井 谷 | 帖 柳井谷 | 前・中・後期 | 出水式, 轟式, 押型, 御領式土器, 敲石 磨製石斧 | |
| 道 重 | 内之倉弓場迫 2280 | 前 中 期 期 | 押型文, 阿高式, 塞ノ神式土器, 敲石, 凹石 | |
| 樽 野 | 内之倉 樽野 555 | 後 期 | 市来式土器, 敲石, 凹石 | |
| ミゾレ 谷 | 夏井 ミゾレ谷 | 中 期 | 卷上法による完形土器 | |
| 下 牧 | 帖 下牧 | 中 後 期 期 | 阿高式土器, 石斧, 凹石, 石皿 | |
| ウドン 上 | 帖 ウドン上 | 中 期 | 阿高式土器 | |
| 吉 原 | 田之浦 吉原 | 中 期 | 轟式土器, 石斧 | |
| 牧 野 | 田之浦 牧野 | 前・中・後期 | 指宿, 押型文, 土偶, 磨製石斧, 紡錘車, 凹石 | |
| 出 口 | 内之倉 出口 | 前 期 | 塞ノ神式, 轟式土器, 磨製石斧 | |
| 立 花 迫 | 内之倉 立花迫 | 後 期 | 南福寺式土器 | |
| 田 床 | 潤野 田床 | 中 後 期 期 | 阿高式, 南福寺式土器, 石斧, 御領式, 注口土器 | |
| 大 川 内 | 潤野 大川内 | 中 後 期 期 | 出水式, 指宿式土器, 有肩石斧 | |
| 天 提 | 帖 松崎 10767 10290 | 早・中・後期 | 阿高, 御領式, 押型文, 並木式土器, 石斧 | |
| 横 峰 | 横峰 | 中 期 | 形式不明, 打製石斧, 敲石, 凹石 | |
| 片 野 | 内之倉 片野 | 前・中・後期 | 轟式, 鮎烟式, 西平式, 指宿式, 市来式土器 貝殻土器, 石器, 骨角器 | 昭和39年 一部発掘 調査 |
| 後 谷 | 田之浦 後谷 | 中 後 期 期 | | |
| 山 ノ 上 | 帖 別府 8473 | 前 期 | 塞ノ神式土器 | 昭和42年 河口貞徳 氏発掘 |
| 小 涠 | 帖 6423 小湧 | 後 期 | 下弓田 I, II, III, 岩崎, 指宿式土器 | 昭和42年 河口貞徳 氏発掘 |
| 倉 野 | 田之浦 吉原 1171 | 前・中 期 | 押型文, 塞ノ神式, 吉田式土器, 黑曜石片 | |
| 板 山 | 板山 116 | 前・中 期 | 押型文土器 | |
| 白木 八 重 | 白木八重 1039 | 前 期 | 押型文 | 道路断面に露出 |
| 大 越 | 宮地原 348 | 中・後 期 | 吉田式, 前平式土器 | 耕地改良工事にて一部 消滅 |
| 小 牧 | 田之浦 小牧 122 | 中・後 期 | 岩崎上層, 岩崎下層土器, 局磨石斧 | |
| 小 迫 | 小 迫 | 後 期 | 土器片, 磨製石斧 | 宅地造成にて消滅 |
| 山 久 保 | 山久保 | 後・晚 期 | 大石式土器, 磨製石斧 | 土地改良工事にて消滅 |

| 遺跡名 | 所 在 地 | 編 (土 器) | 遺 物 | 備 考 |
|-------|---------------------------------------|------------|--------------------------|--------------|
| 宮 前 | 内之倉竹下6661～5 | 中・後期 | 石皿、岩崎上層、岩崎下層、指宿式土器、斧石 | 昭和48年発掘調査 |
| 姥ヶ谷 | 姥ヶ谷 5546 | 後 期 | 条痕文土器、石皿、たたき石 | |
| 東黒土田A | 東黒土田 | 晚 期 | 大石式土器 | 包含層全殻消滅 |
| 東黒土田B | 東黒土田 | 前 期 | 平桟式、塞ノ神式、轟B式土器 | 包含層一部消滅 |
| 東黒土田C | 東黒土田 | 後 期 | 御領式 | |
| 井 手 平 | 井手平 | 前 期 | 平桟式、塞ノ神式土器 | 耕地改良工事にて消滅 |
| 池 野 | 池野 | | 土器片、黒躍石片、 | |
| 八郎ヶ野 | 八郎ヶ野 | 後・晚 期 | 土器片 多量、磨製石斧、折製石斧、 | |
| 倉 園 A | 倉園 | 後 期 | 指宿式、鍾ヶ崎式土器、石皿 | |
| 倉 園 B | 倉園 | 早・前 期 | 吉田式、前平式土器、局磨石片 | 包含層一部消滅 |
| 十 文 字 | 十文字原 4081 | 後 期 | 指宿式土器、石片、焼石 | |
| 浜 場 | 片野 | 前 期 | 吉田式土器 | |
| 出 水 | 内之倉 前畠 2928 | 早 期 | 穀粒押型文土器 | |
| 平 原 | 内之倉 平原 | 早 期 | 石坂式土器 | 一部消滅 |
| 山 裙 | 内之倉 山裙 | 晚 期 | むしろ目压痕文土器 | |
| 今別府 | 内之倉 今別府 | 晚 期 | 大石式、黒川式、むしろ目压痕文土器、大型打製石斧 | 耕地改良工事にて一部消滅 |
| 上 檜 野 | 内之倉 檜野 | 後 期 | 指宿式土器 | |
| 橋 ノ 口 | 内之倉 橋ノ口 ⁴⁶⁶ ₄₆₇ | | 入来式土器 | |
| 櫛 ノ 口 | 内之倉 櫛野 | 前・後 期 | 吉田式、指宿式土器、打製、磨製石斧 | |
| 鎌 石 橋 | 帖 鎌石 | 前 期 | 前平式土器、黒躍石片 | |
| 鎌 石 | 帖 鎌石 | 前 期 | 吉田式土器 | |
| 二 反 野 | 帖 二反野 | 晚 期 | 夜臼式土器、たたき石、黒躍石片 | 土地改良工事にて消滅 |
| 坂 之 上 | 帖 坂之上 | 前 期 | 前平式土器、石鍬 | 消滅 |
| 野 首 橋 | 帖 大性院 | 早・前 期 | 轟C・C式、曾畠式土器、石鍬 | 一部残存 |
| 夏 井 浜 | 夏井 地蔵下 | 後 期 | 西平式、三万田式、御領式土器、石鍬、たたき石 | |
| 上 ノ 園 | 夏井 上園 | 前 期 | 塞ノ神B式土器 | 道路改修のため一部消滅 |
| 曲 瀬 | 安楽 中原 | 後 期 | 市来式土器 | 広域散布 |
| 小 瀬 A | 安楽 小瀬 4684 | 後 期 | 市来式土器、黒躍石片 | 一部消滅 |
| 中 原 | 安楽 中原 | 後 期 | 指宿式、鍾ヶ崎式土器、すり石、黒躍石片 | 一部消滅 |
| 小 瀬 B | 安楽 小瀬 | 後 期 | 指宿式、市来式土器 | 一部消滅 |
| 百 堂 穴 | 安楽 岩戸 | 早 期 | 轟B式土器、石鍬 | 落石にて危険 |
| 宮 脇 | 安楽 宮脇 1106～1 | 後 期 | 市来式、鍾ヶ崎式土器、石鍬、石皿 | 一部消滅 |
| 安 良 | 安楽 安良 | 後 期 | 市来式土器、磨製石斧 | |

| 遺跡名 | 所 在 地 | 編 (土器) | 遺 物 | 備 考 |
|-----|--------|-----------|------------------------|------------|
| 鳥井下 | 安樂 鳥井下 | 晚 期 | 大石式土器 | 包含層消滅 |
| 船 磨 | 安樂 船磨 | 前 期 | 轟式土器 | |
| 前ノ段 | 安樂 前ノ段 | 後 期 | 網目文土器, すり石, たたき石 | |
| 山 角 | 安樂 上ノ門 | 後 期 | 西平式, 打製石斧, 石皿, 敲石, すり石 | 包含層残存 一部消滅 |

(称生時代)

| 遺跡名 | 所 在 地 | 編 (土器) | 遺 物 | 備 考 |
|-------|----------|-----------|---------------------------|--------------------------|
| 出 口 | 内之倉 出口 | 中・後 期 | 弥生式土器, 石器(双角石斧) | |
| 姥ヶ谷 | 内之倉 姥ヶ谷 | 中 期 | 弥生式土器, 石鍤 | |
| 上 門 | 安樂 上門 | 前・中 期 | 打製石斧, 石劍, 紡錘車, 石製品, 弥生式土器 | |
| 大 迫 | 安樂 大迫 | 中 期 | 弥生式土器 | |
| 牧 野 | 田之浦 牧野 | | 磨製石斧, 紡錘車, 土偶, 高杯 | |
| 山 久 保 | 山久保 | 中 期 | 打製石斧, 高杯 | |
| 毛 穴 野 | 帖 毛穴野 | 中 期 | 弥生式土器片, 櫛目文土器片 | |
| 六 月 坂 | 六月坂 | 後 期 | 弥生式土器片 | |
| 野 首 | 帖 野首 | 中 期 | 弥生式土器, 打製石斧 | |
| 宮 馬 場 | 安樂 宮馬場 | 後 期 | 弥生式土器片 | |
| 小 潤 | 帖 小潤 | 後 期 | 弥生式土器片 | |
| 水 ケ 迫 | 安樂 水ヶ迫 | 後 期 | 弥生式土器 | |
| 天 堤 | 潤野 天堤 | 中 期 | 石器破片 | |
| 石 踊 | 帖 石踊 | 中 期 | 石器, 弥生式土器片 | |
| 道 慢 | 道 慢 | 中 期 | 弥生式土器, 磨製石斧 | |
| 八郎ヶ野 | 八郎 八郎ヶ野 | | 大型打製石斧, 打製石斧 | |
| 後 谷 | 四浦 後谷 | 前 中 期 | 石 器 | |
| 田 吹 野 | 田之浦 田吹野 | 前 中 期 | 弥生式土器片, 打製石斧 | |
| 下 牧 | 帖 下牧 | 中 期 | 山ノ口式土器, 石斧, 焼石(磨製), 柱穴遺構 | S.27.12発見(屋敷地ならし作業中) 住居跡 |
| 夏 井 | 夏井 外牧 | | 磨製石斧 | |
| 安 良 | 安樂 安良 | | | |
| 曲 瀬 | 安樂 曲瀬 | | | |
| 高 吉 | 高 吉 | | カメ棺 | |
| 大 越 | 田之浦 大越 | 中 期 | 土 器 | |
| 東黒土田 | 内之倉 東黒土田 | | 土 器 | |
| 片野洞穴 | 内之倉 片野 | 前・中・後期 | 土器, 石器 | S. 39 発掘調査 |

| 遺跡名 | 所 在 地 | 編 年 (土 器) | 遺 物 | 備 考 |
|-------|---------|--------------|---------------|---------|
| 佐 野 | 帖 佐野 | 後 期 | 土 器 | |
| 横 峰 | 横 峰 | 後 期 | 土 器 | |
| 上 原 | 内之倉 上原 | 中 期 | 土 器 | |
| 二 反 野 | 帖 二反野 | | 土 器 | |
| 上田屋敷 | 帖 上田屋敷 | 中 期 | 土 器, 木炭, 有肩石斧 | |
| 鎌 石 | 鎌 石 | | 土 器 | |
| 外 ノ 牧 | 外ノ牧 | 中 後 期 | 土 器, 高杯 | |
| 打出ヶ浜 | 夏井 打出ヶ浜 | 後 期 | 土 器 | 消 滅 |
| 宮 脇 | 安楽 宮脇 | 中 後 期 | 土 器 | |
| 平 城 | 安楽 平城 | 後 期 | 土 器 | 消 滅 |
| 一 丁 田 | 安楽 一丁田 | 中 期 | 土 器 | |
| 百 堂 穴 | 安楽 岩戸 | | 磨製石鋸 | 落石のため危険 |

(古墳時代)

| 遺跡名 | 所 在 地 | 編 年 (土 器) | 遺 物 | 備 考 |
|-------|---------|--------------|---|--------------|
| 山宮土塙 | 安楽 宮馬場 | (石 棺) | 骨壺, 鏡, 長太刀, 積石棺 | |
| 夏井古墳 | 夏井 堀之内 | | 土師器, 敷石 | 消 滅 |
| 飯盛山古墳 | 夏井 ダグリ岬 | 五 世 紀 | 壺型埴輪, 曲玉, 丸玉 | |
| 打出浜土塙 | 夏井 打出浜 | (地下式土塙) | 玄室不明, 小石で固めた石棺男女三人の重葬 | 昭和初年 |
| 宮馬場土塙 | 安楽 宮馬場 | (地下式土塙) | 小石で囲んだ三尺の石棺彷彿製鏡 1, 直刀 1, 骨壺 2, 土器破片 18 | 明治 26 年 12 月 |
| 六月坂土塙 | 六月坂 | (横穴式土塙) | 横穴式土, 人骨, 須恵, 土師器 10 余 | 明治 42 年 |
| 安 良 | 安楽 安良 | | 土師器片 | |
| 六 月 坂 | 六月坂 | | 須恵器, 土師器 | |
| 枇 榴 島 | 枇榔島 | | 須恵器, 土師器片 | |
| 宮 馬 場 | 安楽 宮馬場 | | 須恵器, 土師器 | |
| 水 ケ 迫 | 安楽 水ヶ迫 | | 須恵器(塚, マリ) | |
| 桜 山 | 桜 山 | | 土師器(塚) | |
| 市 坂 | 柳井谷 市坂 | | 須恵器(カメ) | |
| 小 潟 | 帖 小澗 | | 土師器(塚) | |
| 石 蹤 | 帖 石蹠 | | 土師器(塚) | |
| 額 娃 郷 | 安楽 額娃郷 | | 須恵器, 土師器 | |
| 一 丁 田 | 安楽 一丁田 | | 須恵器, 土師器 | |
| 外 ノ 牧 | 帖 外ノ牧 | | 土 師 器 | |

第2節 周辺の遺跡

志布志町は東西に最大幅約10.2キロメートル、南北に約23.9キロメートルあり、縦長な形を呈している地形である。志布志町の遺跡は、北部山岳に水源をもち西側地域を中心に縦流する安楽川と、東部山岳に水源をもち東側地域を貫流する前川との二河川を中心とする流域に、その分布が見られ（註3），第1表に示すように126遺跡ある。この表は、鹿児島県教育委員会発行の『鹿児島県遺跡地図』（1970）・志布志町教育委員会発行の『志布志町文化財要覧』（1970）・鹿児島県考古学会発行『鹿児島考古』第9号（1974）等にもとづいたもので、その内訳は、縄文時代70・弥生時代38・古墳時代18である。

その中で、片野洞穴は、内ノ倉2,684番地にあり、海拔100mの寄り合った丘陵の末端部の洞穴内に位置している。洞穴の前は、幅3mの谷川が流れ、洞穴の入口の高さは8m、幅12m奥行約70mあるとされている。昭和39年に調査が実施され、その結果、遺跡は縄文時代中期を除く縄文時代早期末から古墳時代までと、さらに中・近世に入って再び利用されたものとされている。出土遺物は、藩政時代の轡ノ口、角釘、大平通宝、須恵器、弥生式土器（前期・中期・後期）、夜臼式、布目压痕文土器、松添式、御領式、西平式、市来式、草野式、岩崎上層式、曾畠式、轟式系統の土器、隆起線文土器、敲き石、牙製釣針、骨製カンザシ、骨鏃、鹿の頭骨、鹿の歯、サメの歯、淡水産・海水産の貝類など多彩な遺物がみられる（註4）。山ノ上遺跡は、前川と益倉より前川に流入する支流が合流する地点の南側、石踊台地の北西隅の畠地に位置し、別府（石踊）遺跡の北側500mの地点に所在する。昭和42年3月に調査が実施され、その結果、敷石住居跡が発見され、出土遺物は、縄文時代前期の塞ノ神式土器、石坂式類似土器および石核などがみられる（註5）。小淵遺跡は、前川河口より700m付近の海岸段丘である内城の東側にあり、前川との比高が14mの伊地知武夫氏の宅地内に位置している。昭和42年8月に調査が実施され、その結果、縄文時代中期および後期の土器の出土がみられている。出土遺物は、岩崎下層式、岩崎上層式、指宿式、市来式、草野式、石錘、扁平半磨製石器がみられる。この遺跡により志布志城の中世の遺構が確認されている（註6）。宮之前遺跡は、福島川の支流である四浦川より侵食された通称宮之前台地上にあり、標高約200mの台地上の畠地に位置している。昭和48年8月に調査が実施され、その結果、住居址と考えられるピット及び堀り込みの遺構が確認されている。出土遺物は、縄文時代前期および後期の土器を中心とし、前平式、岩崎式、指宿式、綾式、石鏃、石斧、磨石、石皿などがみられる（註7）。飯盛山古墳は、夏井のダグリ岬の標高50.2mの飯盛山に位置している。5世紀中頃の前方後円墳といわれ、県内では最も古い古墳とされている。全長約80m、前方部の長さ37m、巾30m、高さ4.5mで周囲は葺石がめぐらされ、石室は後円部にあり、長さ180cm、巾90cm、高さ90cmで、栗石を利用した堅穴式石室であったといわれ、昭和38年の国民宿舎ダグリ荘の建設により破壊された。出土遺物は、壺形埴輪、ガラス製勾玉、丸玉、小玉などがみられる（註8）。

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至るまでの経過

県営特殊農地保全整備事業（別府地区）に伴う埋蔵文化財分布調査は、昭和51年12月7日に鹿児島県教育委員会文化課が実施し遺跡の確認をした。

そこで、これらの文化財の取り扱いについては、鹿児島県農政部農地防災課・鹿児島県大隅耕地事務所と協議した結果、確認調査を実施することになり、昭和51年12月22・24日の両日において確認調査を実施した。

その結果、埋蔵文化財の包蔵が確認されたので、さらに農政部農地防災課・大隅耕地事務所と再度協議し、この地区については事業計画変更により事業を実施する運びとなった。しかし道路敷（第1号関連農道）については、事業計画変更が困難なために、道路敷 2,400 m²について発掘調査を実施することとなった。

一次発掘調査は、鹿児島県教育委員会が事業主体となり、道路敷 400 m²をその対象とし、昭和52年3月15日より4月6日まで実施した。その結果、縄文時代晚期・縄文時代前期の包含層より集石遺構および遺物などが検出された。

二次発掘調査は、国・県の補助事業として志布志町教育委員会が事業主体となり、発掘調査を鹿児島県教育委員会文化課に依頼した。

発掘調査の組織

| | | | |
|---------|-----------|---------|-------|
| 発掘調査主体者 | 志布志町教育委員会 | | |
| 発掘調査責任者 | 志布志町 | 教育長 | 北 迫 茂 |
| 発掘調査事務局 | 志布志町教育委員会 | | |
| | 社会教育課長 | 山 畑 敏 寛 | |
| | 社会教育係長 | 永 山 又 男 | |
| | 主 事 | 山 裕 幸 良 | |
| | 主 事 | 有 馬 文 雄 | |
| 発掘調査担当者 | 鹿児島県教育委員会 | | |
| | 文化課 主 事 | 立 神 次 郎 | |
| | 主 事 | 中 村 耕 治 | |

発 堀 作 業 員

町田六男 実吉安尚 岩坂先 田中武雄 木佐貫忠三 原修一 草宮盛雄 桑迫俊一
北室利治 上園秋良 坂口明 木村通夫 木佐貫忠幸 田中勝 森山輝晴 荘司幸一
盛田正夫 相川範義 坪田勝仙 鶴田浩一 加治屋政雄 陣之内勝弘 大口信二郎
川元昭 法元修二 藤崎浩二 永野義己 田中浩 真乘坊勝己 山裾正一 吉原義浩
重森サキエ 森屋レイ子 森元初子 今別府キヨミ 東ミル 中野サエ 吉原スエ子

池尻幸子 原田カズ 肝付サツ子 宇都ハルコ 森洋子 脇畠正子 中野光子 大坪マサ子
別府アツ子 井上洋子 森屋しの 東イネ 徳重キミ子 原トメ 太田みちえ 森屋はつえ
牛込ヨシ子 毛野鈴枝 山重みどり 堀之内キミ 上橋敏子 徳田ツルカ 持留みどり
南田ミチ子 白浜キノ 山下朋子 山畠泰子 中村則子 藤崎洋子 木佐貫スミエ
後藤ノリ

このほか県文化課課長谷崎哲夫氏・同専門員本藏久三氏をはじめ県文化課職員、大隅耕地事務所谷川郁夫氏、志布志町農政課尾川深・中川洋一、斎野建設斎野正春氏の方々の協力を得た。深謝を表したい。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和53年7月10日より8月17日までの32日間行った。その間の経過は、以下調査日誌抄をもってかえたい。

調査日誌抄

- 7月10日(月) ベース設置作業。器材運搬作業。作業員に対して調査の主旨と作業上留意すべきことについて説明を実施。道路敷地内(7~8m)は諸車通行止規制が不可能となつたため片側交互による調査実施。道路敷上面にシラス及び砂利が敷きつめられている関係上、重機により剥ぎ取り作業及び排土運搬作業。グリッド設定作業(1区長さ10mを基準とする)。道路センター杭N.22~N.30までの排土運搬作業。N.22~23は、すでに縄文前期遺物包含層は削平がみられる。N.23~N.24は、縄文前期遺物包含層より塞ノ神式土器の出土がみられる。
- 7月11日(火) 各グリッドに西側1区~25区と呼称する。西側1区~4区は道路敷直下Ⅶ層となる。西側5区・6区道路敷上面排土作業後、縄文前期遺物包含層の遺物検出作業。塞ノ神式土器・吉田式土器・すり石・石器などの出土がみられる。西側7区黒色研磨土器の出土がみられる。西側8区~10区堀り下げ作業。西側13区~17区排土作業。
- 7月12日(水) 西側5区~10区遺物検出作業。西側6区~7区Ⅶ層より石鏃・塞ノ神式土器の出土、西側8区遺物包含層は西及び北側へ傾斜がみられる。西側9区・10区は扁平磨製石斧・土器細片の出土がみられる。西側8区~10区は現道路面より約1.0m以上あり、排土作業に困難を期す。西側13区~15区排土運搬作業。町文化財審議委員の現地見学。
- 7月13日(木) 西側5区・6区・7区遺物平板・レベル実測作業(N.1~N.191)。遺物取り上げ作業後堀り下げ作業。石鏃・塞ノ神式土器の出土がみられる。西側13区~16区遺物検出作業。13区攢乱層より磨製石斧の出土がみられる。西側

19区～23区排土作業後遺物検出作業。20区より縄文時代晚期の出土がみられる。

- 7月14日(金) 西側5区・6区包含層遺物検出作業(Ⅶ層)道路敷直下にあたり、非常に固くしまり堀り下げ作業に困難をきたす。石斧・石鎌・塞ノ神式土器の出土。西側8区・9区・10区遺物検出作業後平板・レベル実測作業。(No.192～No.400)。西側19区・20区においてⅢ層及びⅣ層堀り下げ作業。20区縄文晚期包含層の残層より土器の出土。西側22区・23区Ⅶ層・Ⅷ層堀り下げ作業。遺物・遺構とも確認されず。
- 7月15日(土) 西側5区・6区遺物検出作業後平板・レベル実測作業(Ⅶ層)。石鎌・塞ノ神式土器の出土が主体(No.401～No.517)。西側8区・9区・10区遺物検出作業。8区は縄文前期包含層で傾斜がみられる。塞ノ神式土器の出土。9区・10区は縄文晚期の土器細片・打製石斧・すり石の出土がみられる。西側11区・12区・18区・21区において道路敷盛土の排土作業。西側22区・23区・24区Ⅸ層の堀り下げ作業、遺物・遺構とも確認されず。
- 7月17日(月) 西側5区・6区・8区遺物検出作業(Ⅳ層)。塞ノ神式土器(口縁部・底部を含む)の出土。8区は西側及び北側へ傾斜がみられる。塞ノ神式土器は胎土はもろく、施文の剥脱がみられる。西側9区・10区遺物検出作業。縄文晚期土器細片・扁平打製石斧・凹み石・石すい・石鎌などの出土。西側8区・9区・10区平板・レベル実測作業(No.518～No.800)。
- 7月18日(火) 西側5区・6区・8区遺物検出作業(Ⅶ層)。7区は一時排土捨て場とし排土作業(ダンプとベルトコンベア使用)。塞ノ神式土器片の出土。8区より塞ノ神式土器の完形品の出土がみられるが、土器の表面は剥脱がみられ、胎土は非常にもろい。西側9区・10区縄文期(Ⅲ層及びⅣ層)遺物検出作業。土器細片の出土が多い。
- 7月19日(水) 西側5区～8区遺物検出作業(Ⅶ層)。塞ノ神式土器及び平柄式土器の出土。8区は旧畠地境界にあたり、旧耕作面直下は縄文前期包含層となる。西側9区・10区遺物検出作業。土器細片が多く出土。西側8区・9区・10区平板・レベル実測作業(No.801～No.1010)。
- 7月20日(木) 西側5区～8区遺物検出作業(Ⅶ層)。塞ノ神式土器片の出土。包含層は西側へ傾斜がみられる。遺構確認されず。平板・レベル実測作業(No.1011～No.1195)。西側9区・10区遺物検出作業(Ⅳ層)。土器細片の出土。曾畠系土器と考えられる。
- 7月21日(金) 西側5区～8区遺物検出作業(Ⅶ層)。5区遺物出土はあまりみられなくなる。6区・7区遺物出土量は少なくなり土器自体もろさを感じる。8区塞ノ神式土器・平柄式土器の出土。排土運搬作業(ダンプによる)。西側9区・10区遺

物検出作業(Ⅳ層)。9区・10区は深いため排土作業に困難を期す。

- 7月22日(土) 西側6区～7区遺物検出作業(Ⅶ層)。全体的に遺物の出土はみられなくなる。遺構確認されず。西側8区遺物検出作業(Ⅶ層)土器細片の出土がみられるが、包含層下部へ下がるにしたがい破片の大きさは多少大きくなる傾向がみられる。胎土のもろさを感じる。西側9区・10区遺物検出作業(Ⅳ層)。土器とともに石器の出土がみられる。
- 7月24日(月) 雨のため堀り下げ困難を期す。町教育委員会において発堀調査協議(片側東側道路敷について)。整理作業。
- 7月25日(火) 西側6区～8区遺物検出作業。平板・レベル実測作業(№1196～№1431)。(№1533～№1587)。西側9区・10区遺物検出作業。平板・レベル実測作業(№1432～№1532)。西側12区遺物検出作業(Ⅲ層)。道路敷排土作業。黒色研磨土器。石鏃・磨製石斧(刃部のみ)・扁平磨製石斧の出土。
- 7月26日(水) 西側6区～8区西壁層位断面用ミニトレチ設定後堀り下げ作業。層位断面図作成。8区一部において前期包含層が確認されたため、その周辺の遺物検出作業。西側9区・10区遺物検出作業(Ⅳ層)。西側11区道路敷排土作業後遺物検出作業(Ⅲ層)。西側12区遺物検出作業(Ⅲ層及びⅣ層)。平板・レベル実測作業(№1538～№1621)。遺物取り上げ作業。
- 7月27日(木) 東側5区～7区道路敷排土作業(ブル・ユンボ投入)遺物検出作業(Ⅶ層)。西側へ傾斜しているため、遺物包含層は攪乱がみられる。但し6区・7区は遺物包含層残部より塞ノ神式土器片の出土がみられる。西側8区～12区遺物検出作業(Ⅳ層及びⅦ層)。8区塞ノ神式土器片の出土。9区～12区曾畠系土器・磨製石斧・石匙・たたき石の出土。
- 7月28日(金) 暴風雨のため作業中止。発堀器材は中央公民館へ。遺物取り上げ作業(西側8区～12区)。整理作業。
- 7月29日(土) 雨のため作業中止。整理作業。
- 7月31日(月) 雨のため作業中止。発堀器材中央公民館より発堀現場へ。町教育委員会において発堀調査協議(全面通行止めの件)。整理作業。
- 8月1日(火) 発堀調査地は昨夜からの雨のため、多量の水がたまり排水ポンプを利用し、排水作業。排土運搬作業。ベース設営作業。発堀器材搬入作業。西側11区・12区遺物検出作業(Ⅳ層)。曾畠系土器・すり石・たたき石・石鏃などの出土。
- 8月2日(水) 西側10区～12区遺物検出作業(Ⅳ層)。雨がときより強くなり、西側9区盛土(排土)運搬作業へ移行。風雨が強くなり、発堀器材再び中央公民館へ搬入。整理作業。
- 8月3日(木) 発堀器材運搬作業(中央公民館～発堀現場へ)。排水作業。東側6区・7区遺物検出作業。遺物出土はあまりみられない。西側8区～13区(一部)遺物検

出作業(Ⅳ層)。平板・レベル実測作業(№1622～№1756)。遺物取り上げ作業後Ⅶ層(アカホヤ)堀り下げ作業。Ⅶ層(前期遺物確認のため)ミニトレンチ設定し堀り下げ作業。9区・10区より前期包含層中より塞ノ神式土器の確認がなされる。

- 8月4日(金) 東側5区～7区遺物検出作業(Ⅵ層)。塞ノ神式土器の出土。量はそれほど多くない。平板・レベル実測作業(№1757～№1790)。遺物取り上げ作業。西側9区～11区遺物検出作業(Ⅴ層及びⅥ層)。平板・レベル実測作業(№1790～№1829)。遺物取り上げ作業。東側8区～11区道路敷排土作業(ブル・ユンボ・ダンプ投入)。
- 8月5日(土) 西側9区～11区遺物検出作業。9区が傾斜面でいちばん深い個所となり、塞ノ神式土器の出土。遺構確認されず。東側8区～10区盛土及び道路敷排土作業(ブル・ユンボ・ダンプ投入)。
- 8月7日(月) 西側9区・10区遺物検出作業。塞ノ神式土器の出土。Ⅶ層最終面で整査したが遺構確認されず。平板・レベル実測作業(№1830～№1908)。遺物取り上げ作業。土層断面用ミニトレンチ設定し、堀り下げ実施。土層断面図作成作業。東側9区～12区遺物検出作業及び排土作業。西側調査済区へ排土作業。作業の能率がよくハイペースで進む。
- 8月8日(火) 東側9区～12区遺物検出作業(Ⅲ層及びⅣ層)。土器はほとんど細片の出土。黒色研磨土器・蓆目压痕土器・磨製石斧・すり石・たたき石などの出土。8区～9区は畠地境界となりⅢ層は削平がみられ、残存してもわずかにみられる。排土作業がスムーズに出来るため能率的に進行できる。
- 8月9日(水) 東側9区～12区遺物検出作業(Ⅲ層及びⅣ層)。曾畠系土器・磨製石斧3個・すり石・たたき石・11区より集石出土。平板・レベル実測作業(№1909～№1992)。遺物取り上げ作業。排土作業(重機による)。
- 8月10日(木) 東側9区～12区遺物検出作業(Ⅳ及びⅤ層)。曾畠系土器・すり石・たたき石・凹み石の出土。平板・レベル実測作業(№1998～№2143)。遺物取り上げ作業。
- 8月11日(金) 東側8区～12区遺物検出作業(Ⅳ層及びⅤ層)。曾畠系土器・塞ノ神式土器・石鏃の出土。一部Ⅶ層堀り下げ作業。
- 8月12日(土) 東側8区～12区遺物検出作業(Ⅵ層及びⅦ層)。塞ノ神式土器の細片の出土。Ⅶ層遺物・遺構ともに確認されず。12区は一部Ⅶ層堀り下げ作業。曾畠系土器の出土。平板・レベル実測(№2279～№2457)。遺物取り上げ作業。
- 8月16日(水) 東側8区～12区遺物検出作業(Ⅶ層及びⅧ層)。9区・10区Ⅶ層より塞ノ神式土器の出土。量は多くない。8区・11区・12区遺物・遺構ともに確認されず。平板・レベル実測作業(№2458～№2472)。遺物取り上げ作業。
- 8月17日(木) 東側壁層位断面実測。本日で発掘調査終了。器材運搬作業。

第2図 別府(石鍋)遺跡地周辺地形とグリッド配置図



第3節 調査の概要

別府（石踊）遺跡内における道路敷内の発掘調査は、現在日常利用されているため大型自動車等の通行止規制をとりながら片側づつの道路敷内の発掘調査を実施することとなった。道路敷は、昭和51年度特殊農地保全整備事業により新設された関連農道（幅員8m）である。道路は現在仮道路のために地表面にはシラスや砂利が敷きつめられ（遺跡保護のため）ており、重機により排土作業を実施した。道路は台地のほぼ中央を直線に南北方向に走っており、道路敷の西側を基準にグリッドを設定した。グリッドは10mを基準とし、調査対象地域の南端（昭和51年度発掘調査最終区—鹿児島県教育委員会事業主体）より1区・2区～25区まで設定した。発掘調者は、昭和51年度の確認調査により縄文時代晚期と縄文時代前期の遺物包含層の2文化層が確認されているために、その調査結果に基づいて調査を実施する運びとなった。

調査は片側づつのために終始排土作業に困難を期し、すべてダンプにより運び出す処置をとらざるを得なかつた。

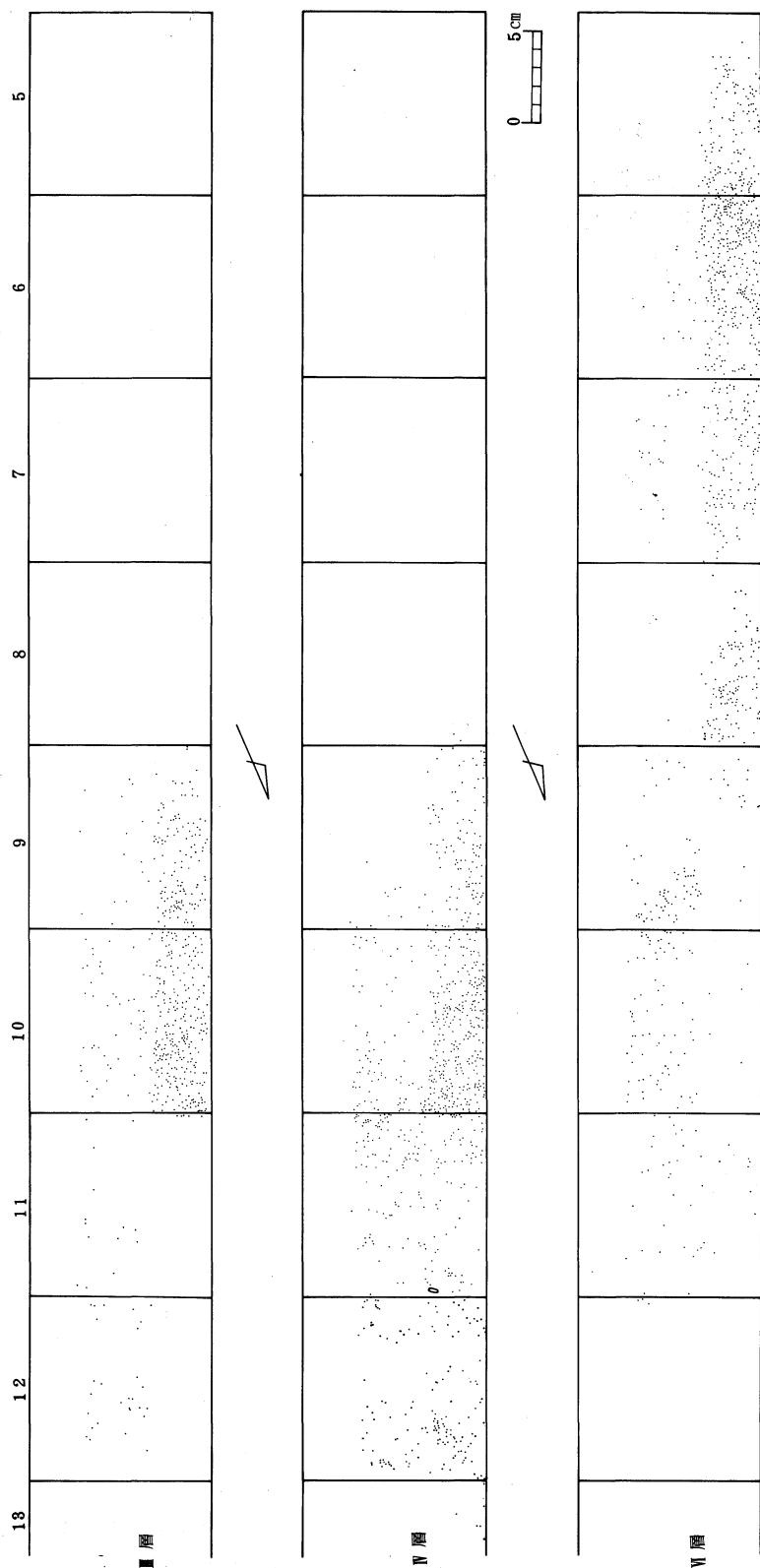
1区より4区においては、Ⅶ層の縄文時代前期の包含層はすでに削除されており、ローム層（無遺物層）が道路敷直下にみられた。さらに西側道路敷端付近に1m巾のトレンチを入れ深堀りをシラス直上まで実施した。I層よりⅦ層までは開墾や畑作などにより削平されている。

5区・6区においては、Ⅶ層上面まで削平がみられ、縄文時代前期遺物包含層がかろうじて残存しており、特に東側5区・6区は遺物包含層をわずかに残すのみであった。遺物包含層より土器及び石器の検出がみられた。土器は塞ノ神式土器を主体に平梅式・吉田式・石坂式などがみられ、石器は石斧・石鎌・スクレーパー・磨石・凹石などの検出がなされた。

7区より12区にかけては、旧地形が9区付近を最深部とする谷状の地形を呈していたものと思われ、現在の道路面より1m以上の深さで縄文時代晚期の遺物包含層が確認される個所もみられた。縄文時代晚期包含層は、Ⅲ層にあたり土器及び石器が検出された。土器は黒色研磨土器や粗製土器が見られ、黒色研磨土器は浅鉢がほとんどであり、なかには赤色顔料で彩色を施し、口縁部にリボン状の突起を有する浅鉢もある。粗製土器は深鉢が主体であるが、組織痕（網目圧痕文・席目圧痕文）が施されたものも出土した。石器は扁平磨製石斧・打製石斧・石鎌・石錐・磨石などがみられる。その他に性格は明確でないが、土偶の手足を思わせるような棒状の土製品も数点確認されている。Ⅳ層は曾畠式系の土器が検出されたが、Ⅲ層とⅣ層の土質が同質のため境目は明確でない。土器は直線・曲線の沈線を施した曾畠式系の土器を主体として荒い貝殻条痕を施した轟式系土器・太い沈線を施した岩崎式系土器などが検出された。石器は磨石・敲石・凹石が多量に出土し、石鎌・石斧・石匙などもみられる。Ⅴ層は無遺物層である。Ⅵ層は縄文時代前期の包含層であるが、10区より北側は出土量が少なくなり、塞ノ神式土器が主体である。

13区より25区にかけては、事業施行や開墾などのため土層の攪乱がみられ、20区に縄文時代晚期の包含層が一部残存していたのみである。さらに1m巾のトレンチにより深堀りを行い、調査を実施したが、ローム層が道路直下にみられる区が多く確認された。

第3図 遺物出土状況

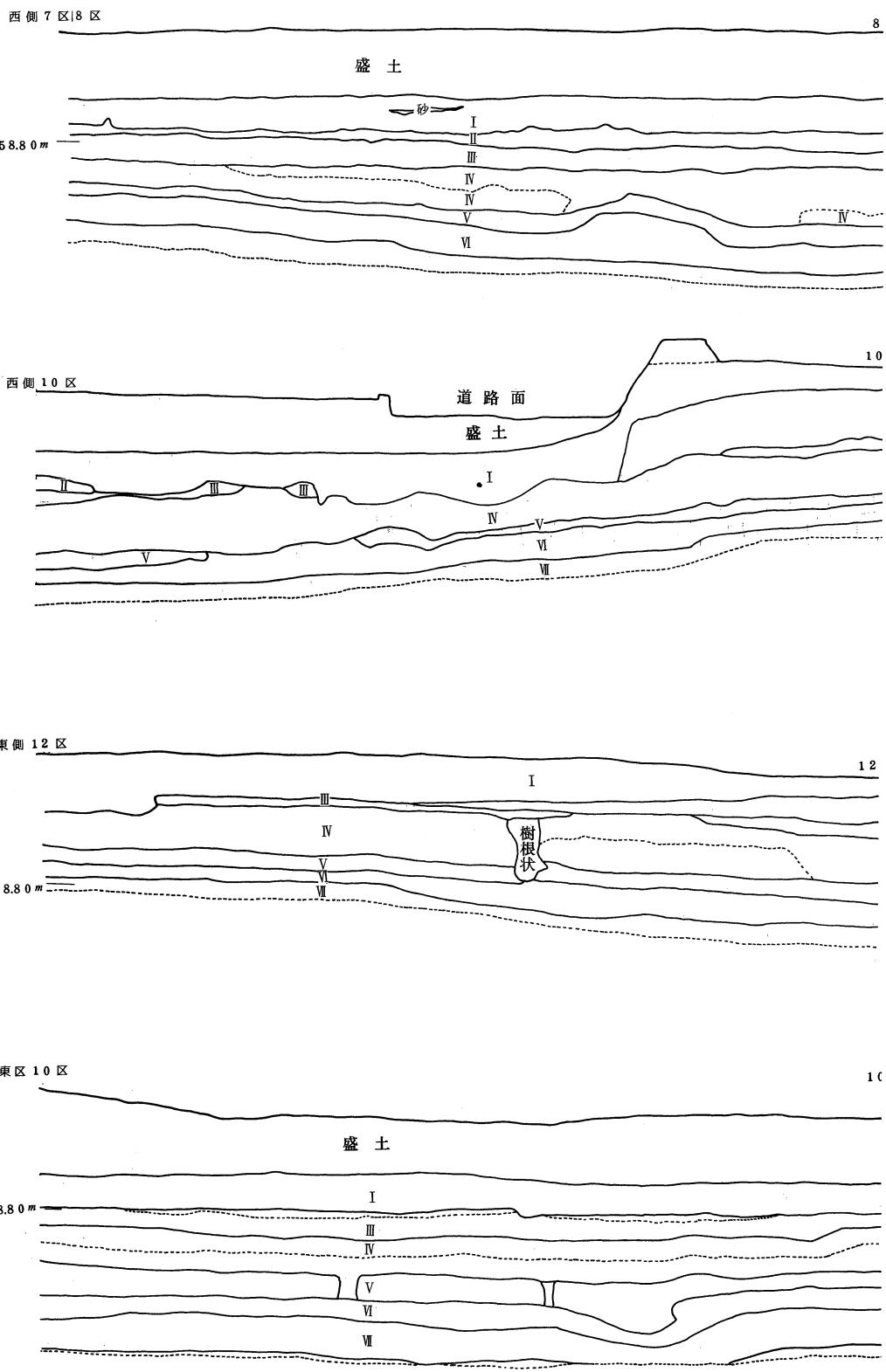


第3章 層位

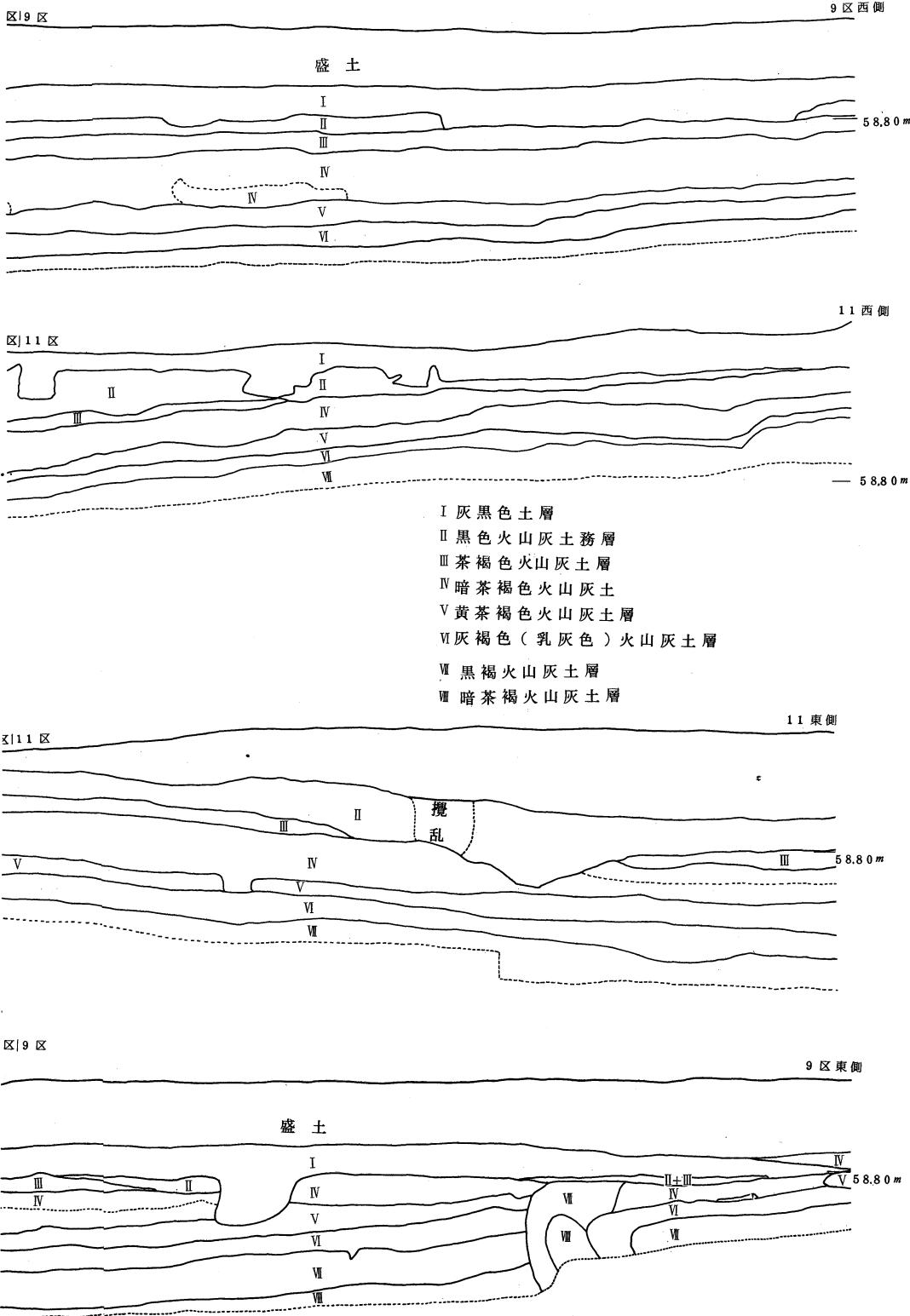
本遺跡における層位は、I層からVII層まで確認した。遺跡地を含む同台地は、昭和51年度の特殊農地保全整備事業の実施により旧地形とともに地層の著しい変化が見られ、全体的にその保存はよくない。調査区の1区より4区までは、すでにVI層までの削平が行なわれ、道路敷直下VII層となり、すでに縄文時代前期遺物包含層は残存していない。5区より7区(一部)にかけては、V層若しくはVI層上部まで削平され、道路敷直下に縄文時代前期の遺物包含層となる。7区(一部)より12区は、旧地形が谷状で谷頭付近の地形のためか旧耕作土の上に約30cmから約50cmの客土(盛土)が確認され、事業実施によるものであり、上層部より残存している。13区以降は、地層が著しく変化しており攪乱層がみられる。

当遺跡の標準的な層位は以下のとくである。

- I層：灰黒色土層で約20cmを測る。1区より7区(一部)までと13区以降は、今までの耕作や特殊農地保全整備事業のためか削平がみられる。7区(一部)より12区にかけては残存している。
- II層：黒色火山灰土層である。II層は比較的薄く、一部においては耕作のために削平をうけている地点もみられる。土質は粒子が小さく、約10cmを測るが、10区・11区においては、約30cmを測る。1区より7区までと13区より以降は削平がみられる。
- III層：茶褐色火山灰土層で軽石を含んでいる。約10cmから20cmを測り、縄文時代晩期の遺物包含層である。8区より12区までと20区に残存しており、他区においては、攪乱および削平がみられる。
- IV層：暗茶褐色火山灰土層である。土層中に約20mm大の軽石を含んでおり、下部の近くになるとつれて量も多く含まれ粒も大きくなる。土質はIII層と類似している。この層は色調により上下に細別され、下部の方がやや暗さが強く感じられる。曾畠式系統の遺物包含層であるが、岩崎式系統・轟式系統の土器も少量みられる。8区より12区まで確認される。
- V層：黄褐色火山灰土層である。土層中に軽石を含み主成分は火山ガラスである。約15cmを測るが、ブロック状になっている部分が認められる。上部は軟質であるが、下部はペミスを多く含み砂状である。わずかに粘質を帶びているが、所謂「赤ホヤ」層と思われ、無遺物層である。8区より12区までは残存している。
- VI層：灰褐色(乳灰色)火山灰土層で、粘質が強く約15cmを測る。縄文時代前期の遺物包含層で、塞ノ神式土器を主体に平椿式・吉田式・石坂式などがみられる。5区より11区まで残存している。
- VII層：黒褐色火山灰土層で約20cmを測る。無遺物層。
- VIII層：暗茶褐色火山灰土層で粘質度が高い。無遺物層。



第4図 別府遺跡地層断面図

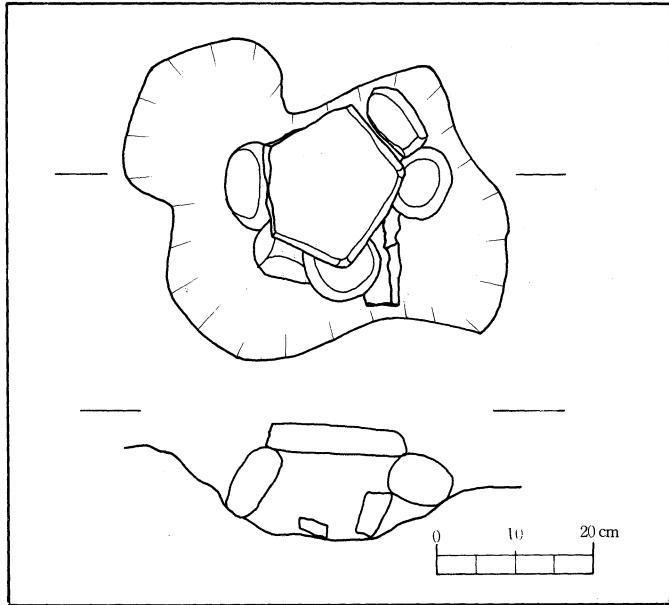


第4章 遺構・遺物

第1節 遺構(第5図 図版2)

集石は11区より検出されたものである。出土層は、Ⅳ層下部にあたり、Ⅳ層出土でⅡ類・Ⅲ類・Ⅳ類土器と同一層である。これまでの他遺跡発見の集石に比較すれば形態を異にしている。

この集石は約10cm～約15cm大の硬質砂岩製の円礫5個と長さ約19cm、巾約10cm、厚さ約4cmの扁平な砂岩製の角礫の上に厚さ約4cm、一边が約15cmの硬質砂岩製の不定な五角形状の扁平な板石がのった状態でみられ、砂の堆積がみられる。集石は深さ約10cmの不整形な落ち込みの中にみられ、炭化物、焼痕跡、灰の残存、腐食物の付着などは確認されなかった。この集石の中で注意すべき点は、円礫のすべてが磨石、敲石であり生活用具の一つを使用していることである。



第5図 集石遺構実測図

第2節 遺物

1 土器

出土した土器は、すべて縄文時代の土器であり、遺物包含層は、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅶ層の三文化層である。時期は縄文時代晩期より前期まで広範囲にわたるものである。これらの土器は出土層位、並びに従来の土器編年を基にし、新しいものから順に10類に細分した。

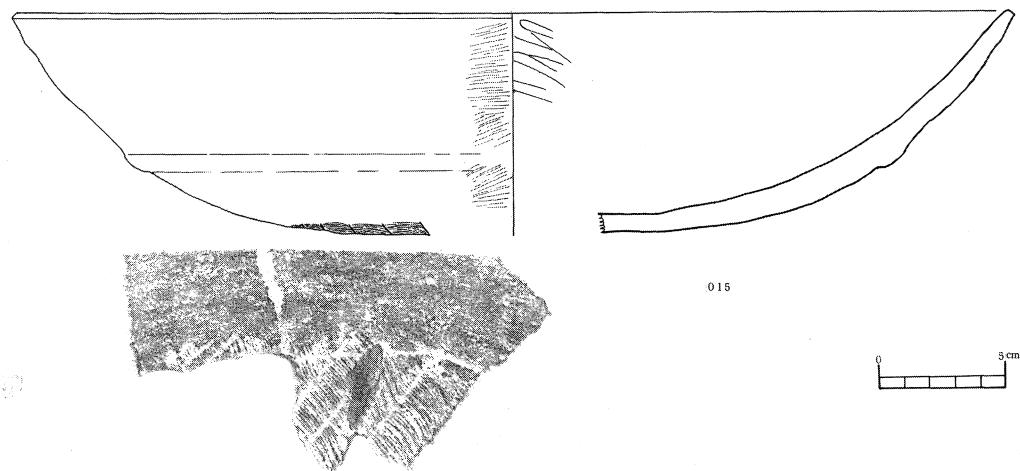
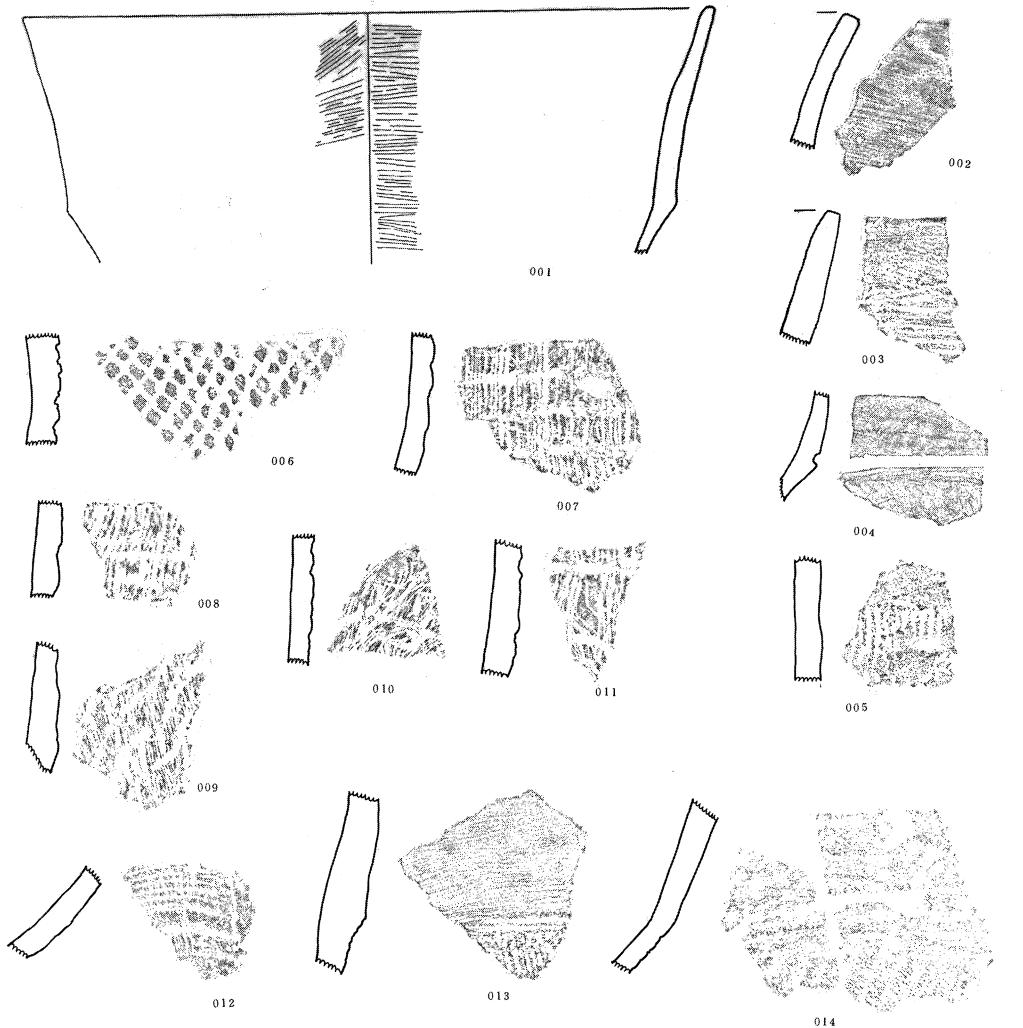
主たる時期の遺物は、Ⅲ層の縄文時代晩期(黒川式系統土器)Ⅳ層の縄文時代前期(曾畠式系統土器)Ⅶ層の縄文時代前期(塞ノ神式系統土器)であるが、いずれの土器も破片が多く、出土量に比し復元可能なものはごく少量であった。以下各類ごとに考察を加えていきたい。

第Ⅰ類土器(第6図、第7図、001~009)

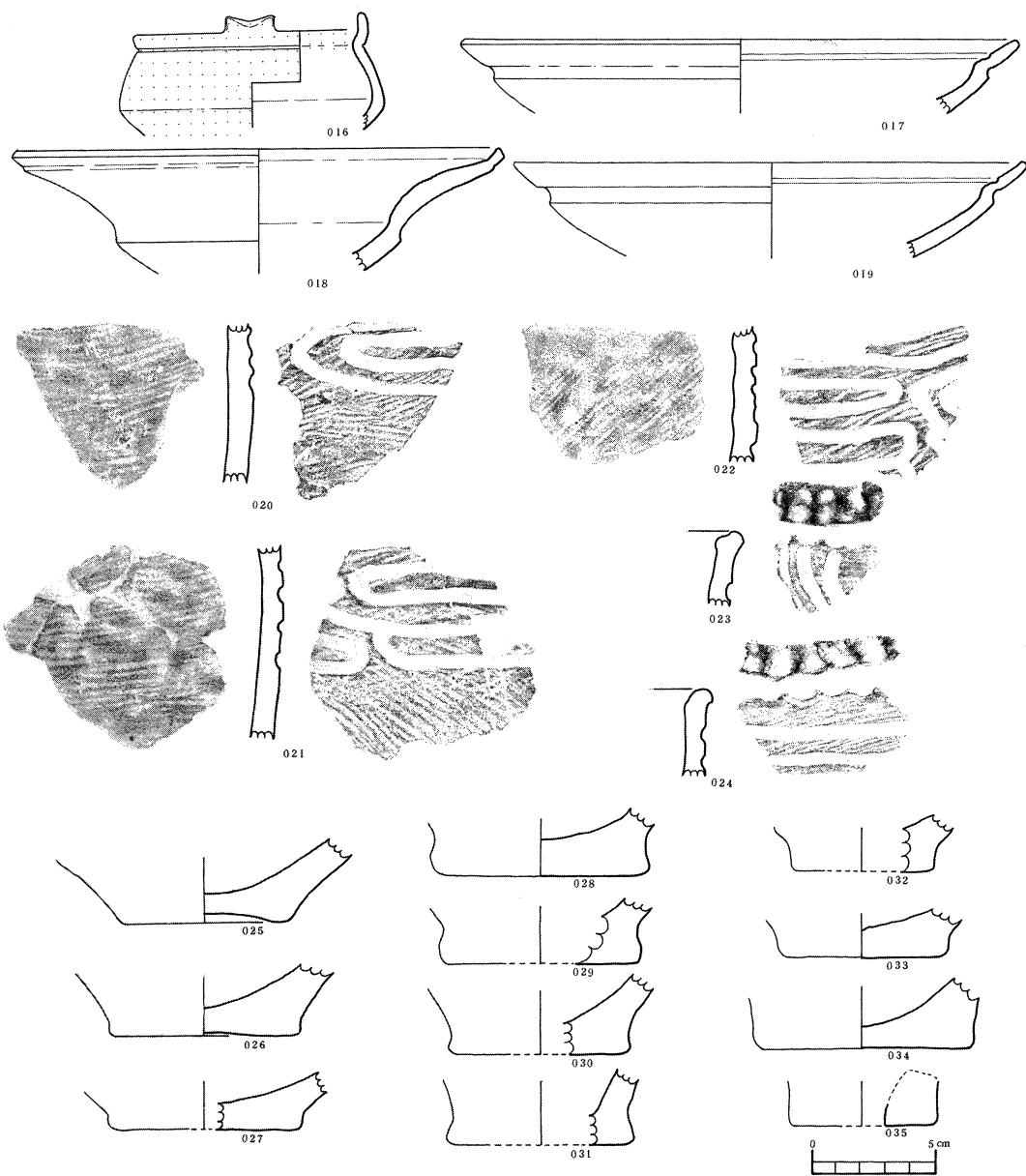
第Ⅰ類土器はⅢ層出土の土器である。繩文晩期(黒川式土器系統に位置するものと思われる)。001~003は鉢形土器である。001は胴部が屈折し、口縁部はゆるやかに外反する。復元口縁径は27.6cmを測る。器面は外面・内面共にハケによる調整痕が見られる。焼成は不良で胎土は石英・長石・角セメントを含む。006は網目圧痕文土器である。007~015は席目圧痕文土器である。007は経糸間隔1.2cm、緯糸0.2cm、008は経糸間隔2.0cm、緯糸0.4cmである。009~011は荒い席目圧痕文で器面の凹凸が激しい。012~015は底部に近い部分で緻密な席目圧痕文である。015は復元口縁径39.4cm、器高8.8cmを測る鉢形土器だが浅く皿状の器形を呈する。外面はハケによる調整、内面はヘラ磨きである。底の部分に経糸間隔1.5cm~1.9cm、緯糸は0.1cm~0.2cmの席目圧痕文が施される。焼成は良好で胎土は石英・長石・角セメント等が含まれる。004、016~019は黒色研磨土器である。016は口縁径9.6cmを測る。器形は球形状に張った胴部より「く」字状に屈折し、やや内湾する短い口縁部を形成する浅鉢である。口縁部にはリボン状の突起を有する。外面全面、及び口縁部内面に朱と思われる赤色顔料が塗られている。017、019はサラ状の胴部より2段の屈折部をもって外反する口縁部を有する浅鉢である。019はサラ状の胴部より「く」字状に外反しさらに口縁端部において内側へ屈折する浅鉢である。016~019はよく研磨された土器で焼成は良好で胎土は精選され、石英・長石等を含む。

第2表 Ⅰ類・Ⅱ類土器出土一覧表

| 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 | 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 |
|-------|---|-----|---|------------------|------------------------|-------|----|-----|----|------|--------------------|
| 1-001 | I | 19 | Ⅲ | 淡茶褐色 | 復元口径：27.6cm | 2-019 | I | 11 | Ⅲ | 黒色研磨 | 浅鉢 (復元口径21.0cm) |
| 〃-002 | " | 12 | " | 茶褐色 | | 〃-020 | II | 10 | IV | 暗茶褐色 | 沈線スス付着 同 |
| 〃-003 | " | 9 | " | 外面：黒色 内面：茶褐色 | | 〃-021 | II | 10 | " | 茶褐色 | 沈線スス付着 個 |
| 〃-004 | " | 12 | " | 黒褐色 | 研磨 | 〃-022 | " | 10 | " | 暗茶褐色 | 沈線スス付着 体 |
| 〃-005 | " | 10 | " | 外面：黒褐色 内面：茶褐色 | | 〃-023 | " | 10 | " | 赤褐色 | 口唇部刻み 同 沈線 一 |
| 〃-006 | " | 10 | " | 明茶褐色 | 網目組織痕 | 〃-024 | " | 10 | " | 赤褐色 | 口唇部刻み 個 沈線 体 |
| 〃-007 | " | 12 | " | " | 席目圧痕文 | 〃-025 | 底部 | 10 | " | 赤褐色 | 底部若干あげ底 |
| 〃-008 | " | " | " | 黒褐色 | 席目圧痕文 | 〃-026 | " | 9 | " | 赤褐色 | |
| 〃-009 | " | 10 | " | 明茶褐色 | 荒い席目圧痕文 | 〃-027 | " | | | | |
| 〃-010 | " | 12 | " | 明茶褐色 | 荒い席目圧痕文 | 〃-028 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| 〃-011 | " | 10 | " | 茶褐色 | 荒い席目圧痕文 | 〃-029 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| 〃-012 | " | 12 | " | 茶褐色 | 席目圧痕文(底) | 〃-030 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| 〃-013 | " | 11 | " | 明茶褐色 | 席目圧痕文(鉢) | 〃-031 | " | 12 | " | 茶褐色 | |
| 〃-014 | " | 12 | " | 茶褐色 | 席目圧痕文(鉢) | 〃-032 | " | 10 | " | 赤茶褐色 | |
| 〃-015 | " | | " | 茶褐色 | 席目圧痕文 復元口径：39.4cm | 〃-033 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| 2-016 | " | 9 | " | 黒褐色研磨 | 赤色顔料付着。浅鉢 | 〃-034 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| 〃-017 | " | 11 | " | 黑色研磨 | 浅鉢(復元口径： 22.9cm)。研磨 | 〃-035 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| 〃-018 | " | 10 | " | 黑色研磨 | 浅鉢 復元口径：20.2cm | | | | | | |



第6図 I類土器実測図・拓影



第7図 I類土器・II類土器・底部実測図・拓影

第II類土器(第7図、020~024)

第II類土器はⅣ層出土で出土量は少なく図化したものにとどまる。従来岩崎式土器といわれているものである。020~022は同一個体で洞部上位に棒状施文具による太い沈線を施す。地文は、外面・内面共貝殻条痕である。023・024は同一個体で口縁部に棒状施文具による太い沈線を縦位・横位に施す。口唇部は同一施文具による押圧刻目を施し凹凸が著しい。地文は外面・内面共貝殻条痕である。いずれも焼成は良好で胎土は石英・長石・角セメント等が含まれる。025~035はI類もしくはII類に伴う底部と考えられる。

第Ⅲ類土器

本遺跡において最も出土量の多かったのがⅢ類土器である。Ⅲ類土器はⅣ層出土で沈線文を主体とした文様で、従来曾畠式土器と言われて来たものである。これらは器形・文様構成・器面整形等により4種類に細分される。

Ⅲ a類土器(第8図、第9図、036~085)

Ⅲ a類土器の文様構成は縦線文を施した後で、横線文、曲線文を施すものである。口縁部は直行するもの(040~043・049・050)と、やや外反するもの(036~039・044~047)がある。口唇部は平坦で例外なく刻み目を施す。口縁内面は3条~4条の横線文が施される。036~043・049~061・063は縦線文と横線文の組み合わせ、044~048・062・064~084は縦線文、横線文、曲線文の組み合わせである。085は底部の近くと思われる。施文具は沈線文、口唇部の刻み目とも先端の丸い棒状の施文具を用いたものと思われる。焼成は良好で胎土は石英・長石・角セメントを主に含むが、中には金雲母を含むもの(078)も見られる。器面整形はナデ整形が行われている。

Ⅲ b類土器(第9図、第10図、第11図、第12図、086~192)

Ⅲ b類土器の文様構成は、縦線文、横線文、斜行線文等が見られる。この中にはⅢ a類と大きな差異がなく区分するのに困難なものもある。口縁部は直行するものと、やや外反するものが見られる。口唇部は平坦で刻み目を施したもののがほとんどであるが、なかには丸味をおびたものもある。口縁内面には1条~6条の横線文を施したものが多い。086・087・089~095・097・099・101・177・178は口縁部下に数条の横線文を配し、その下方に縦線文、曲線文斜行線文等を施すものである。088・096・098・102・104・105・109・110・179~181は口縁部下に縦線文を配したもので、中には曲線文を組み合わせたものもある。これらはⅢ a類と大きな差異はない。099は復元口縁径が29.4cmを測る。100は外面、内面共にやや鋭いヘラ状施文具により短い横線文を施している。やや丸味をもっている口唇部には、同一施文具と思われる刻み目が見られる。口縁部はやや波状をなしている。111~149はやや長い縦線文と横線文を主体とした文様構成である。150~170は斜行線文、171~176は斜行線文と縦線文を組み合わせた文様構成である。177~192は小型の土器である。文様構成は大形土器とほとんど同じであるが、文様は細く鋭い沈線によるものである。これらⅢ b類土器の施文具は086・087・092・100・106・126・138・139・146~149・177~192はヘラ状施文具を、他の土器は棒状の施文具を使用したものと思われる。焼成は良好で胎土は石英・長石・角セメント等を主に含むが、中には金雲母を含むものも見られる。106は径約6mmの穿孔が見られる。137は接合部分が明瞭に残されている。器面整形はナデ整形が行われている。

Ⅲ c 類土器(第12図, 第13図, 193~220)

Ⅲ c 類土器の文様構成は綾杉文, 鋸歯文, 縦線文, 横線文等の沈線文と刺突連点文の組み合せである。又短線による四角形の幾何学文様も見られる。口縁部は外反し口唇部には刻み目を施す。口縁内面には刺突連点文が見られる。193は復元口縁径が27cmを測る。丸味をおびてふくらんだ胴部より頸部がややすぼまり、口縁部は外反する器形を呈する。断面には輪積み技法によるものと思われる接合部分が認められる。器面は外面、内面共にナデによる整形が行われる。文様はヘラ状の施文具により施され、刺突連点文と沈線文が交互に配置される。口縁部に3列の刺突連点文・頸部に鋸歯文、その下に3列の刺突連点文、胴部に沈線による幾何学文、胴部下位に3列の刺突連点文を配して底部へと移行する。胴部の文様はX字文と四角形文の組み合せ、縦線文とS字状文の組み合せの2つの文様単位を交互に施す幾何学文様である。口縁内面には4列の刺突連点文、口唇部にも刺突連点文が施される。198はヘラ状施文具により鋸歯状の斜行線文と、細く鋭い刺突連点文を交互に配してある。200は復元口縁径19.8cmを測る。丸味をおびた胴部より頸部でやや内湾し、口縁部は外反する器形を呈する。底部へと移行する部分に輪積み技法によると思われる接合部が認められる。器面は外面、内面共にナデによる整形が行われる。文様は棒状施文具により口縁部に2条の横線文、胴部に短線による四角形の幾何学文を施す。口縁内面には縦線文と3列の刺突連点文を交互に施す。口唇部の刻み目は荒く凹凸が著しい。外面と口縁内面付近にススが付着している。204~220は短線による四角形の幾何学文様を有する土器である。204~213は棒状施文具、214~220はヘラ状施文具によるものである。これらⅢc 類土器は器面整形はナデ仕上げで焼成は良好、胎土は石英・長石・角セシ石・金雲母等を含む。

Ⅲ d 類土器(第14図, 第15図, 第16図, 第17図, 221~320)

Ⅲd 類土器の文様構成は、縦線文、横線文、斜行線文、曲線文、連点文等の組み合せであるが、Ⅲa類、Ⅲb類、Ⅲc類の文様構成のような法則制は見られず、多種多様である。又、器面整形が貝殻条痕によるものも見られる。221~241は口縁部であるが、直行するもの、やや外反するものがある。225・226は粘土ひも状のものを貼りつけて、こぶ状の突起をつくり出している。227・228・233~239には外面・内面共に貝殻条痕が認められる。240は口縁部に接合部が見られる。241は口縁端部において急に外反する。243~254はヘラ状施文具、棒状施文具により斜行線文、鋸歯文、綾杉文等の文様を施す。251は内外面から穿孔を試みている痕跡が認められる。255~262・264~267は鋭いヘラ状の施文具により不規則な文様を施す。264・265は内面に貝殻条痕が認められる。256には穿孔が見られる。251・261・262は接合部が明瞭である。268~274は棒状の施文具により沈線文が施される。276~278は半載竹管状の施文具により縦線文を施す。279~281は同一個体かとも思われるもので、不規則な横線文と2条の縦線文による文様である。横線文の前後関係には法則制はない。又これらは接合部分が明瞭である。282~293はヘラ状・棒状の施文具により施文されている。286・289・290・293は沈線が浅くはっきりしない。294は復元口縁径約32.4cmで口縁はやや外反

している。外面には斜行線文、内面は横線文、口唇部には刻み目を施す。又、外面・内面共に貝殻条痕が認められる。295・296も貝殻条痕が認められる。297~299・301・302はヘラ状施文具により不規則な斜行線文が施される。300・303~316は外面にヘラ状・棒状の施文具による不規則な斜行線文・横線文が施されており、外面・内面には貝殻条痕が認められる。317はヘラ状施文具による不規則な直線文（格子目文）、曲線文が絵画的に施してある。器面は外面・内面共に貝殻条痕が認められる。318~320も貝殻条痕が認められる。

Ⅲ類土器底部（第17図、第18図、321~360）

Ⅲ類土器に伴う底部は大部分が丸底であるが、平底で安定性のあるものも少くない。321~325は小型の丸底で端正なくもの巣状の文様を呈する。326は丸底で縦線文を底部近くまで引きおろし、底部はくもの巣状を呈すると思われる、327は平底に近い丸底で底には文様は見られない。328は底部近くであるが縦線文・横線文が見られる。329~333はヘラ状施文具による短線を斜位・横位に施す。334は綾杉状の斜線文、335・336は斜線文、337・338は短い横線文を施し接合部が明瞭に認められる。339は縦線文と底部へ移行する部分に3列の刺突連点文を施す。340は平底で、斜線文を施す。底はくもの巣状になるものと思われる。343は平底で縦線文・横線文を施す。胴部と底部の貼り付け部が明瞭に認められる。胴部と底部の中間に幅7mmの粘土紐状の部分が見られる。外面にはススが付着している。344は平底で縦線文を放射状に近い形で施す。胴部と底部の接合部が認められる。345~347は丸底と思われる。底部へ移行する部分までヘラによる縦線文を引きおろす。底はくもの巣状になるものと思われる。348は尖底に近い丸底で、縦線文・横線文がわずかに認められる。349は丸底で外面・内面共に貝殻条痕が認められる。350~358は平底である。353は短い曲線文・横線文、354は胴部は縦線文・横線文、底の文様は横線文が施される。355は底部近くまで縦線文を引きおろし、下位は刺突文を施している。底の文様は円形に3条の沈線をめぐらし内側にくもの巣状の沈線を施したものと思われる。356は円形に1条の沈線をめぐらし内側に斜行線が見られる。357~358は縦線文を施す。356~358は胴部と底部の接合部が明瞭に認められる。359・360はほぼ直線的に底部へ移行する型であり、底部との接合部は明瞭に認められる。359は縦線文と横線文、360は縦線文と斜行線文の組み合わせである。これら底部の焼成は良好で胎土は石英・長石・角セメントなどが含まれる。

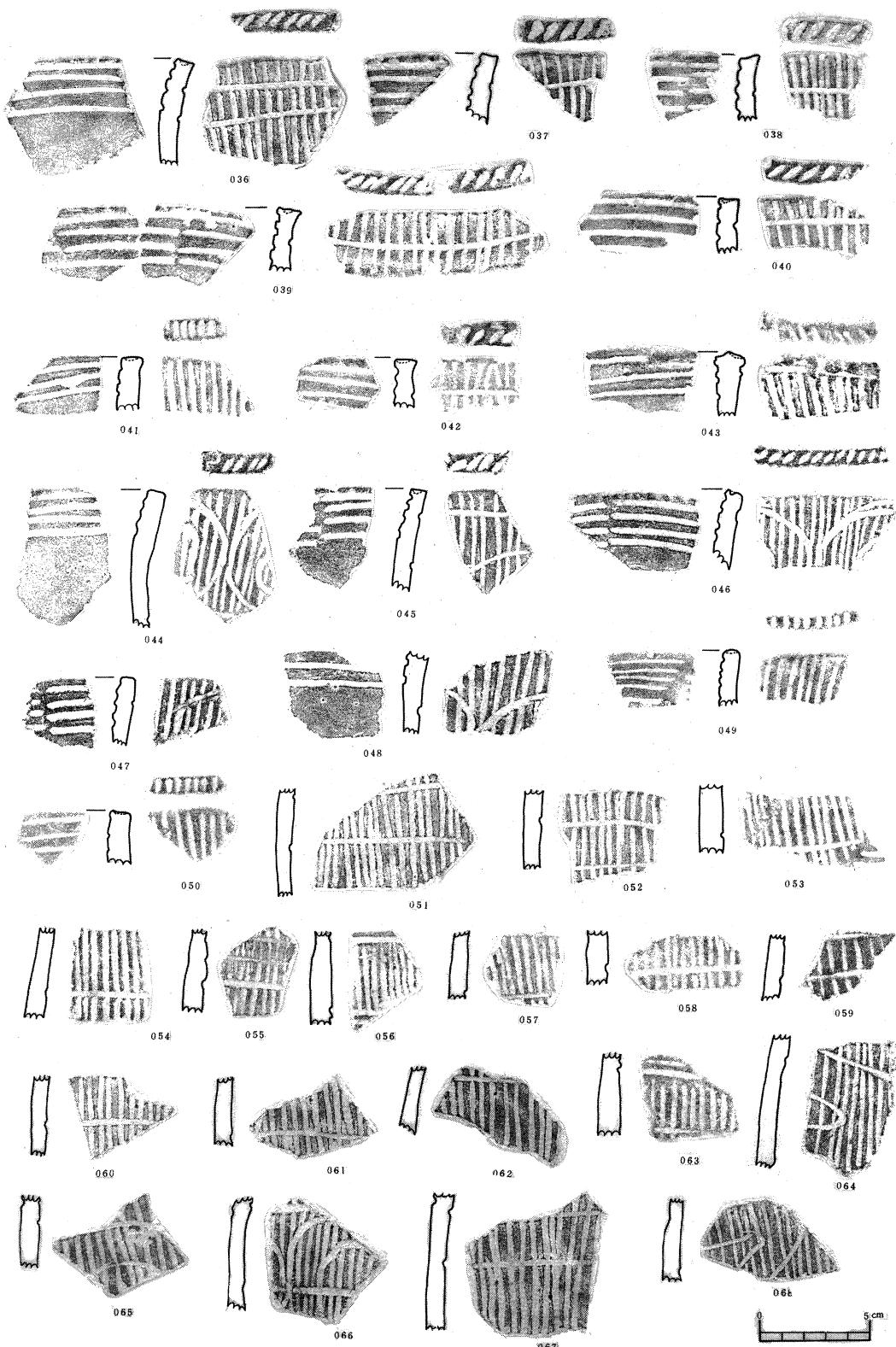
第3表 III類土器出土一覽表

| 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 | 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 |
|-------|------|-----|---|------|----|-------|------|-----|---|------|---------|
| 3-036 | IIIa | 11 | N | | | 4-078 | IIIa | 11 | N | 茶褐色 | スス付着 |
| "-037 | " | 11 | " | 茶褐色 | | "-079 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-038 | " | 11 | " | 茶褐色 | | "-080 | " | 11 | " | 灰褐色 | |
| "-039 | " | 11 | " | 茶褐色 | | "-081 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| "-040 | " | 10 | " | 茶褐色 | | "-082 | " | 10 | " | 暗茶褐色 | |
| "-041 | " | 11 | " | 茶褐色 | | "-083 | " | 11 | " | 灰茶褐色 | |
| "-042 | " | 10 | " | 茶褐色 | | "-084 | " | 11 | " | | |
| "-043 | " | 12 | " | 茶褐色 | | "-085 | " | 11 | " | | |
| "-044 | " | 11 | " | 茶褐色 | | "-086 | IIIb | 11 | " | 黒褐色 | IIIaに近い |
| "-045 | " | 11 | " | 暗茶褐色 | | "-087 | " | 12 | " | 黒褐色 | |
| "-046 | " | 11 | " | | | "-088 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| "-047 | " | 10 | " | | | "-089 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-048 | " | 11 | " | | | "-090 | " | 12 | " | 茶褐色 | |
| "-049 | " | 11 | " | 暗茶褐色 | | "-091 | " | 9 | " | 黒褐色 | |
| "-050 | " | 10 | " | 茶褐色 | | "-092 | " | 12 | " | | |
| "-051 | " | 10 | " | 暗茶褐色 | | "-093 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-052 | " | 10 | " | | | "-094 | " | 9 | " | 茶褐色 | |
| "-053 | " | 11 | " | 茶褐色 | | "-095 | " | 12 | " | | |
| "-054 | " | 10 | " | | | "-096 | " | 12 | " | 淡茶褐色 | |
| "-055 | " | 12 | " | | | "-097 | " | 12 | " | 黒褐色 | |
| "-056 | " | 11 | " | | | "-098 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| "-057 | " | 10 | " | | | 5-099 | " | 11 | " | 茶褐色 | スス付着 |
| "-058 | " | 11 | " | | | "-100 | " | 11 | " | 黒茶褐色 | 波状口縁 |
| "-059 | " | 11 | " | | | "-101 | " | 10 | " | 灰茶褐色 | 内面剥脱 |
| "-060 | " | 11 | " | 暗茶褐色 | | "-102 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| "-061 | " | 11 | " | 暗茶褐色 | | "-103 | " | 12 | " | 淡茶褐色 | |
| "-062 | " | 11 | " | | | "-104 | " | 9 | " | 茶褐色 | |
| "-063 | " | 10 | " | 茶褐色 | | "-105 | " | 9 | " | 淡茶褐色 | |
| "-064 | " | 11 | " | | | "-106 | " | 10 | " | 明茶褐色 | 穿孔あり |
| "-065 | " | 10 | " | | | "-107 | " | 10 | " | 灰茶褐色 | |
| "-066 | " | 11 | " | | | "-108 | " | 12 | " | | |
| "-067 | " | 11 | " | | | "-109 | " | 10 | " | 黒茶褐色 | |
| "-068 | " | 11 | " | | | "-110 | " | 12 | " | 黒茶褐色 | |
| 4-069 | " | 11 | " | 茶褐色 | | "-111 | " | 9 | " | 黒褐色 | |
| "-070 | " | 11 | " | | | "-112 | " | 11 | " | 黒褐色 | |
| "-071 | " | 11 | " | 茶褐色 | | "-113 | " | 11 | " | 暗茶褐色 | |
| "-072 | " | 10 | " | | | "-114 | " | 10 | " | 明茶褐色 | |
| "-073 | " | 11 | " | | | "-115 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-074 | " | 11 | " | | | "-116 | " | 12 | " | 黒褐色 | |
| "-075 | " | 11 | " | | | "-117 | " | 10 | " | 灰茶褐色 | |
| "-076 | " | 11 | " | 茶褐色 | | "-118 | " | 10 | " | 黒褐色 | |
| "-077 | " | 11 | " | 茶褐色 | | "-119 | " | 12 | " | 黒褐色 | |

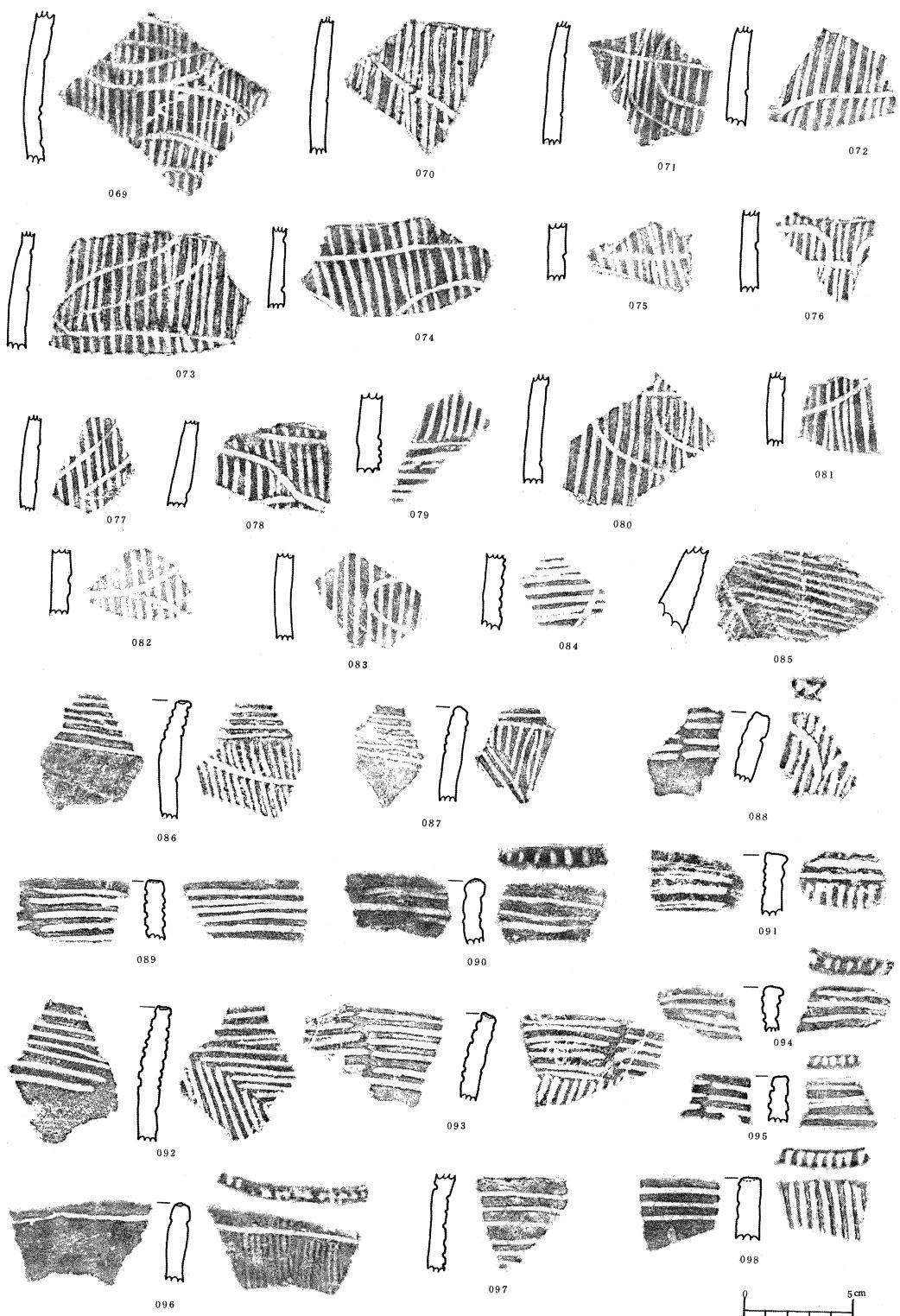
| 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 | 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 |
|-------|------|-----|---|------|----------|-------|------|-----|---|------|--------------|
| 5-120 | IIIb | 10 | N | 暗茶褐色 | | 6-162 | IIIb | 9 | N | 黒褐色 | |
| "-121 | " | 10 | " | 黒褐色 | | "-163 | " | 10 | " | 明茶褐色 | |
| "-122 | " | 11 | " | 黒褐色 | | "-164 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| "-123 | " | 10 | " | 茶褐色 | | "-165 | " | 12 | " | 明茶褐色 | |
| "-124 | " | 10 | " | 茶褐色 | | "-166 | " | 11 | " | 黒褐色 | |
| "-125 | " | 11 | " | 暗茶褐色 | | "-167 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-126 | " | 10 | " | 黒褐色 | | "-168 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-127 | " | 12 | " | 黒褐色 | | "-169 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-128 | " | 11 | " | 茶褐色 | スス付着 | "-170 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-129 | " | 10 | " | 黒褐色 | | "-171 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-130 | " | 11 | " | 茶褐色 | | "-172 | " | 10 | " | 黒褐色 | |
| "-131 | " | 10 | " | 茶褐色 | | "-173 | " | 12 | " | 黒褐色 | |
| "-132 | " | 12 | " | 茶褐色 | | "-174 | " | 10 | " | 明茶褐色 | |
| 6-133 | " | 10 | " | 茶褐色 | | "-175 | " | 11 | " | 茶褐色 | スス付着 |
| "-134 | " | 11 | " | 黒褐色 | | "-176 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| "-135 | " | 11 | " | 黒褐色 | | 7-177 | " | 12 | " | 明茶褐色 | |
| "-136 | " | 10 | " | 茶褐色 | | "-178 | " | 10 | " | 暗茶褐色 | |
| "-137 | " | 10 | " | 茶褐色 | 輪積の痕跡が残る | "-179 | " | 11 | " | 暗茶褐色 | |
| "-138 | " | 10 | " | 暗茶褐色 | } 同一個体 | "-180 | " | 11 | " | 茶褐色 | 表面剥脱 |
| "-139 | " | 10 | " | 暗茶褐色 | | "-181 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| "-140 | " | 11 | " | 明茶褐色 | 輪積の痕跡 | "-182 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| "-141 | " | 11 | " | 茶褐色 | | "-183 | " | 12 | " | 茶褐色 | 内面スス付着 |
| "-142 | " | 10 | " | 茶褐色 | | "-184 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-143 | " | 11 | " | 茶褐色 | | "-185 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-144 | " | 10 | " | 茶褐色 | | "-186 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-145 | " | 11 | " | 淡茶褐色 | | "-187 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-146 | " | 11 | " | 黒褐色 | | "-188 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| "-147 | " | 10 | " | 淡茶褐色 | | "-189 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| "-148 | " | 12 | " | 茶褐色 | 底部近く | "-190 | " | 10 | " | 暗茶褐色 | スス付着 |
| "-149 | " | 11 | " | 茶褐色 | 底部近く | "-191 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| "-150 | " | 11 | " | 黒褐色 | | "-192 | " | 10 | " | 暗茶褐色 | |
| "-151 | " | 10 | " | 黒褐色 | | "-193 | IIIc | | " | | |
| "-152 | " | 11 | " | 黒褐色 | | "-194 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-153 | " | 10 | " | 茶褐色 | | "-195 | " | 10 | " | 暗茶褐色 | |
| "-154 | " | 11 | " | 茶褐色 | | "-196 | " | 11 | " | 暗茶褐色 | スス付着 |
| "-155 | " | 10 | " | 茶褐色 | | "-197 | " | 12 | " | 茶褐色 | |
| "-156 | " | 11 | " | 茶褐色 | | "-198 | " | | " | | |
| "-157 | " | 11 | " | 茶褐色 | | "-199 | " | 13 | " | 明茶褐色 | |
| "-158 | " | 9 | " | 明茶褐色 | | 8-200 | " | 12 | " | 暗茶褐色 | 外面・口縁内部にスス付着 |
| "-159 | " | 12 | " | 黒褐色 | スス付着 | "-201 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| "-160 | " | 12 | " | 黒褐色 | | "-202 | " | 10 | " | 黒褐色 | |
| "-161 | " | 10 | " | 淡茶褐色 | | "-203 | " | 11 | " | 黒褐色 | |

| 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 | 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 |
|-------|-------|-----|----|------|---------------|--------|-------|-----|----|------|-----------------------|
| 8-204 | IIIc | 11 | IV | 黒褐色 | スス付着 | 9-246 | III d | 11 | IV | 茶褐色 | |
| 〃-205 | " | 11 | " | 茶褐色 | | 〃-247 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| 〃-206 | " | 10 | " | 茶褐色 | | 〃-248 | " | 11 | " | 灰茶褐色 | |
| 〃-207 | " | 12 | " | 黒褐色 | スス付着 | 〃-249 | " | 11 | " | 暗茶褐色 | |
| 〃-208 | " | 11 | " | 暗茶褐色 | | 〃-250 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| 〃-209 | " | 10 | " | 暗茶褐色 | | 〃-251 | " | 10 | " | 淡茶褐色 | 内外より穿孔をするが貫通していない |
| 〃-210 | " | 11 | " | 黒褐色 | | 〃-252 | " | 10 | " | 明茶褐色 | |
| 〃-211 | " | 10 | " | 暗茶褐色 | | 〃-253 | " | 10 | " | 淡茶褐色 | |
| 〃-212 | " | 11 | " | 暗茶褐色 | スス付着 | 〃-254 | " | 12 | " | 明茶褐色 | |
| 〃-213 | " | 10 | " | 茶褐色 | スス付着 | 10-255 | " | 10 | " | 淡茶褐色 | |
| 〃-214 | " | 9 | " | 黒褐色 | スス付着 | 〃-256 | " | 11 | " | 淡茶褐色 | 穿孔あり |
| 〃-215 | " | 10 | " | 黒褐色 | スス付着 | 〃-257 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| 〃-216 | " | 11 | " | 茶褐色 | スス付着 | 〃-258 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| 〃-217 | " | 12 | " | 茶褐色 | スス付着 | 〃-259 | " | 11 | " | 明茶褐色 | 輪積みのあと |
| 〃-218 | " | 11 | " | 茶褐色 | | 〃-260 | " | 11 | " | 明茶褐色 | |
| 〃-219 | " | 10 | " | 茶褐色 | | 〃-261 | " | 11 | " | 茶褐色 | 輪積みのあと スス付着 |
| 〃-220 | " | 11 | " | 茶褐色 | | 〃-262 | " | 11 | " | 茶褐色 | 輪積みのあと スス付着 261と同一 |
| 9-221 | III d | 11 | " | 明茶褐色 | | 〃-263 | " | 8 | " | 茶褐色 | 内面剥脱 |
| 〃-222 | " | 10 | " | 明茶褐色 | | 〃-264 | " | 11 | " | 明茶褐色 | 内面条痕 |
| 〃-223 | " | 11 | " | 淡茶褐色 | | 〃-265 | " | 10 | " | 淡茶褐色 | 内面条痕 |
| 〃-224 | " | 10 | " | 茶褐色 | | 〃-266 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| 〃-225 | " | 10 | " | 明茶褐色 | | 〃-267 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| 〃-226 | " | 10 | " | 黒褐色 | | 〃-268 | " | 12 | " | 灰茶褐色 | |
| 〃-227 | " | 12 | " | 茶褐色 | スス付着 内面:条痕 | 〃-269 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| 〃-228 | " | 10 | " | 茶褐色 | 内面:条痕 | 〃-270 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| 〃-229 | " | 12 | " | 淡茶褐色 | | 〃-271 | " | 9 | " | 黒褐色 | |
| 〃-230 | " | 13 | " | 暗茶褐色 | | 〃-272 | " | 10 | " | 淡茶褐色 | |
| 〃-231 | " | 9 | " | 暗茶褐色 | | 〃-273 | " | 9 | " | 茶褐色 | |
| 〃-232 | " | 10 | " | 茶褐色 | | 〃-274 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| 〃-233 | " | 12 | " | 暗茶褐色 | | 〃-275 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| 〃-234 | " | 12 | " | 淡茶褐色 | | 〃-276 | " | 12 | " | 茶褐色 | |
| 〃-235 | " | 10 | " | 茶褐色 | | 〃-277 | " | 12 | " | 茶褐色 | |
| 〃-236 | " | 10 | " | 黒褐色 | | 〃-278 | " | 12 | " | 茶褐色 | |
| 〃-237 | " | 10 | " | 黒褐色 | スス付着 | 〃-279 | " | 9 | " | 暗茶褐色 | 輪積みのあと スス付着 |
| 〃-238 | " | 11 | " | 黒褐色 | スス付着 | 〃-280 | " | 11 | " | 暗茶褐色 | 輪積みのあと スス付着 |
| 〃-239 | " | 10 | " | 黒褐色 | スス付着 | 〃-281 | " | 11 | " | 茶褐色 | 輪積み |
| 〃-240 | " | 10 | " | 暗茶褐色 | 接合部分剥脱 | 〃-282 | " | 10 | " | 暗茶褐色 | |
| 〃-241 | " | 11 | " | 明茶褐色 | | 〃-283 | " | 11 | " | 黒褐色 | |
| 〃-242 | " | 11 | " | 茶褐色 | スス付着 | 〃-284 | " | 11 | " | 灰褐色 | |
| 〃-243 | " | 11 | " | 灰茶褐色 | | 〃-285 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| 〃-244 | " | 10 | " | 茶褐色 | | 〃-286 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| 〃-245 | " | 10 | " | 明茶褐色 | | 〃-287 | " | 11 | " | 茶褐色 | |

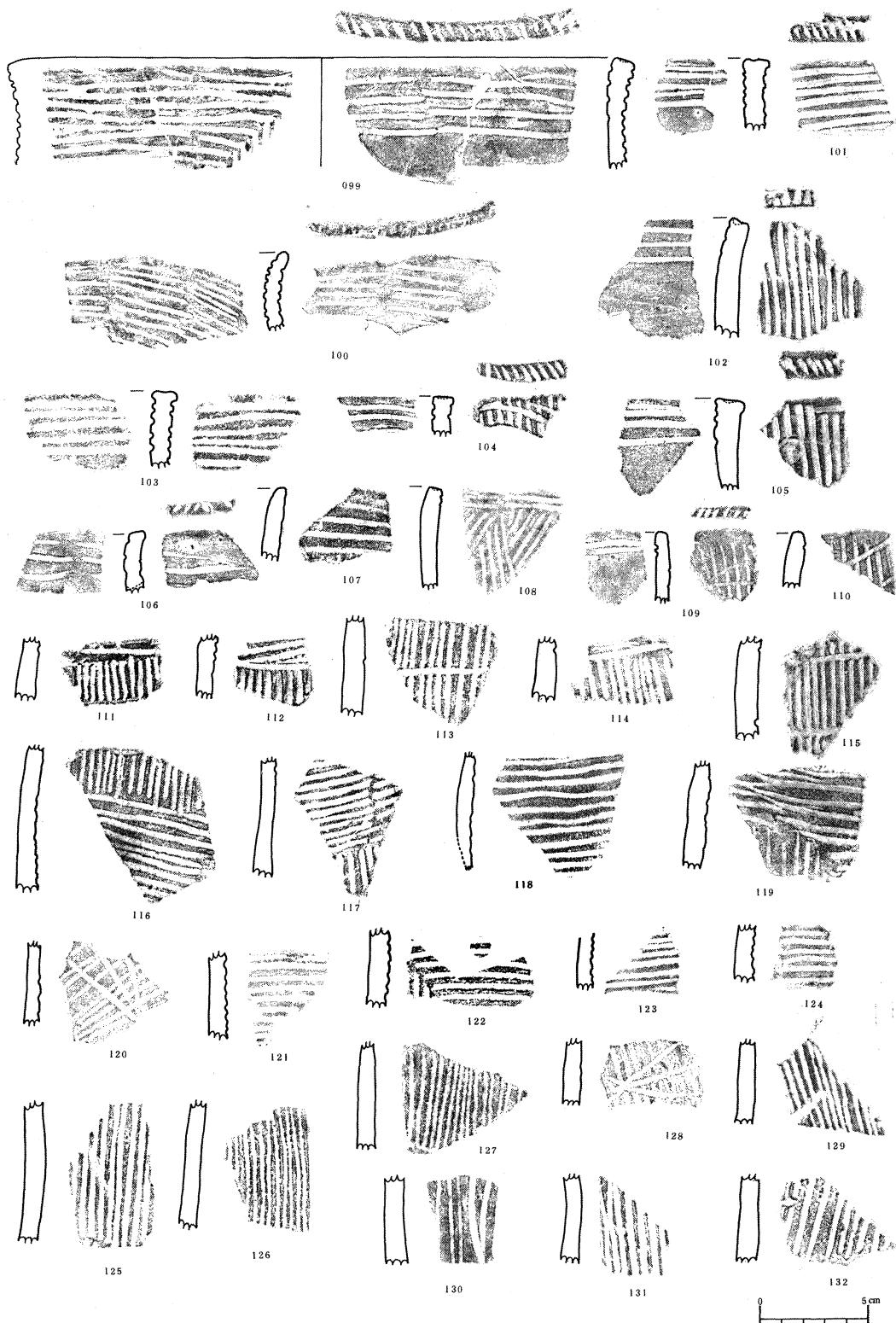
| 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 | 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 |
|--------|-------|-----|----|------|--------------|--------|----|-----|----|---------------|----------------|
| 10-288 | III d | 10 | IV | 灰褐色 | | 12-325 | 底部 | 11 | IV | 茶褐色 | |
| "-289 | " | 12 | " | 黒褐色 | | "-326 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-290 | " | 11 | " | 茶褐色 | スス付着 | "-327 | " | 11 | " | 茶褐色 | 輪積みのあと |
| "-291 | " | 11 | " | 灰褐色 | | "-328 | " | 12 | " | 茶褐色 | スス付着 |
| "-292 | " | 12 | " | 茶褐色 | スス付着 | "-329 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-293 | " | 11 | " | 黒褐色 | スス付着 | "-330 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| 11-294 | " | | " | 黒褐色 | | "-331 | " | 11 | " | やや白っぽい 茶褐色 | |
| "-295 | " | 11 | " | 淡茶褐色 | | "-332 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-296 | " | 11 | " | 茶褐色 | | "-333 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| "-297 | " | 10 | " | 黒褐色 | スス付着 | "-334 | " | 12 | " | 黒褐色 | |
| "-298 | " | | " | 明茶褐色 | | "-335 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| "-299 | " | 11 | " | 黒褐色 | スス付着 | 13-336 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-300 | " | 10 | " | 茶褐色 | スス付着・条痕 | "-337 | " | 11 | " | 暗茶褐色 | 輪積みのあと |
| "-301 | " | 10 | " | 明茶褐色 | | "-338 | " | 10 | " | 茶褐色 | 条痕 |
| "-302 | " | | " | 茶褐色 | スス付着・条痕 | "-339 | " | 10 | " | 明茶褐色 | |
| "-303 | " | | " | 暗茶褐色 | 条痕 | "-340 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-304 | " | | " | 黒褐色 | スス付着・条痕 | "-341 | " | 12 | " | 茶褐色 | |
| "-305 | " | | " | 灰褐色 | スス付着・条痕 | "-342 | " | 10 | " | 明茶褐色 | |
| "-306 | " | | " | 暗茶褐色 | 輪積みのあと 条痕 | "-343 | " | 11 | " | 黒褐色 | スス付着 輪積みのあと |
| "-307 | " | | " | 茶褐色 | スス付着・条痕 | "-344 | " | 12 | " | 茶褐色 | 接合部で剝脱 |
| "-308 | " | | " | 黒褐色 | スス付着・条痕 | "-345 | " | 11 | " | 白っぽい茶褐色 | |
| "-309 | " | 10 | " | 黒褐色 | 条痕 | "-346 | " | 10 | " | 白っぽい茶褐色 | |
| "-310 | " | | " | 黒褐色 | スス付着・条痕 | "-347 | " | 11 | " | 茶褐色 | 内面剥脱多い |
| "-311 | " | | " | 暗茶褐色 | 条痕 | "-348 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-312 | " | | " | 灰褐色 | 条痕 | "-349 | " | 11 | " | 白っぽい茶褐色 | 内面条痕 |
| "-313 | " | | " | 灰茶褐色 | スス付着・条痕 | "-350 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| "-314 | " | 10 | " | 茶褐色 | 条痕 | "-351 | " | 11 | " | 茶褐色 | |
| "-315 | " | | " | 黒褐色 | 条痕 | "-352 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| "-316 | " | | " | 茶褐色 | 条痕 | "-353 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| 12-317 | " | | " | 黒褐色 | 条痕 | "-354 | " | 10 | " | | |
| "-318 | " | 12 | " | 灰茶褐色 | 内面条痕 | "-355 | " | 10 | " | | |
| "-319 | " | 10 | " | 茶褐色 | 内面条痕 スス付着 | "-356 | " | 10 | " | | 接合部 |
| "-320 | " | | " | | | "-357 | " | 9 | " | | 接合部 |
| "-321 | 底部 | 12 | " | 茶褐色 | くもの巣状 | "-358 | " | 11 | " | | 接合部 |
| "-322 | " | 11 | " | 茶褐色 | くもの巣状 | "-359 | " | 9 | " | 暗茶褐色 | 接合部 |
| "-323 | " | 11 | " | 茶褐色 | くもの巣状 | "-360 | " | 11 | " | 茶褐色 | 接合部 |
| "-324 | " | 11 | " | 茶褐色 | くもの巣状 | | | | | | |



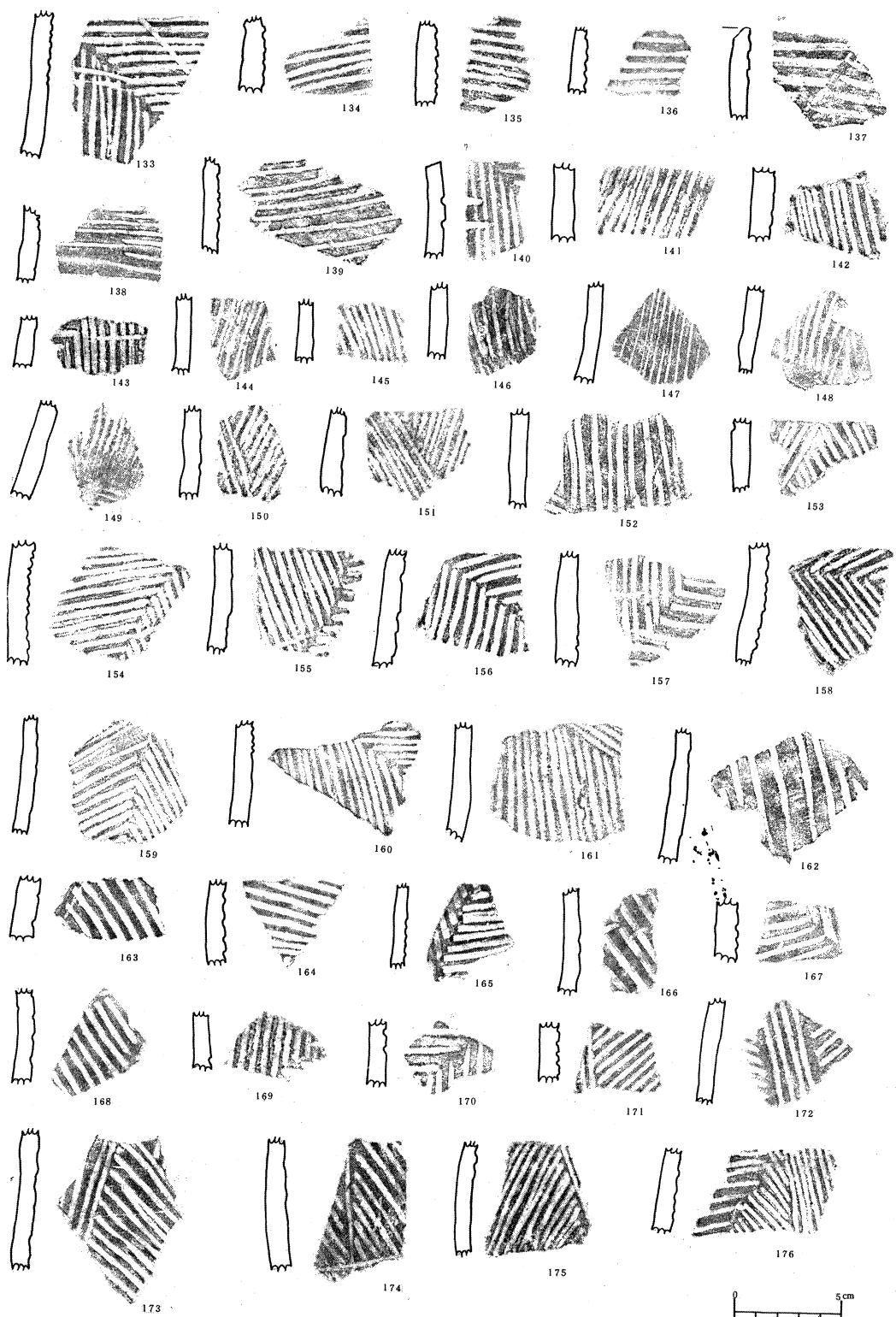
第8図 Ⅲa類土器実測図・拓影



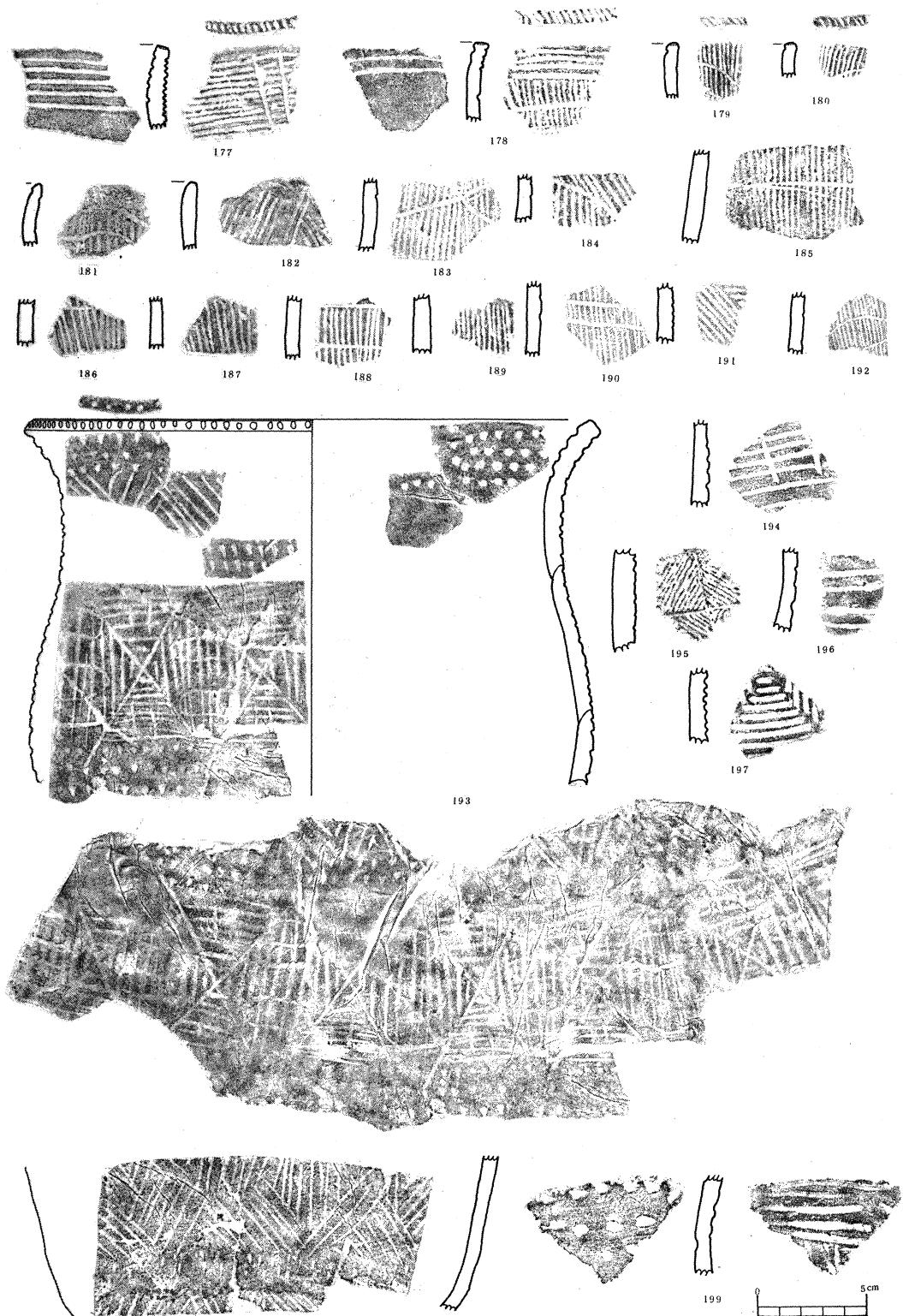
第9図 Ⅲa類土器実測図・拓影



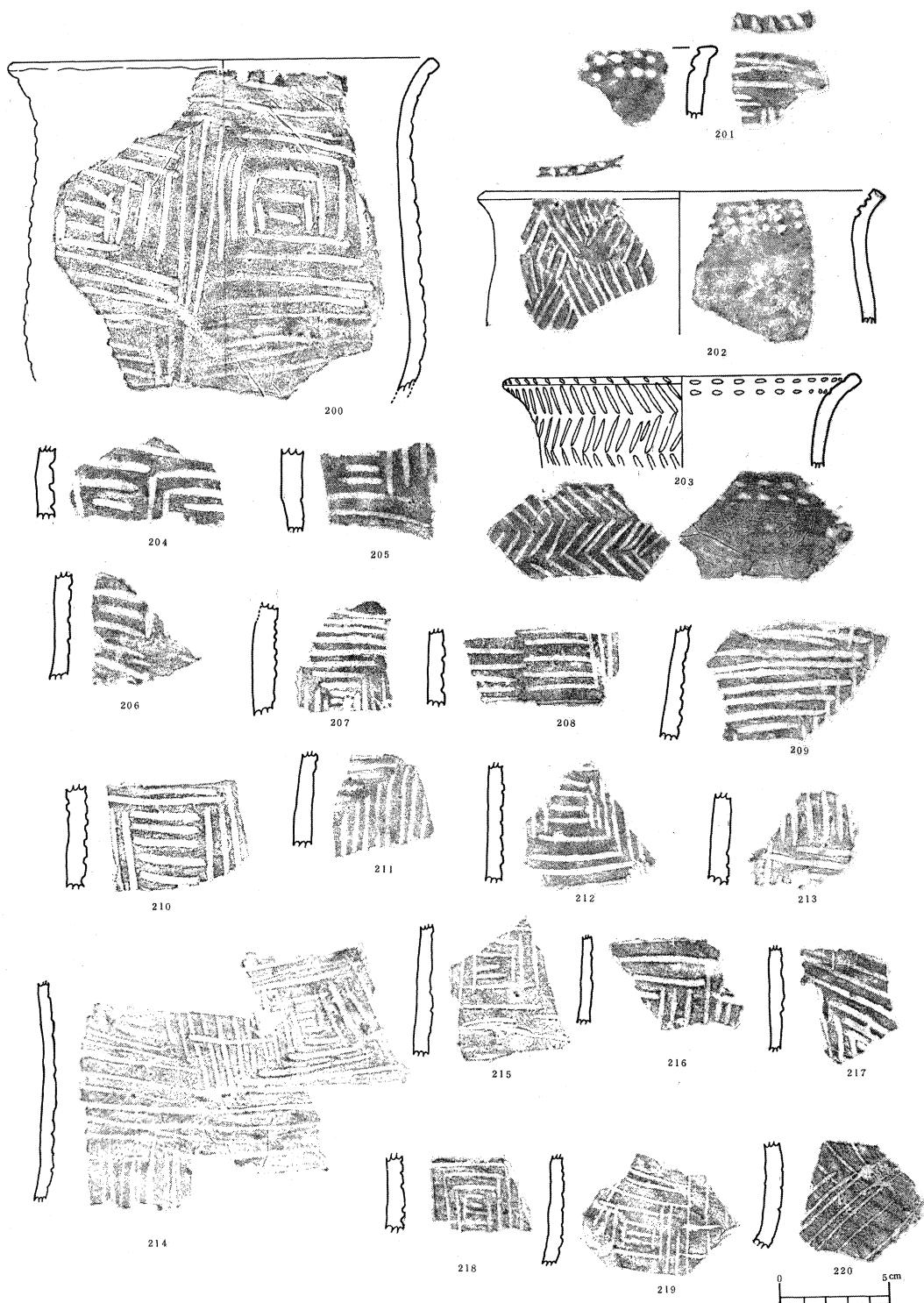
第10図 Ⅲb類土器実測図・拓影



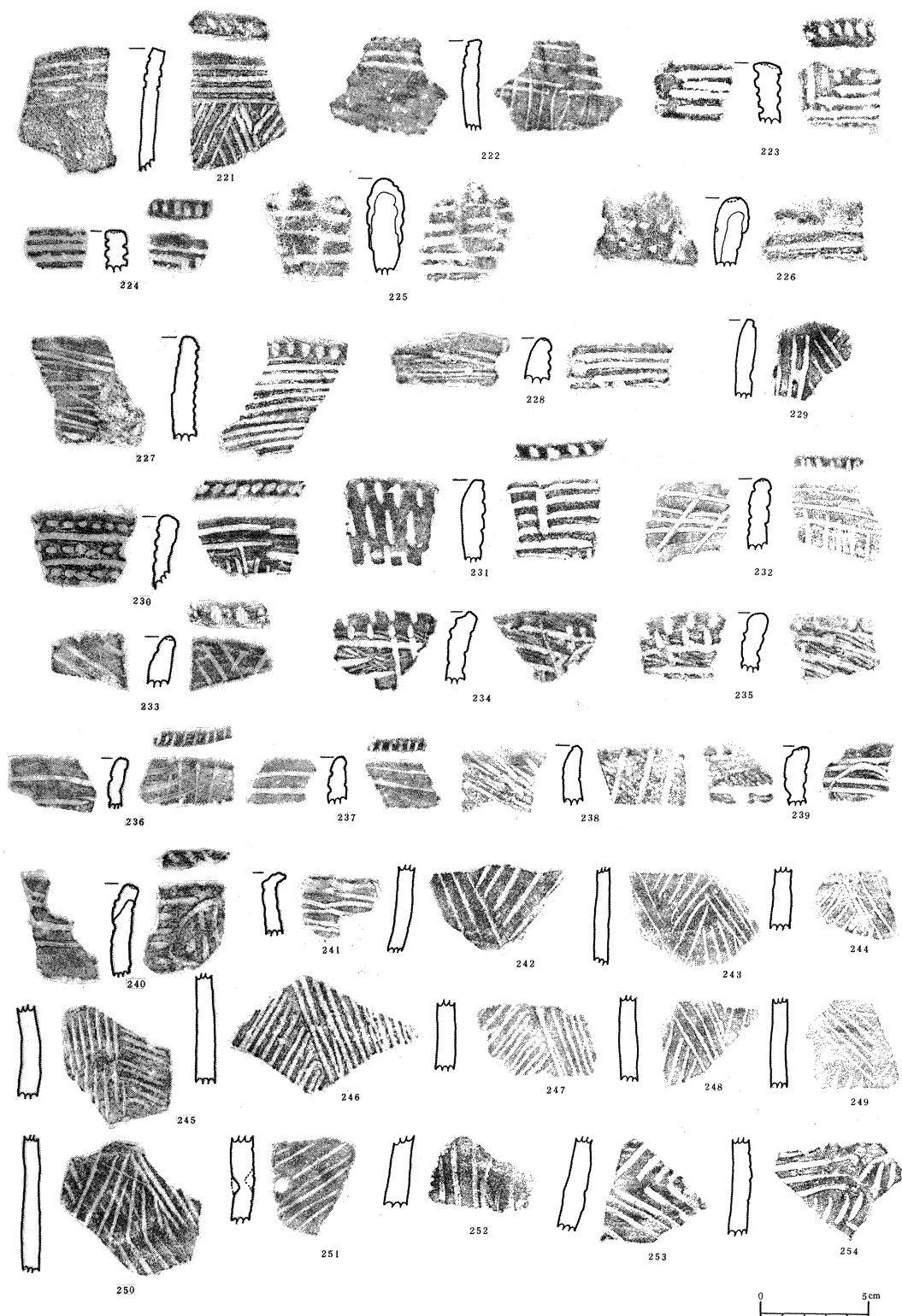
第11図 Ⅲb類土器実測図・拓影



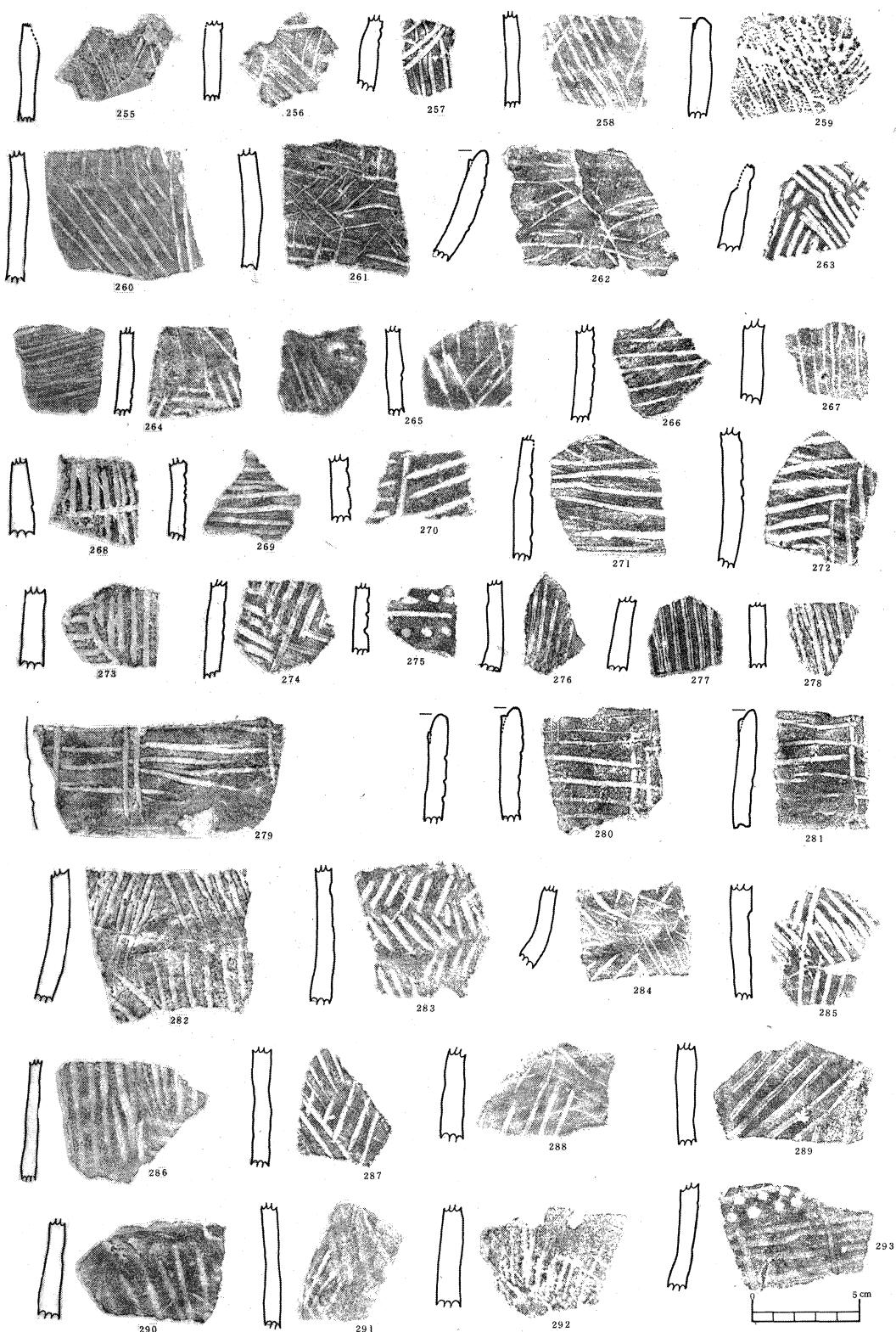
第12図 Ⅲb類・Ⅲc類土器実測図・拓影



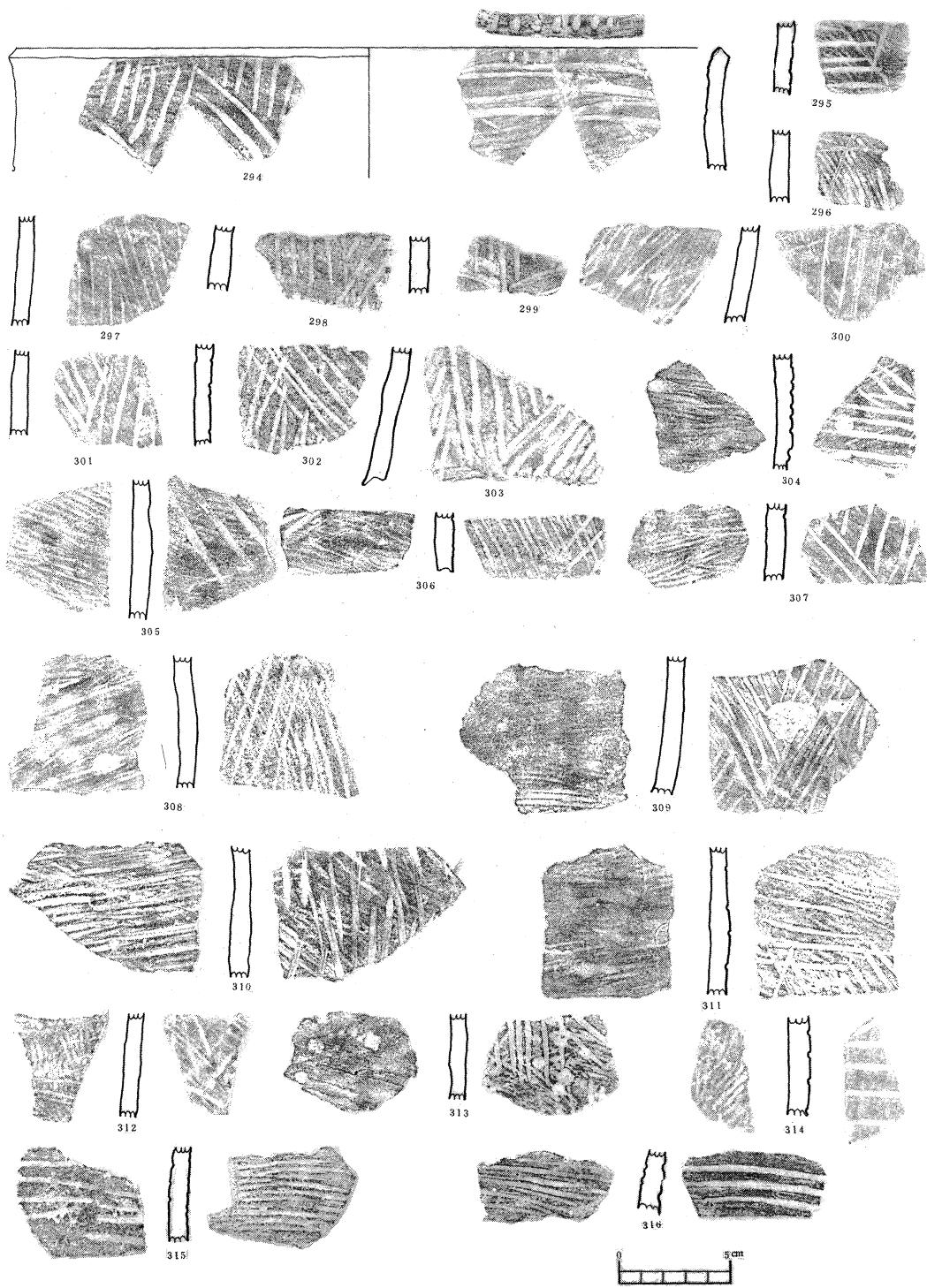
第13図 Ic類土器実測図・拓影



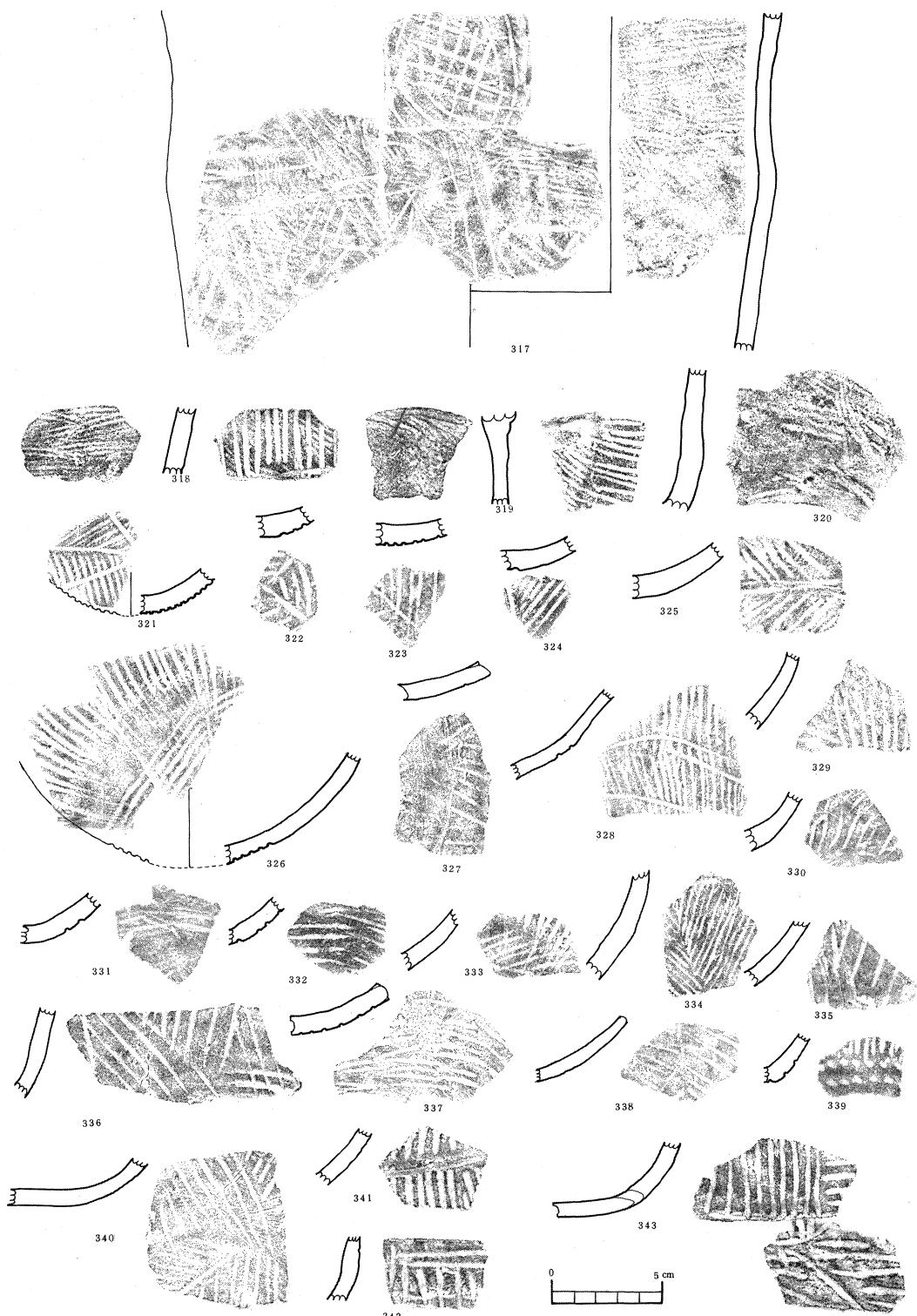
第14図 IIId類土器実測図・拓影



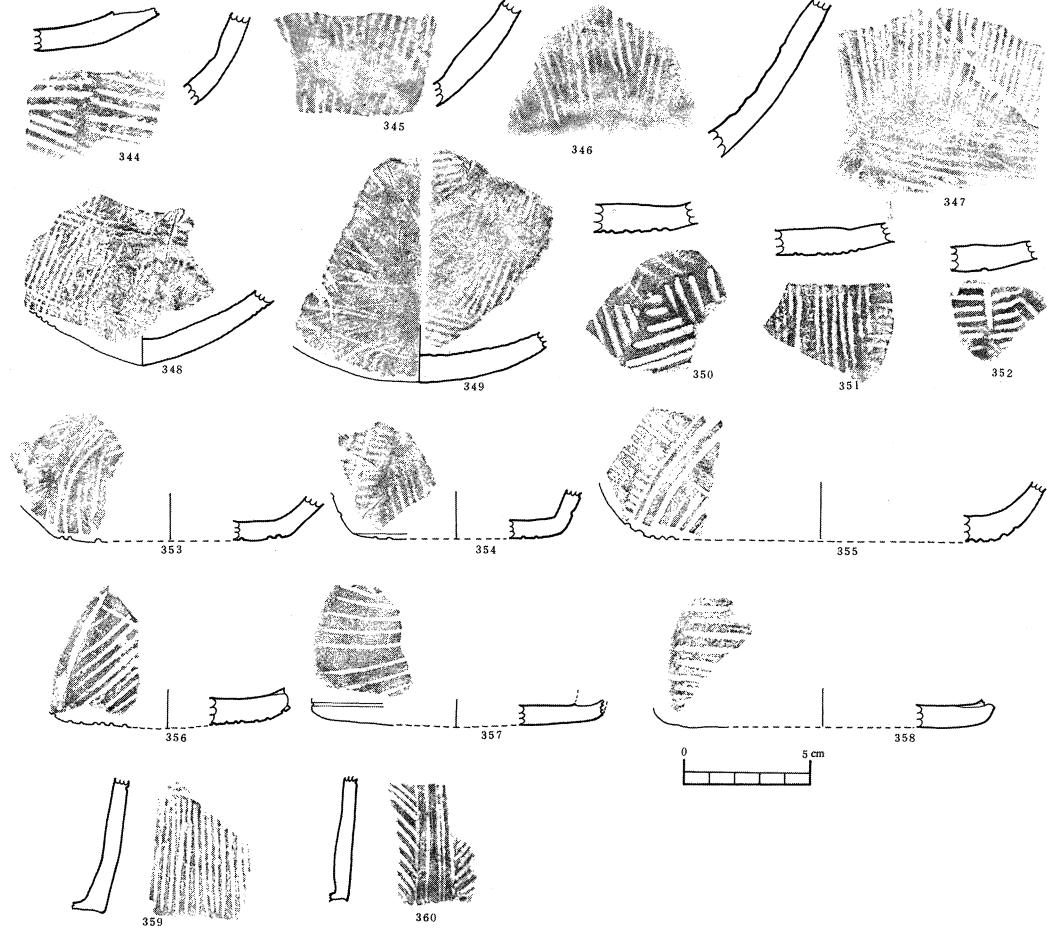
第15図 II d 類土器実測図・拓影



第16図 II d 頸土器実測図・拓影



第17図 Ⅲd類土器・Ⅲ類土器底部実測図・拓影



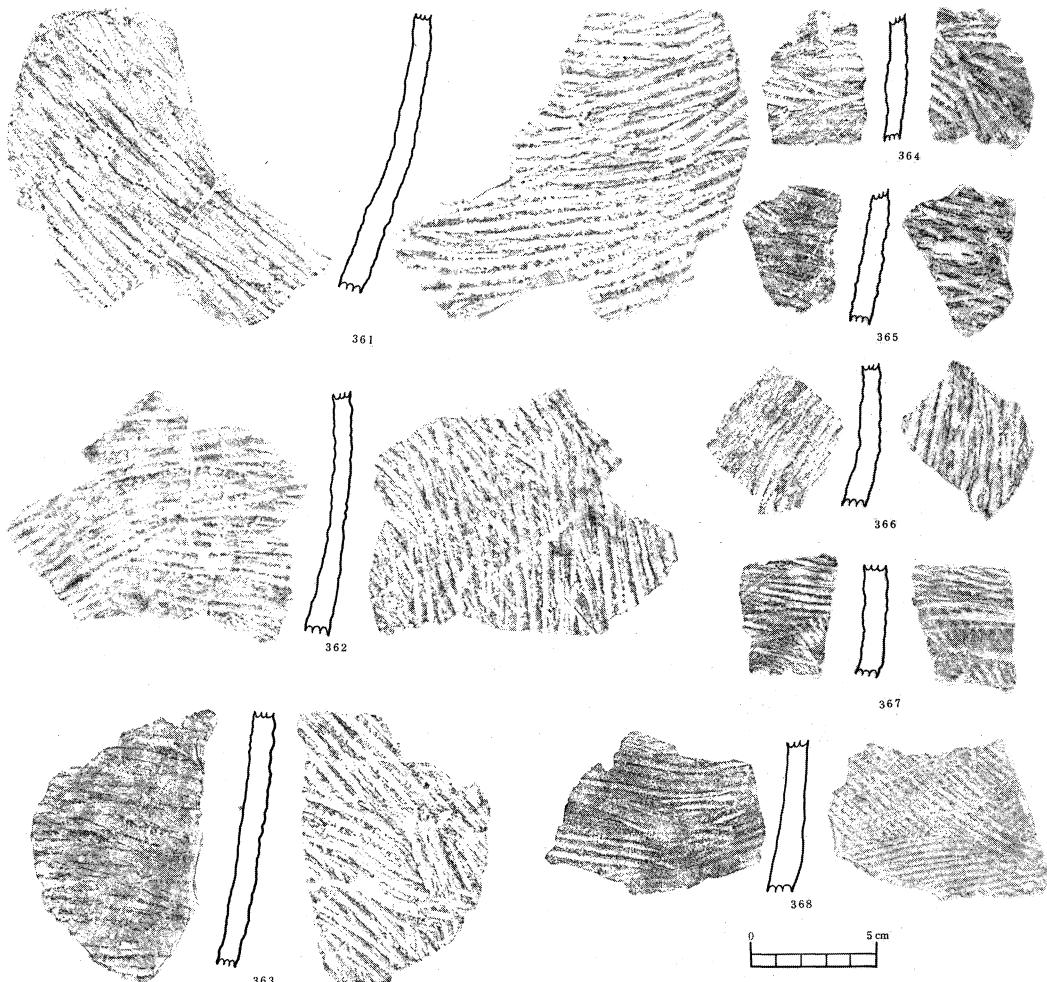
第18図 Ⅲ類土器底部実測図・拓影

IV類土器(第19図、361~368)

本遺跡のIV類土器はIV層の出土であり、出土量は少なく、図化しただけにとどまる。器面の調整は内外面ともに貝殻条痕を斜位および横位に走らせ調整している。器形はすべて破片のため不明である。361~366は内外の条痕は深く、荒く施され、焼成は良好である。胎土には石英・長石・金雲母などの微粒子を多く含んでいる。361~366は同一個体と考えられる。367は外面に磨耗が著しいため条痕は不明確で、内面は斜位に条痕が施されている。368は内外面ともに斜位と横位の条痕が浅く端正に施され、胎土には砂粒子を余り含んでいない。

第4表 IV類土器出土一覧表

| 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 | 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 |
|--------|----|-----|----|-----|------------------|--------|----|-----|----|------|------------------|
| 14-361 | IV | 11 | IV | 黒褐色 | 361~366 同一個体? | 14-365 | IV | 10 | IV | 茶褐色 | 361~366 同一個体? |
| "-362 | " | 11 | " | 茶褐色 | " | "-366 | " | 10 | " | 茶褐色 | " |
| "-363 | " | 10 | " | 茶褐色 | " | "-367 | " | 11 | " | 淡茶褐色 | |
| "-364 | " | 11 | " | 茶褐色 | " | "-368 | " | 10 | " | 明茶褐色 | |



第19図 IV類土器実測図・拓影

第Ⅴ類土器

第Ⅲ類土器と同じように多量に出土したのがこの第Ⅴ類土器である。第Ⅴ類土器はⅣ層出土で沈線文・撲糸文・刺突連点文・貝穀文等が見られるので、從来塞ノ神式土器といわれているものである。これらは撲糸文系（塞ノ神A式）、貝穀文系（塞ノ神B式）とに区分されている。それにならって第Ⅴ類土器を、ⅤA類、ⅤB類に大別する。

ⅤA類（第20図、第21図、第22図、第23図、第24図、369～482）

ⅤA類は沈線、撲糸文、刺突文等を施す土器で、從来塞ノ神A式と呼ばれているものに相当する。369はふくらみをもった胴部から頸部がややしまり、短く銳角に屈折してラッパ状の口縁部となる。復元口縁径は33.6cm、口縁端部は薄くなってくるが、口唇部には刻み目が見られる。文様は幅約1cmの網目撲糸文が頸部より底部近くまで見られる。その後で口縁部直下より胴部上位にかけて9条の沈線をめぐらす。又9条の沈線の後に斜行する3条の沈線をも施している。胴部下位にも撲糸文の後で8条の沈線をめぐらす。焼成はやや不良で器面がもろい。胎土は石英、長石等を含む。373は円筒形状の胴部をなし、頸部は銳角に屈折してラッパ状の口縁部となる。復元口縁径は14cm、口唇部には刻み目が見られる。文様は幅0.7cmの網目撲糸文が頸部以下に見られる。沈線は撲糸文の後で施されたと思われるが、口縁部直下に2条、頸部に2条、胴部にも6条めぐらされている。焼成は良好で胎土は石英、長石、角セン石等が含まれる。374は円筒形状の胴部をなし、頸部は銳角に屈折してラッパ状の口縁部となる。復元口縁径は18.4cm、器高は底部がなく不明確であるが、推定で14cmであろう。口唇部には刻み目が見られる。文様は撲糸文を縦位に配し、その後沈線を施す。口縁部直下より頸部にかけて9条の沈線をめぐらし、そのうえに橢円形状の円を描く。胴部には7条の沈線をめぐらし、その後半円を描く。胴部と底部の接合部が明瞭に認められる。焼成は良好で胎土は石英、長石、角セン石等を含む。370～372・375～377はいずれも頸部が「く」の字に屈折し、ラッパ状の口縁をなすものである。文様は沈線文と、撲糸文が見られる。378・379は頸部が「く」の字状に屈折しラッパ状口縁をなすものである。口唇部には刻み目を施し、頸部などに沈線をめぐらす。380と381は同一個体と思われる。胴部がややしまり口縁部はゆるやかに外反する。口唇部には刻み目が見られる。文様は幅3.5cmの網目撲糸文を施した後で、口縁部直下・頸部・胴部に沈線を施す。焼成はやや不良で器面は風化が著しい。胎土は石英、長石、角セン石が含まれる。382・383は無文である。382は復元口縁径14cmでやや小型である。383は復元口縁径31.8cmを測る。波状口縁をなす。384～390は沈線をめぐらした口縁部である。391～423は沈線と網目撲糸文を施すものである。391・392・394・405は「く」の字状に屈折する頸部である。焼成は大部分が良好であるが、中には不良で風化の著しいものも見られる。424は沈線と撲糸文を施す頸部で「く」の字状の屈折を呈する。425・426は押し引き状の連続刺突文を施すものである。427・428は器面を丁寧に磨きあげて沈線を施すものである。429～430・437はラッパ状に外反する口縁部であるが、口縁端においてわずかに内湾する。口唇部は内側が斜め

に削り取られているため先細になっており、外側には刻み目を施す。429～433は沈線と連続刺突文、437は浅い条痕状の沈線を施す。434～436は「く」の字状に屈折して外反する口縁部の途中から反対に内側へ屈折して口縁部に至るものである。口唇部には刻み目を施す。文様は直線あるいは曲線の沈線により無文の部分と細い刺突文を密に施した部分とに分ける。456はこれらの口縁と同じタイプの土器の頸部と思われる。437～447は沈線を主体としたものである。448～451・454・455は沈線と刺突連点文による文様である。452は頸部に3条の沈線をめぐらし、沈線間の突帶状に残った部分に細い刻み目を施す。又頸部の下方には撲糸文がわずかに認められる。455は頸部に1条の刻み目の細隆起突帶をめぐらす。胴部には撲糸文が認められる。457は沈線間の突帶状に残った部分に小さい刺突文を施している。458～470は撲糸文あるいは網目撲糸文を沈線の区画内に施すものである。470は頸部が「く」の字状に屈折しラッパ状の口縁部をなす。復元口縁径は35cmを測る。口唇部には刻み目が見られる。頸部には2列の波状沈線をめぐらす。頸部と口縁部の間に沈線の区画内に撲糸文を施している幾何学文と、波状沈線を縦に描く規則制のある文様構成が見られる。胴部は破片が少ないため全容は判明しないが、口縁部と似たような沈線の区画内に撲糸文を施している幾何学文が施されているものと思われる。焼成は良好で胎土には石英、長石、角セン石等が含まれる。471～482はVA類に伴うと思われる底部である。471は沈線、撲糸文が底部付近まで施されている。476～478はやや上げ底の底部円板である。477は接合部が明瞭に認められる。479～482は底部からの立ちあがりがやや開きぎみで胴部が張る器形の底部と思われる。焼成は良好で胎土は石英、長石、角セン石等が含まれる。

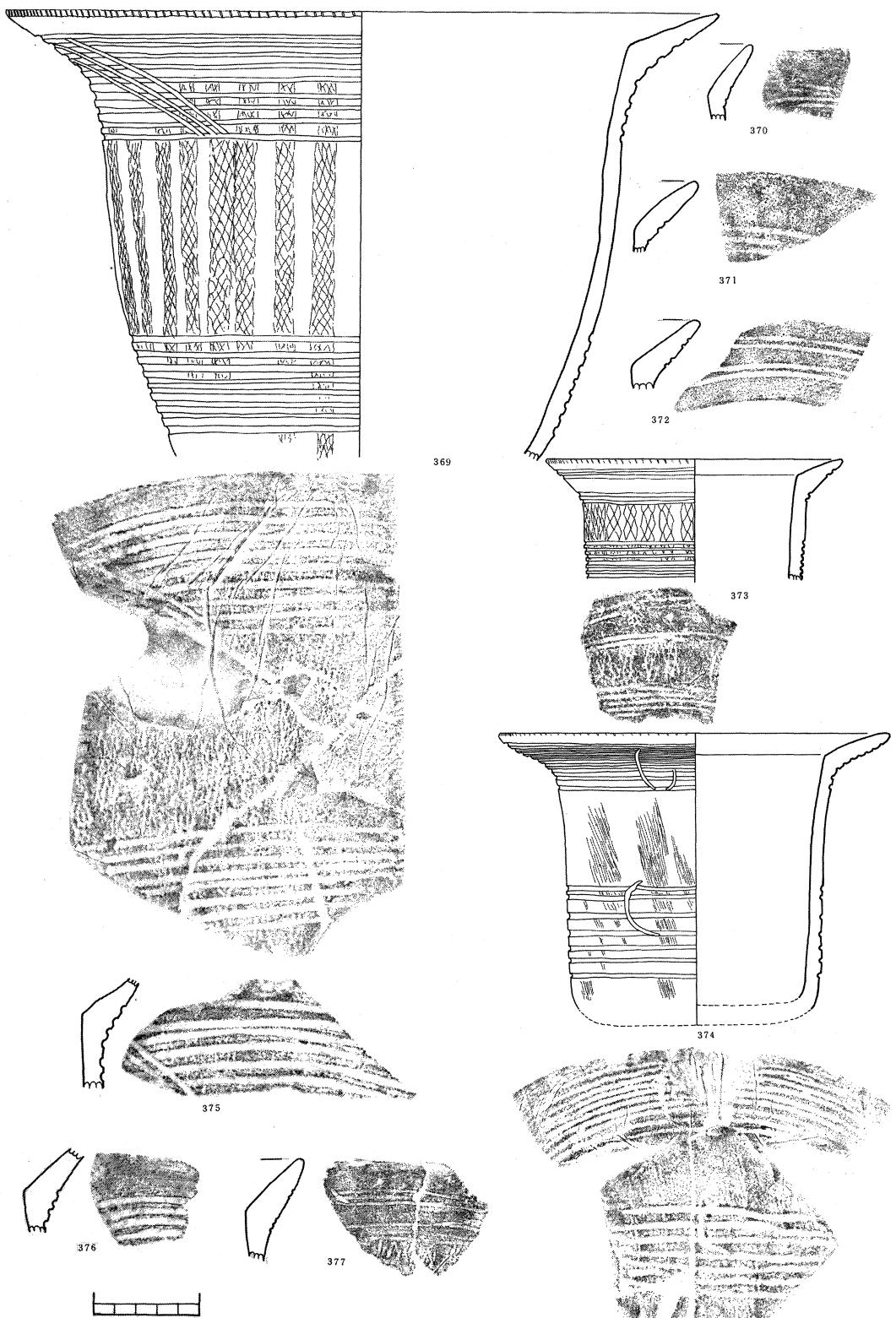
以上 VA類土器の中で369～458は塞ノ神A a式、459～470は塞ノ神A b式と思われる。

VB類土器(第25図、第26図、第27図、483～544)

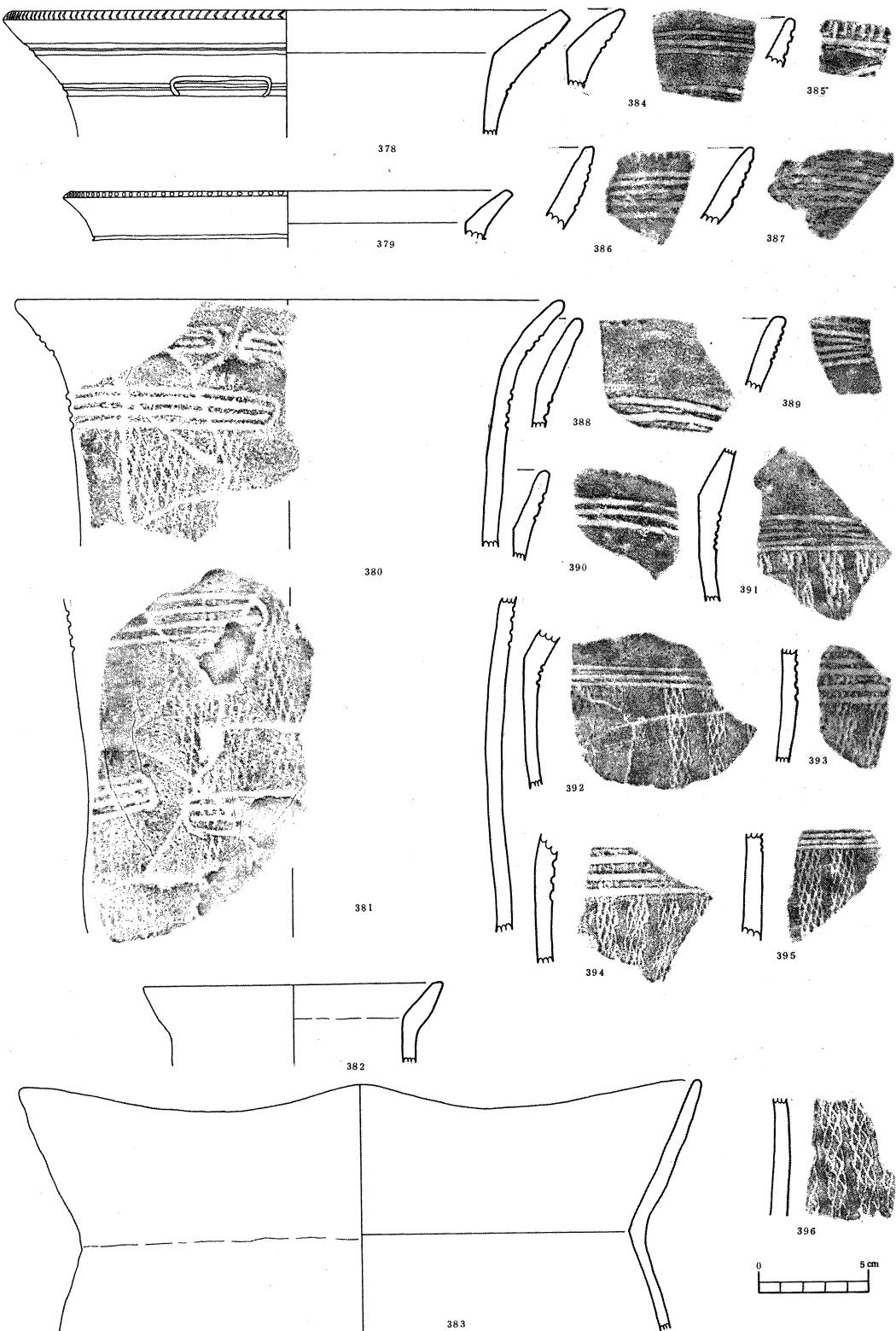
VB類は貝殻縁による押し引き状の連続刺突文(以下貝殻縁連続刺突文とする)、沈線文等を施す土器で従来塞ノ神B式といわれているものである。483～487・493がある程度復元をなし得たものである。483はやや張った胴部から頸部は「く」の字状に屈折し、ラッパ状口縁をなすもので復元口縁径は32cmを測る。口唇部は平坦で口縁端部に貝殻縁による押圧文が見られる。口縁部から頸部にかけては5条の貝殻縁連続刺突文を山形に施す。その下に1条横位の貝殻縁連続刺突文をめぐらす。胴部にはヘラによる鋭い沈線が斜めに施される。器面整形は外面・内面共に貝殻条痕である。484は頸部が「く」の字状に屈折しラッパ状口縁をなすもので復元口縁径は30.8cmを測る。口唇部は平坦で口縁端部には貝殻縁による押圧文が見られる。口縁部から頸部にかけては5条の貝殻縁連続刺突文が山形に施される。器面整形は外面においては貝殻条痕を消しているが、内面はそのままである。485は頸部がやや丸みを帯びて外反し口縁部はわずかに内湾する。復元口縁径は24.4cmを測る。貝殻縁連続刺突文は口縁端部・口縁中位・頸部にめぐらし、その中間はヘラによる整形痕が見られる。486は頸部が「く」の字状に屈折しラッパ状口縁をなすもので復元口縁径は20.2cmを測る。口唇部は平坦で口縁端部から

頸部にかけて5条の貝殻縁連続刺突文をめぐらす。487は頸部が「く」の字状に屈折しラッパ状口縁をなすもので復元口縁径27.2cmを測る。口唇部は平坦であるが、貝殻縁による押圧文が見られる。口縁部から頸部にかけて4条の貝殻縁連続刺突文をめぐらす。493は口縁径15.2cm底部径10cm、器高14.7cmのやや外びらきの円筒形土器である。口唇部は平坦である。口縁端より底部近くまでほぼ等間隔に7条の貝殻縁連続刺突文がめぐらされる。以上はいずれも器壁がやや厚く焼成も良好であるが、486だけは石英粒が多量に含まれるため表面がザラザラしている。胎土は石英、長石、角セン石等を含む。485には金雲母も含まれる。488~491はヘラによる沈線文を施したものである。490・491は沈線による区画の中に貝殻縁による条痕を施す。焼成は良好で、胎土には石英、長石、角セン石等を含む。492はわずかに開く直行に近い口縁部である。口縁端部と胴部に浅い貝殻縁連続刺突文をめぐらし、その中間には貝殻条痕を施すものである。この土器は493と同じような円筒形状と思われる。494~517は貝殻縁連続刺突文が施されているものである。494~517は外反する口縁部がわずかに内湾するものである。494はヘラによる整形が見られるが貝殻条痕が浅く残されている。又穿孔も認められる。496は内面に貝殻条痕をそのまま残すが外面はヘラにより仕上げをしており刺突文も浅くなっている。499は外面・内面共に貝殻条痕による整形がなされている。502は頸部に貝殻縁連続刺突文がめぐらされ、器面は貝殻条痕による整形がなされている。503・504は同一個体と思われる。これらは全体的に焼成は良好であるが、501・502・508・509・515はもろく風化も著しい。胎土は石英、長石、角セン石等が含まれているが、金雲母、輝石を含むものも見られる。518~531は沈線あるいは貝殻条痕が施されている土器である。沈線はヘラによる鋭い文様が施されている。520~523・525・526は内面には貝殻条痕が残っているが、外面は丁寧な整形がなされている。526・528にはわずかではあるが、貝殻縁連続刺突文が認められる。524は内面の貝殻条痕は良く残っているが、外面はヘラ仕上げにより浅くなっている。520は接合部が明瞭に認められる。529~531は鋭いヘラによる不規則な沈線を施すものである。529は外面、内面とも貝殻条痕による整形が見られる。531は丁寧な整形であるが剥脱が著しい。焼成は良好である。532~539は格子目沈線文を施すものである。532は「く」の字状に屈折する頸部である。頸部に貝殻縁連続刺突文をめぐらし胴部に格子目文を施す。他はいずれも胴部である。焼成はやや不良で沈線の明瞭でないものもある。胎土は石英、長石、角セン石等が含まれる。540~544はV形土器に伴う底部と思われる。540は径11.4cmで直行ぎみに立ちあがる。底部と胴部の貼りつけが明瞭に認められる。541~544は底部からのたちあがりがやや開きぎみである。543は底部径が12.5cmで底部と胴部の貼りつけが明瞭に認められる。焼成は良好である。

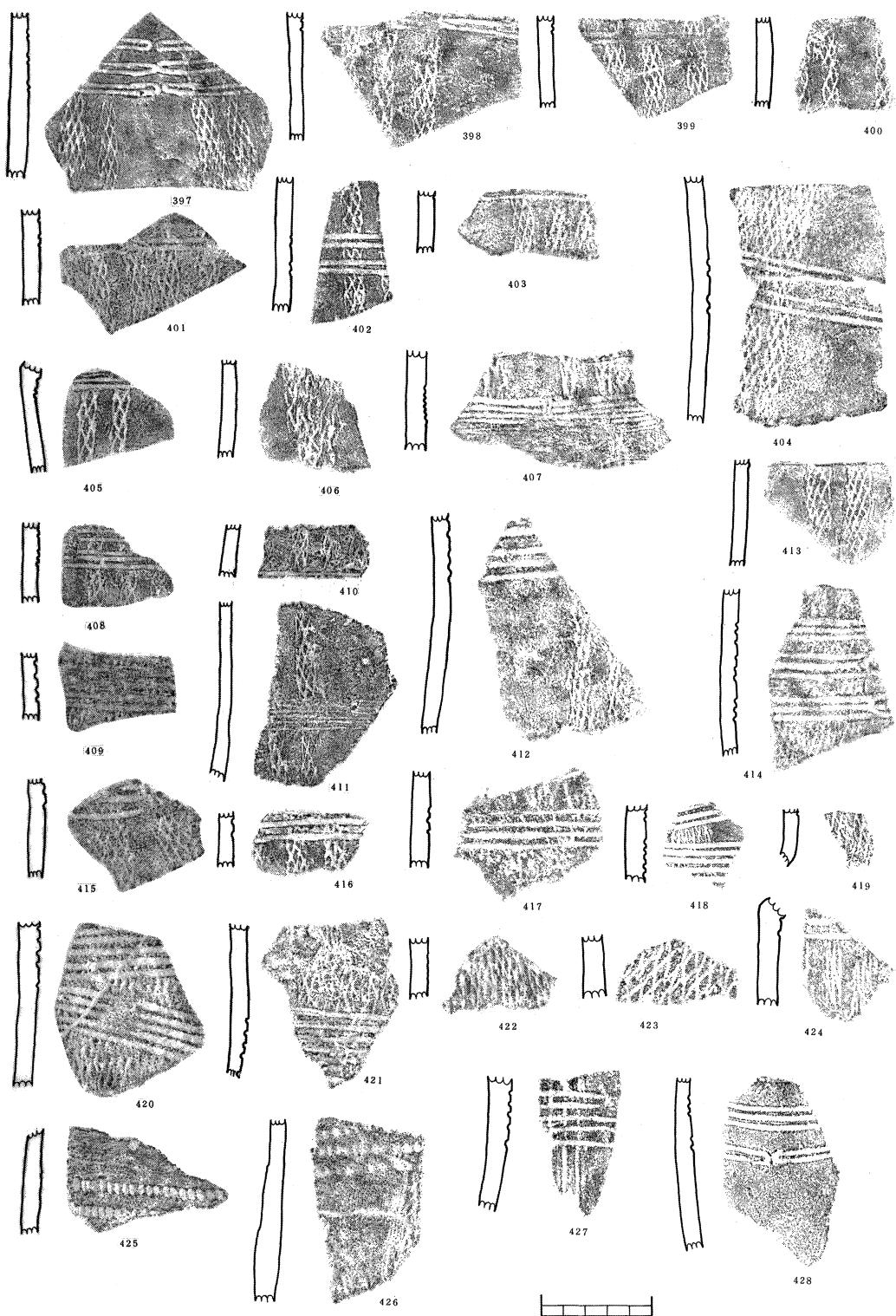
以上V形土器の中で490・491は塞ノ神B c式、532~539は塞ノ神B d式と思われる。



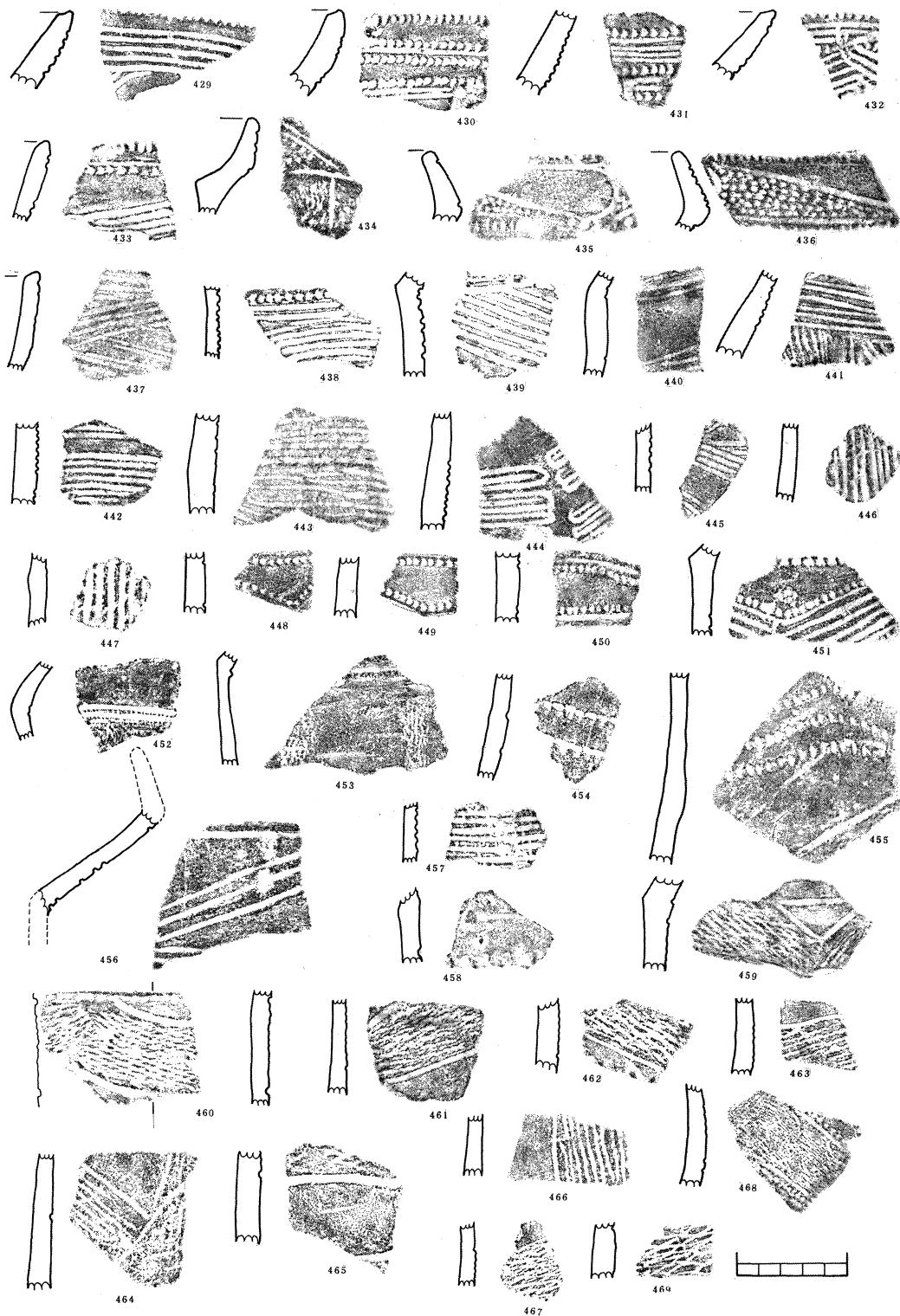
第20図 V A類土器実測図・拓影



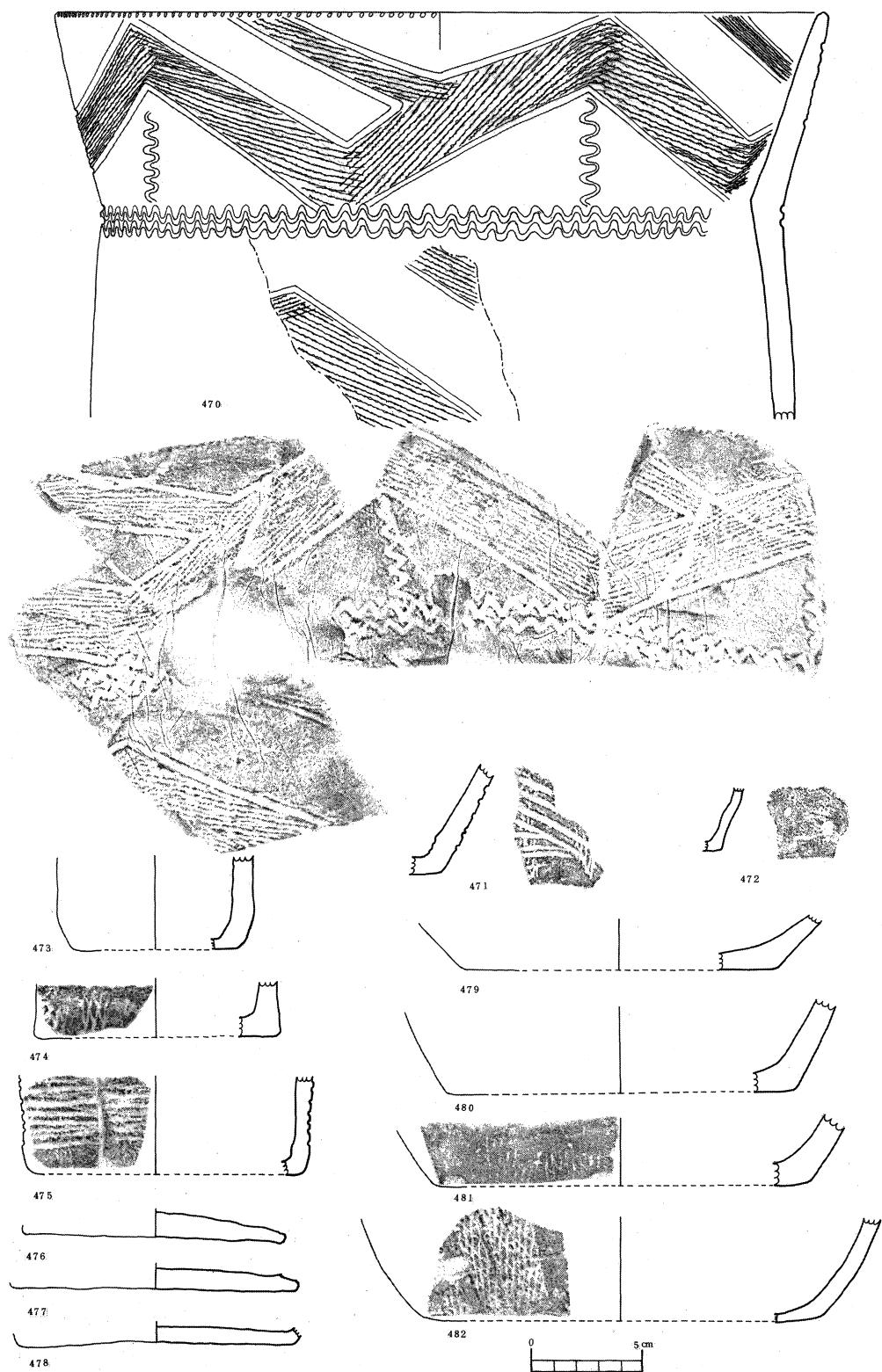
第21図 VA類土器実測図・拓影



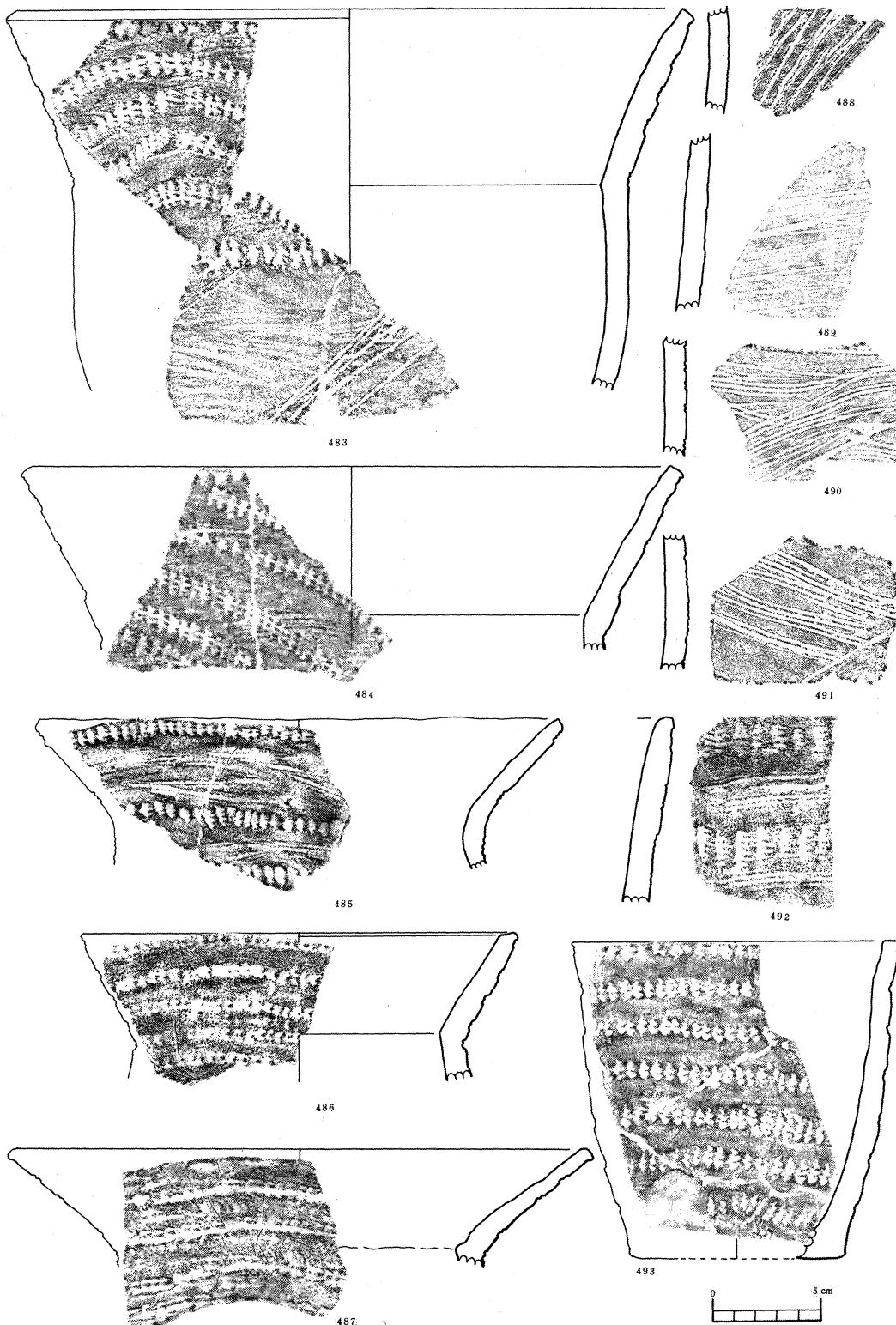
第22図 VA類土器実測図・拓影



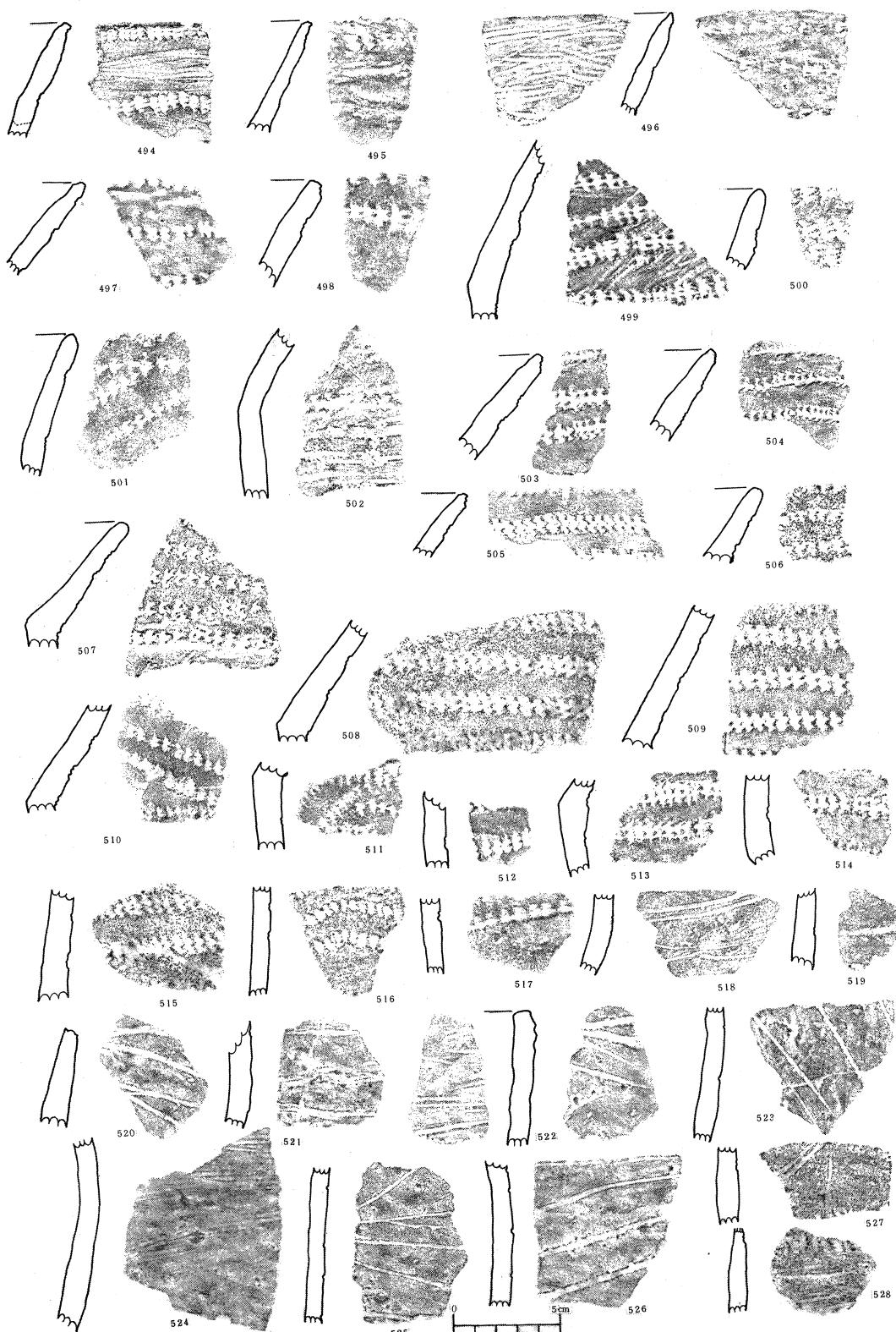
第23図 VA類土器実測図・拓影



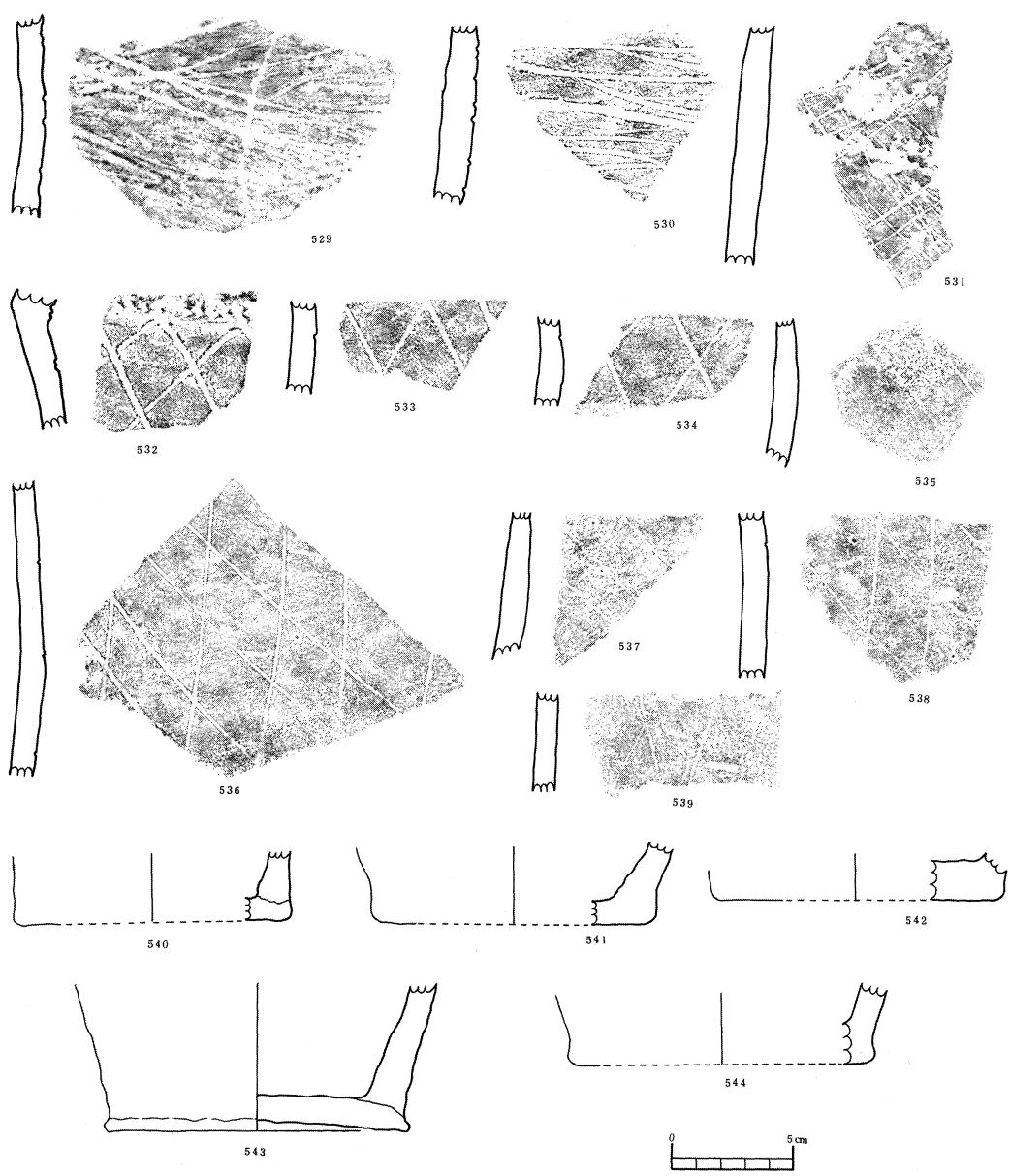
第24図 VA類土器実測図・拓影



第25図 VB類土器実測図・拓影



第26図 VB類土器実測図・拓影



第27図 VB類土器実測図・拓影

第5表 V類土器出土一覧表

| 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 | 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 |
|--------|----|-----|----|-----------|--------|--------|----|-----|----|---------|---------------------|
| 15-369 | VA | 10 | VI | 暗茶褐色 | | 17-411 | VA | 8 | VI | 茶褐色 | |
| 370 | " | 10 | " | 茶褐色 | | 412 | " | 9 | " | 暗茶褐色 | |
| 371 | " | 8 | " | 茶褐色 | | 413 | " | 10 | " | 暗茶褐色 | |
| 372 | " | 8 | " | 淡茶褐色 | | 414 | " | 10 | " | 暗茶褐色 | |
| 373 | " | 9 | " | 茶褐色 | | 415 | " | 8 | " | 茶褐色 | |
| 374 | " | 8 | " | やや白っぽい茶褐色 | | 416 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| 375 | " | 8 | " | 暗茶褐色 | | 417 | " | 9 | " | 白っぽい茶褐色 | |
| 376 | " | 6 | " | 茶褐色 | | 418 | " | 5 | " | 茶褐色 | |
| 377 | " | 6 | " | 灰褐色 | | 419 | " | 7 | " | 茶褐色 | |
| 16-378 | " | 11 | " | 明茶褐色 | | 420 | " | 5 | " | 白っぽい茶褐色 | 剥脱 |
| 379 | " | 7 | " | 茶褐色 | | 421 | " | 12 | " | 茶褐色 | |
| 380 | " | 9 | " | 茶褐色 | {同一個体 | 422 | " | 9 | " | 白っぽい茶褐色 | |
| 381 | " | 9 | " | 茶褐色 | }風化著しい | 423 | " | 6 | " | 白っぽい茶褐色 | |
| 382 | " | 8 | " | 茶褐色 | 無文 | 424 | " | 9 | " | 白っぽい茶褐色 | |
| 383 | " | 7 | " | 暗茶褐色 | 無文山形口縁 | 425 | " | 7 | " | 茶褐色 | |
| 384 | " | 9 | " | 茶褐色 | やや山形口縁 | 426 | " | 7 | " | 茶褐色 | |
| 385 | " | 7 | " | 茶褐色 | | 427 | " | 9 | " | 茶褐色 | |
| 386 | " | 6 | " | 暗茶褐色 | | 428 | " | 9 | " | 茶褐色 | 内面剥脱 |
| 387 | " | 6 | " | 茶褐色 | | 18-429 | " | 6 | " | 茶褐色 | |
| 388 | " | 8 | " | 茶褐色 | | 430 | " | 6 | " | 茶褐色 | |
| 389 | " | 9 | " | 茶褐色 | | 431 | " | 5 | " | 灰茶褐色 | |
| 390 | " | 9 | " | 茶褐色 | | 432 | " | 9 | " | 暗茶褐色 | |
| 391 | " | 8 | " | 茶褐色 | | 433 | " | 5 | " | 灰褐色 | |
| 392 | " | 10 | " | 暗茶褐色 | | 434 | " | 9 | " | 白っぽい茶褐色 | |
| 393 | " | 9 | " | 茶褐色 | | 435 | " | 9 | " | 白っぽい茶褐色 | 二段口縁 |
| 394 | " | 8 | " | 茶褐色 | | 436 | " | 8 | " | 白っぽい茶褐色 | 二段口縁 |
| 395 | " | 9 | " | 茶褐色 | | 437 | " | 10 | " | 暗茶褐色 | |
| 396 | " | 6 | " | 茶褐色 | | 438 | " | 5 | " | 灰褐色 | |
| 17-397 | " | 9 | " | 白っぽい茶褐色 | | 439 | " | 5 | " | 茶褐色 | |
| 398 | " | 9 | " | 灰褐色 | | 440 | " | 7 | " | 茶褐色 | |
| 399 | " | 9 | " | 灰褐色 | | 441 | " | 6 | " | 茶褐色 | |
| 400 | " | 9 | " | 灰褐色 | | 442 | " | 9 | " | 灰茶褐色 | |
| 401 | " | 9 | " | 茶褐色 | | 443 | " | 8 | " | 茶褐色 | |
| 402 | " | 6 | " | 茶褐色 | | 444 | " | 7 | " | 茶褐色 | |
| 403 | " | 9 | " | 白っぽい茶褐色 | | 445 | " | 7 | " | 茶褐色 | |
| 404 | " | 9 | " | 黒褐色 | | 446 | " | 9 | " | 茶褐色 | |
| 405 | " | 10 | " | 茶褐色 | | 447 | " | 10 | " | 茶褐色 | |
| 406 | " | 10 | " | 茶褐色 | | 448 | " | 5 | " | 茶褐色 | 刺突文 |
| 407 | " | 7 | " | 白っぽい茶褐色 | | 449 | " | 7 | " | 茶褐色 | 刺突文 |
| 408 | " | 8 | " | 茶褐色 | | 450 | " | 6 | " | 茶褐色 | 刺突文 |
| 409 | " | 9 | " | 茶褐色 | | 451 | " | 6 | " | 茶褐色 | 刺突文 |
| 410 | " | 6 | " | 茶褐色 | | 452 | " | 9 | " | 白っぽい茶褐色 | 刻みを持つ極細突 帯変形燃糸文？ |

| 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 | 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 |
|--------|-----|-----|----|------------------|---------------|--------|----|-----|----|------|------------------|
| 18-453 | V A | 7 | VI | 暗茶褐色 | 刻みを持つ 極細突掛 | 21-495 | Vb | 6 | VI | 暗茶褐色 | 内外面 条痕が見られる |
| " -454 | " | 7 | " | 茶褐色 | | " -496 | " | 6 | " | 暗茶褐色 | 内外面 条痕が見られる |
| " -455 | " | 7 | " | 茶褐色 | | " -497 | " | 9 | " | 暗茶褐色 | |
| " -456 | " | 8 | " | 茶褐色 | | " -498 | " | 7 | " | 茶褐色 | |
| " -457 | " | 7 | " | 白っぽい 茶褐色 | 剥脱 | " -499 | " | 6 | " | 明茶褐色 | |
| " -458 | " | 5 | " | 茶褐色 | | " -500 | " | 5 | " | 茶褐色 | |
| " -459 | " | 10 | " | 茶褐色 | 塞ノ神Ab | " -501 | " | 6 | " | 暗茶褐色 | |
| " -460 | " | 6 | " | 茶褐色 | | " -502 | " | 7 | " | 茶褐色 | |
| " -461 | " | 6 | " | 茶褐色 | | " -503 | " | 5 | " | 茶褐色 | |
| " -462 | " | 5 | " | 茶褐色 | | " -504 | " | 7 | " | 茶褐色 | |
| " -463 | " | 6 | " | 茶褐色 | | " -505 | " | 6 | " | 淡茶褐色 | |
| " -464 | " | 6 | " | 白っぽい 茶褐色 | | " -506 | " | 7 | " | 淡茶褐色 | |
| " -465 | " | 7 | " | 茶褐色 | | " -507 | " | 6 | " | 茶褐色 | |
| " -466 | " | 6 | " | 茶褐色 | | " -508 | " | 6 | " | 茶褐色 | |
| " -467 | " | 6 | " | 茶褐色 | | " -509 | " | 6 | " | 茶褐色 | |
| " -468 | " | 6 | " | 白っぽい 茶褐色 | | " -510 | " | 7 | " | 淡茶褐色 | |
| " -469 | " | 7 | " | 茶褐色 | | " -511 | " | 7 | " | 淡茶褐色 | |
| 19-470 | " | 5 | " | 暗茶褐色 | | " -512 | " | 6 | " | 茶褐色 | |
| " -471 | " | 11 | " | 茶褐色 | | " -513 | " | 7 | " | 明茶褐色 | |
| " -472 | " | 6 | " | 茶褐色 | | " -514 | " | 7 | " | 茶褐色 | |
| " -473 | " | 6 | " | 茶褐色 | | " -515 | " | 6 | " | 淡茶褐色 | |
| " -474 | " | 9 | " | 茶褐色 | | " -516 | " | 7 | " | 茶褐色 | |
| " -475 | " | 9 | " | 暗茶褐色 | | " -517 | " | 9 | " | 明茶褐色 | |
| " -476 | " | 9 | " | 茶褐色 | | " -518 | " | 5 | " | 暗茶褐色 | |
| " -477 | " | 8 | " | 茶褐色 | | " -519 | " | 6 | " | 暗茶褐色 | |
| " -478 | " | 9 | " | 茶褐色 | | " -520 | " | 6 | " | 暗茶褐色 | |
| " -479 | " | 9 | " | 茶褐色 | | " -521 | " | 5 | " | 茶褐色 | |
| " -480 | " | 10 | " | 茶褐色 | | " -522 | " | 6 | " | 暗茶褐色 | |
| " -481 | " | 6 | " | 茶褐色 | | " -523 | " | 6 | " | 茶褐色 | |
| " -482 | " | 9 | " | 外面:茶褐色 内面:黒褐色 | | " -524 | " | 6 | " | 茶褐色 | |
| 20-483 | Vb | 6 | M | 明茶褐色 | | " -525 | " | 6 | " | 茶褐色 | |
| " -484 | " | 6 | " | 明茶褐色 | | " -526 | " | 6 | " | 暗茶褐色 | |
| " -485 | " | 6 | " | 明茶褐色 | | " -527 | " | 6 | " | 茶褐色 | |
| " -486 | " | 5 | " | 暗茶褐色 | | " -528 | " | 6 | " | 茶褐色 | |
| " -487 | " | 6 | " | 茶褐色 | | 22-529 | " | 6 | " | 明茶褐色 | |
| " -488 | " | 7 | " | 灰褐色 | | " -530 | " | 6 | " | 茶褐色 | |
| " -489 | " | 7 | " | 灰褐色 | | " -531 | " | 6 | " | 淡茶褐色 | |
| " -490 | " | 5 | " | 暗茶褐色 | | " -532 | " | 6 | " | 茶褐色 | 塞ノ神B d |
| " -491 | " | 5 | " | 暗茶褐色 | | " -533 | " | 6 | " | 茶褐色 | 塞ノ神B d |
| " -492 | " | 6 | " | 茶褐色 | | " -534 | " | 6 | " | 黒茶褐色 | |
| " -493 | " | 7 | " | やや白っぽい 茶褐色 | | " -535 | " | 7 | " | 茶褐色 | 536・538と 同一個体 |
| 21-494 | " | 6 | " | 茶褐色 | 穿孔がある | " -536 | " | 7 | " | 茶褐色 | 535・538と 同一個体 |

| 図 番 | 類 | 出土区 | 層 | 色 調 | 備 考 | 図 番 | 類 | 出土区 | 層 | 色 調 | 備 考 |
|--------|-----|-----|----|-----|--------------|--------|-----|-----|----|-----|-----|
| 22-537 | V b | 6 | VI | 茶褐色 | | 22-541 | V b | 5 | VI | 茶褐色 | |
| 〃-538 | " | 7 | " | 茶褐色 | 535・536と同一個体 | 〃-542 | " | 7 | " | 茶褐色 | |
| 〃-539 | " | 6 | " | 茶褐色 | | 〃-543 | " | 6 | " | 灰褐色 | |
| 〃-540 | " | 6 | " | 茶褐色 | 底部は円板貼りつけ | 〃-544 | " | 6 | " | 黒褐色 | |

第Ⅵ類土器(第28図、545~562)

第Ⅵ類土器はVI層出土である。出土量はわずかである。545~554は刻み目のある細隆起突帯を施すものである。器形は口縁部・底部がないので全容は判明しないが、胴部が球形状に大きくふくらむものと思われる。細隆起突帯は貼りつけであり、横位もしくは斜位に施す。器面は外面・内面共に丁寧なナデによる整形が見られる。焼成は良好で胎土は石英、長石、角セソ石等が含まれるが、中には金雲母、輝石が含まれるものもある。555は胴部が球形状にふくらむ器形である。頸部と思われる部分に4条の沈線をめぐらす。沈線の下には1列の刺突連点文を施している。器面は外面・内面ともナデによる整形がなされる。焼成は良好である。胎土は精選された土で石英、長石が含まれる。556は頸部に1条の貝殻縁連続刺突文をめぐらし、胴部は球形状にふくらむ。焼成は良好で、胎土に石英、長石、角セソ石、輝石が含まれる。562は球形状にふくらんだ胴部で、焼成は良好、胎土は精選された粘土に石英、長石が含まれる。

557~561は小型の土器である。557は復元口縁径が8.6cmを測る。558は復元口縁径7.2cmで口縁部は肥厚し内側に突出している。559は復元口縁径7.7cmでやや山形口縁を呈し、山になっている部分にこぶ状の突起を有する。560は復元口縁径9cmを測り、胴部に3条の沈線をめぐらす。561は復元口縁径10.2cm、底部径6.5cm、器高は3.3cmを測る浅い皿状の土器である。557~560は口縁部だけで全体器形は復元不可能である。焼成は良好で、胎土は精選された粘土を使い、石英、長石、角セソ石等を含む。

第Ⅶ類は今までに型式名のないものであるが、時期としては第Ⅵ類(塞ノ神式)と大差はないものと思われる。口縁部・底部などがないため全体器形は判明しない。

第Ⅶ類土器(第29図、563~570)

第Ⅶ類土器はVI層出土、出土量はわずかで図化したものにとどまる。563~565は同一個体と思われる。文様は4筋を単位とした貝殻縁による浅い条痕文により波状文等が施される。

563は口縁部で口唇部には刻み目が見られる。文様は貝殻条痕で三角形を描き横には波状文が施される。564・565は胴部で波状文が施される。焼成は不良、胎土は石英、長石、角セソ石、輝石が含まれる。566は4筋を単位とした貝殻縁による太目の条痕文で菱形を構成する。568は荒い貝殻条痕を羽状に施す。567は太い沈線を斜位と横位に施す。569はヘラによる沈線を羽状に施す。570は斜行する撚糸文が施される。第Ⅶ類は今までに型式名のないものである。

第VII類土器（第29図、571～581）

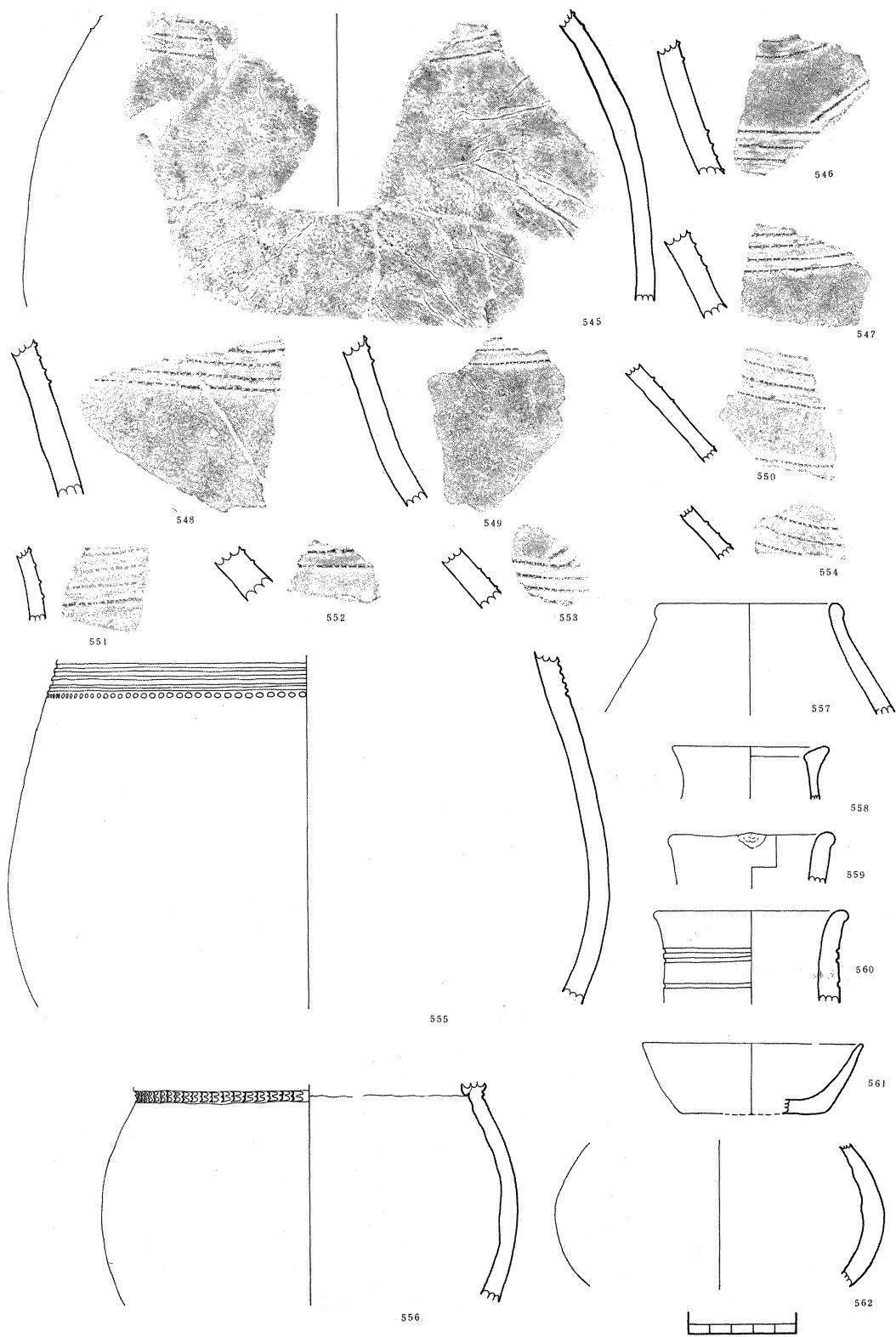
第VII類土器はⅦ層出土である。出土量は少なく図化しただけにとどまる。従来平桟式土器といわれているものである。571～573は外反する口縁部で口唇部には刻み目を施すものである。571は口縁と頸部の中間に段を設けている波状口縁である。文様は沈線と刺突文を交互に施したものである。573は口縁部に貼りつけによる段を設ける。文様は浅い沈線文が施される。574はやや内湾する口縁部で口唇部に「ハ」状の刻み目を施す。文様は沈線文が見られる。575は小型土器の頸部で「く」の字状に屈折する。頸部に沈線と刺突文をめぐらし、胴部は4条の沈線を山形に施すものである。576～580は斜行繩文を施すものである。578・579は結束のある斜行繩文である。580は刻み目突帯と結束のある斜行繩文を施したものである。581は580と同様の刻み目突帯を有し、突帯の下方に波状の沈線文を施すものである。焼成は良好で、胎土は石英、長石、金雲母等を含む。

第VIII類土器（第29図、582）

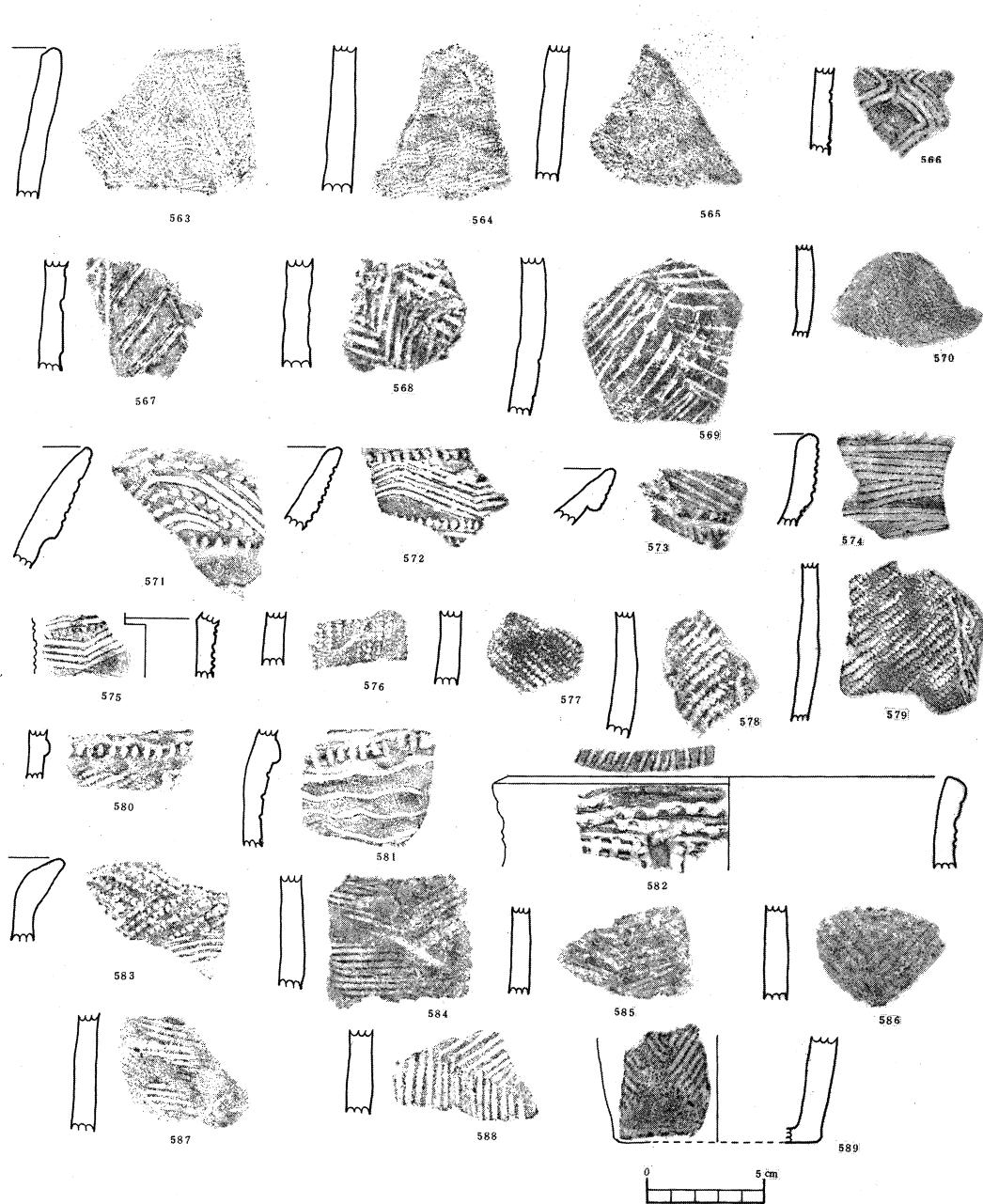
第VIII類土器はⅦ層出土の土器で、出土したのは1点だけである。従来吉田式といわれているものである。口縁部はわずかに外反するもので復元口縁径は20cmを測る。口唇部は平坦でヘラによる刻み目を施す。口縁端部には貝殻腹縁による刺突文を横位に2条めぐらし、下方には横位の押し引き文を施す。押し引き文の上にはクサビ形貼付文が付けてある。焼成は良好で、胎土は石英、長石、角セメントを含む。

第IX類土器（第29図、583～589）

第IX類土器はⅦ層出土で出土量は少なく図化したものにとどまる。従来、石坂式土器といわれているものである。583は外反する口縁部である。口縁から頸部にかけて刺突文を羽状に施し、胴部には横位の貝殻条痕文が施される。584～588は貝殻条痕文を施す胴部である。589は底部で、復元底部径8.5cmを測る。底部からの立ち上りはわずかに開くがほぼ直行である。焼成は良好で胎土は石英、長石、角セメント等を含む。



第28図 IV類土器実測図・拓影



第29図 VII類・VIII類・IX類・X類土器実測図・拓影

第6表 VII類・VII類・VIII類・IX類・V類土器出土一覧表

| 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 | 図番 | 類 | 出土区 | 層 | 色調 | 備考 |
|--------|-----|-----|-----|-------------------|-----------------|--------|------|-----|-----|------|-----------------|
| 23-545 | VII | 8 | VII | 茶褐色 | 極細・突帶 (刻目) | 24-568 | VII | 5 | VII | 明茶褐色 | 内面剥脱 |
| "-546 | " | 7 | " | 茶褐色 | " | "-569 | " | 10 | " | 明茶褐色 | |
| "-547 | " | 6 | " | 茶褐色 | " | "-570 | " | 6 | " | 灰褐色 | 繩文? |
| "-548 | " | 6 | " | 黒茶褐色 | " | "-571 | VIII | 7 | " | 明茶褐色 | 波状口縁 |
| "-549 | " | 6 | " | 黒茶褐色 | " | "-572 | " | 6 | " | 黒茶褐色 | |
| "-550 | " | 8 | " | 茶褐色 | " | "-573 | " | 10 | " | 灰茶褐色 | |
| "-551 | " | 9 | " | 淡茶褐色 | " | "-574 | " | 8 | " | 茶褐色 | |
| "-552 | " | 7 | " | 茶褐色 | " | "-575 | " | 6 | " | 黑褐色 | 小型 |
| "-553 | " | 6 | " | 暗茶褐色 | " | "-576 | " | 10 | " | 茶褐色 | 斜行繩文 |
| "-554 | " | 8 | " | 茶褐色 | " | "-577 | " | 11 | " | 茶褐色 | 斜行繩文 |
| "-555 | VII | 6 | " | (外)明茶褐色 (内)黒褐色 | | "-578 | " | 9 | " | 明茶褐色 | 結束のある繩文 |
| "-556 | " | 6 | " | 暗茶褐色 | | "-579 | " | 6 | " | 明茶褐色 | 結束のある繩文 |
| "-557 | " | 10 | " | 茶褐色 | | "-580 | " | 10 | " | 黒茶褐色 | 刻目突帶 結束のある繩文 |
| "-558 | " | 9 | " | 茶褐色 | | "-581 | " | 8 | " | 暗茶褐色 | 刻目突帶・沈線 |
| "-559 | " | 7 | " | 暗茶褐色 | こぶ状・突起をもつ 口縁 | "-582 | IX | 5 | " | 明茶褐色 | 貝殻刺突文・さび状 |
| "-560 | " | 10 | " | 茶褐色 | | "-583 | X | 6 | " | 灰茶褐色 | 刺突文・貝刺条痕 |
| "-561 | " | 8 | " | 明茶褐色 | | "-584 | " | 5 | " | 茶褐色 | 貝殻条痕 |
| "-562 | " | 8 | " | 茶褐色 | | "-585 | " | 5 | " | 明茶褐色 | 貝殻条痕 |
| 24-568 | " | 9 | " | 茶褐色 | クシ状・沈線 | "-586 | " | 5 | " | 明茶褐色 | 貝殻条痕 |
| "-564 | " | 9 | " | 茶褐色 | クシ状・沈線 | "-587 | " | 5 | " | 茶褐色 | 貝殻条痕 |
| "-565 | " | 9 | " | 茶褐色 | クシ状・沈線 | "-588 | " | 11 | " | 淡茶褐色 | 貝殻条痕 |
| "-566 | " | 5 | " | 淡茶褐色 | クシ状・沈線 | "-589 | " | 7 | " | 茶褐色 | 貝殻条痕(底部) |
| "-567 | " | 7 | " | 茶褐色 | | | | | | | |

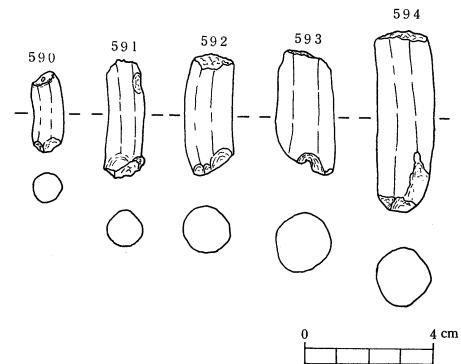
2 土 製 品(第30図, 590~594)

土製品はⅢ層より5点出土している。

590は12区の出土で塊長2.6cm, 径0.9cmを測り暗茶褐色を呈する。591は10区の出土で塊長3.7cm, 径1.0cmを測りやや白っぽい茶褐色を呈する。592は10区の出土で塊長3.9cm, 径1.5cmを測り茶褐色を呈する。593は10区の出土で塊長3.9cm, 径1.7cmを測り茶褐色を呈する。594は11区の出土で塊長5.7cm, 径1.7cmを測り暗茶褐色を呈する。

以上はいずれも石英・長石・角セメント等を含み焼成は良好である。

土偶の一部(手・足)かと考えられる。



第30図 土製品実測図

3 石 器

石器には石鎌・石斧（磨製石斧・打製石斧）・石匙・スクレーパー・磨石・敲石・凹石・石錘・異形石器などがある。

① 石鎌（第31図、001～018）

18点の石鎌が出土している。001～005はⅢ層、006～009はⅣ層、010～017はⅦ層であり、018は表採である。

石鎌の形状は無茎で二等辺石鎌が主体を占るが、等辺鎌（004・007・009・014）とに大別される。石材には黒曜石・チャート・玉髓・玄武岩などがあり、形態的には平基式（005・009・016）と凹基式（001～004・006～008・010～015・017・018）とに分けられる。凹基式の形状には浅いものと深いものがあり、深いものにはV字状とU字状をなすものがあり、浅いもの（002～004・007・008・018）、深いものでV字状のもの（006）、深いものでU字状のもの（001・010～015・017）とに分類される。側辺の形状は直線をなすものと窪むものとに分けられ、直線をなすもの（001～007・009・010・012～016）と窪むもの（008・011・017・018）とがある。

石鎌の破損状況を観察すると、18点の中で完形品は8点、その他の12点はいずれかの部分が破損している。破損部位を観察すると先端部が破損しているもの（002・003・007・013）、基部片脚が破損しているもの（003・009・010・014・015）、基部両脚が破損しているもの（006）、先端と基部の片脚が破損しているもの（003）、先端と側辺が破損しているもの（002）とが認められる。

石鎌の調整方法はそのほとんどが入念な交互剥離により加工調整されている。石鎌の欠損しているものを除き、重さ、長さ、厚さについてみると、重さは最大3.6g、最小0.25gの範囲におさまり、0.25gから1.0gの範囲に集中がみられる。長さは最大3.1cm、最小1.6cmの範囲内にあり、2.0cmから3.0cmまでの範囲内にやや集中している。厚さは最大7.5mm、最小3mmまでの範囲にあり、3mmから5mmの範囲内に集中がみられる。

これらの石鎌の中で017・018は石鎌と同様に取り扱ったが、他の石鎌に比べ形状が一部において異なる部分が観察される。017は凹基式の形態で、凹基の形状は深くU字状であり両面の一部に自然面がみられ、主要剥離面を若干残しており、先端は7.5mmと厚く、丸く磨かれているような形状を呈している。018は凹基式の形態で凹基の形状は浅くU字状であり、側辺および両脚部の形状は左右対称でなく、先端部は鋭利でない。

② 磨製石斧（第32図、024～036）

14点の磨製石斧が出土している。完形品は4点、破損品は10点である。023は表層・024は攪乱層、025～026はⅢ層、027～032はⅣ層、033～036はⅦ層である。石材は頁岩・蛇紋岩・砂岩・ホルンフェルスなどである。

磨製石斧のほとんどは破損品であるが、その形状 { 平面形・断面形 (縦断面形) } ・大きさ・重量・製作痕跡・使用痕跡・破損状況などについて観察すると、平面形は石斧の頭部・胴部・刃部について形態を観察できる。頭部の形態は、そのふくらみから丸味をもち胴部側辺との境が不明なもの (023)、そのふくらみから平坦で胴部側辺との境が明瞭のもの (024・026・028・036)、破損のため不明なもの (025・027・029~035) とに分けられ、胴部の形態は、胴部上半より胴部下半の幅が大きいもの (023~026・029~031・034・036)、胴部の側辺が平行のもの (028・033)、破損のため不明なもの (029・032) とに分けられる。ただし、推定可能なものについては、破損のため不明なものより削除した。刃部の形態は、刃部が丸味をもつものの (024~026・028・030・036)、刃部中央部が直線的で両端が丸味をもつものの (027・032・033・035)、破損のため不明のもの (023・029・031・034) とに分けられる。断面形は縦断面形で、胴部について形態をみると、胴部が平行のもの (026・028・033・035)、胴部がわずかにふくらむもの (023・024・027・029~034・036) とに分類される。

石斧の大きさ・重量は、完形品 4 点のみについて観察を行った。長さは 10 cm より 14 cm の範囲内におさまり、重量は 115 g から 235 g までの範囲内にみられる。

石斧の製作痕跡・使用痕跡について観察すると、製作痕跡は、全ての石斧において研磨されているが擦痕と研磨面が判明するもの (024・028) は 2 点のみで、擦痕と研磨面とは幅の一致が観察されるところから製作時の痕跡と考えるのが妥当であろう。しかし、他の石斧は器面の風化のため観察されない。使用痕跡は、刃部の破損がすべての石斧について観察され、刃部欠損のもの (023・029・031・034) がみられ、他の石斧は刃こぼれ程度のものより破損状態の大きいものまで観察され、おそらく使用のため破損したものと考えられる。

石斧の破損状況についてみると、14 点のうち破損品は 10 点みられ、いずれかの部分について破損している。刃部が破損しているもの (023・029・031・034)、頭部および胴部が破損しているもの (025・027・029~035) とが認められる。

③ 打製石斧 (第 33 図、037~040・048)

4 点の打製石斧が出土している。037~039・048 はⅢ層、040 はⅣ層である。石材はホルンフェルス・頁岩で、これらの石斧は 4 点とも破損している。破損状況についてみると、頭部破損のもの (037~040)、刃部破損のもの (037・039・040)、刃部および頭部欠損のもの (039・040・048) とが認められる。調整については、そのほとんどが両面周から大小の剥離により調整し、風化のためか両面ともに磨耗がみられ、剥離痕は鋭さを欠いているものもみられる。048 は破損品であり、その全貌は判明しないが、その形状より打製石斧の破損品と考えられる。扁平な石材を用い、両面ともに側縁に大小の調整剥離を施し加工されている。

④ 石匙(第31図, 021・022, 第33図, 041)

3点の石匙が出土している。石材はチャート・ホルンフェルスであり, 021・022 はともに横型, 041 は縦型の形状である。021 は両面とも剥離がほぼ全面に大きく施され, 刃部など周辺のみに調整剥離が加えられ, つまみ部上端に自然面を残している。刃部は一方が約32度, 片方が約29度の傾きをもつ。022 は板状剥片を使用し自然面をほとんど残し, 縁辺や刃部のみの片方に調整剥離を加え, つまみの幅が非常に広く, 全体的に薄くえぐりの部分は簡単に調整されている。041 は縦型の形状で, 縦長の剥片を用い片面に大きい剥離面を残し, その側縁の一つに片面調整剥離を施し刃部を作りだしている。つまみ部の幅は広く, 扱りは簡単に調整を行っている。

⑤ スクレーパー(第33図, 042~046)

5点のスクレーパーが出土している。石材は頁岩・流紋岩・チャートなどで042・045・046 はⅣ層, 044 はⅦ層である。

スクレーパーの平面形を観察すると, 片面の一部に自然面を残した剥片を用いたもの(042・045・046), ある程度調整された剥片を用いたもの(043・044)とに大別されるが, それぞれに形状を異にしている。042 は扁平な石材を用い片面は自然面を残し, 片面のみに調整剥離加工痕がみられ刃部を作りだしている。043 は破損品であり, その全貌は判明しないが, ごく扁平な剥片を素材に用い, 片面のみの側縁に調整剥離加工を施し刃部を作っている。044 はチャート製の扁平な剥片を用い, 側縁の一部に両面より調整剥離を加え刃部を作り, 他側縁は接断されている。045 は流紋岩製の片面に自然面を残している剥片を用い, その剥片の一辺の側縁に両面より調整剥離を加え刃部を作り出し, 他側縁には調整痕はみられない。046 は頁岩製の橢円礫を大きく打ち欠きその一面に自然面を残す素材を用い, 片面の縁辺の一部に調整剥離加工を施し刃部を作り, 自然面は磨耗がみられ, 磨面を作りだしている。

第7表 石器出土一覧表

| 図版番号 | 区・層 | 石器名 | 全長 (長径) | 最大幅 (短径) | 厚さ | 重さ(g) | 石材 | 備考 |
|------|------|-----|------------|-------------|-------|--------|-----|-----|
| 001 | 10・Ⅲ | 石鏃 | 2.7 | 1.8 | 0.45 | 1.4 | 黒曜石 | |
| 002 | 11・Ⅲ | " | (1.55) | 1.5 | 0.3 | (0.55) | 黒曜石 | 凹基式 |
| 003 | 9・Ⅲ | " | (1.5) | (1.1) | (0.4) | (0.6) | 玉髓 | " |
| 004 | 12・Ⅲ | " | 1.6 | 1.15 | 0.8 | 0.25 | 黒曜石 | " |
| 005 | 10・Ⅲ | " | (1.1) | 1.0 | 0.25 | (0.2) | 黒曜石 | 平基式 |
| 006 | 11・Ⅳ | " | (1.75) | (1.1) | 0.3 | (0.3) | 黒曜石 | 凹基式 |
| 007 | 10・Ⅳ | " | (1.0) | 2.0 | 0.3 | 0.5 | 黒曜石 | " |
| 008 | 10・Ⅳ | " | 2.45 | 1.8 | 0.8 | 1.0 | 玄武岩 | 凹基式 |
| 009 | 11・Ⅳ | " | 1.6 | (1.2) | 0.4 | (0.45) | 黒曜石 | 平基式 |

| 図版番号 | 区・層 | 石器名 | 全長 (長径) | 最大幅 (短径) | 厚さ | 重さ(g) | 石材 | 備考 |
|------|--------|-------|------------|-------------|-------|--------|---------|----------|
| 010 | 6・Ⅵ | 石鎌 | 2.25 | (1.5) | 0.3 | (0.6) | 黒曜石 | 凹基式 |
| 011 | 9・Ⅵ | " | 2.1 | 1.6 | 0.4 | 0.5 | 玄武岩 | " |
| 012 | 9・Ⅵ | " | 2.5 | 1.7 | 0.55 | 1.55 | " | " |
| 013 | 6・Ⅵ | " | (2.2) | 1.7 | 0.5 | (1.0) | 黒曜石 | " |
| 014 | 5・Ⅵ | " | 1.6 | (1.4) | 0.3 | (0.45) | " | " |
| 015 | 7・Ⅵ | " | 3.1 | (1.8) | 0.35 | (1.45) | " | " |
| 016 | 5・Ⅵ | " | 3.0 | 2.3 | 0.6 | 2.1 | " | 平基式 |
| 017 | 6・Ⅵ | " | 2.7 | 2.3 | 0.75 | 3.6 | チャート | 凹基式 |
| 018 | 12・表採 | " | 1.95 | 1.3 | 0.33 | 0.7 | 玄武岩 | " |
| 019 | 11・Ⅳ | 異形石器 | 3.0 | 1.3 | 0.5 | 1.8 | 黒曜石 | |
| 020 | 10・Ⅳ | 異形石器 | 2.0 | 1.0 | 0.3 | 0.6 | 玄武岩 | |
| 021 | 10・Ⅳ | 石匙 | 3.2 | 3.2 | 0.95 | 7.8 | チャート | 横型 |
| 022 | 11・Ⅳ | " | 5.3 | 4.8 | 0.4 | 13 | ホルンフェルス | " |
| 023 | 7・表層 | 磨製石斧 | (10.9) | (5.0) | (2.5) | (166) | " | |
| 024 | 13・擦剥層 | " | 12.2 | 5.3 | 2.6 | 210 | 蛇紋岩 | |
| 025 | 10・Ⅲ | " | (5.7) | 4.6 | 1.8 | (62) | ホルンフェルス | |
| 026 | 9・Ⅲ | " | 13.9 | 7.9 | 1.7 | 233 | " | |
| 027 | 10・Ⅳ | " | (4.5) | (4.4) | (1.3) | (29) | 頁岩 | |
| 028 | 12・Ⅳ | " | 12.9 | 4.4 | 1.9 | 168 | " | 千枚岩化している |
| 029 | 10・Ⅳ | " | 12.8 | 6.3 | (1.4) | (131) | ホルンフェルス | |
| 030 | 11・Ⅳ | " | (8.7) | 6.8 | 4.1 | (338) | " | |
| 031 | 11・Ⅳ | " | (8.6) | 5.3 | 2.9 | (156) | " | |
| 032 | 10・Ⅳ | " | (6.7) | 5.9 | 2.7 | (148) | " | |
| 033 | 6・Ⅵ | " | (8.0) | 5.7 | 2.5 | (151) | " | |
| 034 | 7・Ⅵ | " | (6.8) | 6.0 | 2.35 | (130) | 砂岩 | 細粒である |
| 035 | 5・Ⅵ | " | (6.2) | (2.4) | 1.0 | (19) | 頁岩 | |
| 036 | 7・Ⅵ | " | 10.2 | 4.6 | 1.1 | 64 | " | |
| 037 | 10・Ⅲ下 | 打製石斧 | (8.7) | 4.3 | 2.2 | (76) | " | |
| 038 | 9・Ⅲ | " | (11.4) | 5.5 | 1.7 | (145) | ホルンフェルス | |
| 039 | 10・Ⅲ | " | (5.6) | 5.2 | 1.3 | (63) | 頁岩 | |
| 040 | 11・Ⅳ | " | (4.2) | 3.7 | 1.1 | (25) | " | |
| 041 | 10・Ⅲ | 石匙 | 7.6 | 3.6 | 0.8 | 17 | ホルンフェルス | 縦型 |
| 042 | 10・Ⅲ | スクレーペ | 9.8 | 7.8 | 1.4 | 109 | 頁岩 | 風化がみられる。 |

| 図版番号 | 区・層 | 石器名 | 全長 (長径) | 最大幅 (短径) | 厚さ | 重さ(g) | 石材 | 備考 |
|------|-------|--------|------------|-------------|-----|--------|---------|----|
| 043 | 10・Ⅳ | スクレーパー | (3.8) | 1.5 | 0.3 | (2.25) | チャート | |
| 044 | 11・Ⅶ | " | 3.1 | 2.1 | 0.6 | 5.05 | チャート | |
| 045 | 5・Ⅳ | " | 6.4 | 6.0 | 1.1 | 36 | 流紋岩 | |
| 046 | 12・Ⅳ | " | 5.0 | 3.9 | 1.2 | 28 | 頁岩 | |
| 047 | 10・Ⅲ下 | 異形石器 | (6.5) | (5.3) | 1.5 | (87) | ホルンフェルス | |
| 048 | 10・Ⅲ | 打製石斧 | (9.6) | (9.0) | 2.0 | (146) | " | |

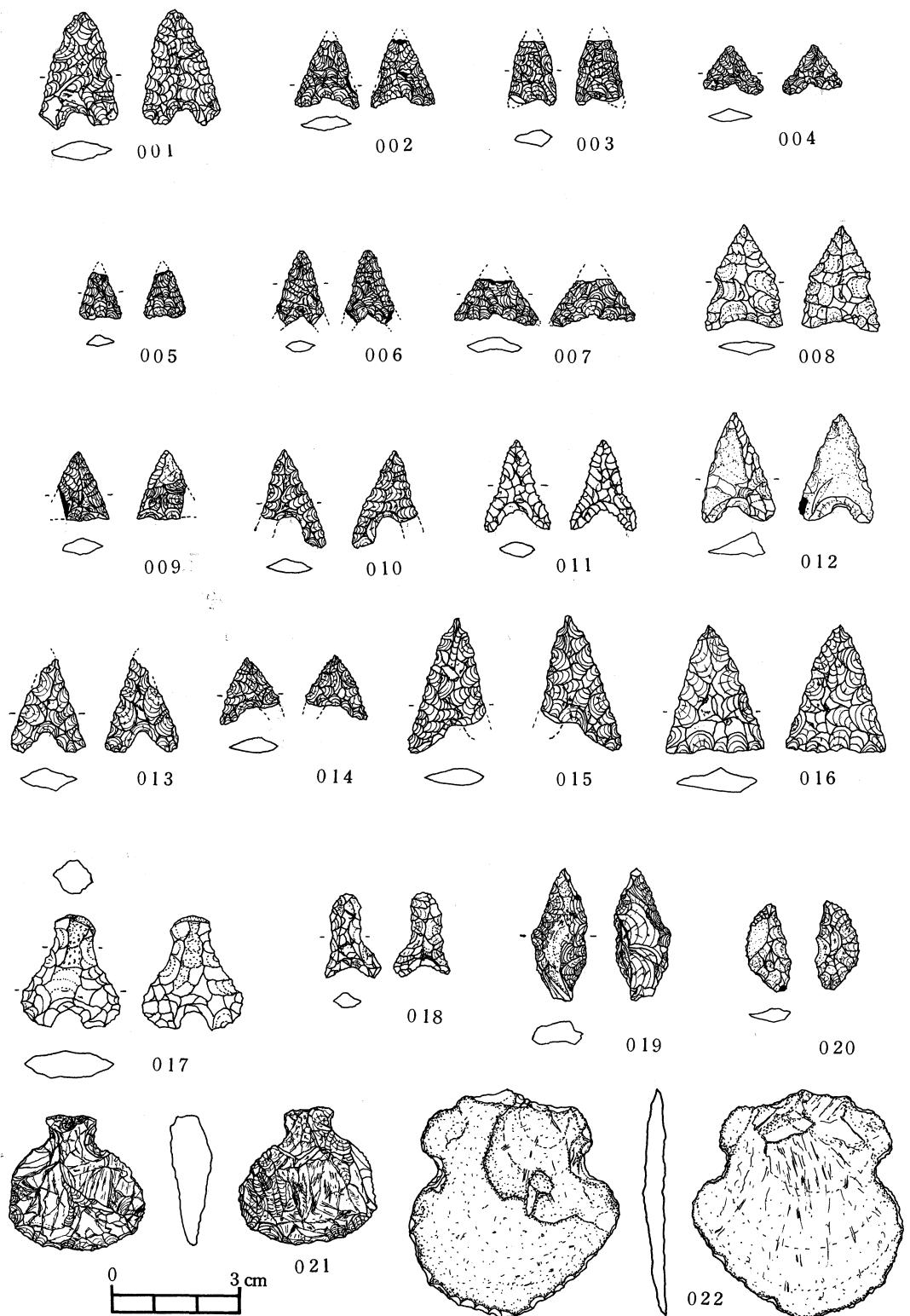
⑥ 磨石(第34図, 049~057・第35図, 058~066・第36図, 067~073)

27点の磨石が出土している。057・072はⅢ層, 056・062・066・074はⅣ層, 他はすべてⅦ層である。完形品は22点, 破損品は5点で, 石材はすべて砂岩である。

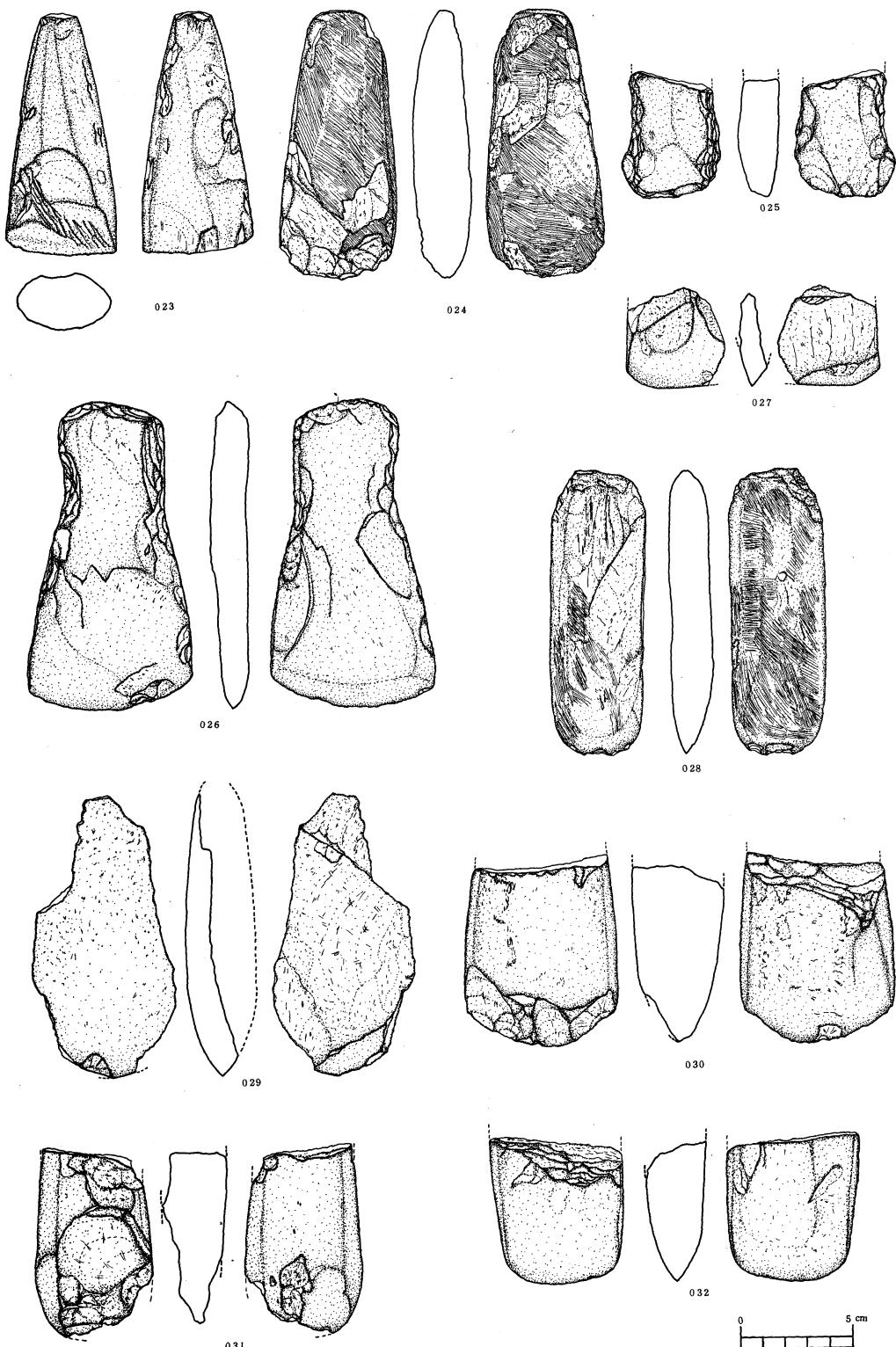
磨石の形態は平面形および断面形につき観察すると, ほとんど橿円形を基本としている。大きさは完形品のみで観察してみれば, 最大長径11.9cm, 最大短径10.0cm, 最小長径6.2cm, 最小短径4.9cmの範囲内におさまる, 最大的ものは11.9cm×9.2cm(071), 最小のものは6.2cm×4.9cm(062)である。これらの磨石は, 長径6.2cmから8.2cm, 短径4.8cmから6.0cmの範囲内におさまるもの, 長径9.7cmから11.9cm, 短径7.1cmから10.0cmの範囲内におさまる二つのタイプに分類できる。

磨石の重量は完形品のみでみると, 最大重量959g(071), 最小重量95g(062)の範囲内におさまる, 132gから286gの範囲内におさまるものと529gから714gの範囲内におさまるものとがみられる。大きさ, 重量の計測から観察すると大きいタイプ(052~056・063・064・067~071)と小さいタイプ(049~051・058~062)とに分類される。

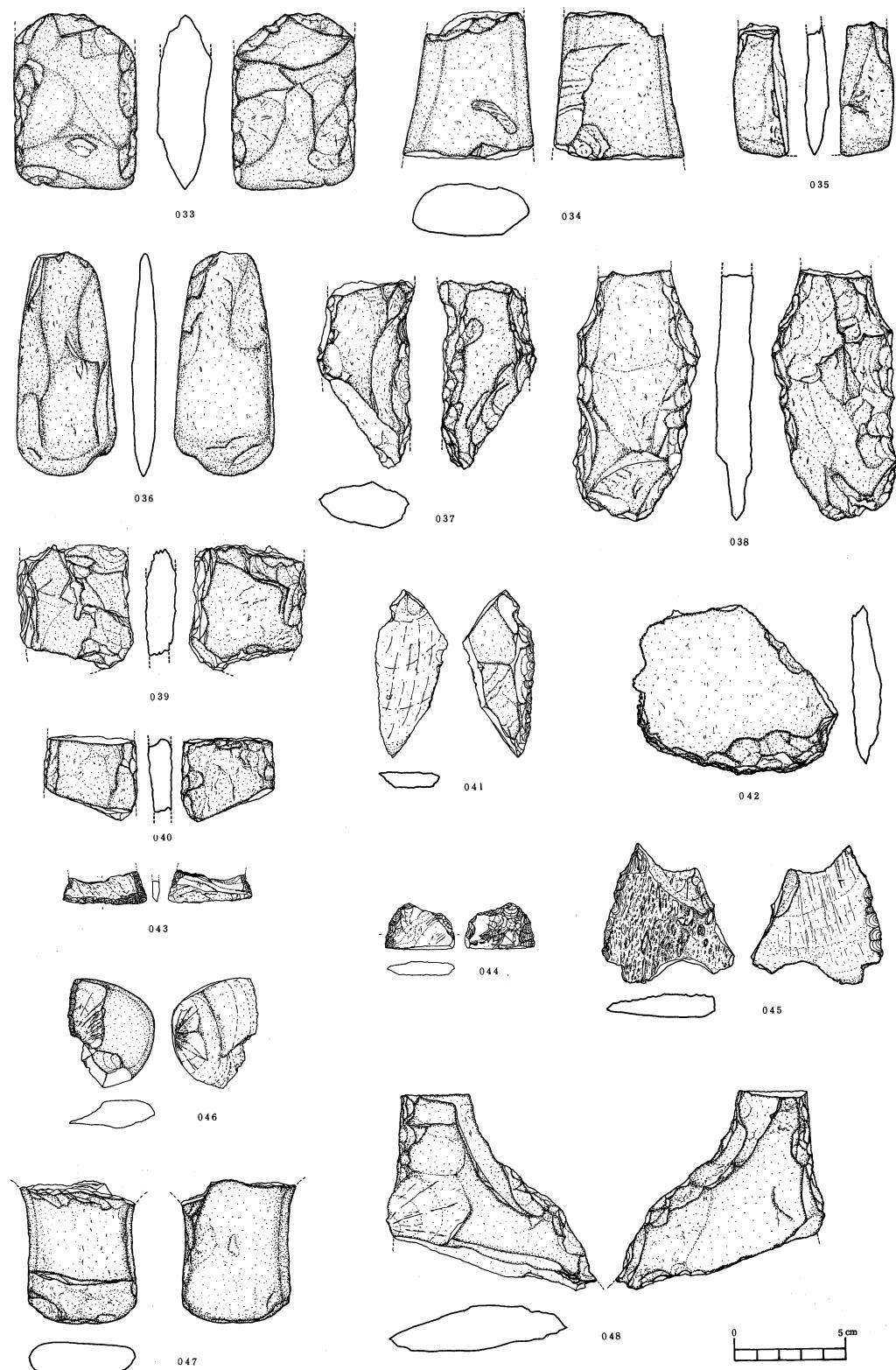
磨石の使用痕についてみると風化のため判明しがたいものも認められるが, はっきりと研磨面(磨面)が認められるものが大部分である。研磨面は磨石の両面・両側面などに観察され, わずかに磨り減った状態のものと稜線が判明するほど磨り減った状態のものとに分けられる。その他に使用痕として認められるものに敲打痕が観察される。磨石の研磨面の位置についてみてみると片面にあるもの(060・072・073), 両面にあるもの(049・050・055~059・061~064・066~071・074), 両面と片側面にあるもの(051・053・065), 両面と両側面にあるもの(052・054)とに大別され, 両面に研磨面が認められるものが多く観察される。特に部分的および全面的に稜線が判明するほど磨り残った状態のもの(051~054)が観察され, 065は両面のほか片側面において磨面が認められ二次的な使用がなされたものと考えられる。その他の使用痕として敲打痕が認められ, その位置について観察すると, 両面にあるもの(054・061・069), 片面にあるもの(059・060・068・070), 両面と両側面にあるもの(063), 両面と片側面にあるもの(071), 片面と両側面にあるもの(074)とが認められる。このように磨石自体の主目的である機能は全体的に磨る作業であるが, 一部に敲く作業を兼ね備えているものも認められる。



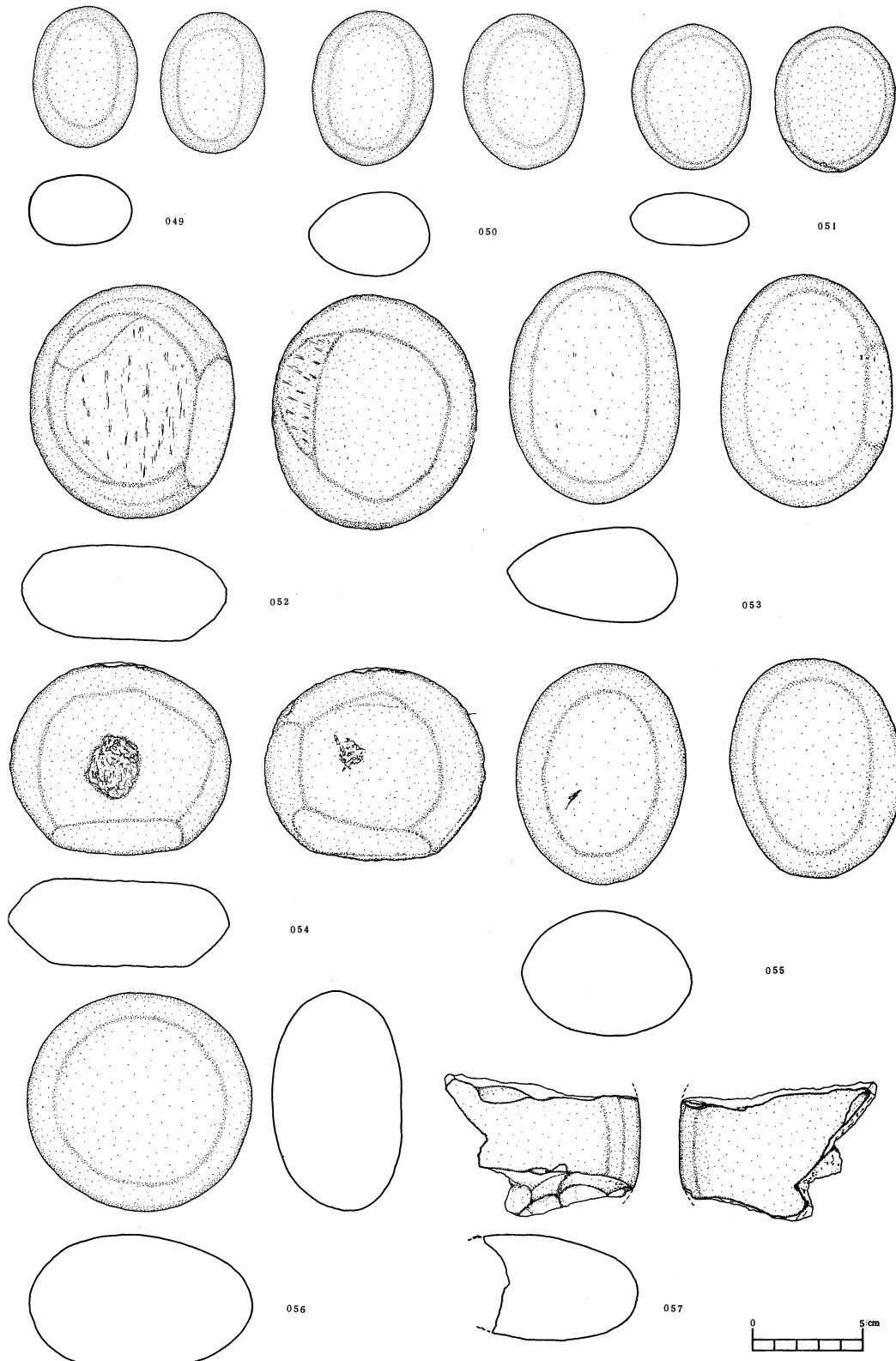
第31図 石器実測図(石鎌・石匙・異形石器)



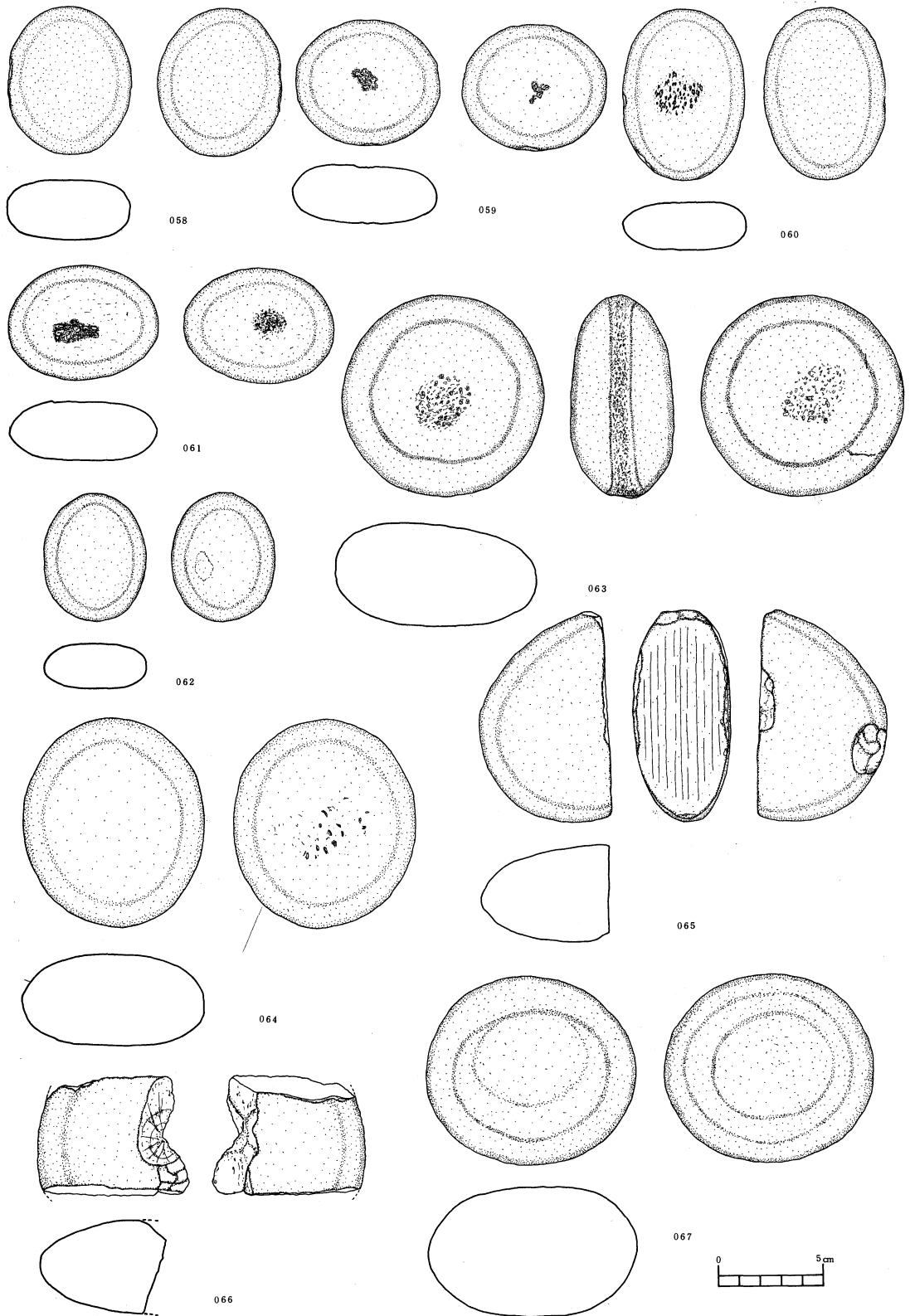
第32図 石器実測図(磨製石斧)



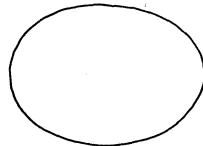
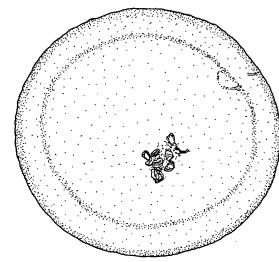
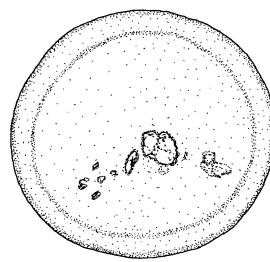
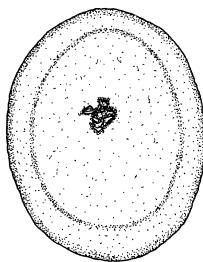
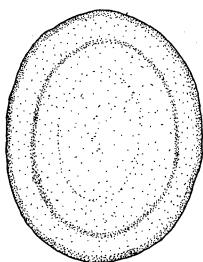
第33図 石器実測図（磨製石斧・打製石斧・スクレーパー・異形石器）



第34図 石器実測図(磨石・I)



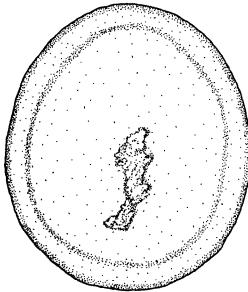
第35図 石器実測図(磨石・Ⅱ)



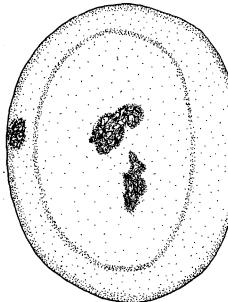
068



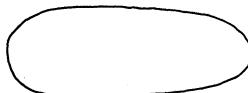
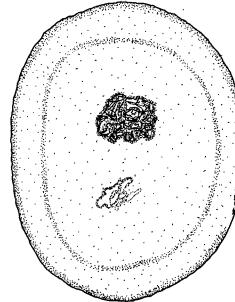
069



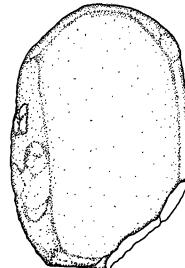
070



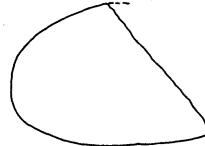
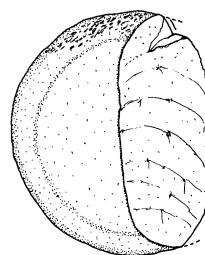
071



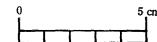
072



073



074



第36図 石器実測図(磨石・Ⅲ)

(7) 敲石(第37図, 075~088, 第38図, 089~101, 第39図, 102~109, 第40図, 110~117)

43点の敲石が出土している。完形品は29点、破損品は14点である。076・081・112・113はⅢ層、096・102・117はⅣ層、他の敲石はⅤ層の出土で、石材はほとんど砂岩が用いられているが、なかには輝石安山岩もみられる。

敲石の完形品についての形態は、平面形および断面形につき観察すると、ほとんど橢円形を基本にしているが、平面形の一部がほぼ直線的な形状をなすもの(086)も認められる。その他に破損品で板石状の礫を素材にしたもの(115・116)もある。大きさは、最大長径12.0cm 最大短径9.65cm、最小長径4.8cm、最小短径3.0cmの範囲内におさまり、最大のものは12.0cm(106)、最小のものは4.8cm×4.6cm(076)である。これらの敲石は、長径8.0cmから、5.8cm、短径6.8cmから4.5cmの範囲内におさまるものが多くみられる。

敲石の重量は完形品についてみると、最大重量820g(112)、最小重量74g(076)の範囲内におさまり、74gから245gに集中がみられる。

敲石の使用痕には、敲打のため破損したものとみられるものも観察されるが、両面や側縁に敲打痕がはっきりと観察されるものが大部分である。その他の使用痕として敲石の両面や側面に敲打のため凹部を作っているもの、敲石の両面に磨面が観察されるものが認められる。敲石の敲打痕の位置についてみると、片面にあるもの(086・115・116)、片面と片側面にあるもの(094・111・113・117)、片面と両側面にあるもの(095)、両面と片側面にあるもの(090・097・104・108・109)、両面と両側面にあるもの(076・077・082・083・088・091・092・096・100~102・105・106)、両面と両側面と両端にあるもの(075・078・084・093・098・114)、両面と両端にあるもの(089・093・099)、両端にあるもの(086)、両側面にあるもの(080・081・083・102・110・112)、両側面と両端にあるもの(087)とに分類される。前記の分類に併用するものもあるが、他の使用痕が認められる敲石には、両面や側面に凹部を作っているもの、磨面が観察されるものなども確認される。その凹部についてみると、片面にあるもの(076・090・095・103・107・113・115~117)、両面にあるもの(077・082・084・089・097~100・102・104・106・108)、片面と両側面にあるもの(076・091・095・096)とに分類される。磨面が観察されるものについてみると、片面にあるもの(095・099・103・104・111・113)、両面にあるもの(079~081・083・110)とに分けられる。

これらの敲石は、両面・両側面に敲打痕が観察され、この敲打痕は使用されたがための使用痕であり、敲く作業によるものと考えられる。その他に敲く作業のために凹部を作りだしたものや磨る作業を同時に行ったものと考えるのが妥当であるが、他の石器からの転用も当然考えなければならない。

(8) 凹石(第41図 118~126, 第42図 127~134, 第43図 135~142)

25点の凹石が出土している。135はⅢ層, 131・132はⅣ層, 他はすべてⅤ層である。完形品20点, 破損品5点であり, 石材はすべて砂岩である。

凹石の完形品について平面形の形態は, 楕円形を主体にするもの(118・120・121・124・127・128・130・132・136~139・141)と楕円形を基本としているが, その一部が直線的になるもの(122・125・126・129・131・133~135)とに分けられる。断面形の形態はほとんど楕円形の形状を呈している。

凹石の大きさは完形品についてみると, 最大長径15.7cm, 最大短径11.0cm, 最小長径6.2cm, 最小短径4.5cmの範囲内にあり, 最大のものは11.7cm×11.0cm(134)で, 最小のものは6.2cm×5.9cm(118)である。長径6.2cm~8.0cm, 短径5.1cm~7.1cm, 長径10.7cm~8.3cm短径7.1cm~9.3cmとの二つの範囲内に集中がみられる。

凹石の重量は完形品についてみると最大重量949g, 最小重量127gで, 900gから950gまでが2点, 670gから755gまでが5点, 360gから520gまでが6点, 120gから210gまでが7点と4つに分類できる。

凹石の凹部の位置は, 片面にあるもの(135・138・139~142), 両面にあるもの(118~121・124~132・134・136・137), 両面と側面にあるもの(122・133), 両面と両側面にあるもの(123・127・133)とに分けられる。凹石の凹部の数は1個のもの(135・136・138~142), 2個のもの(118~121・124・125・128~130・132・134・137), 3個のもの(122・131), 4個のもの(123・126・127・133)とがある。

凹部の形態は, 平面形および断面形についてみると, 平面形が円形で断面形がV字状に凹むもの(120), 平面形が円形で断面形がU字状に凹むもの(124), 平面形が円形で断面形が皿状に凹むもの(118・125・136), 平面形が円形で断面形が不規則に凹むもの(127・129), 平面形が楕円形で断面形がV字状に凹むもの(119・142), 平面形が楕円形で断面形がU字形に凹むもの(137・140), 平面形が楕円形で断面形が皿状に凹むもの(123・132・138), 平面形が楕円形で不定形に凹むもの(121・122・128・130・134・139・141), 平面形が不定形で断面形が不定形に凹むもの(126・131・135)とに分けられる。

凹部の位置とその数については, 両面に2個あるものが大部分であり, 凹部の形態については, 浅く凹むもの, 深く凹むものとに大別される。凹石の使用痕跡についてみると, 凹部の使用痕と側縁などにみられる敲打痕が認められるが, その他に124・135などにみられるような磨面が認められるものもある。ほとんどの凹石は凹部に敲打痕が認められ, 敲打痕の範囲の小さいもの, 大きいもの, 浅いもの, 深いものとが観察され, 131のように凹部は浅く凹み敲打状痕は磨滅しているものも認められる。凹部の使用痕とともに側縁に敲打痕が認められるものがほとんどの凹石にみられ, 119・122・123・129・130・133のようにその側縁に強く敲打痕が確認されるものもある。その他に118・120・136・137のように全ての側縁に敲打痕が確認されるものもある。このような敲打痕跡により推定すれば, 凹部を使用した敲打作業の

ほか側縁を使用した敲打作業を行ったものと考えられ、凹部に磨面や敲打痕が認められたことから凹部以外の部分で当然、磨る作業・敲く作業が行なわれ、凹部での作業と同時か他の石器（磨石や敲石など）から転用という過程が考えられる。

⑨ 石錘（第44図 143・144）

2点の石錘が出土している。石材は溶結凝灰岩と砂岩であり、143はⅢ層、144はⅣ層である。143は長楕円形状の自然礫を用い、縦断面は亀甲状を呈し両側に大きく剥離加工痕が認められ、横形のものである。144は楕円礫を用い、片面の側面のみに大きく剥離を加え簡単にえぐり部を作りだしている。この石器は片面中央部には敲打のため凹部を作り凹石に使ったものを石錘に転用したものと考えられる。

⑩ 異形石器（第31図 019・020、第33図 047）

3点の異形石器が出土している。019・020はⅣ層、047はⅢ層の出土である。019は黒曜石製で長さ3.0cm、幅1.3cmと小形で、柳葉形をしている。厚手の剝片の両側辺に細かな押圧剥離調整を施しするとい先端部を成すが、基部の調整は施されずに雑に仕上げられている。020は長さ2.0cm、幅1.0cmと小形で、柳葉形をしている。玄武岩製の剝片を素材とし、両側縁に両面より調整剥離が認められる。基部は両側縁ともにわずかな抉りを作り出している。047は破損品であり全体的な形態は把握されないが、残存している形状は上部の両サイドが外側に開いていくように推定され、十字形石器の一部に類似するものと考えられる。

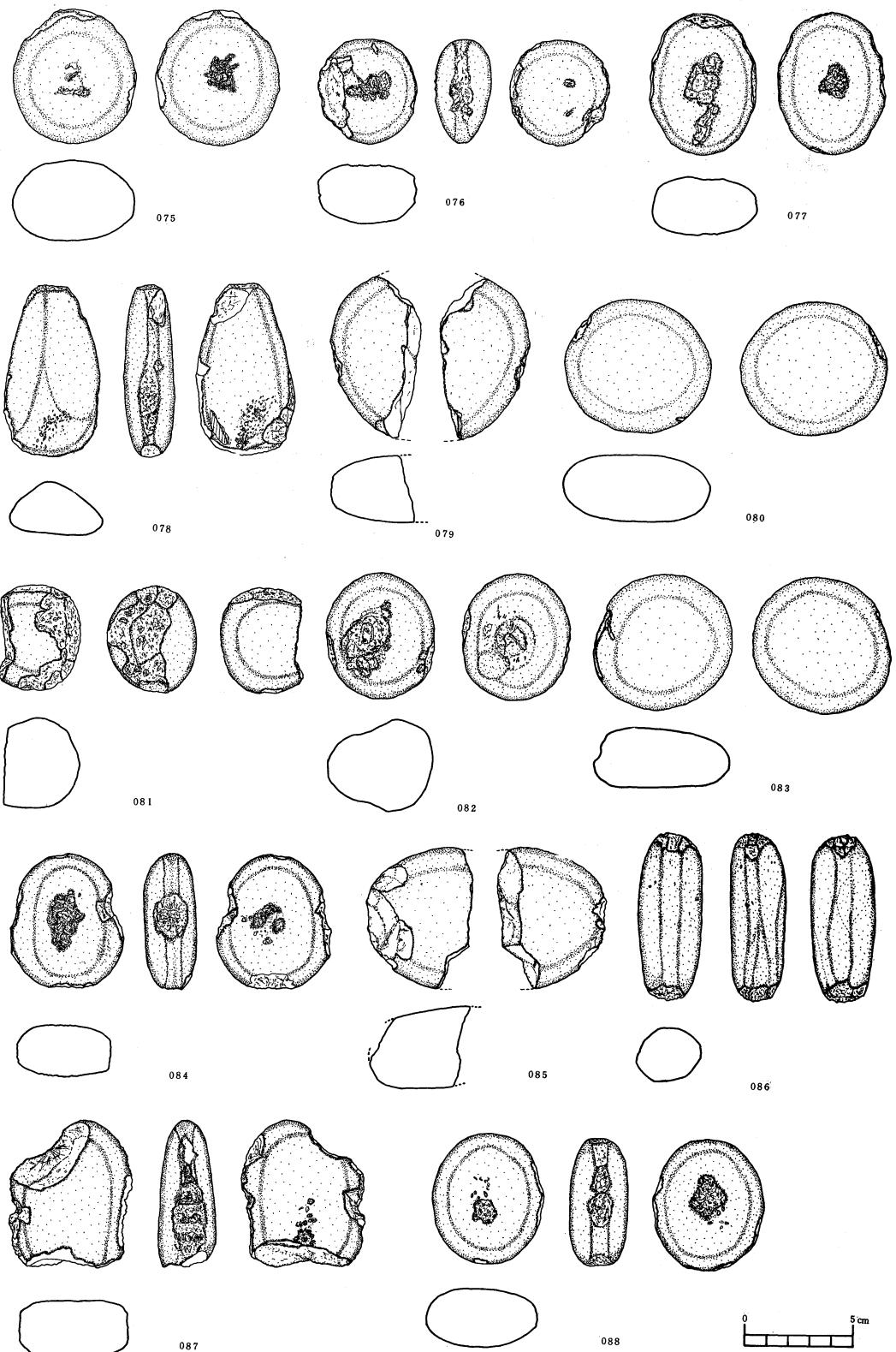
第8表 石器出土一覧表

| 図版番号 | 区・層 | 石 器 名 | 全 長 (直径) | 最大幅 (直径) | 厚 さ | 重さ(g) | 石 材 | 備 考 |
|------|------|-------|----------------|-------------|------|-------|-----|-----|
| 049 | 11・Ⅳ | 磨 石 | 6.5 | 4.8 | 3.25 | 132 | 砂 岩 | |
| 050 | 10・Ⅳ | " | 7.2 | 5.6 | 3.9 | 210 | " | |
| 051 | 11・Ⅳ | " | 6.7 | 5.5 | 2.5 | 173 | " | |
| 052 | 12・Ⅳ | " | 10.8 | 9.45 | 4.45 | 678 | " | |
| 053 | 10・Ⅳ | " | 10.7 | 7.9 | 4.4 | 541 | " | |
| 054 | 10・Ⅳ | " | 10.2 | 8.95 | 4.0 | 529 | " | |
| 055 | 11・Ⅳ | " | 10.2 | 7.9 | 5.8 | 620 | " | |
| 056 | 11・Ⅶ | " | 10.4 | 10.0 | 6.1 | 888 | " | |
| 057 | 11・Ⅲ | " | (9.1) | (6.5) | 4.9 | (292) | " | |
| 058 | 10・Ⅳ | " | 7.1 | 5.9 | 2.9 | 179 | " | |
| 059 | 11・Ⅳ | " | 6.9 | 6.0 | 2.75 | 168 | " | |
| 060 | 12・Ⅳ | " | 8.2 | 5.8 | 2.3 | 166 | " | |
| 061 | 12・Ⅳ | " | 7.2 | 5.6 | 2.8 | 157 | " | |

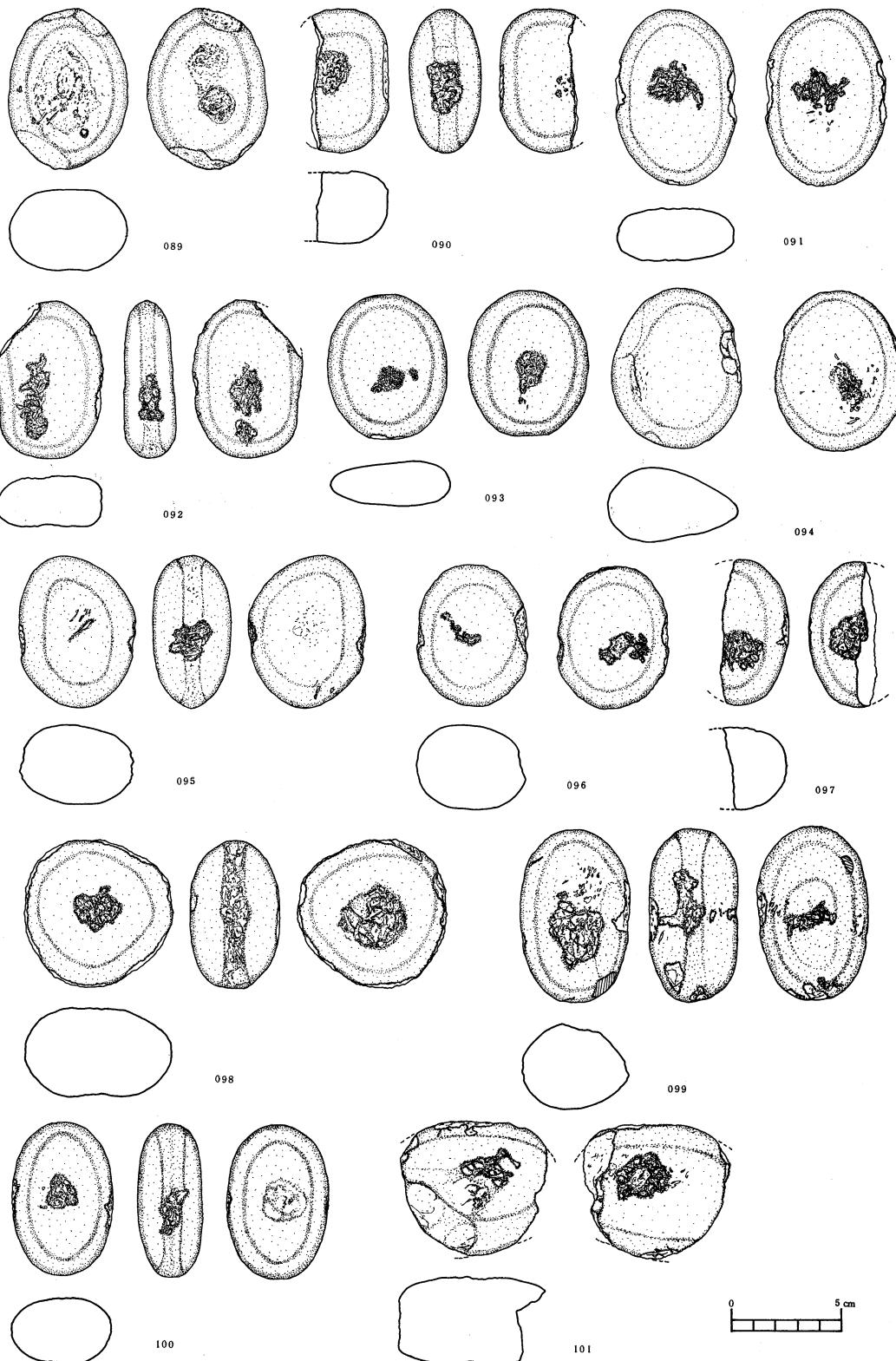
| 図版番号 | 区・層 | 石器名 | 全長 (長径) | 最大幅 (短径) | 厚さ | 重さ(㌘) | 石材 | 備考 |
|------|------|-----|------------|-------------|------|-------|-------|----|
| 062 | 6・Ⅶ | 磨石 | 6.2 | 4.9 | 2.25 | 95 | 砂岩 | |
| 063 | 12・Ⅳ | " | 9.7 | 9.6 | 4.9 | 639 | " | |
| 064 | 11・Ⅳ | " | 10.0 | 8.9 | 4.4 | 540 | " | |
| 065 | 10・Ⅳ | " | (10.2) | (6.8) | 4.7 | (378) | " | |
| 066 | 6・Ⅵ | " | (7.4) | (5.7) | 4.5 | (258) | " | |
| 067 | 11・Ⅳ | " | 10.0 | 9.1 | 6.2 | 790 | " | |
| 068 | 12・Ⅳ | " | 10.0 | 7.8 | 5.6 | 595 | " | |
| 069 | 11・Ⅳ | " | 10.5 | 9.9 | 5.0 | 714 | " | |
| 070 | 11・Ⅳ | " | 11.4 | 9.8 | 3.6 | 611 | " | |
| 071 | 12・Ⅳ | " | 11.9 | 9.2 | 6.1 | 959 | " | |
| 072 | 9・Ⅲ | " | (12.2) | (5.5) | 3.9 | (441) | " | |
| 073 | 10・Ⅳ | " | 10.5 | 7.1 | 2.8 | 286 | " | |
| 074 | 10・Ⅵ | " | (9.7) | (8.0) | 5.6 | (491) | " | |
| 075 | 10・Ⅳ | 敲石 | 6.3 | 5.7 | 3.7 | 158 | " | |
| 076 | 10・Ⅲ | " | 4.8 | 4.6 | 2.7 | 74 | " | |
| 077 | 12・Ⅳ | " | 6.5 | 4.9 | 2.7 | 116 | " | |
| 078 | 10・Ⅳ | " | 7.8 | 4.6 | 2.3 | 94 | " | |
| 079 | 10・Ⅳ | " | (7.5) | (4.2) | 3.1 | (108) | " | |
| 080 | 7・Ⅳ | " | 6.8 | 6.1 | 3.1 | 175 | " | |
| 081 | 9・Ⅲ | " | 4.9 | (4.0) | 4.3 | (112) | " | |
| 082 | 10・Ⅳ | " | 5.8 | 5.1 | 4.2 | 158 | " | |
| 083 | 10・Ⅳ | " | 6.4 | 6.8 | 2.5 | 157 | " | |
| 084 | 9・Ⅳ | " | 6.2 | 5.2 | 2.5 | 111 | " | |
| 085 | 10・Ⅳ | " | 6.6 | (5.0) | 3.8 | (140) | " | |
| 086 | 12・Ⅳ | " | 7.7 | 3.0 | 2.5 | 94 | 輝石安山岩 | 棒状 |
| 087 | 12・Ⅳ | " | (6.9) | 5.7 | 2.7 | (121) | 砂岩 | |
| 088 | 10・Ⅳ | " | 6.0 | 5.2 | 2.7 | 117 | " | |
| 089 | 11・Ⅳ | " | 7.4 | 5.4 | 3.6 | 214 | " | |
| 090 | 10・Ⅳ | " | 6.6 | (3.9) | 3.3 | (110) | " | |
| 091 | 12・Ⅳ | " | 8.0 | 5.5 | 2.4 | 150 | " | |
| 092 | 12・Ⅳ | " | 7.2 | 5.0 | 2.2 | 119 | " | |
| 093 | 12・Ⅳ | " | 6.7 | 5.5 | 2.1 | 103 | " | |
| 094 | 9・Ⅳ | " | 7.3 | 5.9 | 3.4 | 178 | " | |
| 095 | 11・Ⅳ | " | 6.9 | 5.3 | 3.6 | 179 | " | |

| 図版番号 | 区・層 | 石器名 | 全長 (長径) | 最大幅 (短径) | 厚さ | 重さ(g) | 石 材 | 備 考 |
|-------|------|-----|------------|-------------|-------|-------|-----|-----|
| 0 9 6 | 11・Ⅶ | 敲 石 | 6.4 | 5.1 | 3.8 | 163 | 砂 岩 | |
| 0 9 7 | 10・Ⅳ | " | 6.7 | (3.1) | 3.7 | (97) | " | |
| 0 9 8 | 12・Ⅳ | " | 6.8 | 6.8 | 3.9 | 245 | " | |
| 0 9 9 | 11・Ⅳ | " | 7.9 | 5.0 | 3.9 | 196 | " | |
| 1 0 0 | 11・Ⅳ | " | 7.0 | 4.6 | 3.0 | 141 | " | |
| 1 0 1 | 11・Ⅳ | " | 6.7 | (4.1) | 4.0 | (203) | " | |
| 1 0 2 | 11・Ⅶ | " | 8.0 | 7.2 | 5.3 | 397 | " | |
| 1 0 3 | 9・Ⅳ | " | 9.8 | 9.2 | 4.6 | 576 | " | |
| 1 0 4 | 11・Ⅳ | " | 8.8 | 7.9 | 5.2 | 482 | " | |
| 1 0 5 | 12・Ⅳ | " | 10.0 | 8.65 | 4.6 | 568 | " | |
| 1 0 6 | 11・Ⅳ | " | 12.0 | 8.7 | 4.8 | 724 | " | |
| 1 0 7 | 11・Ⅳ | " | 10.4 | 9.2 | 3.8 | 465 | " | |
| 1 0 8 | 12・Ⅳ | " | (8.3) | (6.2) | 2.5 | (191) | " | |
| 1 0 9 | 11・Ⅳ | " | (9.3) | 7.4 | 3.8 | (295) | " | |
| 1 1 0 | 11・Ⅳ | " | 11.0 | 9.65 | 5.2 | 776 | " | |
| 1 1 1 | 10・Ⅳ | " | 9.3 | (5.6) | 5.3 | (315) | " | |
| 1 1 2 | 12・Ⅲ | " | 11.0 | 9.4 | 6.0 | 820 | " | |
| 1 1 3 | 8・Ⅲ | " | (8.7) | (5.9) | 3.9 | (215) | " | |
| 1 1 4 | 12・Ⅳ | " | 7.8 | 6.0 | 3.4 | 205 | " | |
| 1 1 5 | 11・Ⅳ | " | (16.1) | 9.2 | 4.9 | (992) | " | |
| 1 1 6 | 11・Ⅳ | " | (11.8) | (8.2) | (3.1) | (494) | " | |
| 1 1 7 | 8・Ⅵ | " | (7.8) | (5.2) | (4.7) | (228) | " | |
| 1 1 8 | 12・Ⅳ | 凹 石 | 6.2 | 5.9 | 2.7 | 136 | " | |
| 1 1 9 | 11・Ⅳ | " | (6.6) | 6.0 | 3.4 | (169) | " | |
| 1 2 0 | 11・Ⅳ | " | 6.6 | 5.7 | 3.7 | 183 | " | |
| 1 2 1 | 11・Ⅳ | " | 7.1 | 6.0 | 2.4 | 185 | " | |
| 1 2 2 | 12・Ⅳ | " | 7.4 | 5.1 | 3.9 | 201 | " | |
| 1 2 3 | 11・Ⅳ | " | (8.0) | 5.8 | 4.1 | (257) | " | |
| 1 2 4 | 11・Ⅳ | " | 9.8 | 8.7 | 6.15 | 746 | " | |
| 1 2 5 | 12・Ⅳ | " | 10.7 | 8.5 | 5.1 | 679 | " | |
| 1 2 6 | 11・Ⅳ | " | 11.9 | 8.55 | 4.8 | 686 | " | |
| 1 2 7 | 12・Ⅳ | " | 8.3 | 7.9 | 4.8 | 367 | " | |
| 1 2 8 | 10・Ⅳ | " | 9.5 | 9.2 | 3.9 | 513 | " | |
| 1 2 9 | 12・Ⅳ | " | 8.7 | 5.6 | 3.1 | 189 | " | |

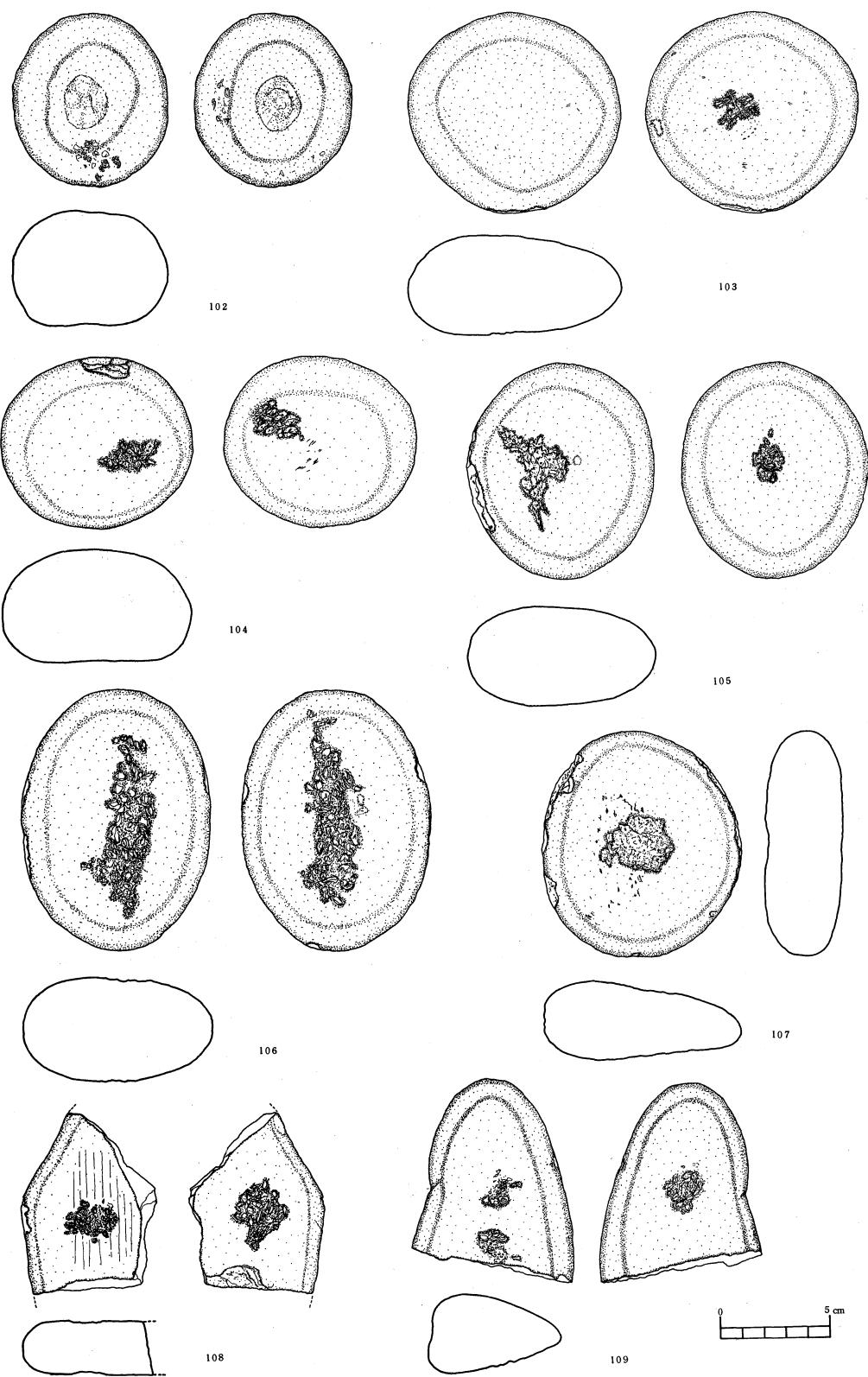
| 図版番号 | 区・層 | 石器名 | 全長 (直径) | 最大幅 (短径) | 厚さ | 重さ(g) | 石材 | 備考 |
|------|------|-----|------------|-------------|-------|-------|-------|----|
| 130 | 10・Ⅳ | 凹 石 | 6.7 | 5.5 | 2.3 | 127 | 砂 岩 | |
| 131 | 10・Ⅶ | " | 10.6 | 7.3 | 3.8 | 437 | " | |
| 132 | 9・Ⅶ | " | 7.5 | 6.5 | 5.5 | 480 | " | |
| 133 | 12・Ⅳ | " | 8.0 | 4.5 | 2.8 | 151 | " | |
| 134 | 10・Ⅳ | " | 15.7 | 11.0 | 3.7 | 949 | " | |
| 135 | 12・Ⅲ | " | 11.9 | 9.8 | 5.5 | 900 | " | |
| 136 | 12・Ⅳ | " | 9.25 | 9.3 | 5.8 | 708 | " | |
| 137 | 11・Ⅳ | " | 9.7 | 8.65 | 6.8 | 751 | " | |
| 138 | 11・Ⅳ | " | 9.4 | 8.6 | 3.1 | 368 | " | |
| 139 | 10・Ⅳ | " | 9.2 | 8.0 | 5.1 | 456 | " | |
| 140 | 12・Ⅳ | " | 10.25 | (8.8) | (4.7) | (499) | " | |
| 141 | 10・Ⅳ | " | 7.3 | 7.1 | (4.9) | (272) | " | |
| 142 | 10・Ⅳ | " | (8.8) | (7.3) | (3.1) | (206) | " | |
| 143 | 10・Ⅲ | 石 錘 | 17.1 | 11.2 | 3.9 | 767 | 溶結凝灰岩 | |
| 144 | 13・Ⅳ | " | 11.6 | 9.2 | (2.3) | 354 | 砂 岩 | |



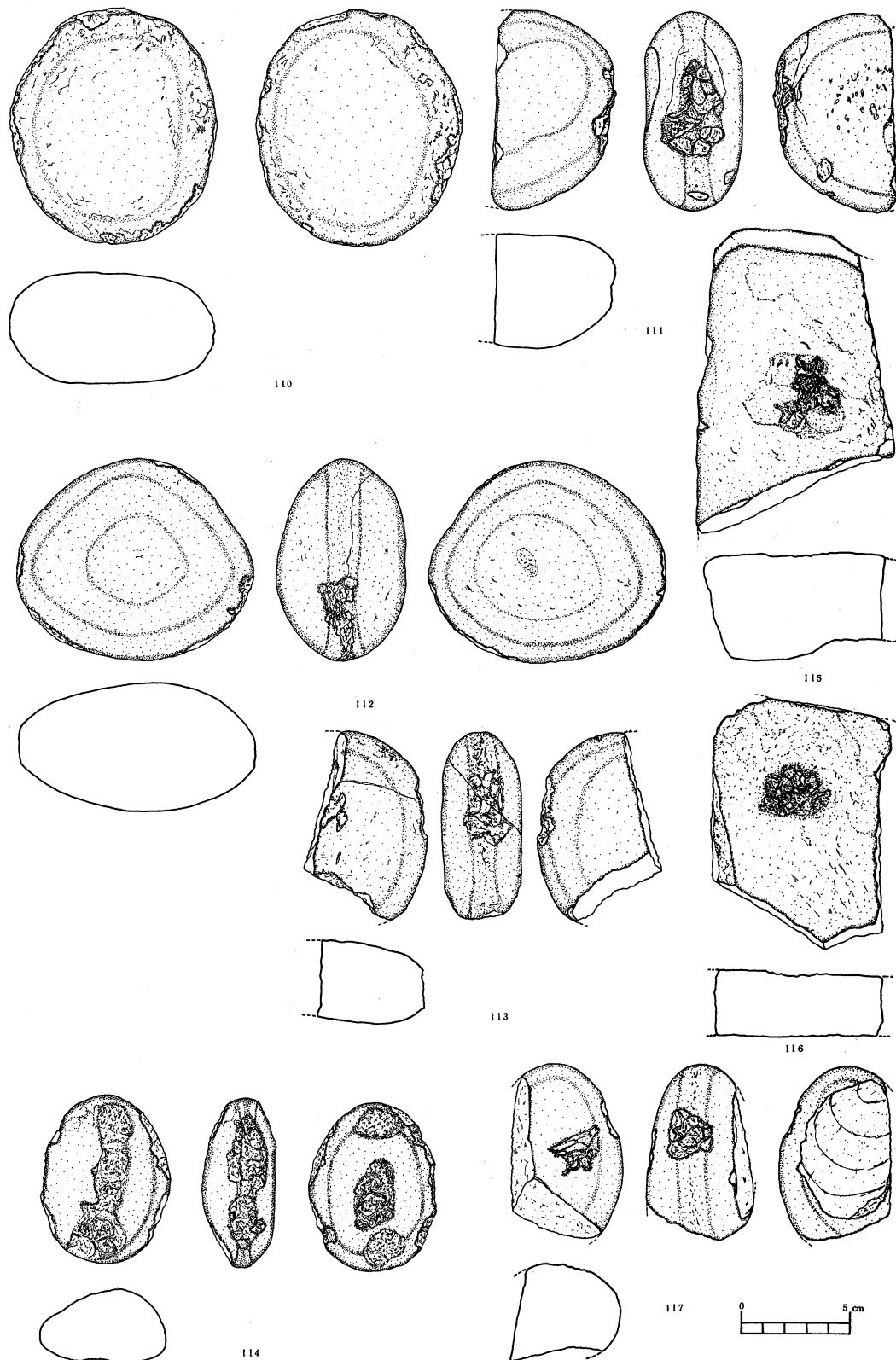
第37図 石器実測図(敲石・1)



第38図 石器実測図(敲石・Ⅱ)



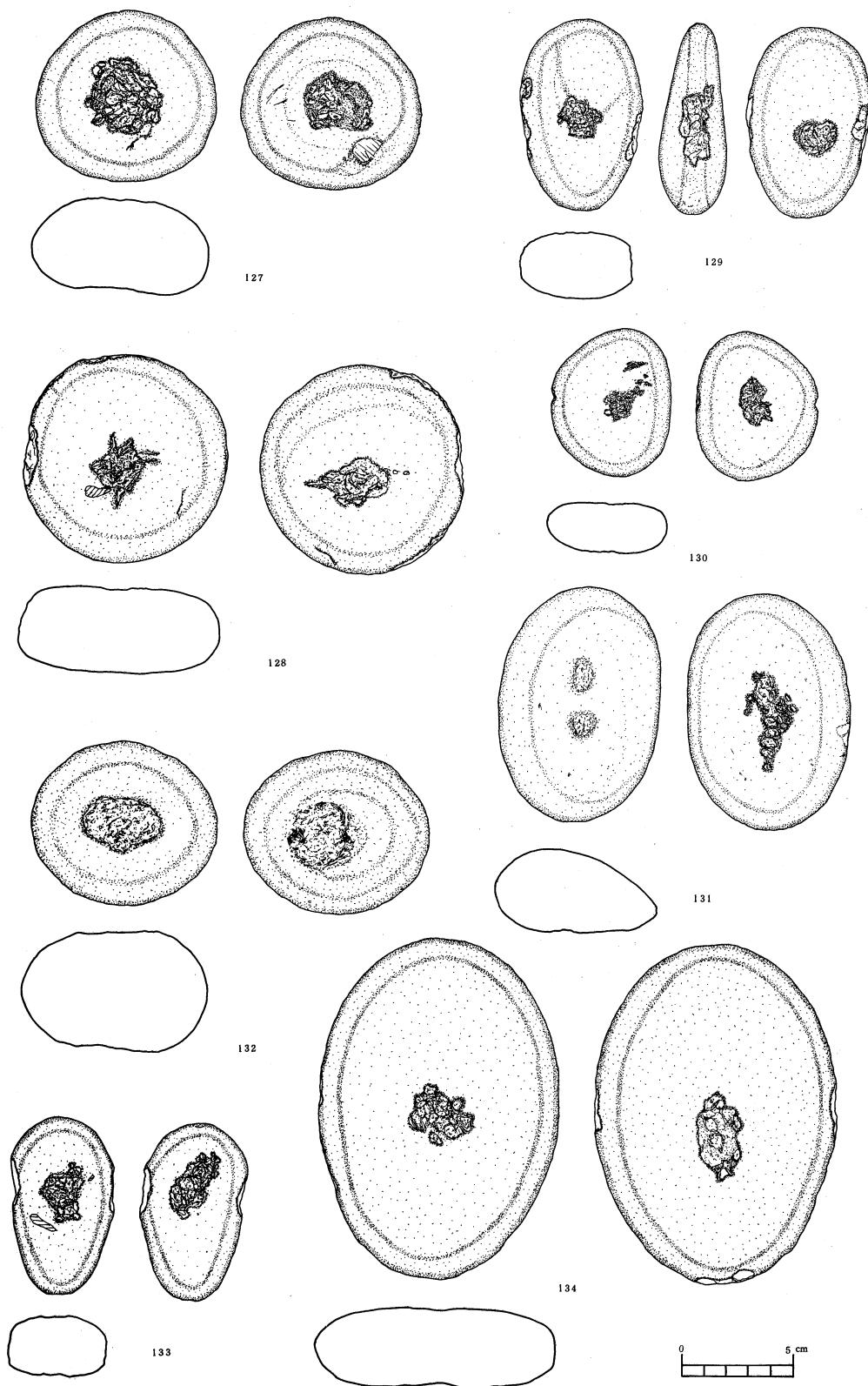
第39図 石器実測図(敲石・Ⅲ)



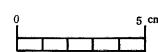
第40図 石器実測図(敲石・IV)

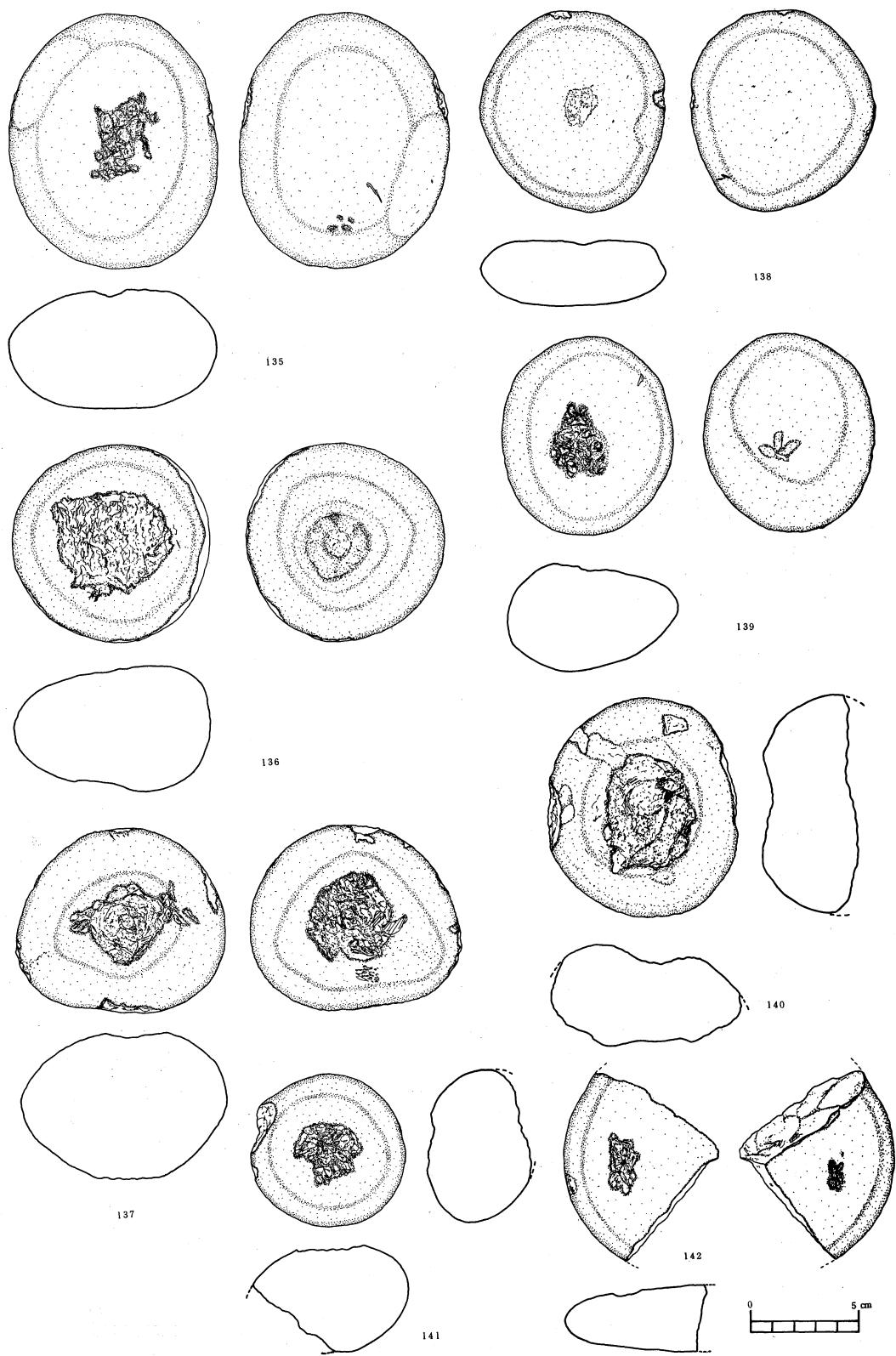


第41図 石器実測図(凹石・1)

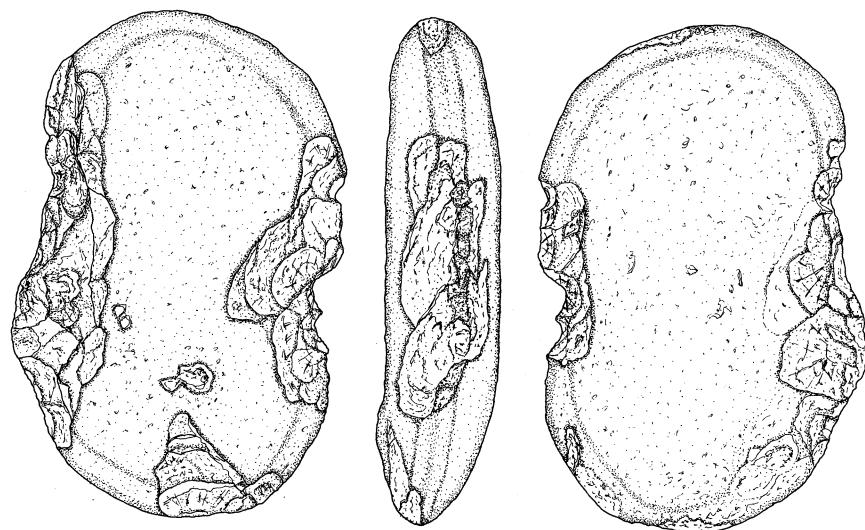


第42図 石器実測図(凹石・Ⅱ)

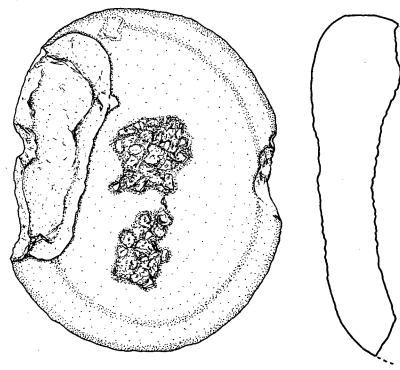
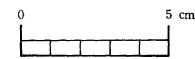




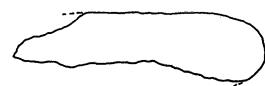
第43図 石器実測図(凹石・Ⅲ)



143



144



第44図 石器実測図(石錐)

第5章 まとめにかえて

別府(石踊)遺跡は縄文時代全般にわたって遺物が見られる。以下層位、各時代の土器、石器について少々の概略をのべて問題点を提起しまとめにかえたい。

①層位と出土遺物の関係

| 層位 | 土器 | 石器 |
|------------------|-----------------------------|--|
| I 耕作土 | | |
| II 黒色土 | | |
| III 茶褐色土 | I類 土製品 | 石鏃、磨製石斧 打製石斧、石匙 磨石、敲石 凹石、石錐 異形石器 |
| IV 暗茶褐色土 | II類 III類 IV類 | 石鏃、磨製石斧 打製石斧、石匙 スクレーパー、磨石 敲石、凹石 石錐 |
| V 黄褐色土 | | |
| VI 灰褐色土 (乳白色) | VI類 VII類 VIII類 IX類 | 石鏃、磨製石斧 スクレーパー、磨石 敲石、凹石 |
| VII 黑褐色土 | | |
| VIII 暗茶褐色土 | | |

第45図 層位と出土遺物

カホヤ」と呼ばれている層と思われる。この「アカホヤ」層は各所のC¹⁴測定によりBP約6000年前後という数値が示されている(註9)。このことによりV層出土のIII類土器・VI層出土のV類土器の大まかな絶対年代が推察される。これと似たような現象は、最近各地の発掘調査においても確認されつつある(註10)。

層位については第3章において考察したのでここでは主に出土遺物との関係について考えてみたい。III層中にはI類土器(縄文晚期)に伴い石斧・石鏃・磨石・石錐等が出土する。又III層下部には土偶の一部かと思われる土製品が数点出土する。IV層はIII類土器(曾畠式)が大部分であるが、わずかにII類土器(岩崎式)・IV類土器(轟式)が出土する。III類土器とIV類土器の上下関係はあきらかでないが、II類土器はやや上位より出土する。石器は石斧・石鏃・石匙や、多量の出土をみた磨石・敲石・凹石等が見られる。III層とIV層は同質で境が明確でないが含まれる軽石の量で判別される。VI層中にはV類土器(塞ノ神式)が大部分であるが同一レベルでVI類土器・VII類土器・VIII類土器(平椿式)・IX類土器(吉田式)・X類土器(石坂式)等の縄文前期土器が少量ずつ出土する。石器は石鏃・石斧・スクレーパー・磨石等が見られる。

ここで特筆すべき点は、包含層のV層、VI層の間に黄褐色の無遺物層(V層)が存在することである。この層は所謂「ア

② 土器について

土器は縄文式土器に限られる。縄文式土器は大きく晩期(Ⅰ類), 中期(Ⅱ類), 前期(Ⅲ類~Ⅹ類)に分けられる。層位的に見るとⅠ類はⅢ層, Ⅱ類~Ⅳ類はⅣ層, Ⅴ類からⅩ類はⅦ層に出土する。

Ⅰ類土器は縄文時代晩期に位置するもので, 黒色研磨土器, 組織痕文土器等が見られる。黒色研磨土器にはリボン状突起を有するものもあり, 黒川式土器(註11), あるいは縄文晩期Ⅱ式土器(註12)といわれるものに比定できる。Ⅰ類土器において注目すべき点は赤色顔料による彩色土器(016)と組織痕文土器, 特に網目圧痕文土器(006)の存在である。彩色土器は珍らしいが, 昭和27年の黒川洞窟の調査により当遺跡のものと同時期と考えられる黒色研磨土器に彩色を施したものが発見されている(註13)。網目圧痕文も席目圧痕文に伴い出土して来ている。最近の調査例によると, 内之浦町炉木遺跡(註14), 志布志町前之段遺跡(註15)鹿屋市南町牧ノ原遺跡(註16), 又宮崎県でも宮崎市松添貝塚(註17)において確認されている。

このような組織痕は縄文時代晩期後半の鉢形土器・椀形土器の下半分に施されるものである。

Ⅱ類土器は縄文時代中期に位置するもので, 地文の貝殻条痕をよく残し太い沈線文が施されているものである。これらは田代町岩崎遺跡を標準遺跡とする岩崎式土器に比定できる。

Ⅲ類土器は縄文時代前期に位置するもので, 沈線による縦線文・横線文・斜行線文・曲線文

第9表 鹿児島県内の曾畠式土器地名表

| 市町名 | 遺跡名 | 備考 | 市町名 | 遺跡名 | 備考 |
|------|------|-----------------|------|------|------|
| 大口市 | 日勝山 | | 吹上町 | 黒川洞穴 | |
| 菱刈町 | 白坂 | | 西之表市 | 寺の門 | |
| 姶良町 | 稻荷 | | 西之表市 | 本城 | |
| 牧園町 | 中野 | | 西之表市 | 本立 | |
| 牧園町 | 一本松 | | 西之表市 | 田之脇 | |
| 牧園町 | 赤子 | | 西之表市 | 神山 | |
| 末吉町 | 石ノ脇 | | 西之表市 | 指辺 | |
| 志布志町 | 片野 | 昭和39年 一部発掘調査 | 西之表市 | 池ノ久保 | |
| 志布志町 | 野首橋 | 一部残存 | 西之表市 | 城ノ浜 | |
| 吾平町 | 新地ノ上 | | 西之表市 | 花里崎 | |
| 吾平町 | 哀損原 | | 西之表市 | 小浜 | 貝塚 |
| 頴娃町 | 北手牧 | | 西之表市 | 柳原 | 一部破壊 |
| 頴娃町 | よろん谷 | | 中種子町 | 二十番 | |
| 知覧町 | 堤の原 | | 中種子町 | 田島 | 破壊 |
| 知覧町 | 二ツ谷 | | 中種子町 | 中田 | |
| 知覧町 | 下郡 | | 中種子町 | 千草原 | |
| 金峰町 | 阿多貝塚 | | 上屋久町 | 一湊松山 | |

四角形文・連續刺突文等の幾何学文が施される。これらは熊本県宇土市曾畠貝塚を標準遺跡とする曾畠式土器に比定できる。本県における曾畠式土器の出土は第9表に見られるように県下全域に分布している。本遺跡の曾畠式土器は文様構成にやや乱れが見られ、曲線文も多様されることから大口市日勝山遺跡(註18)の土器に代表される曾畠Ⅲ 武士器(註19)に想定される。ただⅢd類土器には文様構成が不規則で貝殻条痕が顕著に見られる土器がある。特に317は外面・内面共に貝殻条痕が強く施され、文様も複雑で絵画的な沈線文である。このようなⅢd類土器、特に貝殻条痕を有する土器の時期設定が問題になるが、時間差、地域差等との関連も考え合わせて今後の研究に課したい。

Ⅳ類土器は縄文時代前期に位置し、器面は外面、内面共に強く荒い貝殻条痕で整形されているものである。轟式土器に比定出来る。

Ⅴ類土器は縄文時代前期に位置するもので、文様構成は撲糸文と沈線文(ⅤA類)、貝殻文と沈線文(ⅤB類)とに大別される。Ⅴ類土器は塞ノ神式土器に比定できるが、河口氏により細分されている(註20)のでそれに習うことにする。ⅤA類は塞ノ神A式で沈線文と撲糸文を施すもの(塞ノ神A a式)と沈線による区画内に撲糸文を施すもの(塞ノ神A b式)が見られる。ⅤB類は塞ノ神B式で沈線による区画内にヘラによる条線を施すもの(塞ノ神B c式)と貝殻縁による連續刺突文を施すものや、ヘラによる格子目沈線文を施すもの(塞ノ神B d式)が見られる。塞ノ神式土器は県下全域に広く分布し遺跡数も多い。志布志町においても、出口遺跡、東黒土田B遺跡、倉野遺跡、板山遺跡、井手平遺跡、上ノ園遺跡、大迫遺跡、道重遺跡白木原遺跡(註21)等が知られている。又、県外においては、宮崎県串間市大平遺跡、宮崎市柏田貝塚、同跡江貝塚、延岡市大貫貝塚等(註22)が知られている。熊本県では最近の調査により24ヶ所の遺跡が確認されている(註23)。特に1975年報告の熊本県上益城郡益城町の「櫛島遺跡」(註24)においては相当量の塞ノ神式土器が出土している。又櫛島遺跡の炉穴からの¹⁴C測定ではBP 9320±185年、BP 9410±125年という測定値が出されている。以上のように塞ノ神式土器は縄文時代前期に南九州全域に広範囲な分布を示している。今後、科学的な年代測定、層位との関係、地域的な差異の比較検討により明らかにされる必要があろう。

Ⅵ類土器は縄文時代前期に位置すると思われる。文様は小さな刻み目を施す細隆起突帯をめぐらすものである。Ⅵ類土器は今までに型式名のついていないものであるが、この種の土器は塞ノ神式土器、平桟式土器等に伴って出土している。本遺跡の塞ノ神式土器の中にも同様の刻み目細隆起突帯を頸部にめぐらし胴部に撲糸文を施したもの(452・453)が出土している。このような細隆起突帯の出土している遺跡をあげてみると、国分市平梅貝塚(註25)、知覧町、石坂上遺跡(註26)、栗野町花ノ木遺跡第Ⅵ地点(註27)、加世田市村原(梅ノ原)遺跡(註28)において塞ノ神式土器、平桟式土器等と共に出土している呼称は細隆起線文、細隆起突帯微隆突帯と不統一であるが同一の文様と思われる。今後の研究によりこれらの土器については時期、型式設定の必要があると思われる。

Ⅶ類土器は縄文時代前期に位置するものと思われるが、他の前期土器にあてはまらないもの

である。時期は塞ノ神式土器とほぼ同時期と考えられる。

VII類土器は縄文時代前期に位置し、貝殻条痕、ヘラによる沈線で波状、羽状の文様を施すものである。VII類土器に類似した土器は最近の調査により類例が増して来ている。本県においては、栗野町花ノ木遺跡第Ⅶ地点(註29)、溝辺町桑ノ丸遺跡(註30)、溝辺町長ヶ原遺跡(註31)、笠沙町西ノ園遺跡(註32)、西ノ表市下剣峯遺跡(註33)等において確認されている。又宮崎県においても宮崎郡田野町において発見され、器形全体が復元されている(註34)。

VIII類土器はVII類土器、VII類土器と同様に型式名のないものであるが、今後の調査や資料整備により時期的な位置づけが待たれるものである。

IX類土器は縄文時代前期に位置するもので、貝殻縁による刺突文、押し引き文、クサビ形貼付文を施すもので吉田式土器に比定できる。

X類土器は縄文時代前期に位置するもので、口縁部に刺突文を羽状に施し、胴部には貝殻条痕文を横位もしくは羽状に施すものである。石坂式土器に比定できる。

以上のように本遺跡においては縄文時代前期より縄文時代晩期まで10類に分けられる土器が出土している。特に縄文時代前期においては、III類(曾畠式系統)、VII類(塞ノ神式系統)を中心に多種の土器が出土しており、今後の縄文時代前期の資料整備を待ち再検討する必要がある。

③石器について

石器は狩猟具、加工具、土堀り具、皮剥ぎ具、調理具などの生活用具のほとんどが検出され石鎌・石斧(磨製石斧・打製石斧)・石匙・スクレーパー・磨石・敲石・凹石・石錐・異形石器など144点の石器が出土している。その内訳はIII層21点、IV層98点、VII層22点、表採および攬乱層3点である。これらの石器を層別にみるとIII層は石鎌5点・磨製石斧2点・打製石斧4点・石匙1点・磨石2点・敲石4点・凹石1点・石錐1点・異形石器1点。IV層は石鎌4点・磨製石斧6点・打製石斧1点・石匙2点・スクレーパー4点・磨石20点・敲石36点・凹石22点・石錐1点・異形石器2点。VII層は石鎌8点・磨製石斧4点・スクレーパー1点・磨石4点・敲石3点・凹石2点がみられる。以下石器について留意点を簡単にまとめてみる。

石鎌については、そのほとんどが無茎の二等辺石鎌である。石鎌の類に分類した017・018は他の石鎌に比較しその形状に相違がみられる。018は玄武岩製で全長1.95cm、脚端部の幅1.3cmと小形で先端部は磨滅がみられ丸くなっている。研磨面は観察されず、表採品であるために時期的に把握できない。福岡県の深原遺跡(註35)、同県の大通端遺跡(註36)など九州内の出土例が九ヶ所知られている異形局部磨製石鎌(石器)に形状は非常に類似しているが、小形である。本遺跡出土のものは異形局部磨製石鎌を実見してないために同様の石器かどうか断言できない。017・018は県内での出土例はみられない。ともに今後の資料の増加によって検討を要する資料と考えられる。

磨製石斧・打製石斧については、そのほとんどが破損品である。磨製石斧は短冊型・短冊状

の扁平な石斧・蛤刃状の石斧などがみられる。打製石斧はすべて破損品のため全貌は把握できない。

石匙については、3点の出土がみられ横型2点、縦型1点である。021はチャート製で横型022は横型、047は縦型であり、ともにホルンフェルスを素材として用いたもので、つまみ部は簡単に調整が行なわれ幅が広い。047は溝辺町の曲迫遺跡(註37)出土の石匙に類似している。

スクレーパーについては、頁岩・チャート・紋流岩などを素材として用い、それぞれに形状を異にしている。スクレーパーより石匙は削除し別項として取りあげた。

磨石・敲石・凹石については、本遺跡出土の石器144点のうち94点の出土がみられる。これらの石器とともに数多くの円礫・橢円礫・角礫などもみられたが、特に加工の加わってないものは除いた。石器のほとんどは砂岩を素材として用い、輝石安山岩もみられる。本遺跡は志布志町の大河川の一つである前川や海岸まで近距離にあるためか浜石などの素材を用いたものと考えられる。県内での磨石・敲石・凹石など多量の出土例はみられないが、福岡県の深原遺跡(註38)においては敲石・磨石とあわせて76点の出土例が報告されている。西之表市指辺遺跡(註39)において類似した石器がみられる。

本遺跡出土の磨石・敲石・凹石は磨面・敲打痕・敲打痕により凹むものとに区別したが、これらを機能上から区別することは困難である。

磨石については、基本的に磨面をもっているもので磨る作業を機能としているものである。その中には敲打痕を素材の一部に有するものもみられ、磨る作業と敲く作業の機能を果したものも観察され、磨る作業を主とし敲く作業をも一部かねたものと考えられる。また敲石からの転用も推定される。

敲石については、基本的に敲打痕跡をもっているもので敲く作業を機能としているものである。その中には敲石の一部に敲打のため凹部を有するものや敲石の一部に磨面を有するものとが観察される。敲石においても敲く作業を主とし磨る作業を一部かねたものも観察され、磨石や凹石からの転用も当然考えられる。これらの敲石の中には棒状のものもみられる。086は長さ7.7cm、幅3.0cmの輝石安山岩の棒状の素材を用い両端に敲打痕が観察される。この棒状の敲石は縄文時代前期の土器とともに出土した加世田市の村原遺跡(註40)、西之表市の指辺遺跡(註41)、金峰町の阿多貝塚(註42)等に類似した資料がみられる。

凹石については、基本的に敲打痕などにより凹部を作りだしているもので敲石と同様に敲く作業を機能として凹部を形成している。その中には凹部での敲く作業を主とし磨る作業をもそれ以外でかねたものも観察される。また凹部以外での敲く作業あるいは磨る作業を行ったものも認められる。このように敲打痕や磨面が観察されることは、凹石が磨石・敲石からの転用と磨石・敲石が凹石への転用も当然考えられる。また台石としての機能も推定される。

これらの磨石・敲石・凹石は、それぞれの石器の機能からの転用か、それぞれの石器の機能をかねそなえたものか判別するのは困難である。

石錘については、2点の出土がみられ、溶結凝灰岩と砂岩とが素材として用いられている。

143はⅢ層からの出土であり大型で横形のものである。志布志町の夏井ヶ浜遺跡(註43)には数多くの石錘の出土例が知られ、大型タイプに類似している。144はⅣ層からの出土で、片面中央部に敲打のため凹部を作り出し、凹石として使用したものを石錘として再利用したものであると考えられる。

異形石器については、形状を異にする3点の出土がみられる。019は黒曜石製で先端部の形状から観察して石槍としての機能が考えられる。020は玄武岩製で形状は柳葉形を呈し小型である。019・020は福岡県の大道端遺跡(註44)出土の柳葉形石鏃に形状が非常に類似している。047は破損品のために全貌は判明しないが十字形石器の一部と考えられる。県内において十字形石器は高尾野町の放光寺遺跡(註45)、枕崎市の花渡川遺跡(註46)などにみられ、県外では長崎県の筏遺跡(註47)、長崎市の深堀遺跡(註48)、熊本県の今村上村東遺跡(註49)などに出土例が知られる。019・020・047は本遺跡においては異形石器で取り扱ったが、今後の資料の増加をまち、検討を要する資料と考える。

- 註 1 鹿児島県(1971)「土地分類基本調査」国土調査 鹿屋 志布志
- 註 2 河口貞徳・諫訪昭千代・酒勾義明(1971)「山ノ上遺跡発掘報告」鹿児島考古第5号
- 註 3 瀬戸口望(1974)「志布志町の縄文遺跡分布」鹿児島考古第9号。
- 註 4 志布志町町誌編纂委員会(1972)「志布志町誌」上巻
志布志町教育委員会(1976)「志布志町文化財要覧」
- 註 5 註4と同じ
- 註 6 註4と同じ
- 註 7 志布志町教育委員会(1976)「志布志町文化財要覧」
- 註 8 註4と同じ
- 註 9 町田洋(1977)「火山灰は語る」
- 註 10 金峰町教育委員会(1978)「阿多貝塚」金峰町埋蔵文化財調査報告書(1)
西之表市教育委員会(1978)「下剝峯遺跡」西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書
- 註 11 河口貞徳(1952)「黒川洞窟発掘報告」鹿児島県考古学会紀要第2号
- 註 12 賀川光夫(1969)「九州・晩期の様相の研究史」新版考古学講座3
- 註 13 註11と同じ
- 註 14 池水寛治・戸崎勝洋(1974)「内之浦町桟木遺跡」鹿児島考古9号
- 註 15 瀬戸口望(1974)「志布志町の縄文遺跡の分布・立地・標高・その他について」鹿児島考古9号
- 註 16 鹿児島県教育委員会(1978)「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(9)

- 註 17 宮崎市教育委員会(1974)「松添貝塚発掘調査報告書」
- 註 18 木村幹夫(1932)「鹿児島県大口盆地の遺跡」考古学雑誌22-10
寺師見国(1954)「南九州の縄文土器」
- 註 19 江坂輝弥(1967)「縄文土器九州編・6」「考古学ジャーナル12・14~16」
- 註 20 河口貞徳(1972)「塞ノ神式土器」鹿児島考古6号
- 註 21 註15・註20より引用
- 註 22 註20と同じ
- 註 23 熊本県教育委員会(1975)「櫛島遺跡」熊本県文化財調査報告第18集
- 註 24 註23と同じ
- 註 25 註20と同じ
- 註 26 註20と同じ
- 註 27 鹿児島県教育委員会(1975)「花ノ木遺跡」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(1)
- 註 28 加世田市教育委員会(1977)「村原(椎ノ原)遺跡」加世田市埋蔵文化財調査報告書
- 註 29 註27と同じ
- 註 30 鹿児島県教育委員会(1977)「桑ノ丸遺跡」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(7)
- 註 31 鹿児島県教育委員会(1978)「長ケ原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(9)
- 註 32 鹿児島県教育委員会(1978)「西之園遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
- 註 33 西之表市教育委員会(1978)「下剝峯遺跡」西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書
- 註 34 茂山護(1978)「宮崎郡田野町採集の貝殻条痕文土器」宮崎考古第4号
- 註 35 福岡県教育委員会(1978)「深原遺跡」山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第8集
- 註 36 福岡県教育委員会(1977)「大道端遺跡」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XIV
- 註 37 鹿児島県教育委員会(1978)「曲迫遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 註 38 註35と同じ
- 註 39 鹿児島県教育委員会(1977)「指辺遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- 註 40 註28と同じ
- 註 41 註39と同じ
- 註 42 金峰町教育委員会(1978)「阿多貝塚」金峰町埋蔵文化財調査報告書(1)
- 註 43 濬戸口望(1973)「夏井ヶ浜採集の遺物について」鹿児島考古7号
- 註 44 註36と同じ
- 註 45 鹿児島県教育委員会(1975)「放光寺遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- 註 46 小林久雄(1967)「九州縄文土器の研究」小林久雄遺稿刊行会編
- 註 47 百人委員会(1974)「筏遺跡」百人委員会埋蔵文化財報告 第4集
- 註 48 長崎大学医学部解剖学第二教室(1967)「深堀遺跡」人類学研究報告 第1号
- 註 49 城南町誌より

あとがき

別府（石踊）遺跡の発掘調査報告書もようやく刊行にこぎつけた。発掘調査は7月・8月の猛暑の中で汗を額から流しながら行われた。出土遺物は縄文時代晚期より前期に渡る各時期の土器・石器がみられた。特に曾畠式土器・塞ノ神式土器の出土量は多く、層位的にも興味をひかれるものがある。石器も曾畠式土器に伴い多量の磨石・敲石・凹石などが見られ、縄文時代前期の石器組成に好資料をもたらしたといえよう。

このように本遺跡においては豊富な資料と成果を得たと同時に、今後に残す問題点も多かったように考える。

最後に本調査にあたって猛暑の中、発掘作業にたずさわっていただいた地元の作業員の方々をはじめ、発掘調査後の整理作業においては、水洗・註記・復元作業などの多くの人々の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書

別府（石踊）遺跡

発行日 昭和54年3月

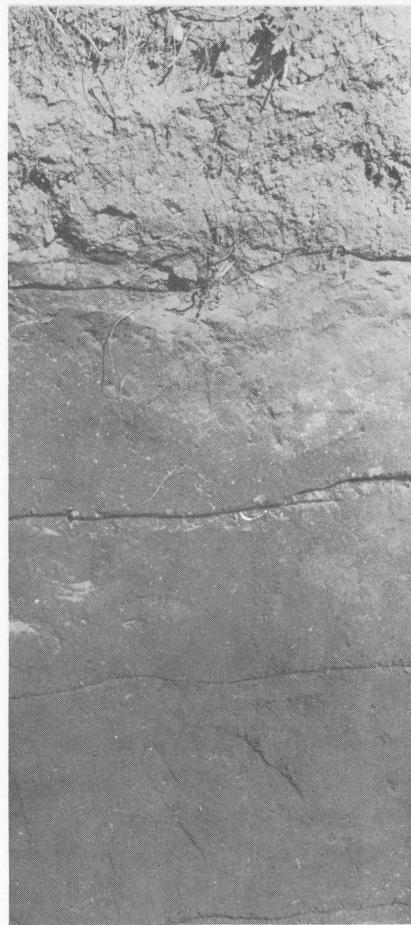
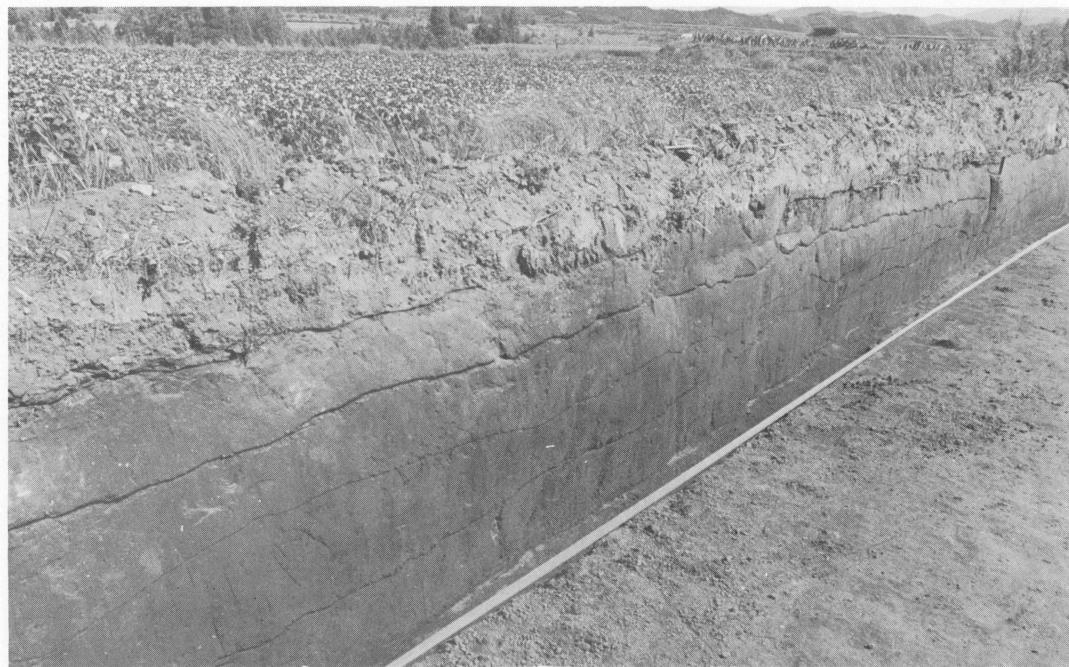
発行 志布志町教育委員会 〒899-71 曾於郡志布志町

印刷所 新生社 印刷 鹿児島県鹿屋市札元1-22-34



図版

図版 1



盛 土

耕 作 土

III 層

IV 層

V 層

東側壁断面

図版 2



①9. 10. 11区 ①9. 10. 11区 Ⅱ層 遺物出土状態

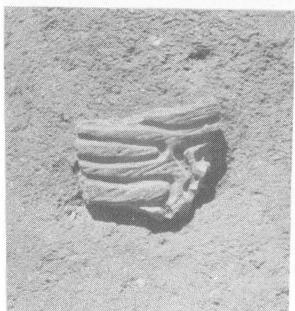
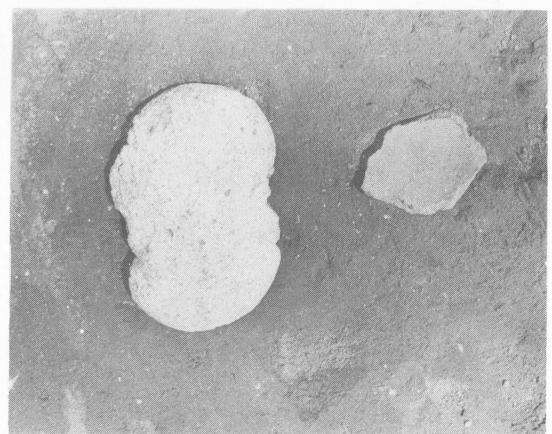
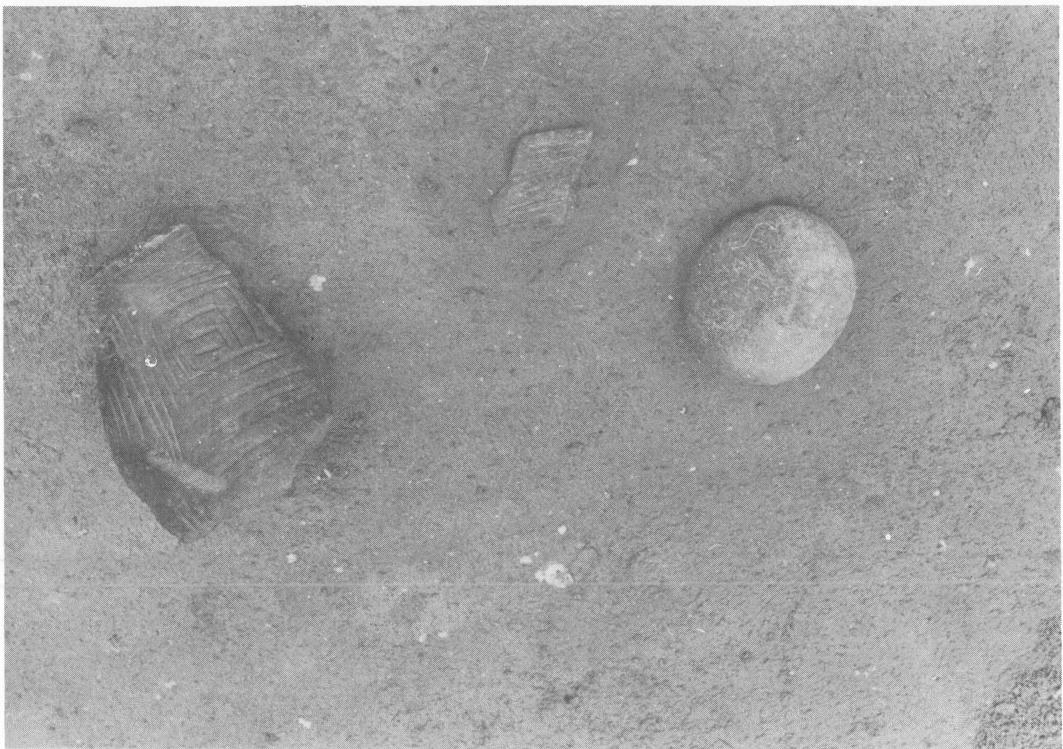


②14～18区 トレンチ調査

図版 3

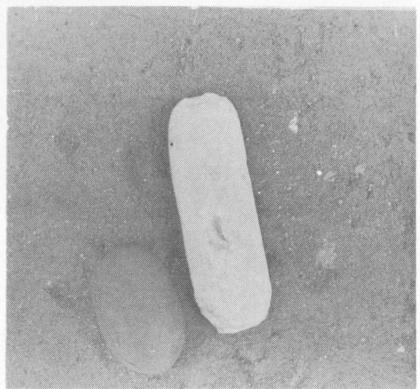
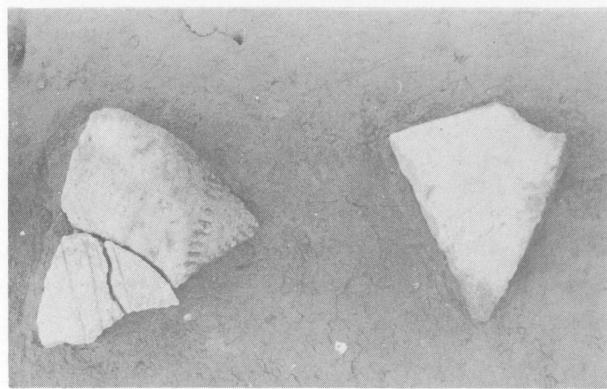
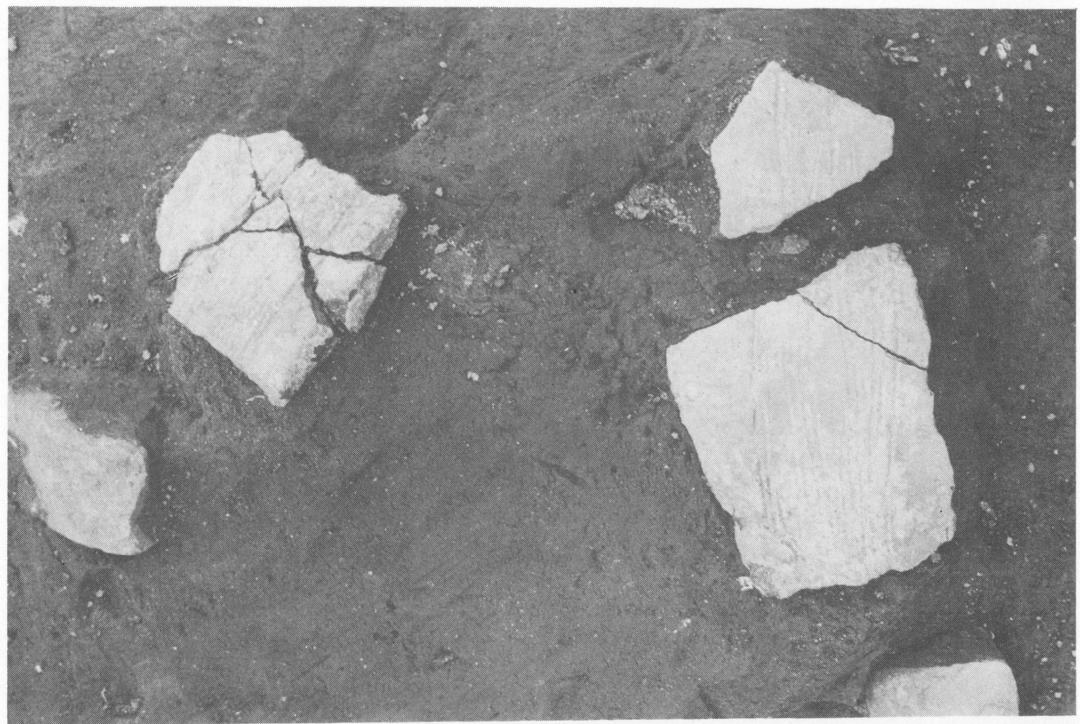


11区Ⅳ層 集石の検出状態

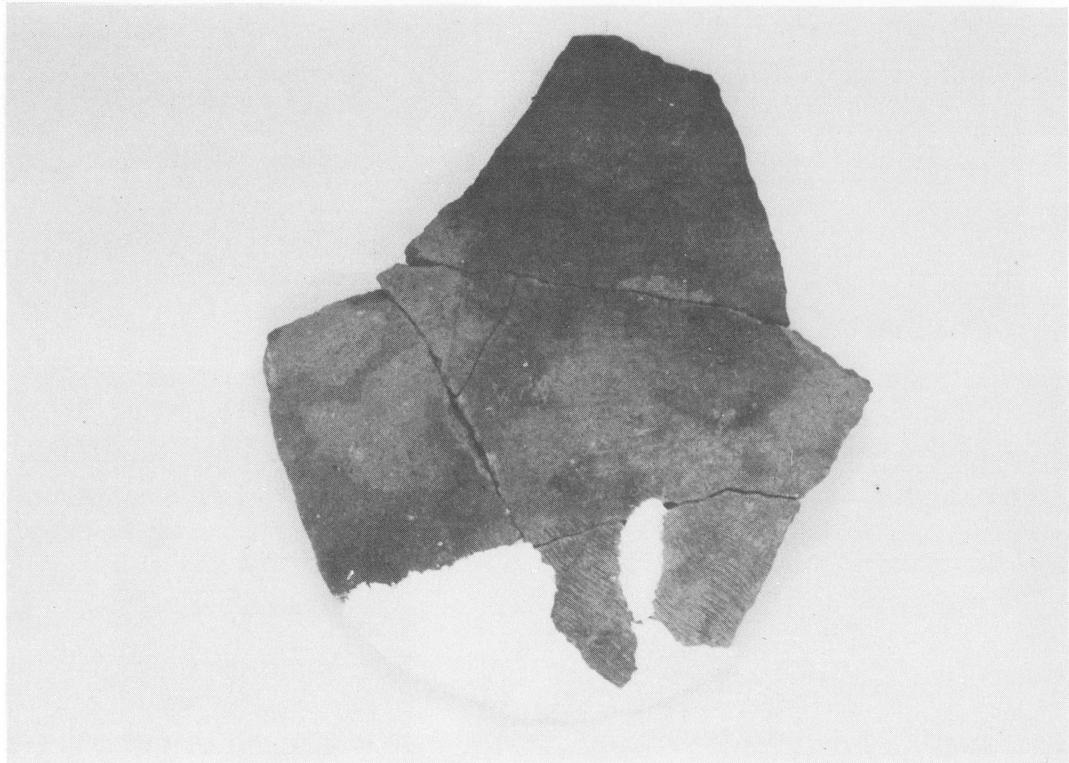


III層・IV層 遺物出土状態

図版 5

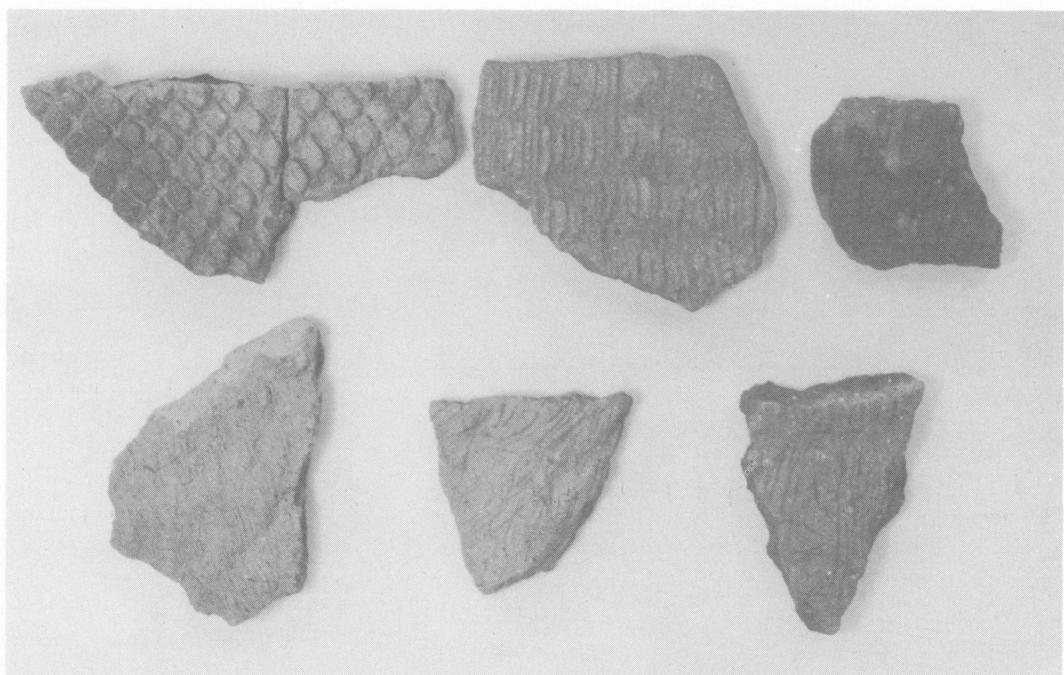


Ⅶ層 遺物出土状態

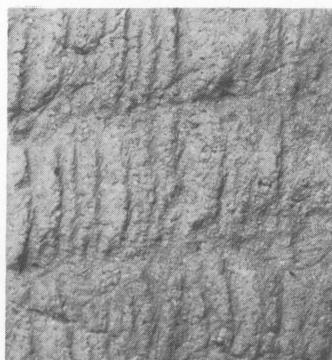


I類 土 器

図版 7



006の拡大



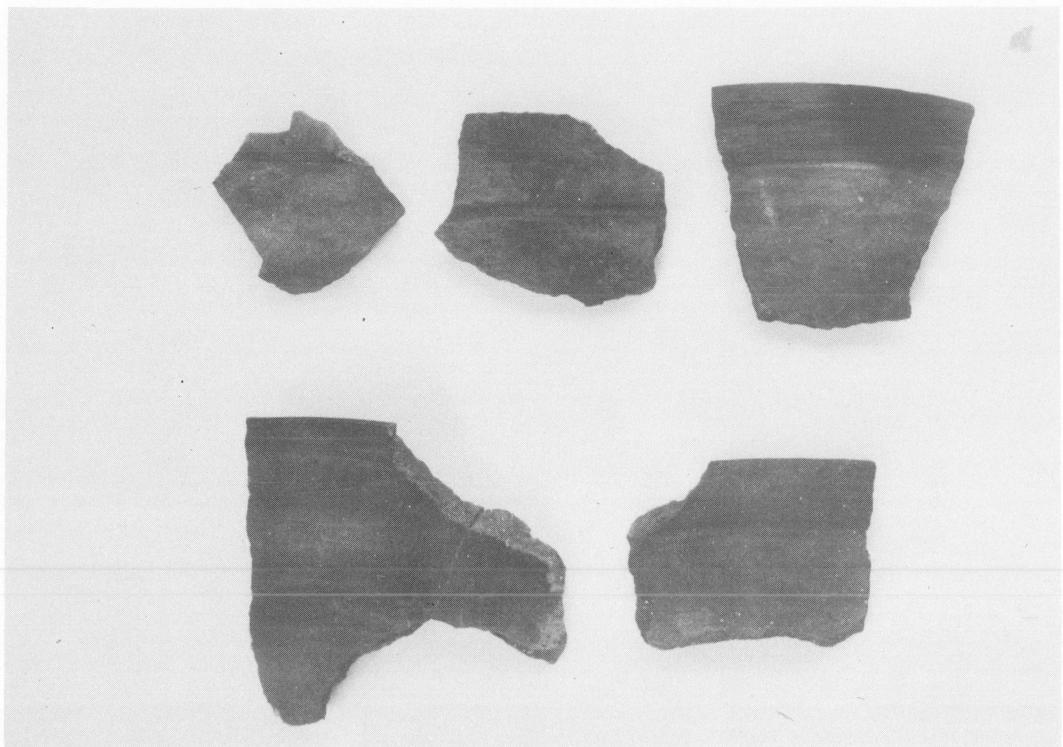
007の拡大



008の拡大



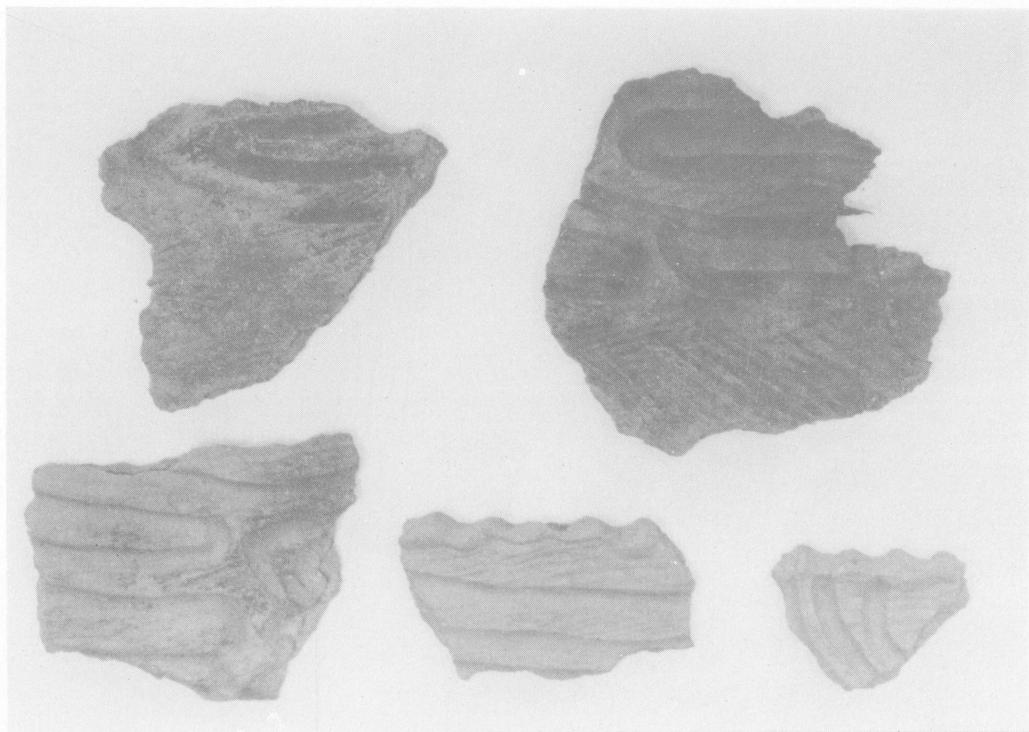
I類 土 器



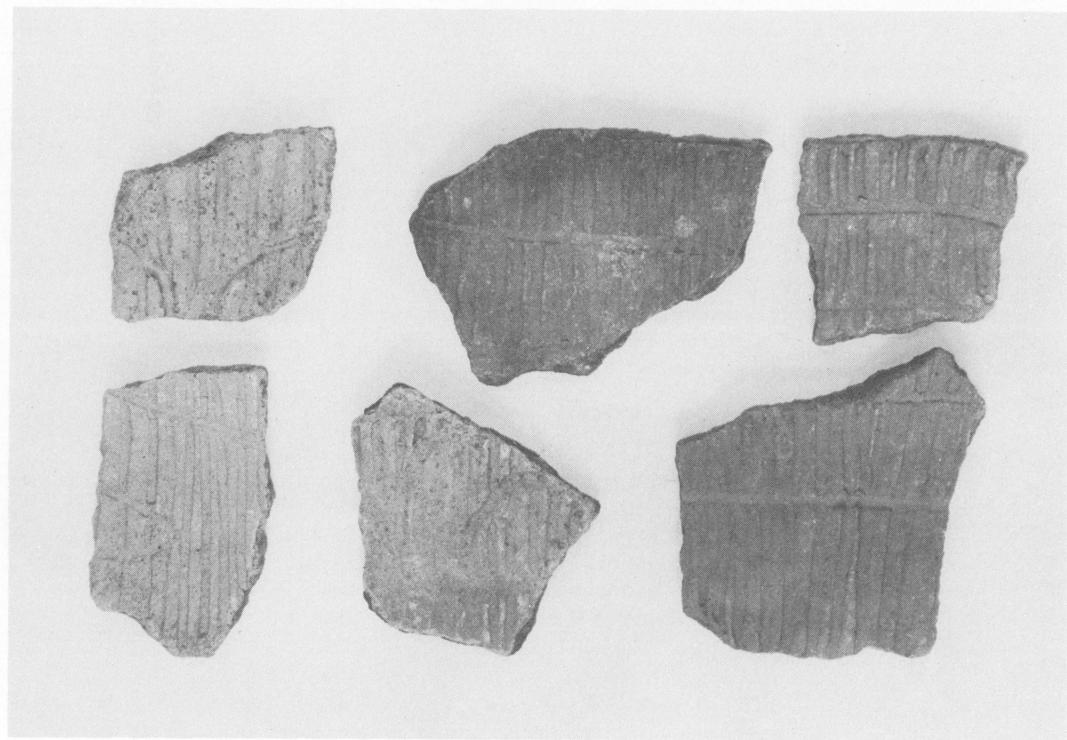
① I類土器



② Ⅲ層出土 土製品



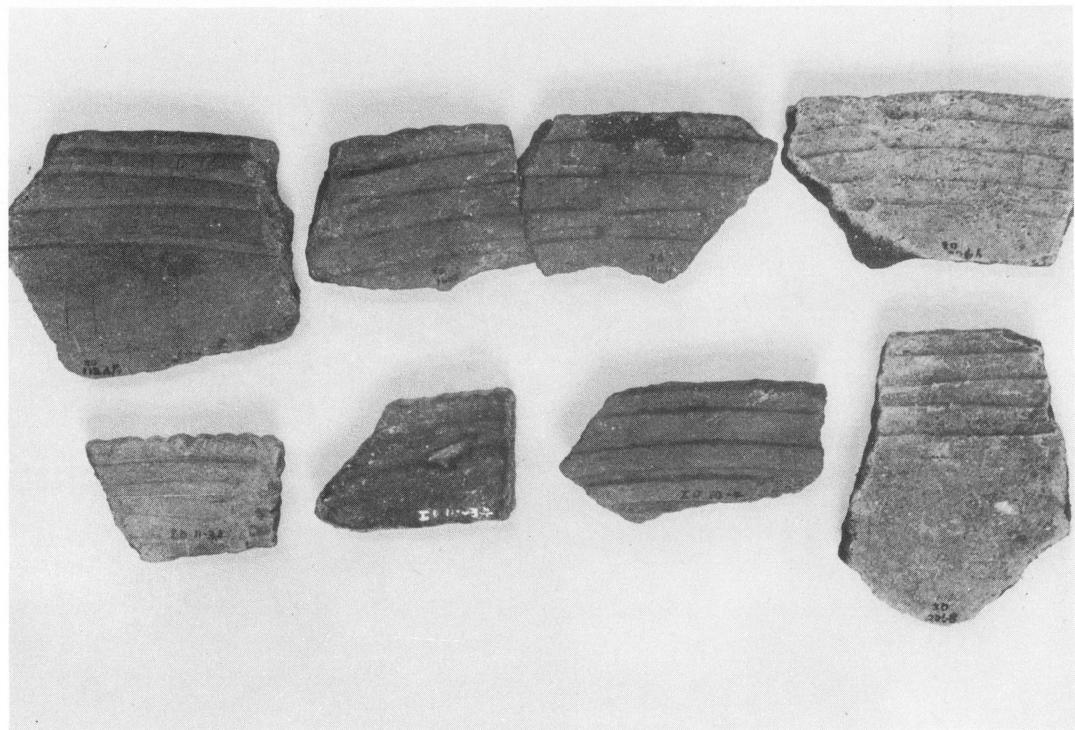
① II類土器



② IIIa類土器



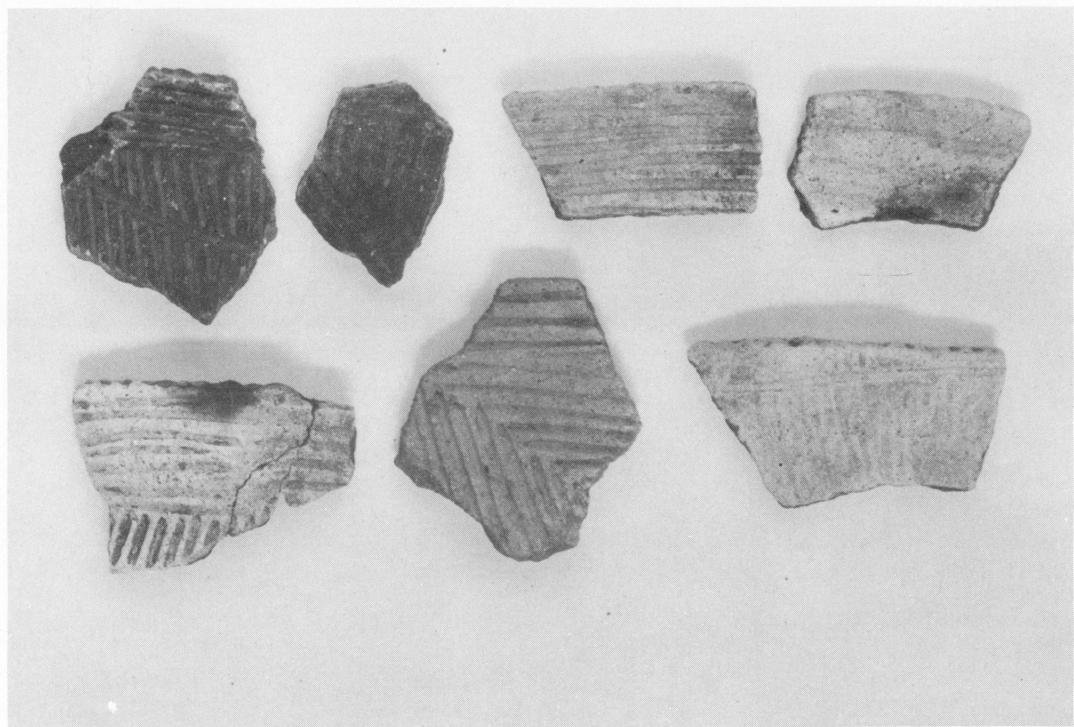
III a 類土器 (表)



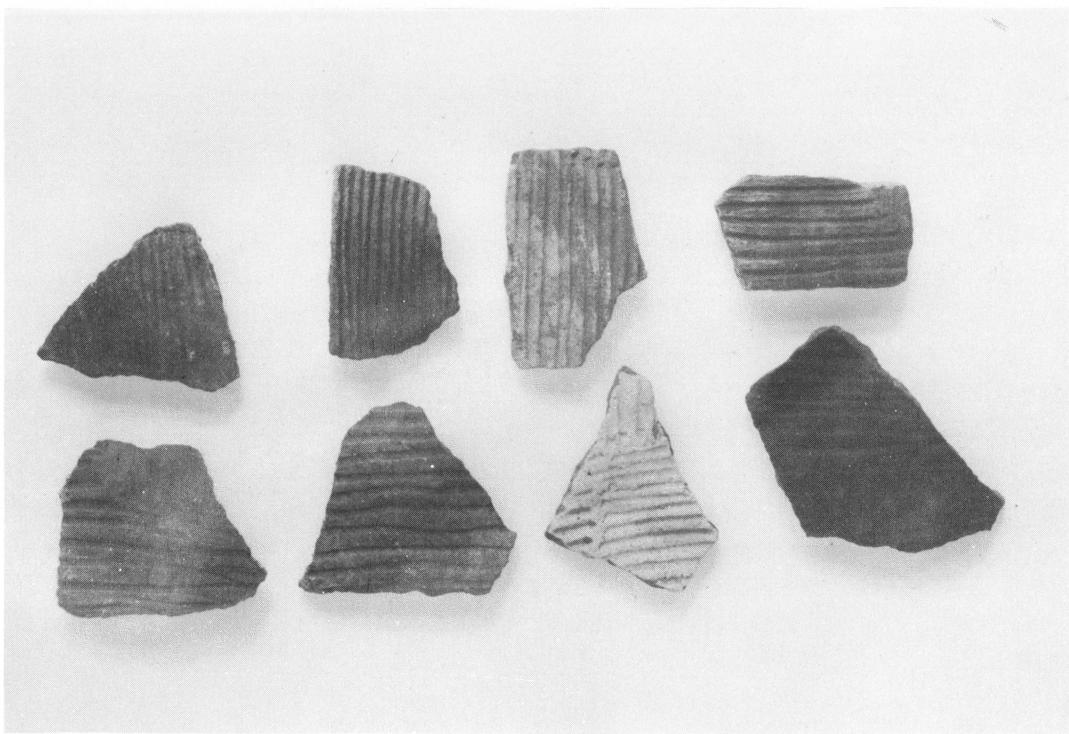
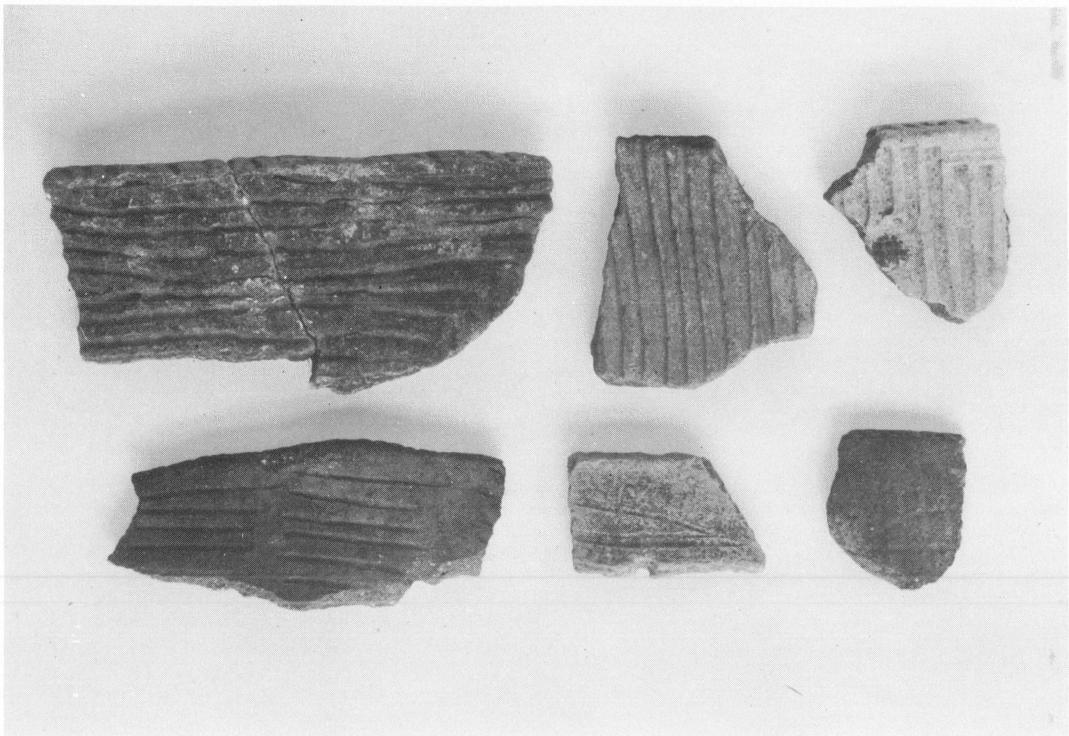
III a 類土器 (裏)



① III a類土器

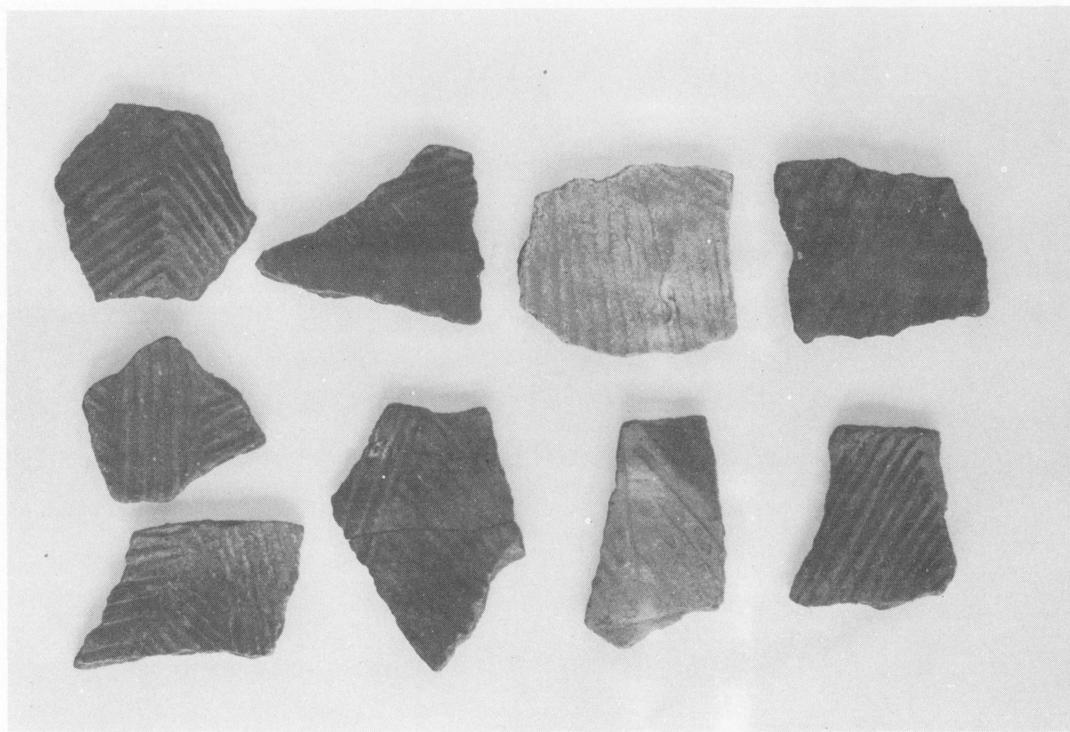


② III b類土器



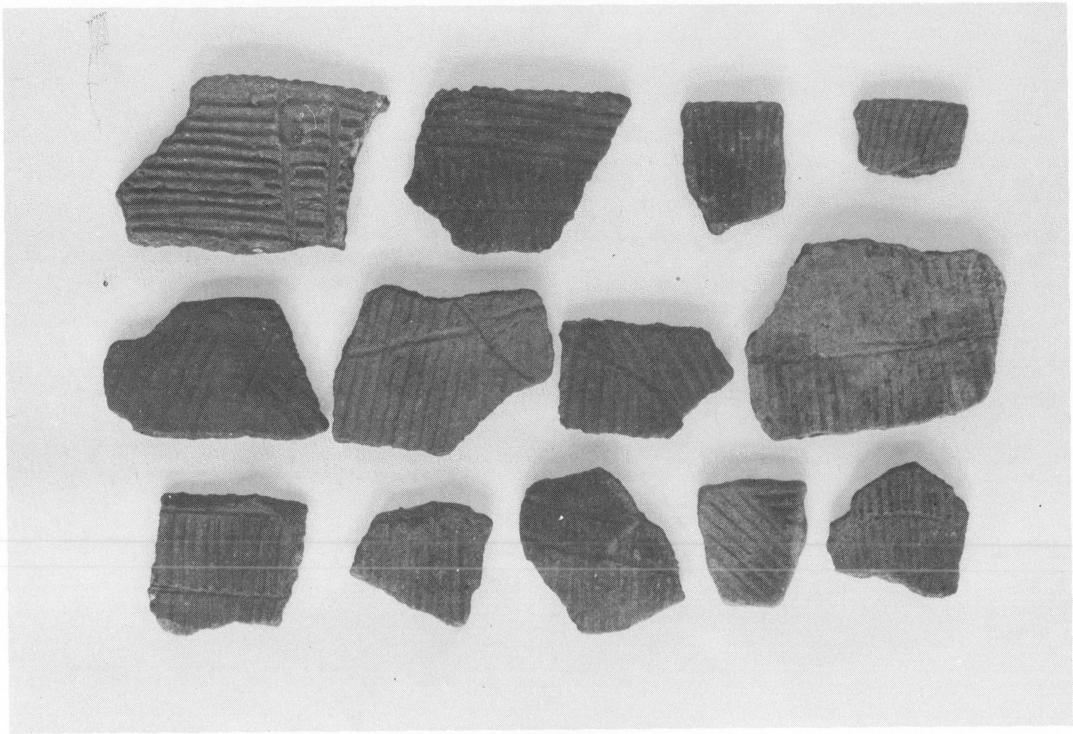
III b 類土器

図版13

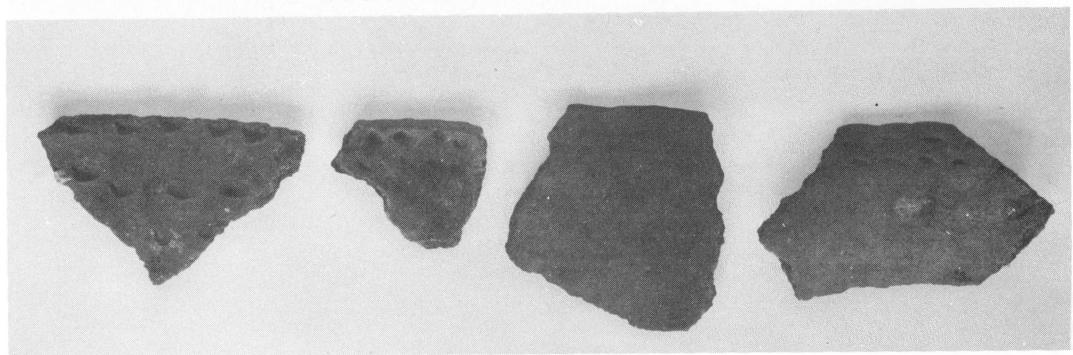
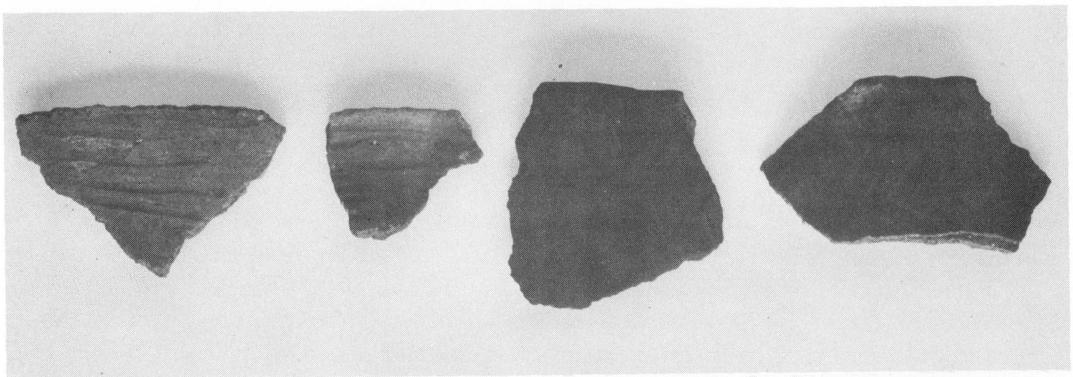


III b 類土器

図版14

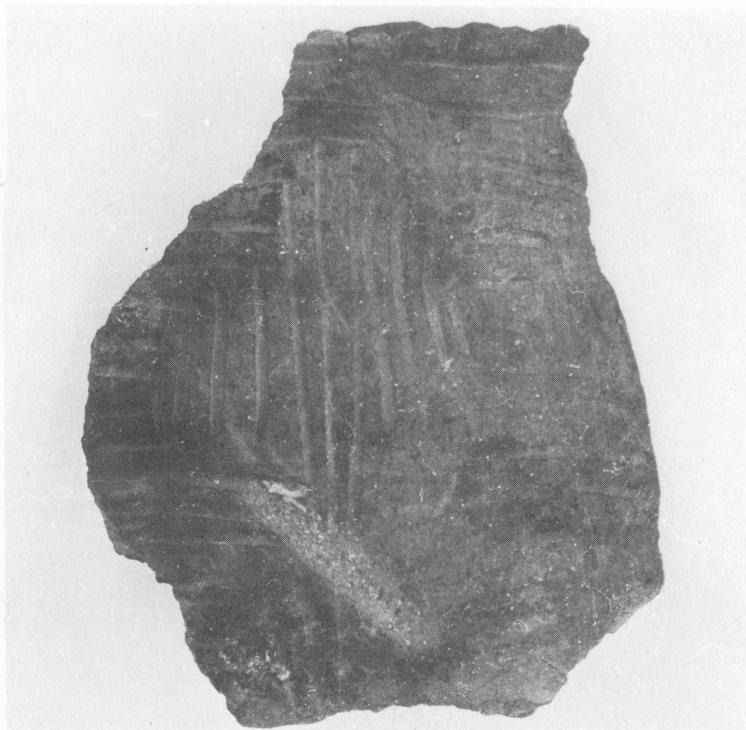


① Ⅲ b 類土器

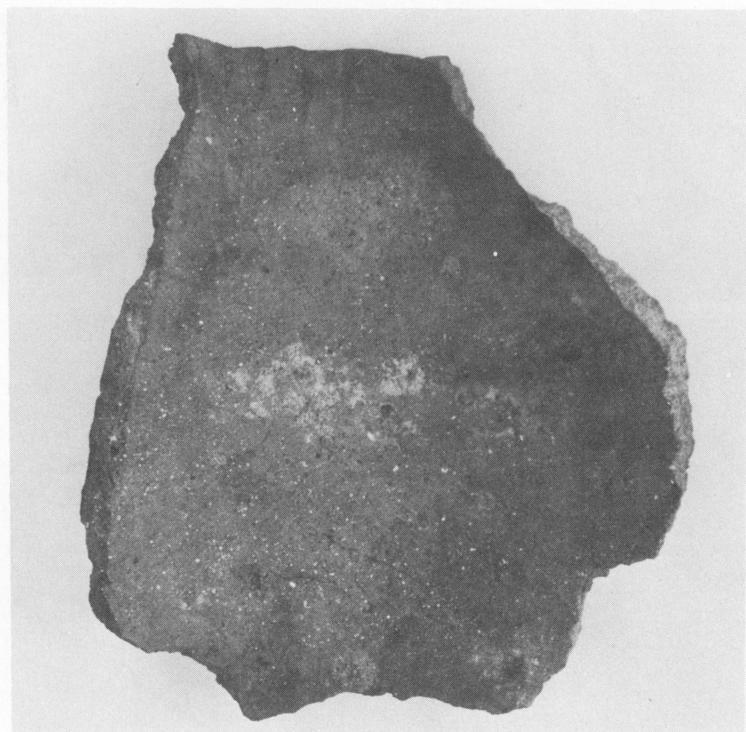


② Ⅲ c 類土器

図版15

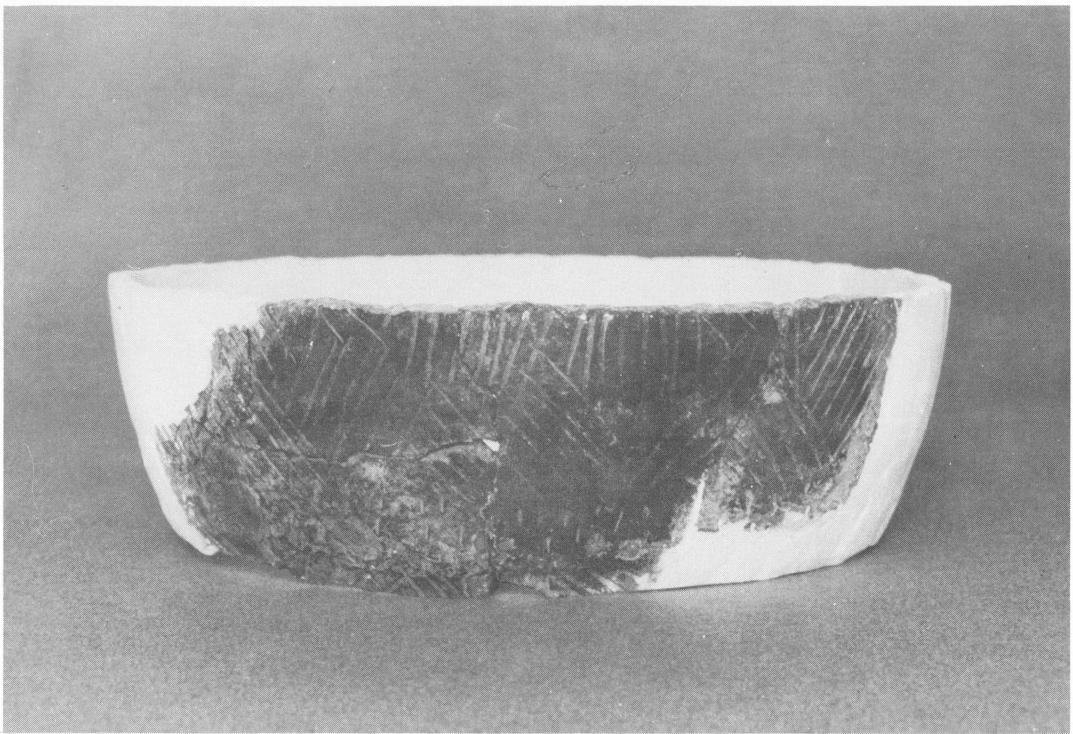
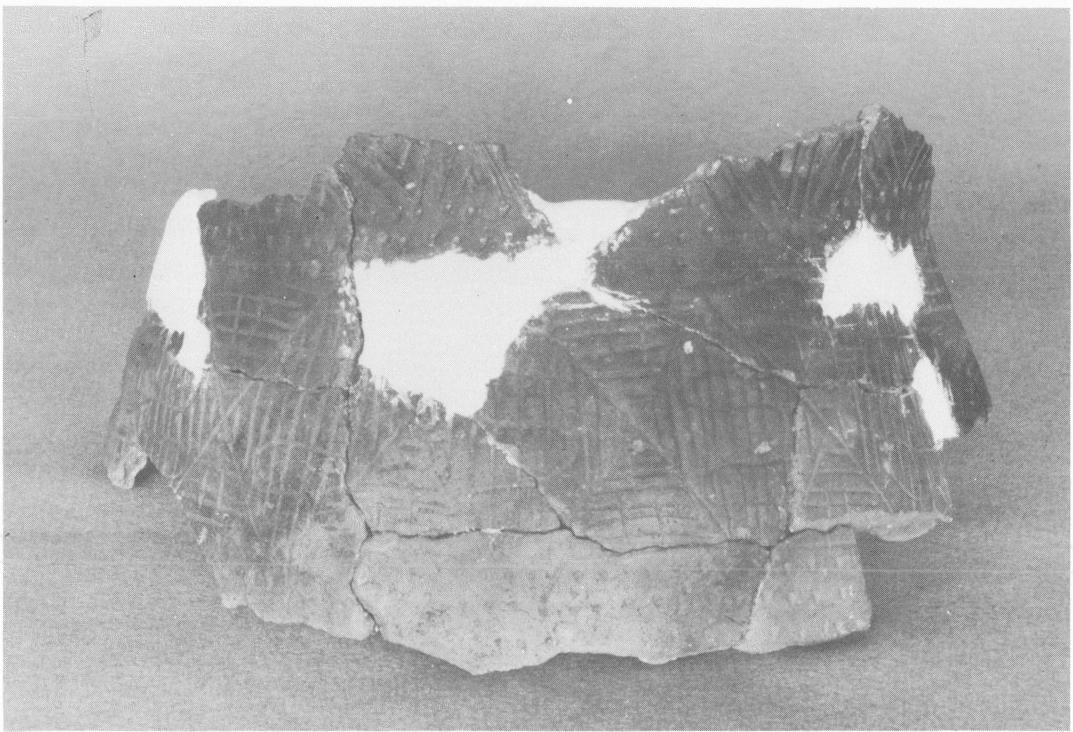


表



裏

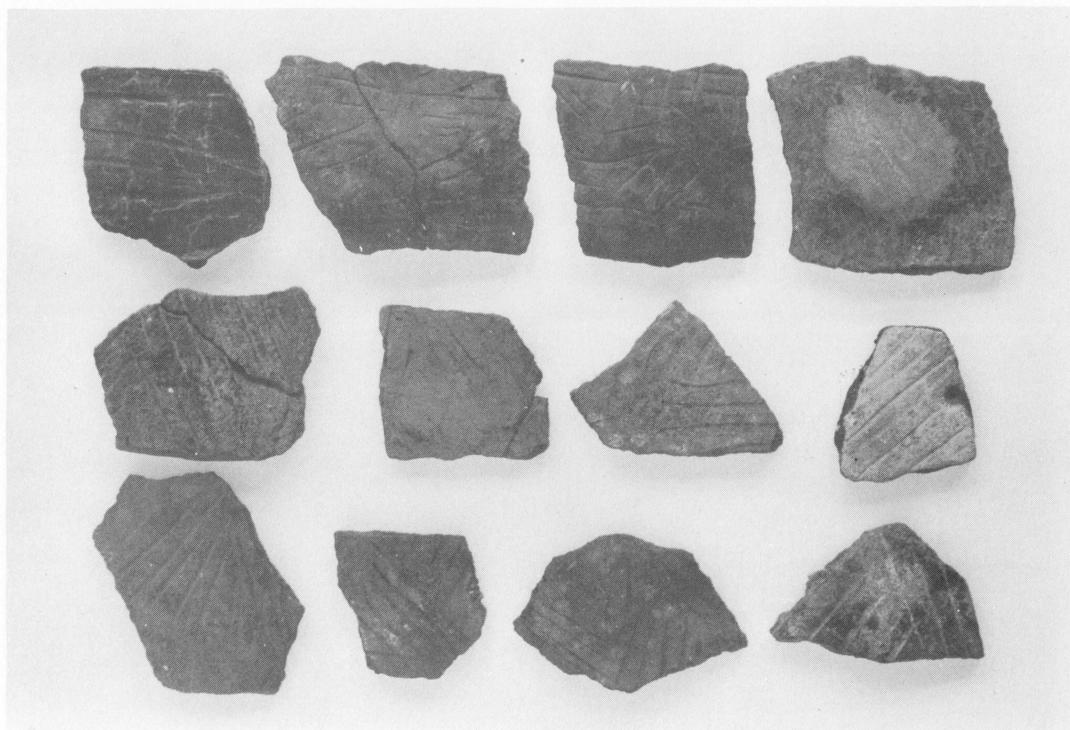
III c 類土器



III c 類土器

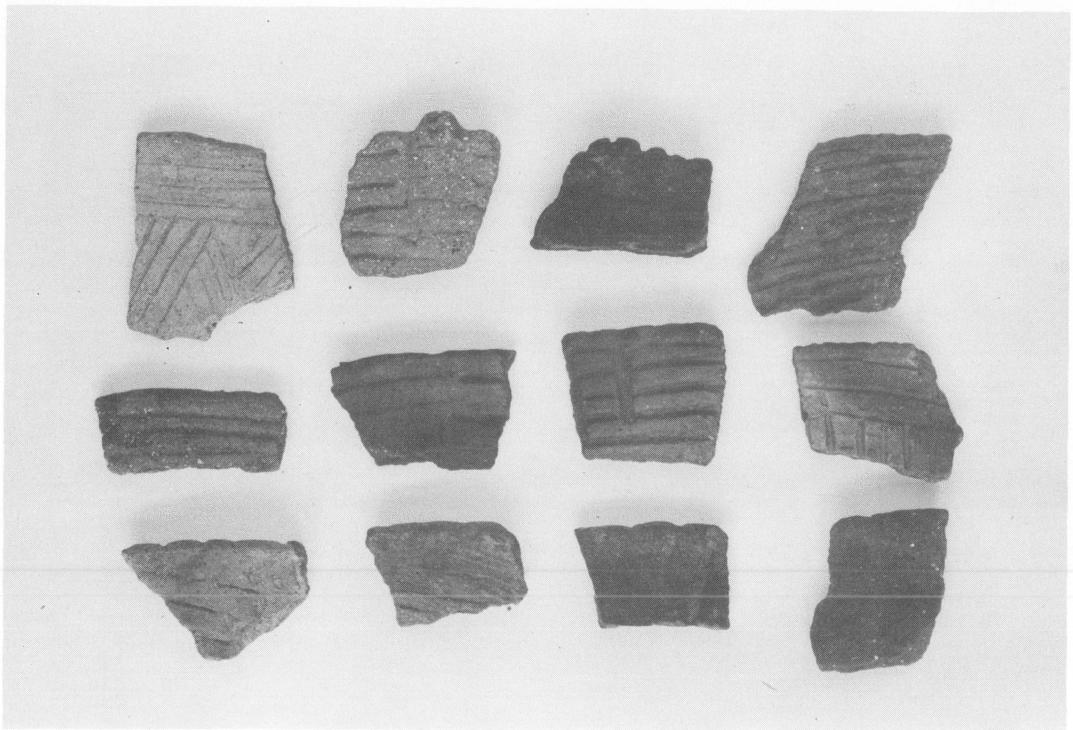


(1) IIIc類土器



(2) IIId類土器

図版18



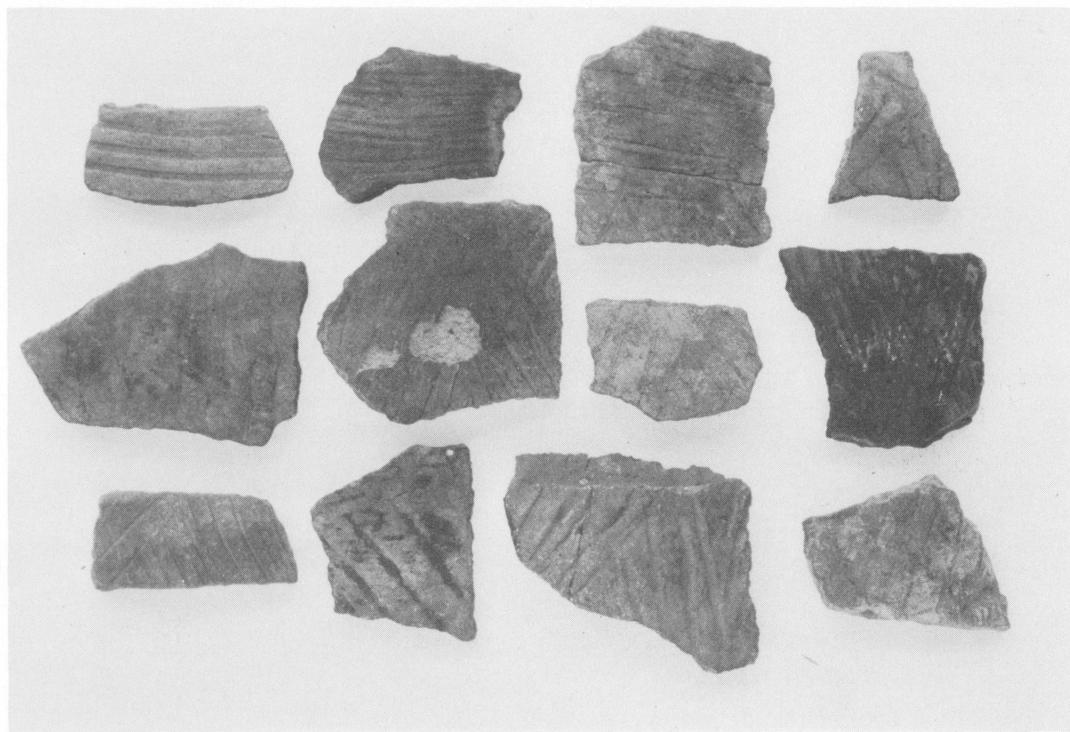
表



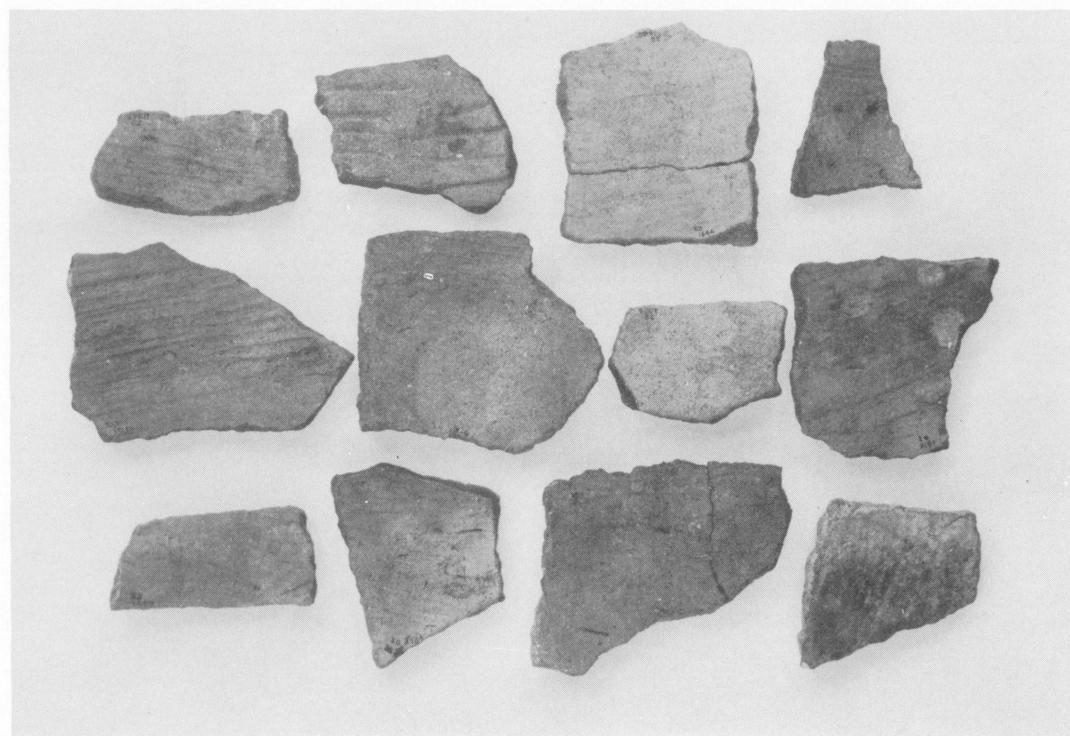
III d 類土器

裏

図版19

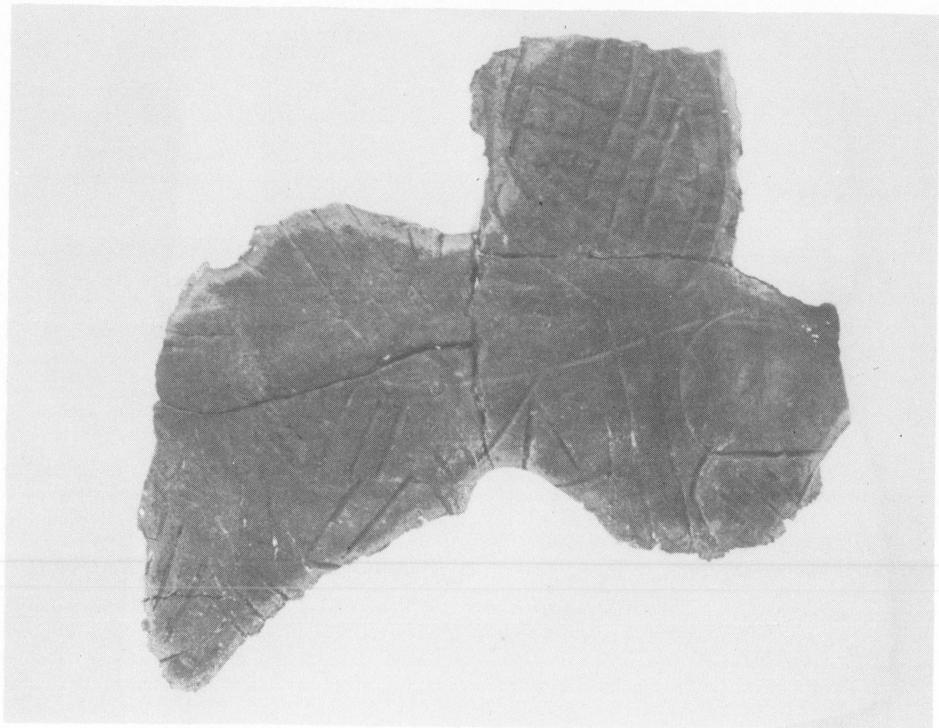


表

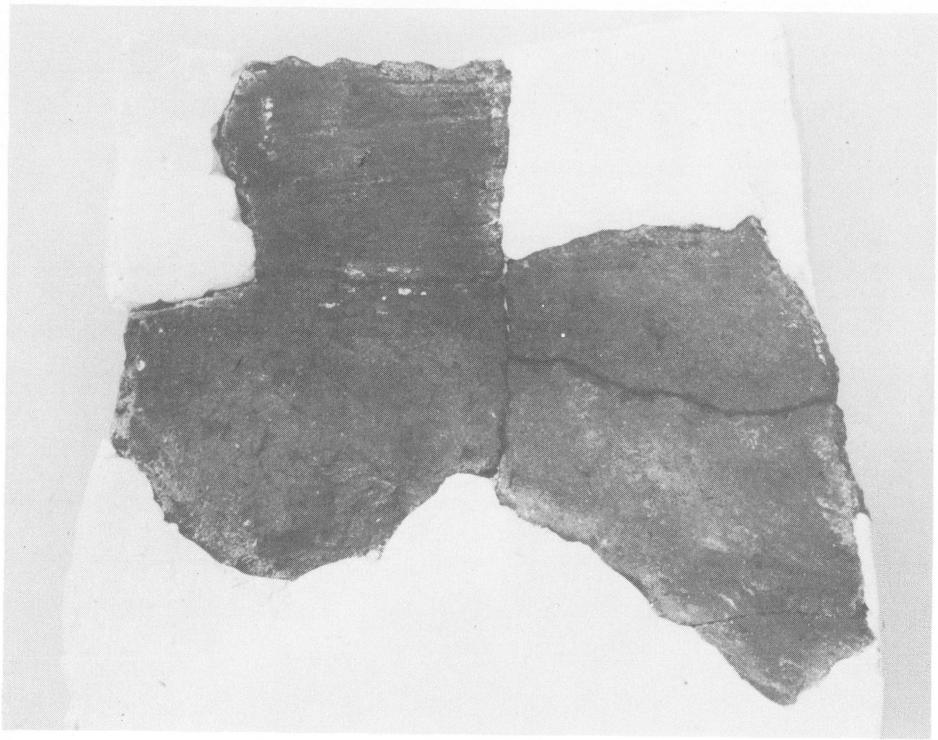


裏

Ⅲ d 類土器



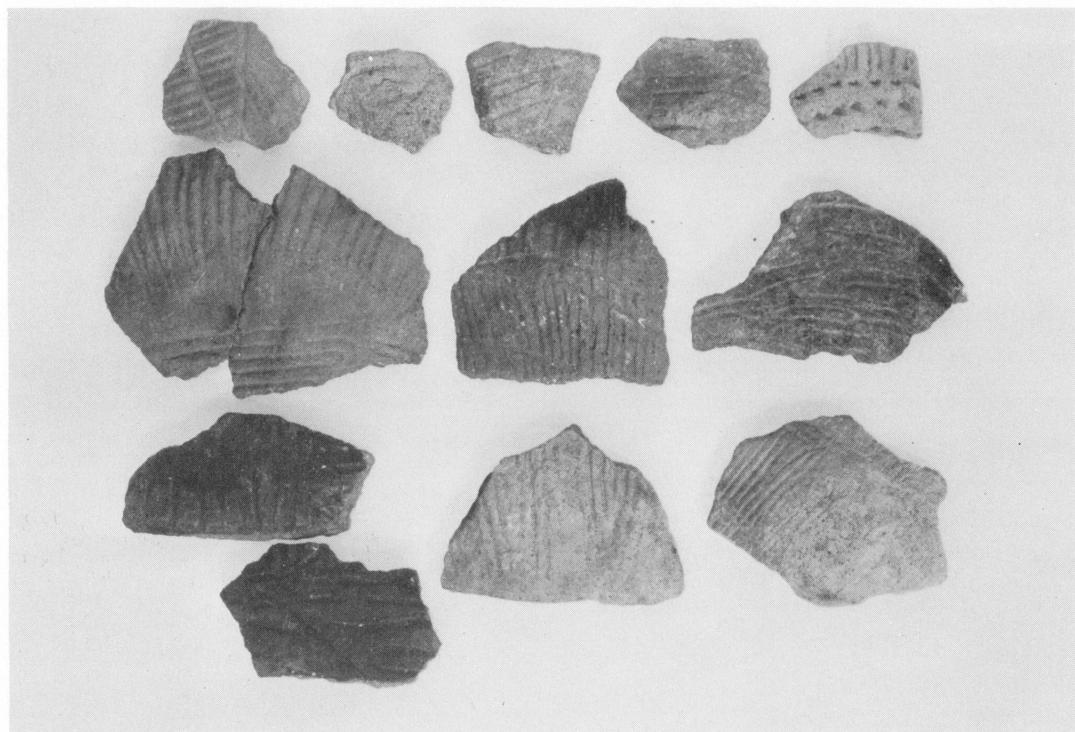
表



III d 類土器

裏

図版21



Ⅲ 類土器底部

図版22



表



IV 類土器

裏

図版23

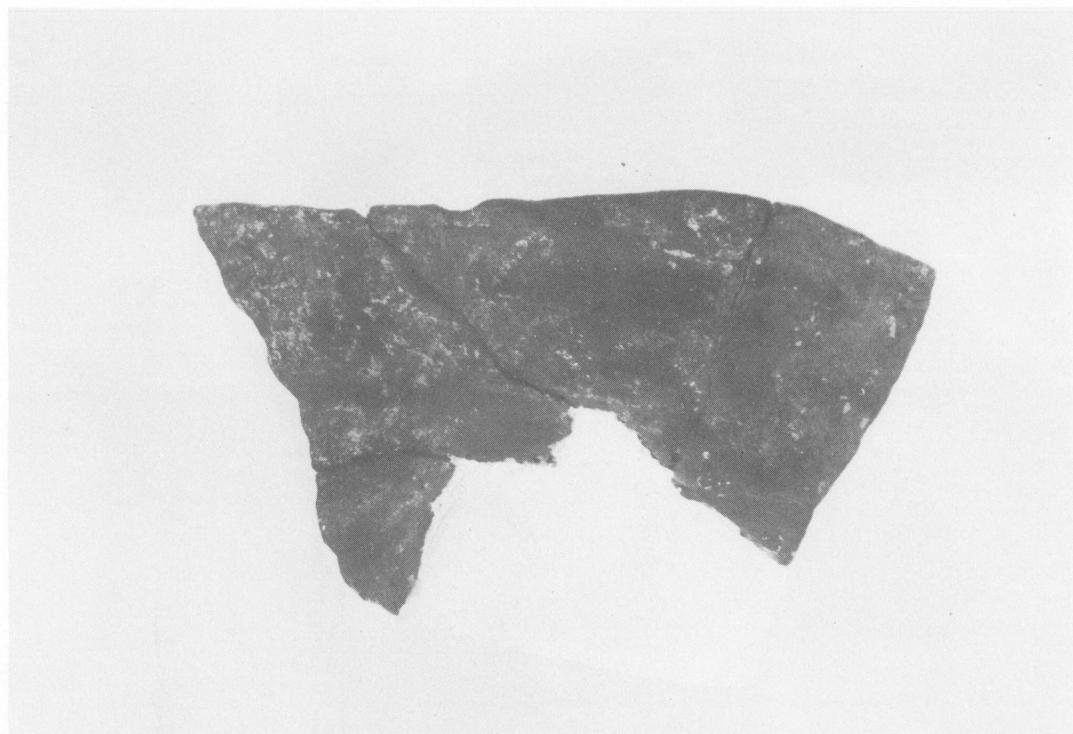


V A類 土 器

図版24



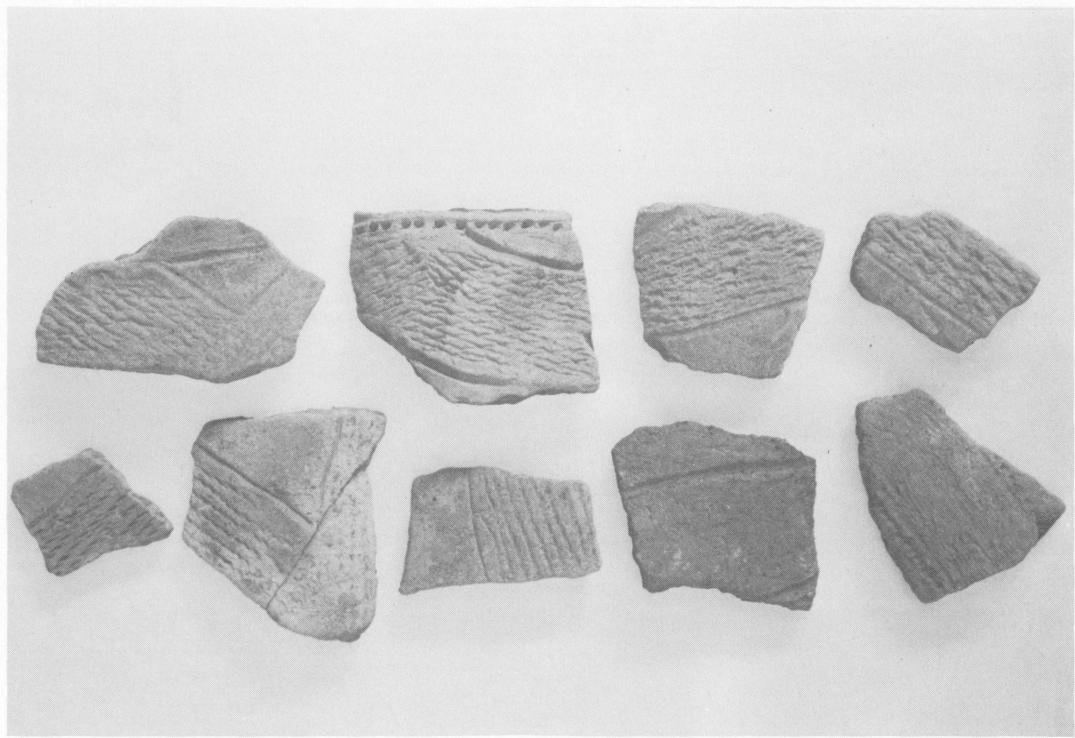
V A類 土 器



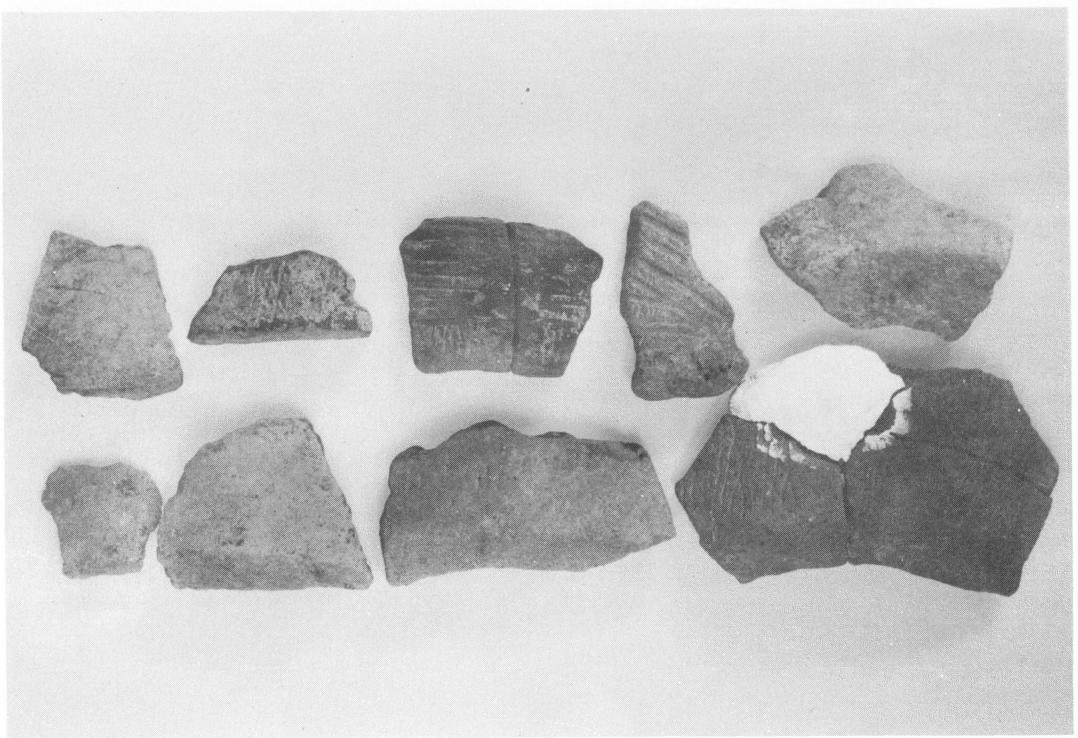
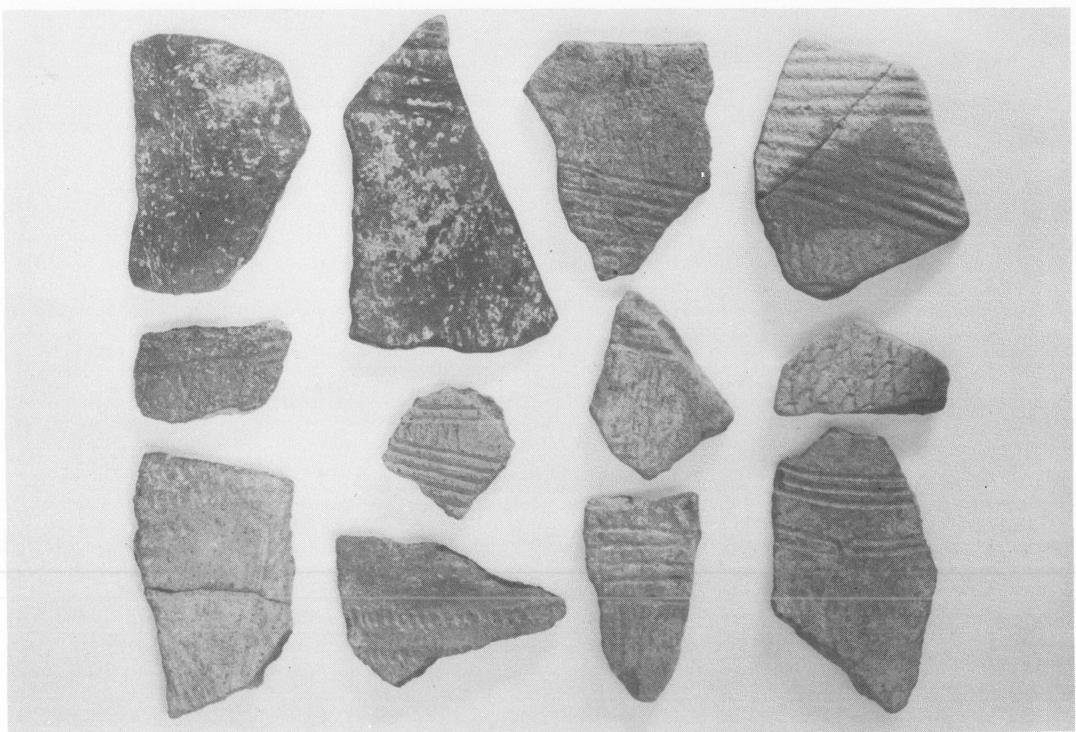
V A類 土 器



V A類 土 器



V A類 土 器



V A類 土 器

図版29

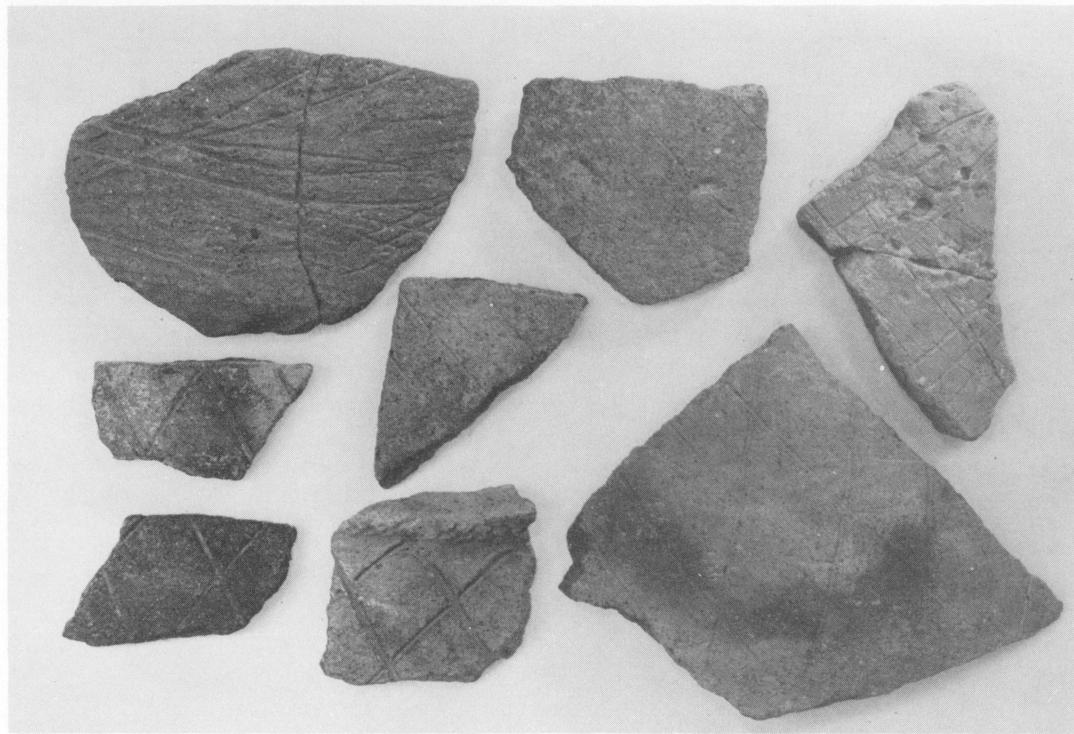


V B類 土 器

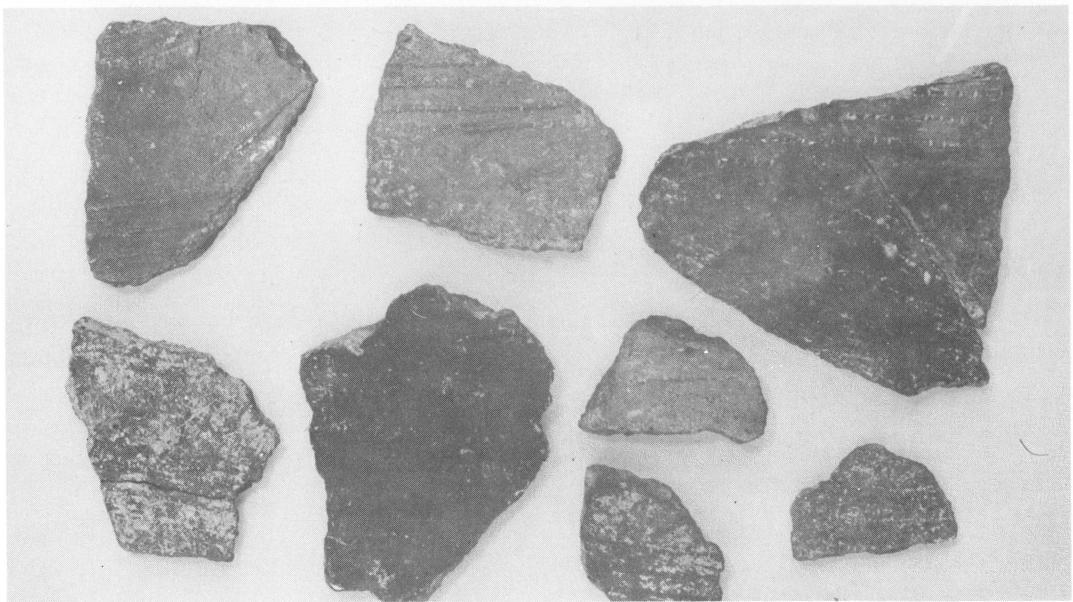
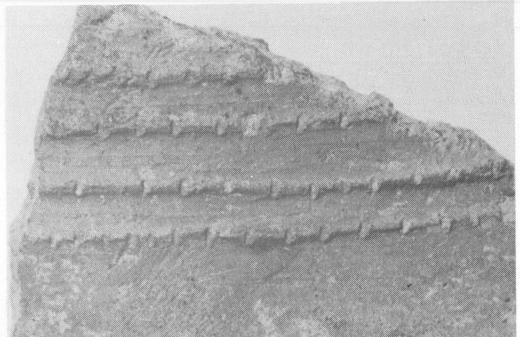
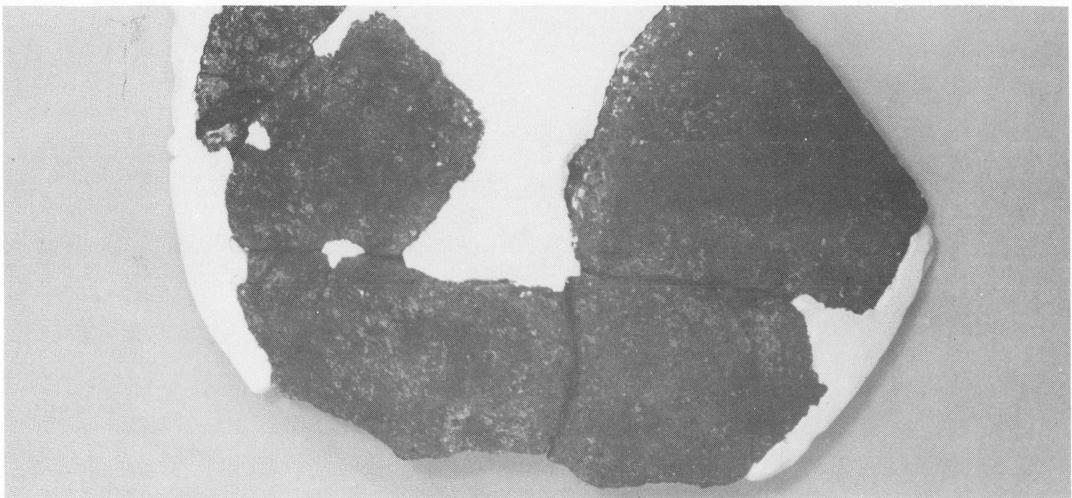


V B類 土 器

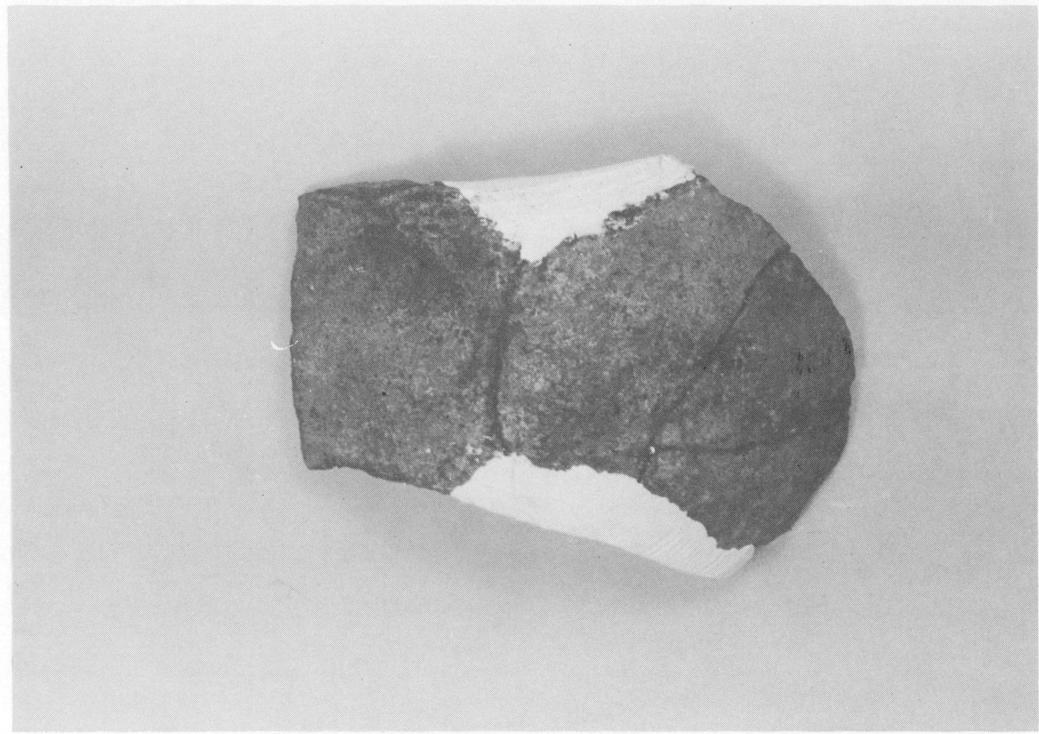
図版31



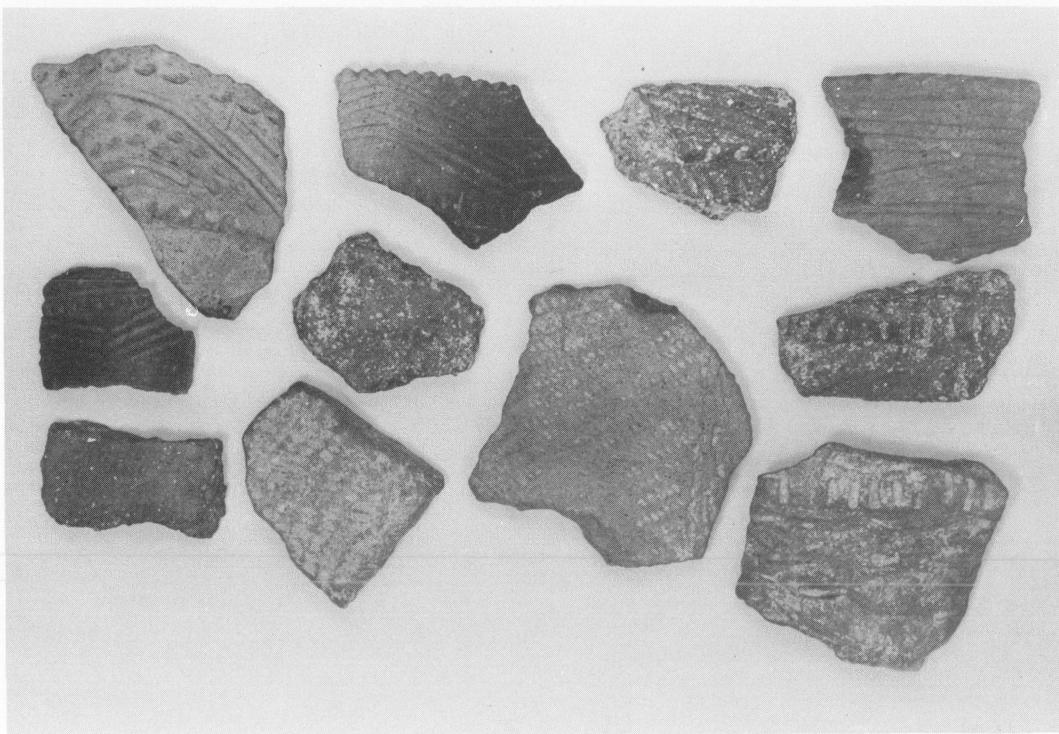
V B 類 土 器



VII類 土 器



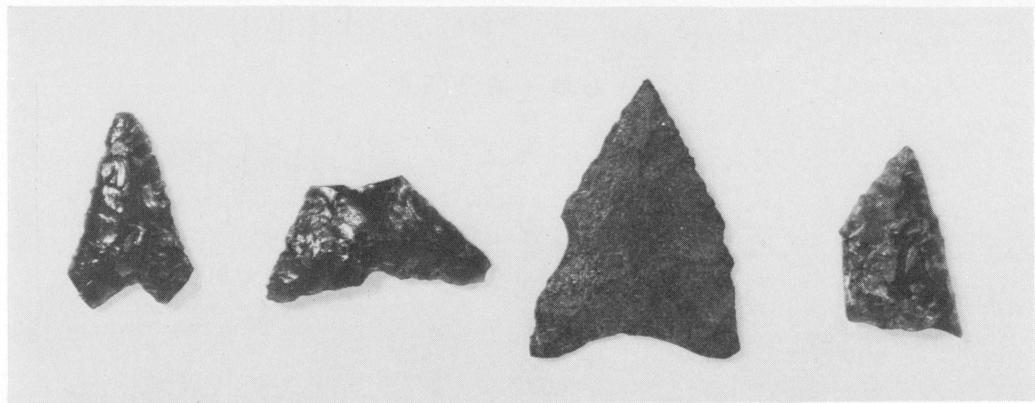
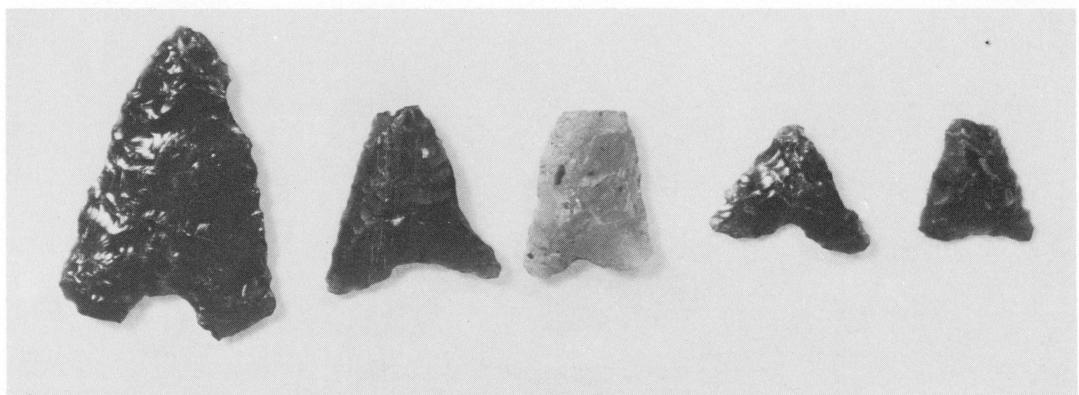
VII類 土 器



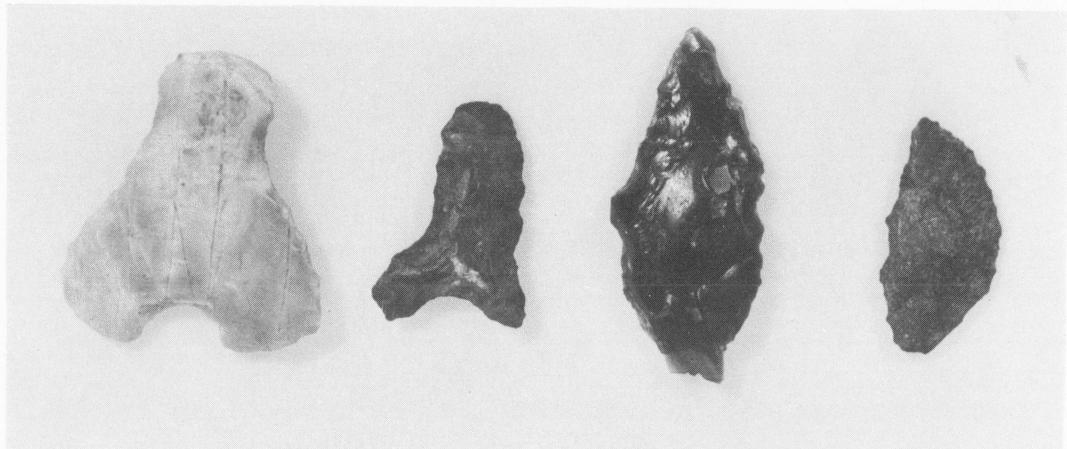
① VII類土器



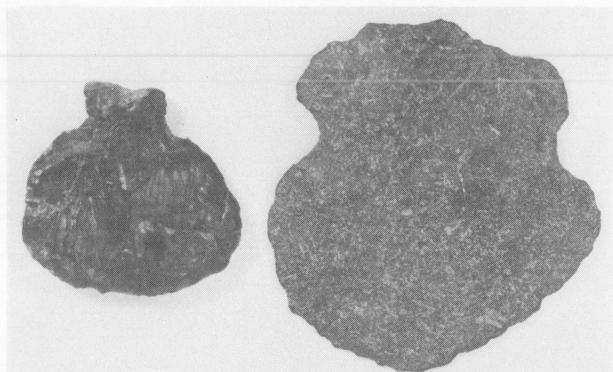
② IX. X類土器



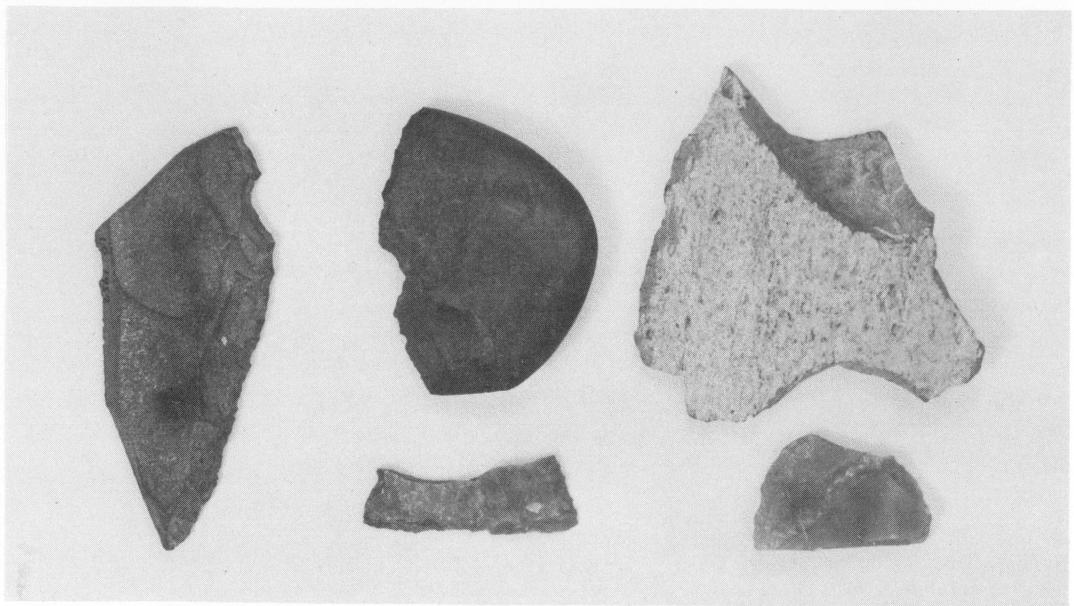
石 鏃



① 石鏃・異形石器



② 石匙



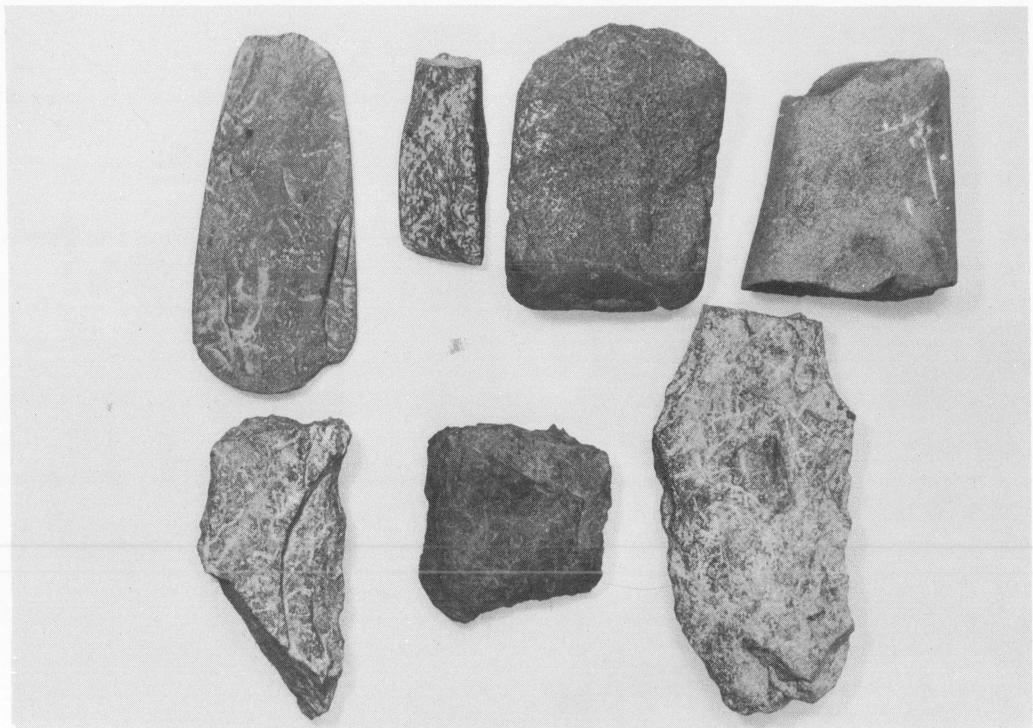
③ 石匙・スクレーパー



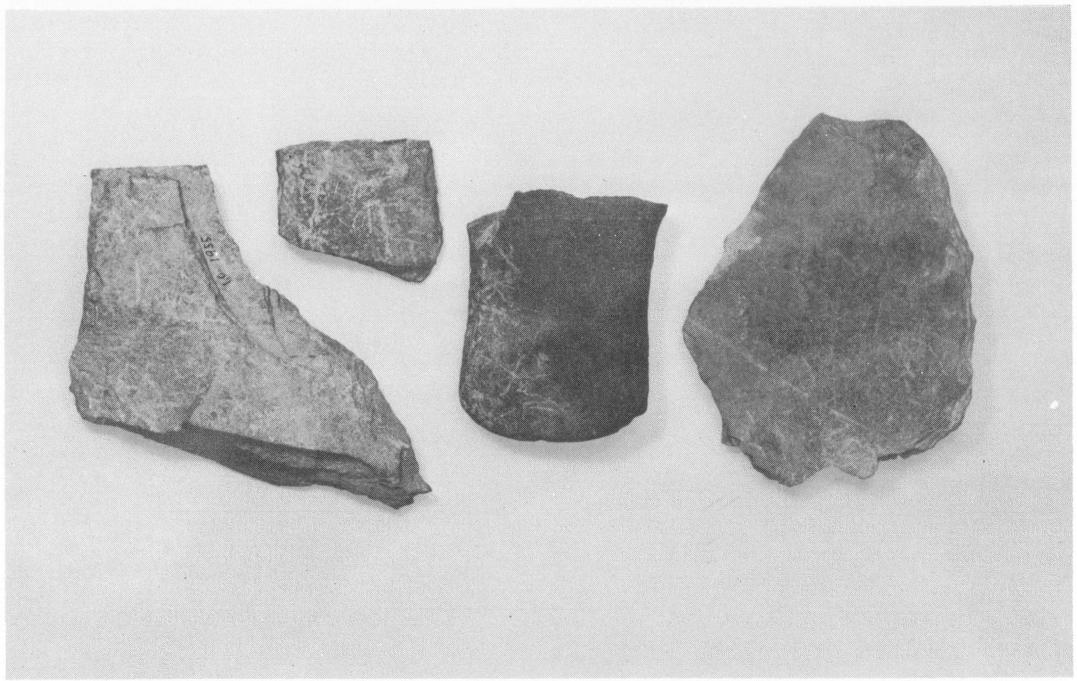
磨製石斧



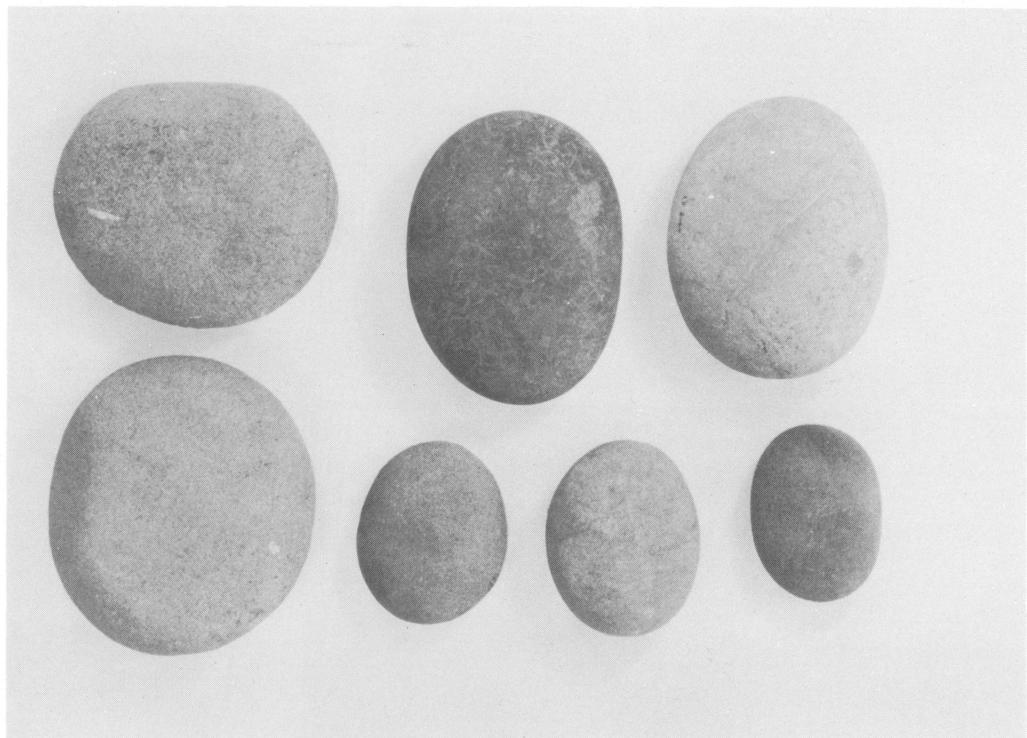
磨製石斧



① 磨製石斧・打製石斧



② 打製石斧・スクレーバー・異形石器



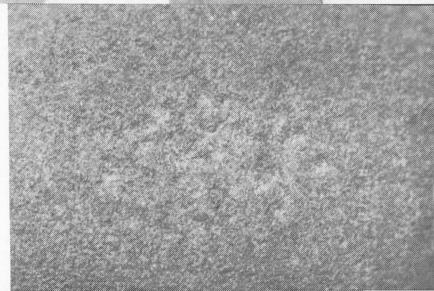
磨石Ⅰ



磨石Ⅱ



① 磨石 III

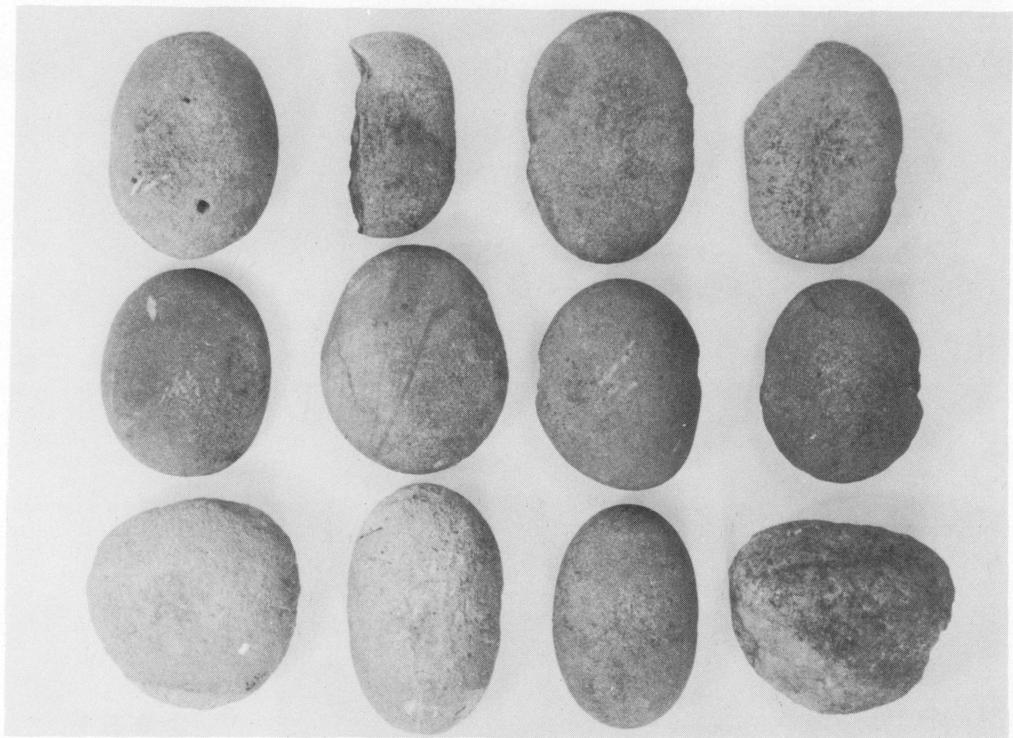


84 拡大



② 敲石 I

図版41

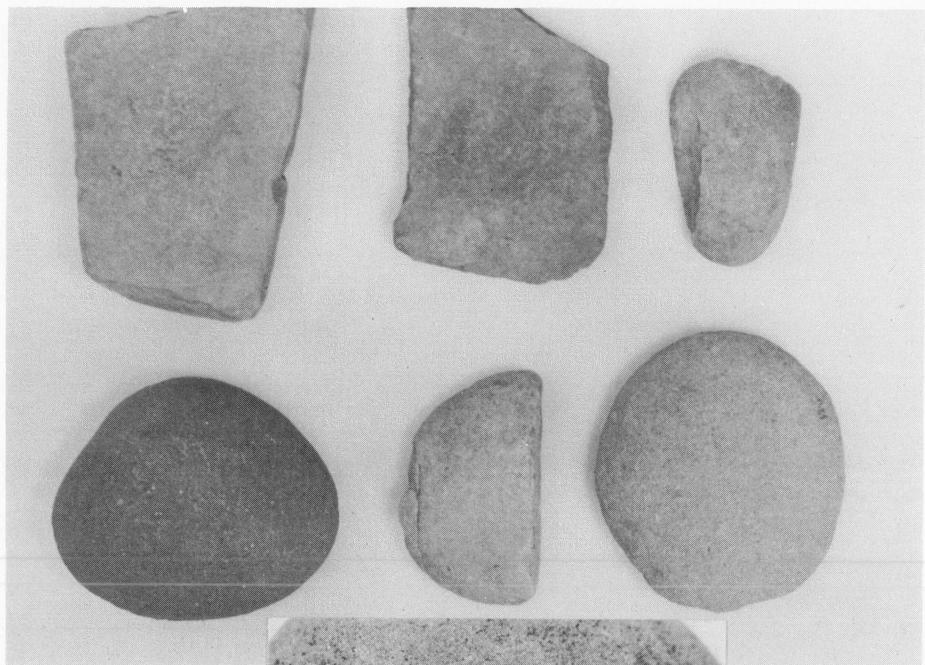


敲石Ⅱ

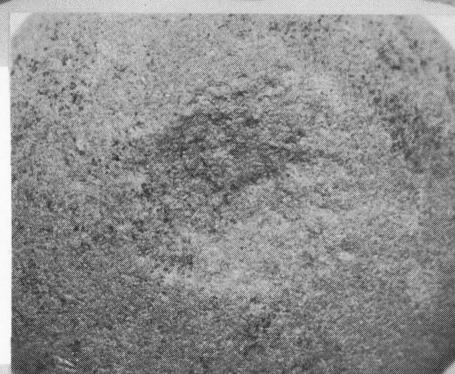


敲石Ⅲ

図版42



① 敲石 IV

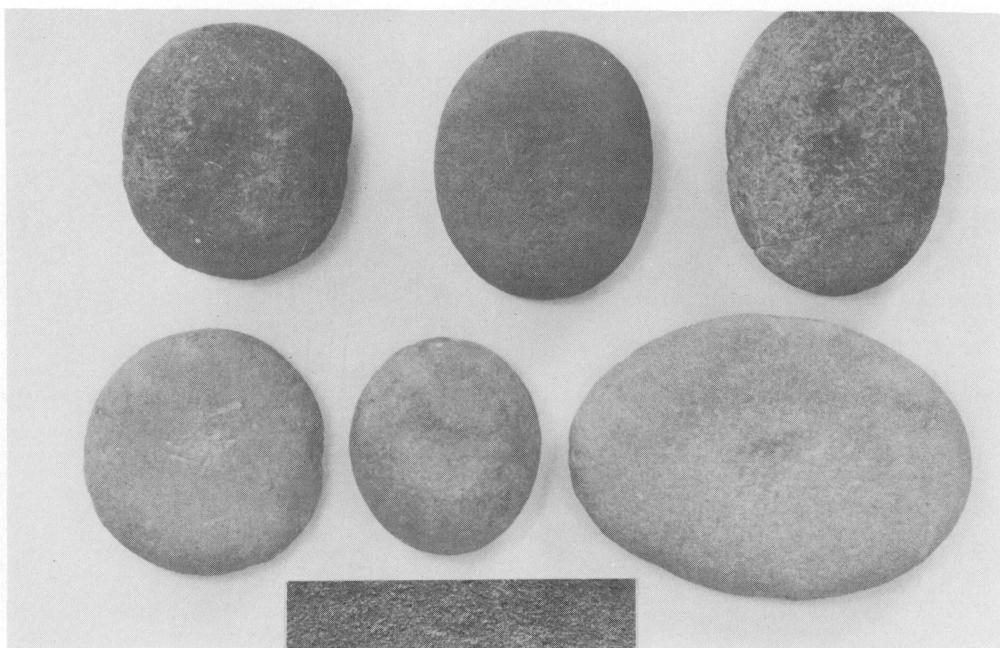


127 拡大



② 凹石 I

図版43



凹石Ⅱ

142 拡大

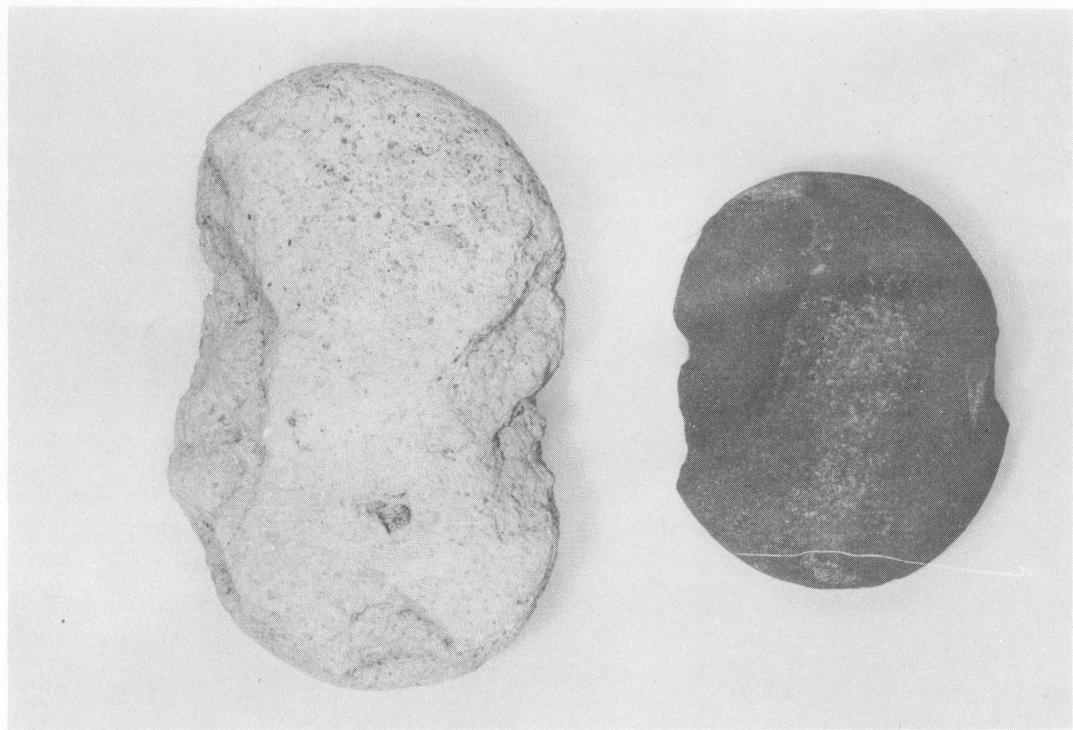


142

凹石Ⅲ



①磨石Ⅱ 060の拡大



②石錐